椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

-9-

福岡県築上郡椎田町所在広幡城跡の調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 -9-

	<u> </u>		
頁	行	誤	E
例言	(14)	V と〔特論〕	V <u>-A・B</u> と〔特論〕
Χi	2	Photo.7 SX5~7の発掘	降雪中の作業
"	4	Photo.9 降雪中の作業	S X 5 ~ 7 の発掘
Χii	10	Tab <u>el.</u> 3	Table. 3
3	表1	7-C 赤幡・十双遺跡	7-C 十双遺跡
"	<i>*</i>	9 _ /_ 水原	椎田町水原
6	Photo. 7	<u>SX5~7の発掘</u>	降雪中の作業
. ,,	Photo. 9	降雪中の作業	S X 5 ~ 7 の発掘
7	12	椎田バイパス <u>エ</u> 事	椎田バイパス <u>工</u> 事
15	3	天険の要塞	天険の要害
"	5	僅かしさない	僅かし <u>か</u> ない
16	13	④『築上郡誌』	④『築上郡 <u>志</u> 』
25	11	Ⅲ郭は西面は	Ⅲ郭は西面には
43	第22図	$(\underline{1/4})$	(1/40)
131	29	第 <u>92・93</u> 図	第 <u>90</u> ・ <u>91</u> 図
" "	31	(第 <u>91</u> 図)	(第89図)
134	2	安岐城(第 <u>92</u> ・ <u>93</u> 図)	安岐城(第 <u>90</u> ・ <u>91</u> 図)
<i>"</i> .	4	広幡城(第 <u>91</u> 図)	広幡城(第 <u>89</u> 図)
136	9	(第 <u>94</u> 図414・415)	(第92図414・415)
138	3	第 <u>95</u> 図	第 <u>93</u> 図
144	15	豊前国衛田所,	豊前国衙田所,
"	26	<u>及ば</u> し,	及 <u>ぼ</u> し,
"	29	鎖西宇都宮氏	鎮西宇都宮氏
145	21	論じて <u>あ</u> るとおり	論じているとおり
151	8~9		A
101		—— <u>ლ 幣</u>	(線が抜けている)
付編9	Fig. 6		下段右より 1~4トレンチ 上段右より 5・8・6・7トレンチ
17	8	(Fig. <u>15</u>) _o	(Fig. <u>16</u>) _o
PL.1			上段が1,下段が2
PL.2			上段が1,下段が2
			

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

-9-

福岡県築上郡椎田町所在広幡城跡の調査



広幡城跡全景航空写真 (東から)



1 広幡城跡遠景 (東から)



2 広幡城跡全景 (東から)



1 広幡城跡全景気球写真(真上から)



2 広幡城跡SR2下石組(南から)



1 広幡城跡の虎口と堀(北から)



2 広幡城跡の堀と土層(北から)

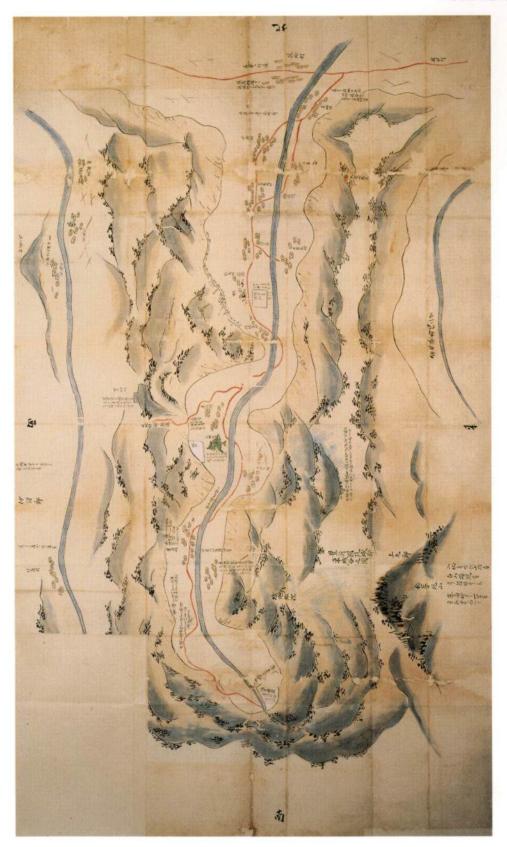


1 広幡城跡SX5・6・7 (東から)



2 広幡城遺跡火葬墓(南から)

巻頭図版6



築城郡城井谷絵図(福岡県立図書館蔵)



1 広幡城跡出土ボタン



2 広幡遺跡SK1出土二彩小壺

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託されて、昭和61年度より一般国道 10号椎田バイパスに関わる埋蔵文化財の調査を行ってきました。

発掘調査については平成元年をもって終了し、椎田バイパスの供用が平成3年3月15日より開始されましたことは、この事業に関与することとなったひとりとして、誠に慶賀すべきことであると存念します。

この報告は、昭和63年度に実施した広幡城跡についてのものでありますが、中世宇都宮氏の出城と言われていたこの山城跡の内容の一端が明らかにされるとともに、弥生時代の遺構なども知られるに至っております。

本書が、旧豊前国内における原始・古代そして中世の地域史解明の一助ともなり、かつ文化財愛護思想の普及に活用されるならば幸甚であります。

最後に、発掘調査あるいはその後の事業に御協力・御援助いただいた方々に衷 心より感謝いたします。

平成 4 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

- 1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施した遺跡の報告書であり、一般国道10号椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の9冊目にあたる。
- 2. 本書をもって、日本道路公団の委託による椎田バイパス関係の報告は最後である。
- 3. 本書には,昭和63年度(1988~1989)に調査を行った,福岡県築上郡椎田町水原に所在する 広幡城跡・広幡遺跡を収録した。
- 4. 遺構の実測は、井上裕弘・木下修・木村幾多郎・伊崎俊秋・日高正幸・海津恵子・鎌田つる代・森仲美・田原フジ子・久本英子が行い、写真は井上・木下・伊崎が撮影した。
- 5. 航空写真は伊崎と緒方泉が撮影し、気球写真はフォトオオツカによる。
- 6. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもと福岡県立九州歴史資料館および文化課甘木事務 所において行った。
- 7. 出土遺物の実測は、大野愛里・高瀬照美・木下・伊崎が行った。
- 8. 遺構・遺物の整図等は、豊福弥生・原かよ子・水野美奈・関久江・岡由美子・黒木美幸・ 塩足里美と伊崎が行った。
- 9 出土遺物の写真は、石丸洋・岡紀久夫・上野周平が撮影した。
- 10. 本書で使用した方位には座標北と磁北とがある。
- 11,出土鉄滓の分析・炭化材の樹種同定・C¹⁴ 年代測定の結果を,自然科学系の調査として収録した。
- 12. 特論として、松下辰章氏・磯村幸男氏の玉稿を掲載した。
- 13. 末尾に、付編として、平成3年(1991)に行った広幡城跡第二次調査の成果を収めた。
- 14. 本書の執筆は、Vと〔特論〕を除いて、本文中の出土遺物の石器・土製品については木下が、それ以外を伊崎が行った。
- 15. 本書は伊崎が編集した。

本 文 目 次

		(頁)
T	はじめに	1
_	1. 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	2. 調査組織と関係者	7
I	遺跡の立地と歴史的環境	10
	1. 立 地···································	10
	2. 周辺の遺跡	12
	3. 周辺の山城跡の分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
	4. 広幡城跡についての文献	15
Ш	広幡城遺跡の調査	
	ム	
. A	1. 調査区内外の遺構の状況····································	21
	2. Ⅲ・Ⅲ郭の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	2. II・II郭の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	. 調査前の状況 ····································	26
1 -	. 土塁と堀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	26
	■. 工 妥 と 堀 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
, ,	Ⅳ. 南斜面の遺構	38
	V. 出土遺物 ····································	•••••••44
	4. 小 結	50
В	3. 奈良時代の遺構と遺物	
	1. 1号火葬墓	
	2. その他の遺物	53
	3. 小 結	•••••54
C	こ. 弥生時代の遺構と遺物	56
	1. 竪穴住居跡	
	2. 貯 蔵 穴	
	3. ピットその他の土器・石器	
	4. 小 結	76

${ m I\!V}$	広幡遺跡の調査	7
Α.	. 中世以降の遺構と遺物7	8
	. 中世以降の遺構と退物 1. 調査区外の現況7	8
•	2. 建物·石垣·溝······7	9
	3. 土 壙8	8
	4. 墓9	3
	5. SGI その他······9	5
	6. 小 結···································	8
В.	。	9
	1 堅穴住居跡9	9
,	2. 掘立柱建物跡11	0
•	3. 包含層〈S G 2〉···································	2
	4 その他の遺構と遺物······11	8
	5. 小 結	9
C	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	0:
	1	0
	2. 小 結	21
T 7		
V	目然科字系の調宜	14
Α	. 広幡遺跡から出土した炭化材12	Z
В	. 広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査 ····································	33
C	. C —14年代測定 ····································	29
IV	総 括	30
.11	1. 広幡城跡の築城と存続年代1	30
•	2. 広幡遺跡と広幡城跡1:	39
〔特	論〕	
Cla		44
	2. 松下辰章「廣幡城と城井宇都宮氏」1	
	P. D. Lead. Million Committee of the Principal State of the Committee of t	
行什	編〕	
, (13	広幡城跡 一第2次調査一	

図 版 目 次

巻頭図版1 広幡城跡全景航空写真(東から)

巻頭図版 2 1. 広幡城跡遠景(東から)

2. 広幡城跡全景(東から)

巻頭図版 3 1. 広幡城跡全景気球写真(真上から)

2. 広幡城跡 S R 2 下石組(南から)

巻頭図版4 1. 広幡城跡の虎口と堀(北から)

2. 広幡城跡の堀と土層(北から)

巻頭図版 5 1. 広幡城跡 S X 5 ・ 6 ・ 7 (東から)

2.広幡城遺跡火葬墓(南から)

巻頭図版 6 築城郡城井谷絵図(福岡県立図書館蔵)

巻頭図版 7 1. 広幡城跡出土ボタン

2. 広幡遺跡 S K 1 出土二彩小壺

図 版 1 広幡城跡周辺航空写真(国土地理院 K U -72- I X C I -4)

図 版 2 広幡城跡全景航空写真(東から)

図 版 3 1.広幡城跡航空写真(東南から)

2. 広幡城跡航空写真遠景(東南方向から)

図 版 4 1. 広幡城跡航空写真(東から)

2. 広幡城跡航空写真遠景(北から)

図 版 5 1. 広幡城跡航空写真(東から)

2. 広幡城跡航空写真(西から)

図 版 6 1. 広幡城跡遠景(北から)

2. 広幡城跡遠景(東から)

3. バイパス開通後の広幡城跡(東から)

図 版 7 1. 広幡城跡調査前全景気球写真(東南から)

2. 広幡城跡調査前【郭部分気球写真(東から)

3. 広幡城跡調査前 I 郭の堀・土塁気球写真(東から)

図 版 8 1. 広幡城跡と広幡遺跡全景(東南から)

2. 広幡城跡全景気球写真(東南から)

- 図 版 9 1. 広幡城跡全景気球写真(東から)
 - 2. 広幡城跡 [郭気球写真(南から)
- 図 版 10 1. 広幡城跡 S R 1 (東から)
 - 2. 広幡城跡 SR 3 (西から)
 - 3. 広幡城跡 SR 4 (南から)
- 図 版 11 1. 広幡城跡 SR 2 (東から)
 - 2. 広幡城跡 SR 2下石組(東から)
 - 3. 広幡城跡 SR 2下石組(西から)
- 図 版 12 1. 広幡城跡 SR 2 下石組(南から)
 - 2. 広幡城跡 SR 2下石組(北から)
 - 3. 広幡城跡 S R 11下石組(北から)
- 図 版 13 1. 広幡城跡 SR11(東から)
 - 2. 広幡城跡 S R 11下石組(東から)
 - 3. 広幡城跡 S R 11下石組(南から)
- 図 版 14 1. 広幡城跡堀 I 区と S R 11 (東から)
 - 2. 広幡城跡堀 [区と S R 10 (東から)
 - 3. 広幡城跡堀Ⅲ区とSR9(東から)
- 図 版 15 1. 広幡城跡 SR 6
 - 2. 広幡城跡堀V区とSR5(東から)
 - 3. 広幡城跡縦堀とSR7(東南から)
- 図 版 16 1.広幡城跡堀Ⅳ区・SZI(北東から)
 - 2. 広幡城跡 S Z I (南西から)
- 図 版 17 1. 広幡城跡堀 Ⅱ 区と S Z Ⅱ (東から)
 - 2. 広幡城跡SΖⅡ(南から)
- 図 版 18 1. 広幡城跡 SR 5と階段(東から)
 - 2. 広幡城跡虎口とSZI(東北から)
- 図 版 19 1.広幡城跡虎口と【郭内(南東から)
 - 2. 広幡城跡 Ⅰ郭内礎石群(東から)
- 図 版 20 1.広幡城跡 S S 1 (東から)
 - 2. 広幡城跡 SS 4 (北から)
 - 3. 広幡城跡 SS 5 (北から)
- 図 版 21 1.広幡城跡SS2(南西から)
 - 2. 広幡城跡SS3(北西から)

- 3. 広幡城跡 SS 9・10(西から)
- 図 版 22 1. 広幡城跡 S K 1 (東から)
 - 2. 広幡城跡 SK 3 (南から)
 - 3. 広幡城跡 SK 5 (南から)
- 図 版 23 1.広幡城跡 S K 6 (北から)
 - 2. 広幡城跡 SK 7 (南から)
 - 3. 広幡城跡 SK 7 (南から)
- 図 版 24 1. 広幡城跡 S X 1 (真上から)
 - 2. 広幡城跡 S X 1 (北東から)
- 図 版 25 1. 広幡城跡 S X 1 (南西から)
 - 2. 広幡城跡 S X 1 の礫石(南から)
 - 3. 広幡城跡 S X 1 の壁溝(南西から)
- 図 版 26 1. 広幡城跡 S X 8 (真上から)
 - 2. 広幡城跡 S X 8 (東から)
 - 3. 広幡城跡 S X 8 (西から)
- 図 版 27 1.広幡城跡 S X 5~7(東から)
 - 2. 広幡城跡 S X 5 ~ 7 (真上から)
- 図 版 28 1.広幡城跡SX5~7(北から)
 - 2. 広幡城跡 SX5~7(東から)
- 図 版 29 1. 広幡城跡 S X 5 (東から)
 - 2. 広幡城跡 S X 6 · 7 (東から)
- 図 版 30 1.広幡城跡 S X 2・4 (南東から)
 - 2. 広幡城跡 S X 2(北から)
 - 3. 広幡城跡 S X 9 (東から)
- 図 版 31 1.広幡城遺跡1号火葬墓検出状態(南から)
 - 2. 広幡城遺跡1号火葬墓検出状態(真上から)
 - 3. 広幡城遺跡1号火葬墓断面(南東から)
- 図 版 32 1.広幡城遺跡1・2号住居跡(北東から)
 - 2. 広幡城遺跡1・2号住居跡(西から)
- 図 版 33 1、広幡城遺跡3号住居跡(南西から)
 - 2. 広幡城遺跡 4 号住居跡(北から)
- 図 版 34 1. 広幡城遺跡 5 号住居跡(西南から)
 - 2. 広幡城遺跡2~9号貯蔵穴(南から)

- 図 版 35 1. 広幡城遺跡1号貯蔵穴(北から)
 - 2. 広幡城遺跡7号貯蔵穴(南から)
- 図 版 36 1. 広幡城遺跡2・6号貯蔵穴(南から)
 - 2. 広幡城遺跡 8 号貯蔵穴(東から)
- 図版 37 1. 広幡城遺跡 3 号貯蔵穴(東から)
 - 2. 広幡城遺跡 4 号貯蔵穴(東から)
 - 3. 広幡城遺跡5号貯蔵穴(北から)
- 図 版 38 広幡城跡出土土器
- 図 版 39 広幡城跡出土土器
- 図 版 40 広幡城跡出土土製品・石器・金属器
- 図 版 41 広幡城跡出土陶磁器・骨蔵器・須恵器・石器
- 図 版 42 広幡城遺跡弥生住居跡・貯蔵穴出土土器
- 図 版 43 広幡城遺跡出土弥生土器
- 図 版 44 広幡城遺跡出土石器
- 図 版 45 1. 広幡遺跡全景(南東から)
 - 2. 広幡遺跡全景(北西から)
- 図 版 46 1. 広幡遺跡東半部全景(北西から)
 - 2. 広幡遺跡1号建物跡(南東から)
- 図 版 47 1. 広幡遺跡1・2号石垣全景(東南から)
 - 2. 広幡遺跡1号石垣(東南から)
 - 3. 広幡遺跡2号石垣(東から)
- 図 版 48 1. 広幡遺跡 3 号石垣(東南から)
 - 2. 広幡遺跡3号石垣と暗渠(南西から)
 - 3. 広幡遺跡3号石垣と暗渠(蓋石除去後)(南西から)
- 図 版 49 1. 広幡遺跡暗渠全景(北東から)
 - 2. 広幡遺跡暗渠全景(蓋石除去後)(北東から)
 - 3. 広幡遺跡暗渠全景(南西から)
 - 4. 広幡遺跡暗渠の一部(東北から)
- 図 版 50 1. 広幡遺跡1号土壙(東から)
 - 2. 広幡遺跡1号土壙〈礫石除去後〉(東から)
- 図 版 51 1.広幡遺跡2号土壙(南東から)
 - 2. 広幡遺跡1号墓(東南から)
 - 3. 広幡遺跡 2 号墓(西から)

図	版	52	1.広幡遺跡1号住居跡(南東から)
			2. 広幡遺跡 3 号住居跡(北西から)
図	版	53	1. 広幡遺跡 2 号住居跡(北東から)
			2. 広幡遺跡 2 号住居跡カマド(東から)
図	版	54	1.広幡遺跡 5~10号住居跡(西北から)
			2. 広幡遺跡 7 号住居跡(北から)
図	版	55	1.広幡遺跡9号住居跡と3号石垣・暗渠(北東から)
			2. 広幡遺跡 3 号建物跡(北西から)
図	版	56	1.広幡遺跡包含層〈SG2〉土層(北東から)
•		٠	2. 広幡遺跡包含層土器出土状態(東から)
図	版	57	広幡遺跡石垣・溝・墓等出土土器
図	版	58	広幡遺跡 1 号土壙出土陶磁器・瓦
図	版	59	広幡遺跡出土陶磁器
図	版	60	広幡遺跡出土常滑陶器・鉄器
図	版	61	広幡遺跡住居跡出土土器
図	版	62	広幡遺跡住居跡出土土器
図	版	63	広幡遺跡SG2等出土土器
図	版	64	広幡遺跡ピット出土土器:SG1・2出土焼塩土器・緑釉陶器
図	版	65	広幡遺跡出土石臼・子持勾玉・ふいご羽口など
図	版	66	広幡遺跡石器

挿 図 目 次

				()
第	1	図	一般国道10号椎田バイパス路線位置図(約1/850,000)	2
第	2	図	一般国道10号椎田バイパス周辺地理図(1/500,000)	11
第	3	図	広幡城跡周辺遺跡分布図(1/50,000)······12-13(折)	조)
第	4	図	豊前中部地方中世山城分布図(1/200,000)	14
第	5	図	広幡城跡調査部分名称・遺構配置図 (1/800)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
第	6	図	広幡城跡周辺地形図(1/5,000)	22
第	7	図	広幡城跡 Ⅱ・Ⅲ郭地形図(1/800)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24
第	8	図	広幡城跡SR2下の石組実測図(1/40) ······	28

第	9	図	広幡城跡SR11下の石組実測図(1/40)30
第	10	図	広幡城跡土層実測図(1/80)30-31(折込)
第	11	図	広幡城跡階段・虎口・堀V区実測図 (1/60)32-33(折込)
第	12	図	広幡城跡SB1実測図 (1/60)33
第	13	図	広幡城跡郭内遺構配置図(1/600)34
第	14	図	広幡城跡土壙実測図 1 〈S K 1 ~ 3 · 5 〉 (1/40) ······35
第	15	図	広幡城跡土壙実測図 2 〈S K 4 · 6 · 7 〉 (1/40) ·······37
第	16	図	広幡城跡SX1実測図 (1/60) ······38-39(折込)
第	17	図	広幡城跡SX8実測図 (1/60)38-39(折込)
第	18	図	広幡城跡SX5~7周辺地形図 (1/300) ······39
第	19	図	広幡城跡SX5実測図 (1/60)40-41(折込)
第	20	図	広幡城跡SX6実測図 (1/60)
第	21	図	広幡城跡SX7実測図 (1/60)42
第	22	図	広幡城跡SX7内土壙実測図 (1/4)
第	23	図	広幡城跡出土土器実測図1 (1/4)45
第	24	図	広幡城跡出土土器実測図 2 (1/4)
第	25	図	広幡城跡出土土錘実測図(1/3)47
第	26	図	広幡城跡出土石器実測図(1/3)47
第	27	図	広幡城跡出土金属器実測図 (1/1)48
第	28	図	広幡城跡出土鉄器実測図(1/2)49
第	29	図	広幡城跡近~現代陶磁器実測図(1/3)50
第	30	図	広幡城遺跡 1 号火葬墓実測図 (1/20)52
第	31	図	広幡城遺跡出土骨蔵器実測図(1/3)53
第	32	図	広幡城遺跡出土須恵器実測図(1/3)55
第	33	図	広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,000)56
第	34	図	広幡城遺跡 1 ・ 2 号住居跡実測図(1/60)57
第	35	図	広幡城遺跡 3 ・ 4 号住居跡実測図(1/60)59
第	36	図	広幡城遺跡 5 号住居跡実測図 (1/60)
第	37		広幡城遺跡 6 号住居跡実測図(1/60)
第	38		広幡城遺跡住居跡出土土器実測図(1/4)・・・・・・・・・62
第	39		広幡城遺跡貯蔵穴実測図1〈1・7号〉(1/40)
	40		広幡城遺跡貯蔵穴実測図 2 〈2 ・ 6 ・ 8 号〉(1/40)
第	41	図	広幡城遺跡貯蔵穴実測図3〈3~5・9号〉(1/40)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第	42	図	広幡城遺跡貯蔵穴出土土器実測図(1/4)69
第	43	図	広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 1 (1/4)71
第	44	図	広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 2 (1/4)72
第	45	図	広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 3 (1/4)73
第	46	図	広幡城遺跡弥生時代ほかの石器実測図1 (1/2)75
第	47	図	広幡城遺跡弥生時代ほかの石器実測図 2 (1/3)75
第	48	図	広幡城遺跡出土石器実測図(1/3)75
第	49	図	広幡遺跡表採土器実測図 (1/3)79
第	50	図	広幡遺跡 1 号建物跡・出土遺物実測図 (1/60・1/3)80
第	51	図	広幡遺跡 4 号建物跡実測図(1/60)81
第	52	図	広幡遺跡 1 · 2 号石垣, 暗渠実測図 (1/60) ·······82-83(折込)
第	53	図	広幡遺跡石垣出土遺物実測図(1/3)83
第	54	図	広幡遺跡 2 号石垣出土石臼実測図(1/4)・・・・・・83
第	55	図	広幡遺跡溝出土遺物実測図1〈SD1・2〉(1/3) ······86
第	56	図	広幡遺跡溝出土遺物実測図 2 〈S D 3 ~10〉 (1/3) ·······87
第	57 .	図	広幡遺跡 1 号土壙実測図(1/40)
第	58	図	広幡遺跡 1 号土壙出土遺物実測図 1 (1/2)90
第	59	図	広幡遺跡 1 号土壙出土遺物実測図 2 (1/4)91
第	60	図	広幡遺跡 2 ・ 3 号土壙実測図(1/40)92
第	61	図	広幡遺跡1・2号墓実測図(1/20)・・・・・・・・・93
第	62	図	広幡遺跡1・2号墓出土遺物実測図(1/3)94
第	63	図	広幡遺跡SG1出土土器実測図1 (1/3)······96
第	64	図	広幡遺跡 S G 1 出土土器実測図 2 (1/4) · · · · · · · 97
第	65	図	広幡遺跡出土遺物実測図(1/3)・・・・・・98
第	66	図	広幡遺跡 1 号住居跡実測図(1/60)100
第	67	図	広幡遺跡 2 号住居跡出土子持勾玉実測図(1/2)101
第	68	図	広幡遺跡 5 号住居跡出土羽口実測図(1/3) 102
第	69	図	広幡遺跡 2 ・ 3 号住居跡実測図(1/60) 103
第	7 0	図	広幡遺跡 7 ・ 9 号住居跡実測図(1/60)・・・・・・・105
第	71	図	広幡遺跡住居跡出土土器実測図1 (1/3)106
第	72	図	広幡遺跡住居跡出土土器実測図 2 (1/4)107
第	73	図	広幡遺跡出土鉄器実測図(1/3)108
第	74	図	広幡遺跡 5 ・6 ・8 ・10号住居跡実測図(1/60)108-109(折込)

第	7 5	図	広幡遺跡10号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	109
第	76	図	広幡遺跡10号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	110
第	77	図	広幡遺跡 2 ・ 3 号建物跡実測図(1/60)	
第	78	図	広幡遺跡建物跡出土土器実測図(1/3) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第	79	図	広幡遺跡包含層土層図・土器出土状態実測図 (1/40)	
第	80	図	広幡遺跡包含層〈SG2〉出土土器実測図1 (1/3) ·······	114
第	81	図	広幡遺跡包含層〈SG2〉出土土器実測図2 (1/3) ·······	
第	82	図	広幡遺跡包含層〈SG2〉出土土器実測図3(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	83	図	広幡遺跡包含層〈SG2〉出土羽口実測図(1/3) ·······	
第	84	図	広幡遺跡包含層〈SG2〉出土焼塩土器実測図 (1/3) ····································	
第	85	図	広幡遺跡出土石器・土製品実測図(1/3)	117
第	86	図	広幡遺跡ピット出土土器実測図(1/3)	
第	87	図	広幡遺跡出土縄文時代他遺物実測図(1/3)	120
第	88	図	広幡遺跡縄文時代他の出土石器実測図(1/2)	
第	89	図	広幡城跡出土土器実測図(1/6)	
第	90	図	安岐城SX1·SX2出土土器······	
第	91	図	安岐城出土土器······	134
第	92	図		
第	93	図	波多江遺跡SD003 その他出土土器	
第	94	図	広幡城復原イラスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第	95	図	城井谷をめぐる見取図・・・・・・	
第	96	図	広幡城跡・広幡遺跡地形図 (1/800)	込)
第	97	図	広幡城跡・広幡遺跡全体図 (1/800) 164(折	込)

写 真 挿 図

Photo.	1	完成後の椎田バイパス (椎田町水原付近)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·X
Photo.	2	広幡遺跡調査風景	• 4
Photo.	3	広幡遺跡10号住居跡付近	• 4
Photo.	4	葛城小学校 6 年生の社会科実習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 5
Photo.	5	ム, ム何かあるぞ!?	• 5

Photo.	6	広幡城跡での完全防備の艶姿······5					
Photo.	7	S X 5 ~ 7 の発掘····································					
Photo.	8	葛城小学校 5 年生の実習6					
Photo.	9	降雪中の作業					
Photo.	10	作業員一同					
Photo.	11	雪のあと求菩提方向をのぞむ18					
Photo.	12	広幡城跡空中写真(虎口付近) · · · · · · · · 20					
Photo.	13	広幡城跡尾根上に残る土塁・・・・・・23					
Photo.	14	広幡城跡Ⅱ・Ⅲ郭西端の土塁・・・・・・・・25					
Photo.	15	広幡城跡 [郭北端くびれ付近27					
Photo.	16	広幡城跡Ⅱ郭堀Ⅰ区の発掘・・・・・・・31					
Photo.	17	(左) S X 1 の溝, (右) I 郭堀 V 区の溝51					
Photo.	18	(左)SХ1のピット、(右)SХ8のピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・					
Photo.	19	降雪中の発掘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・					
Photo.	20	作業風景76					
Photo.	21	広幡遺跡周辺135					
Photo.	22	宇都宮鎮房の墓164					
		表 目 次					

付 図 目 次

付	図	1	広幡城跡地形測量図(1/400
付	図	2	広幡城跡測量図(1/400)
付	図	3	広幡城遺跡遺構図(1/200)
付	図	4	広幡遺跡遺構図(1/200)

V - A		林氏の報文		
Fig.	1	広幡1号墓 ユズリバ	······122—1	23
Fig.	2	広幡城貯蔵穴2下層	ウリカエデ・・・・・・122-1	23
Fig.	3	広幡城貯蔵穴6	ウリカエデ・・・・・・122-1	23
Fig.	4	広幡城貯蔵穴8	ウリカエデ・・・・・・122-1	23
V - B		大沢氏の報文		
Fig.	1	築上郡地区出土製鉄関	連遺物の Ti - V ······ 12	28
Table.	1	供試材の履歴と調査項	目	23
Table.	2	鉄滓・鍛造剝片の化学	組成12	25
Tabel.	3	広幡遺跡出土精錬鍛冶	滓(F K17)のコンピュータープログラムによる	
		高速定性分析結果		27
Photo.	1	鍛錬鍛冶滓・精錬鍛冶	滓の顕微鏡組織128-12	29
Photo.	2	広幡遺跡出土精錬鍛冶	滓(FK17)の特性X線像128—13	29



Photo. 1 完成後の椎田バイパス (椎田町水原付近)

Iはじめに

一般国道10号は、北九州市から大分市・宮崎市を経て鹿児島市に至る総延長 450 kmの、九州東海岸を走る大動脈である。そのうち、北九州市と大分市との間は北大道路として過年度より部分的に整備が進められてはきていたが、特に行橋市から豊前市にかけては近年北九州市のベッドタウン化が進んできたこともあって、その道路交通網の整備が急務とされていた。その北大道路の一環として椎田バイパスが計画され、建設大臣の事業許可がおりたのは和和55年(1980)2月のことである。

椎田バイパスは京都郡豊津町から築上郡椎田町に及ぶ全延長16.2kmであり、そのうち10.3kmを日本道路公団が施工し、一般有料道路として供用するというものであった。道路の工事については昭和62年(1987)2月に発注されてのち、平成3年3月15日には供用開始となった。

その間、文化財についての協議は、事業許可の前後から開始されていたが、路線決定、用地 買収等を経過してのち、日本道路公団から委託されて実際に発掘調査が開始されたのは昭和61 年(1986)からであった。26の地点が対象となっていたものの、実際には22の地点において 175,740㎡を調査し、平成元年(1989)12月をもって完了した(表1)。報告書の刊行は平成元年 (1989)より逐次行ってきて、5集まで刊行されたが、本年度(平成3年度)が最終年度となっている。

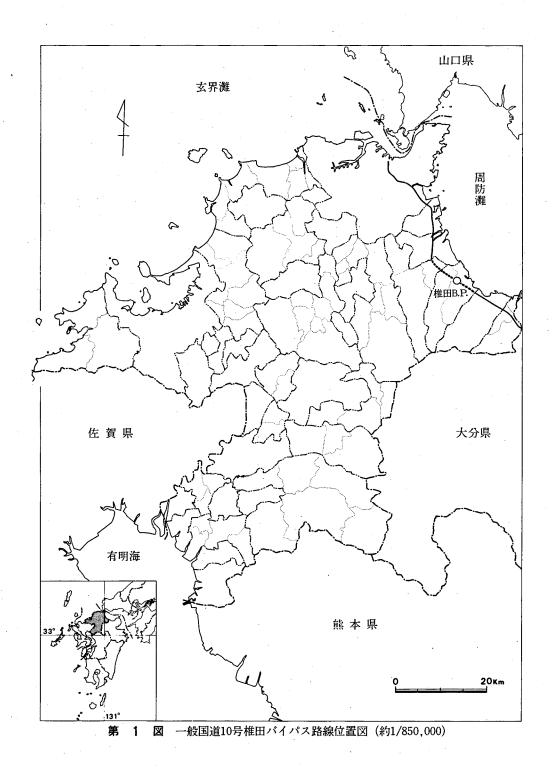
平成3年度は、1地点・神手遺跡、7地点(A・塞ノ神遺跡、B・赤幡線がでは 双遺跡)、9地点(広幡城跡・広幡遺跡)10地点・山崎遺跡、11地点・尾久保屋敷遺跡、13地点 ・日奈古寺尾遺跡についての整理を文化課甘木事務所、同太宰府事務所、九州歴史資料館等で 行うとともに、報告書が刊行され(6~9集)、日本道路公団からの委託による椎田バイパス関係の事業は完了したのである。

本書においては、第9地点の広幡城跡・広幡遺跡について報告する。

1.調査の経過

広幡城跡・広幡遺跡の発掘調査は、昭和63年(1988)7月から開始し、翌平成元年(1989) 3月に終了した。

第9地点としては、はじめ広幡城跡のみの名称であったが、山頂の山城跡に加えて裾部にも竪穴住居跡等が検出されたので、この裾部の方を広幡遺跡と別称することとした。広幡城遺跡で約6,200㎡、広幡遺跡で約2,600㎡の面積、計約8,800㎡を調査したが、これは平面積であって、実際には斜面がかなり含まれるので実面積はもっと広くなる(付図1・2)。



_ 2 _

1 10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表

											_	_			·	т												
報告書		無	無	無	無	鳅	無	無	無		無	無	無	無	無	鳅	無	無	無	無	無			無	無	無		
		9	က		_	က	က	က	4		4	4	4	∞	∞	∞	2	6	~	7	2			2	2	2		
鏕				豊津町委託						遺構なし												遺構なし	遺構なし				遺構なし	
養	平1								4,683			4,500	11,000	450	18,800	2,000	1,000											42,433
と面が	63										4,547	800	11,000		2,000	7,500	4,900	13,800										44,547
郑冈	29	1,000	009,6	11,000	3,300	2,000	2,000	2,900									-										442	32,242
題	61年度 (㎡)	試掘(1,200)	試 掘	*	*		*			試掘(3,600)	武 掘	*	4	*	*	"	*		7,200	160	5,800	試 掘		19,500	11,000	15,000		(4,800) 58,660
分布面積	(#)	1,200	9,600	11,000	3,300	2,000		3,000	4,683		4,547	2,300	22,000	450	20,800	6,500	2,900	13,800	7,200	160	5,800			19,500	11,000	15,000		175,740
松		弥生・古墳集落,墓地	弥生・古墳・奈良集落	"	4		"	4	土壙		弥生散布地	縄文・弥生・古墳集落	弥生・古墳集落, 墓地	中世石積	古墳~平安集落	弥生・古墳集落	"	弥生, 中世城跡	縄文・奈良集落	古墳集落	. "			古墳墓地	"	, ,		1000
所在地		豊津町徳永	/ 档見	4 4	/ 下原	4 4	" "	/ 档見	築城町船迫	" "	/ 安武	" "	4: 4	/ 赤幡	" "	赤幡・広末	^ 広末	/ 水原	椎田町水原	" "	↑ 日奈古	〃 山本	~ 上り松	~ 石堂	^ 福間	/ 山添	》 石堂	
#	遺跡名		岩 見 遺 跡	ソ重選	製 田		•	カワラケ田遺跡				安武・土井の内遺跡	田遺	`	ヶ坪遺	赤幡·十双遺跡	広末·安永遺跡	広 幡 城 遺 跡	山 崎 遺 跡	尾久保屋敷遺跡	日奈古寺尾遺跡			堂中後ヶ谷古墳	墳	頁無 古墳群		
1 1	地河	1 神	2-A	2-B	2-Ç 🖟	2-D	2-E	2-F	3	4	2	6 - A 3	6-B 3		-	7-C ½	8	9 17	10 1	11	13 E	16	18		22	23 📱	24	

以下、調査日誌を抄録して経過を辿ることとする。

昭和63年(1988)

- 7月7日(木) 道路公団と調査に着手する件で協議。
- 22金 現地へユニットハウス,器材を搬入。
- 26火) 重機入るも雨にて動けず。トイレ設置。水原区区長へ挨拶。
- 28休) 広幡遺跡について重機稼動す。
- 8月1日(月) 作業員入る。テント設営。
 - 5金 遺構検出と発掘。16:00すぎより雷雨。
 - 10休) 住居跡らしき遺構が現れる。
 - 17休) 広幡城跡について発掘前の現況における気球写真撮影。
 - 18休) 広幡遺跡の遠景写真。
 - 25休) 1 · 2 号石垣の調査。レベル 移動。
 - 30(火) 1号墓発掘。広幡城跡の現況 地形測量にとりかかる。
- 9月1日(木) 福岡県文化財保護指導委員・宮本工氏来訪。
 - 6 (火) 広幡城跡の路線内現況測量お わり。
 - 8休)広幡城跡のSX1周辺の表土 を除去。SX1の石組が横穴墓の 閉塞石のようにみえた。
 - 9(金) 2号住居跡より子持勾玉出土。 また、溝5の南側遺構面より青磁 ・白磁・陶器・土師器・スラッグ などが出土。

 - 30金) 現場再開。10号住居跡より多量の炭化米出土。
- 10月4日(火) 包含層の発掘にとりかか

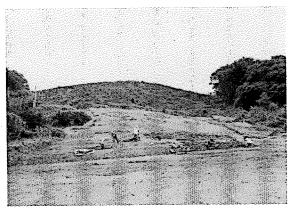


Photo. 2 広幡遺跡調査風景



Photo. 3 広幡遺跡10号住居跡付近

る。

- 12(水) 1号土壙より二彩の小壺出土。
- 17(月) 広幡遺跡全体写真。
- 19休) 葛城小学校 6 年生28人来訪。 包含層の発掘を手伝う。
- 25(火) 広幡城跡項部の遺構検出を始める。
- 28金 テントを広幡城跡の方に移す。
- 31月)広幡遺跡については発掘も図面も全て終了。広幡城跡の堀の発掘。
- 11月1日(火) 広幡城跡の調査に本格的にとりかかる。
 - 2(水) 土層の写真撮影,実測及び堀 の発掘等をすすめる。併せて1/ 100平板測量を行う。
 - 4 (金) 築上郡文化財協議会長・松下 辰章氏来訪。
 - 18金 土層用土堤の除去。平板測量 をすすめる。
 - 22次 SX1の発掘始める。
 - 30休) SK1より永楽通宝出土。レベル59.505m。
- 12月6日(火) 広幡城跡の用地外の平板 測量 (1/200) を始める。
 - 13次 航空写真撮影に備えて清掃。
 - 14(水) 天候不順にて航空写真は中止。 S X 5~7の検出。
 - 19月) ヘリコプターによる航空写真 撮影。
 - 22休) 礎石その他の写真撮影。
 - 26例 本年の調査おわり。

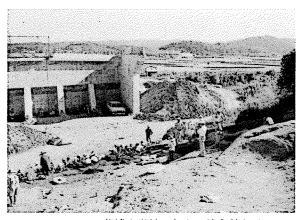


Photo. 4 葛城小学校 6 年生の社会科実習



Photo. 5 ム・ム……何かあるぞ!?



Photo. 6 広幡城跡での完全防備の艶姿

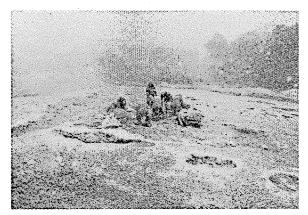


Photo. 7 SX5~7の発掘



Photo. 8 葛城小学校5年生の実習

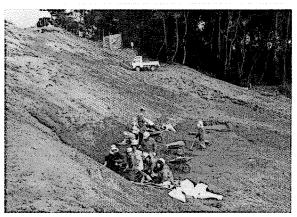


Photo. 9 降雪中の作業

昭和64年(1989)

- 1月6日金) 仕事はじめ。
 - 7(土) 昭和天皇6:33崩御。
 - 9 (月) 平成元年となる。
 - 10(火) 暖かい一日であった。広幡城 跡頂部の弥生遺構の発掘を続行。
- 13金 葛城小学校 5 年生29人来訪。 発掘を手伝う。
- 16金 貯蔵穴やSX, SK等の発掘 と実測を併行して行う。
- 26休) 新聞発表を行う。
- 27金 ものすごい雪となる。それで も実測,発掘を行う。
- 2月10日金 雪ひどし。
 - 15休) 気球写真をとる。
 - 20(月) テントを撤去し、器材の一部 を片づける。実測と写真撮影等の 詰めの作業を行う。
 - 26(日) 広幡城跡のⅡ郭・Ⅲ郭等の測量を始める。
- 3月1日(水) 遠景写真。
 - 2(木) 広幡城跡の発掘調査全で終了。 路線外の測量を行う。
 - 6(用) 広幡遺跡の路線外部分の測量 を行う。
 - 14伙) 花ぐもりのような一日。広幡 遺跡の測量おわり。
 - 17金 広幡城跡の測量おわり。
 - 18生) 全て終了。

2. 調査組織と関係者

調査関係者は次のとおりである(昭和63〈1988〉~平成3〈1991〉年度)。

日本道路公団福岡建設局

局 長 杉田 美昭 (前任) 臼井 信 (前任)

中島 英治(前任) 加藤 興次

次 長 吉岡 康行(前任) 進 哲美(前任)

高野 武(前任) 渡辺 国几

総務部長 安元 富次(前任) 進 哲美(前任)

堀 義任(前任) 岡本 房徳

管理課長 副島 紀昭(前任) 江良 信弘

管理課長代理 三野 徳博(前任) 荒木 恒久(前任) 塚本 文康

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長 山田 将博(前任) 大島 勲

副所長(事務) 佐藤健一郎

副所長(技術) 坂牧 嵩三(前任) 国本 忠敬

庶務課長 樫川 敏博

用地課長 二神 鉄男 (前任) 益岡 政夫

工務課長 佐々木俊治(前任) 飯田 文夫

築城工事区工事長 山口 宗雄

椎田工事区工事長 黒田 義樹

福岡県教育委員会

総 括

教育長 竹井 宏(前任) 御手洗 康

教育次長 大鶴 英雄(前任) 淵上 雄幸(前任)

光安 常喜 亀谷 陽三

指導第二部長 大平 岩男 (前任) 月森清三郎

指導第二部参事 葉石 勳 (兼任)

文化課長 葉石 勳(前任) 六本木聖久(前任) 森山 良一

文化課参事 森本 精造 石松 好雄

文化課課長補佐 平 聖峰(前任) 安野 義勝(前任)

国武 康友 松尾 正俊

文化課課長技術補佐 宮小路賀宏(前任) 石松 好雄(前任)

文化課参事補佐 柳田 康雄 井上 裕弘 石山 勲

濱田 信也 副島 邦弘 清水 圭輔

庶務・管理

文化課庶務係長 池原 脩二(前任)

文化課管理係長 岸本 実〈平成2年度から〉

文化課主任主事 沢田 俊夫(前任) 安丸 重喜

調査

文化財保護室室長 石松 好雄 (兼任) 〈平成3年度から〉

 文化課調查班総括
 柳田 康雄 (兼任)

 同 総括補佐
 井上 裕弘 (兼任)

同 技術主査 木下 修(現北九州教育事務所)

同 技術主査 中間 研志 (現福岡教育事務所)

同 主任技師 伊崎 俊秋 (現京築教育事務所)

同 主任技師 飛野 博文

同 主任技師 小田 和利

同 技 師 水ノ江和同

同 文化財専門員 木村幾多郎(現大分市歴史資料館長)

 同 文化財専門員
 日高 正幸

 同 調査補助員
 高田 一弘

同 調查補助員 武田 光正 (現遠賀町教育委員会)

〈発掘作業員〉

今川 和子・奥 フサエ・奥村 靖子・前田フサエ・仲 律子・橋本 富代・西森ヒサ子 久本 英子・海津 恵子・吉國 洋子・田原フジ子・木戸 時子・森渕アツ子・横田みち子 森 仲美・久保 年子・鎌田つる代・横田シズ子・宮原 操・上田 栄子・加来 咲美 奥本ツジエ・正野 鈴子・井上 洋子・井上 正子・西 一枝・井上フミヨ・高橋 知子 加藤 弘義・横田 昇・横田 信雄・河上倉之助・杉野 政一

その他,下記の機関ならびに諸氏には発掘調査期間中および報告書作成の段において,多大なる御協力・御援助・御教示等を賜わった。記して深甚の謝意を表します。

福岡県教育庁京築教育事務所・県立求菩提資料館・椎田町教育委員会・築城町教育委員会・

築上郡文化財協議会・椎田町文化財研究協議会・築城町文化研究会・国立博物館誘致対策室・ 椎田町水原区

村本建設(株)・岡崎工業(株)共同企業体・南日本高圧コンクリート(株)・福島建設

濱島三司・宮本工・川本義継・一川淳江・飯田昭・大尾勝美・相原孝行・松中猛・宮田隆・ 上杉兼春・今田義雄・百留隆男・大木本法通・森重高岑・上田初利・高橋章・谷口知子・鳥井 義明・廣畑博・小松憲道・浦本陽子・尾座本康子

重松敏美・松下辰章・竹下鎭生・高島悟・多田寛・西野浩平・合羅謙治・棚町信康・大塚清 美・横山康子・菅野彌栄子・杉本和子・川本壽子・井無田栄子・椋野恵子・井上九三郎・中原 三重子

横田義章・大塚健・濱田信也・石丸洋・小池史哲・末永弥義

小島佐枝子・西奇子・中塩屋リツ子・藤井カオル・石井紀美子・渡辺輝子・大野愛里・近藤 美恵子・高瀬照美・塩足里美・豊福弥生・岩瀬正信・高畠美智子・古賀陽子・砥上トシ子・武 藤睦子

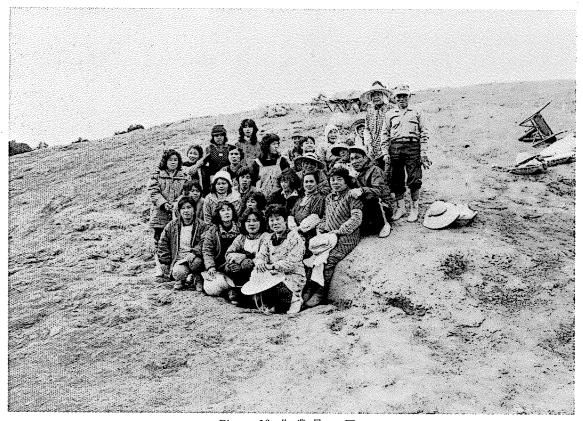


Photo. 10 作業員一同

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

広幡城跡および広幡遺跡は、福岡県築上郡椎田町大字水原653-1, 2, 654, 663, 664-1, 2, 665-1, 2, 3, 666, 667, 671-1, 2, 676, 677, 678, 679, 680, その他に所在し、広幡城跡のごく一部は隣接の築城町大字広末にかかっている。この広幡城跡は、「福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)」には940008の番号にて周知の遺跡となっており、"鎌倉時代、丘陵端付近に所在"との概要説明がなされている。

また、同分布地図には、この広幡城跡の東方に940007の番号で「広幡八幡宮跡」という神社 跡が存することになっていて、概要説明は広幡城跡のそれと全く同じである。この広幡八幡宮 の存した場所というのが今回調査した広幡遺跡の周辺にあたるのか、もっと離れているのかよ くわからない。

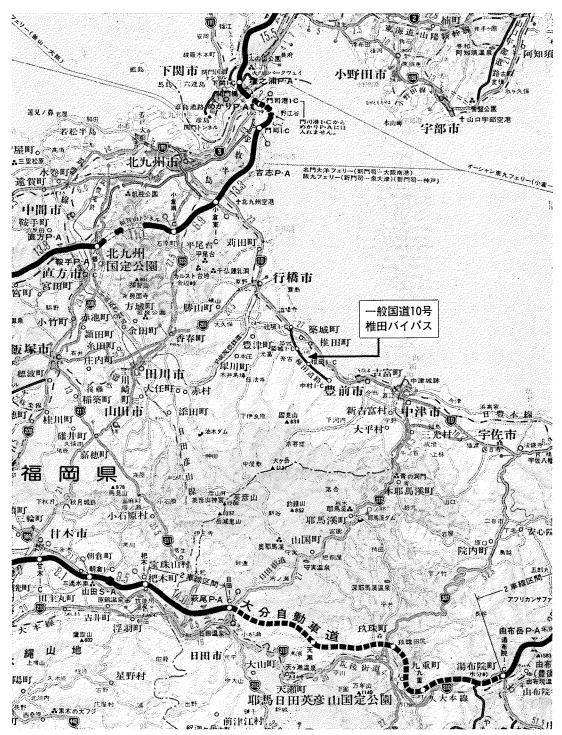
1 . 寸 地 (図版1~3,第2図)

福岡県の東端部に位置する行橋市・京都郡、豊前市・築上郡のいわゆる京築地方は、九州山脈の中の一峰たる英彦山・犬ケ岳・求菩提山・国見山等から派生したいくつもの尾根が周防灘に向かって八ツ手状に伸びて横たわるという地形的環境をなしている。それらの丘陵はわりと高峻なもの、なだらかなものがあるが、ここに報告する広幡城の位置する丘陵は、直接的には求菩提山、国見山からやや東に偏しつつ北へと派生してきて、その先端部付近では屈折して東西方向に尾根を有することになる。ここは北に急で南に緩やかな地形をなしており、山城としての立地上きわめて重要なポイントとなっている。

広幡城跡は頂部で標高約60mを測り、眼下には丘陵西に小山田川が、東に岩丸川が流れ、丘陵先端部で合流してのち椎田浜宮で周防灘に流れ込んでいく。ここから現在の海岸線までは直線で3kmしかない。城跡頂部と周辺の田地とは比高差が40m程ある。

広幡遺跡は広幡城跡の東南裾部にあって、岩丸川左岸の水際に近い所と言ってよい。この標高20~36mの所で各種遺構を検出した。

なお、広幡城跡の頂部に立つと、晴れて空気が澄んでいる日には、遠く東は国東半島とその 先端に姫島が、北方には中国地方の山口県宇部市付近の工場群までもが鮮明に眺望できる。あ るいはもっと遠く光市のあたりまで見えているのかもしれない。ただし、発掘調査を実施して いた期間(1988年8月~1989年3月)の中で、上述の所が見晴るかす眺望しえたのは僅かに数 えるしかなかった。



第 2 図 一般国道10号椎田バイパス周辺地理図 (1/500,000)

〈日本道路公団1991.12発行を転載〉

2. 周辺の遺跡 (第3図)

広幡城跡・広幡遺跡のある椎田町と隣接の築城町においては、従来はそれほど多くの遺跡が周知されているとはいえなかった。昭和43年(1968)3月に刊行された「全国遺跡地図(福岡県)」では、椎田町は2ケ所の古墳群が示されているにすぎず、築城町でも7ケ所の遺跡しかとりあげられていなかった。1976年に福岡県が作成した分布地図では、椎田町が34ケ所、築城町は45ケ所の遺跡がリストアップされた。

その後15年程を経過する中で、椎田バイパスの建設あるいは農業基盤整備事業(ほ場整備) 等に伴っての発掘調査が行われるようになり、遺跡の数はどんどん増え続けている。椎田バイパスに関係した調査は、まさしくこの一帯に幅35~60mのトレンチ(試掘壙)を延々と設定したようなものであった。

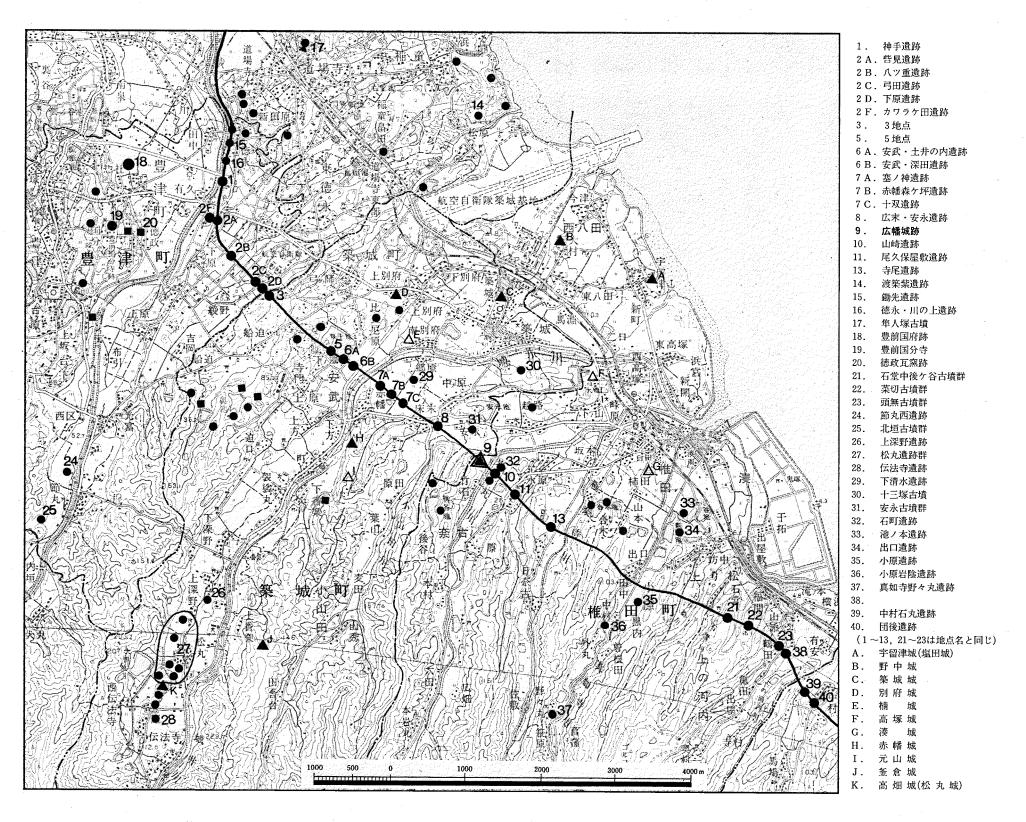
この路線内で築城町・椎田町の遺跡を見ると、3 地点、6 A 地点・安武土井の内遺跡、6 B 地点・安武深田遺跡、7 A 地点・塞ノ神遺跡、7 B 地点・赤幡森ケ坪遺跡、7 C 地点・十双遺跡、8 地点・広末安永遺跡の7 ケ所が築城町、10地点・山崎遺跡、11地点・尾久保屋敷遺跡、13地点・日奈古寺尾遺跡、21地点・石堂中後ケ谷古墳群、22地点・菜切古墳群、23地点・頭無は群の6 ケ所が椎田町で新たに加えられたことになる。築城町の5 地点と椎田町の9 地点・広幡城跡は以前より知られていた遺跡であった。

以上のことを勘案してくると、今までの分布地図にドットがなく空白であった所は、遺跡が ないのではなく、これまでに発見されていないのであって、かえって存在する可能性が高いと いうことを示しているようである。

さて、周辺遺跡についての紹介は、すでにいくつか行われているので、それらを参照していただきたい。ただ本報告と時代的に関連する遺跡を周辺の知られている中から拾いあげると、縄文時代後期では、岩丸川をはさんで広幡遺跡とすぐ対峙した所に石町・山崎・水原遺跡が存する。これらは名称は異なるものの本来は同一の遺跡の広がりである。

弥生時代前期は、築城町下清水において石棺墓群の検出をみるが、あと赤幡森ケ坪遺跡において土器片の出土をみるのみである。それ以外には旧京都・仲津郡まで視野を広げないと近在 しない。弥生中期の前半段階までだと広幡城の北方眼下に広末・安永遺跡が存する。

古墳時代後期(6世紀末~7世紀)から奈良時代あるいは平安時代にかけては、この周辺でも遺



第 3 図 広幡城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

跡がかなりふえてくる。舌状丘陵の頂部あるいは先端付近に群集墳がみられ、その周辺低台地上には集落が形成されている。集落は築城町が安武・深田遺跡、同土井の内遺跡、赤幡森ケ坪遺跡、椎田町で石町遺跡、山崎遺跡、池ノ本遺跡などにて検出・調査されており、とくに、赤幡森ケ坪遺跡の奈良~平安期の住居群は注目される。古墳群は調査されたものは安永古墳群くらいのものであり、現在までに前方後円墳の存在を見ない旧築城郡の具体的様相はまだ詳らかにしえない状況と言ってよい。

中世期の遺構も,椎田町池ノ本・小原あるいは石町・山崎,築城町では赤幡森ケ坪・松丸などで知られており,戦乱の多かったであろう時代背景の中での生活・生業の一端を垣間見ることが少しずつ可能となってきつつある。

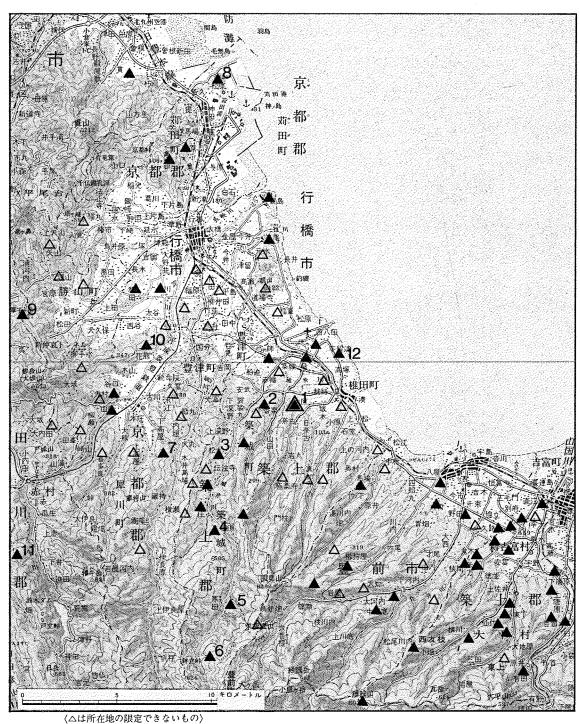
3 周辺の山城跡の分布 (第4図)

豊前国は中世期山城跡の多い所である。福岡県下全体では 700 ケ所を前後する山城跡の存在が知られているが、そのうち豊前国 (福岡県分のみ) は200ケ所をこえる数が捉えられている。それを単純に県下の面積比で分布密度を考えても、その占める割合は高いといわねばならない。

今回報告する広幡城跡は築上郡椎田町に存するが、所謂京築地方に限ってみても、行橋市・京都郡で51ケ所、豊前市・築上郡で70ケ所もの城跡が知られている。それらは鎌倉時代から江戸初期までの約450年の間に築城されたものの集計であって、決して短期間に営まれたものではない。ただ、大半は室町時代後半の戦国期に築城されたものであり、下剋上を常とする戦乱の世にあって諸豪族の興亡は著しいものがあった。必定、防御のためにも山城の築城が多くなったものと考えられる。また、豊前地方は瀬戸内海の西端にあたり、本州側から九州へ上陸する際の最初の地であるという地理的背景も、この豊前地方をあまたの戦乱にまきこむこととなったのである。

さて、広幡城の周辺を見渡すと半径 2 kmの範囲内でも赤幡城・元山城・楠城・高塚城の存在が知られており、さらに半径 6 kmとエリアを広くすれば、稲童城・黒岩城・高畑城・釜倉城・岩丸城・極楽寺城・真如寺城・馬場城・鳥越城・有安城・野中城・塩田城(宇留津城)・別府城・築城城・湊城といった城跡が存する。ともかく数が多い。しかし、その内容がごく一部なりとも具体的に知れるものは皆無であり、それらの詳細は今後の調査に委ねられる。これらの多くは山頂に立地する文字どおりの要塞としての山城であるが、いくつかの低台地に存するものは山城というより平地における居館の名残りを示しているのであろう。

もっと広い視野で周辺をみると、文献にもよく名の出てくるものに松山城(苅田町)、馬ケ岳



1. 広幡城 2.赤幡城

5. 大平城 6. 萱 切 城(城井の上城)

9. 障子ケ岳城 10. 馬ケ嶽城

3. 高畑城(松丸城)

7. 神楽城

11. 岩石城

4. 本 庄 城 8. 松山城 12. 宇留津城(塩田城)

第 4 図 豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)

城(行橋市),障子ケ岳城(勝山町),神楽城(犀川町),本庄城・萱切城(築城町),香春岳城(田川郡香春町),岩石城(同添田町)などがある。特に萱切城は戦国末期,城井宇都宮氏が、中津に襲封した黒田氏に反抗して拠点とした城とされており、天険の要塞の地に営まれている。

以上をもふくめて、京築地方の山城跡の中でこれまでに地形測量・発掘調査等の行われたものはごく僅かしさない。

松山城跡は周防灘に突き出た独立丘陵の、標高128m を最高所とする所に築かれている。ここは遺構の確認調査や踏査のあと、重要遺跡緊急確認調査を実施して主郭付近の測量、発掘、地形図作成など基礎資料の整備に努めてきているが、それ以外に土取り等に先立っての土塁の調査なども行われている。ここの土塁も主郭から延びて尾根上を屈折しつつ築かれて山麓の方へと続いている。

障子ケ岳城跡は京都郡と田川郡の境にあり、標高 427 mを最高所とする尾根上に築かれている。ここの頂部のみで全長 260 mに及ぶ距離の中に5つの郭が造られ、それらは一直線に並ぶ連郭式の配置をとっている。頂部の地形測量が行われたのみで発掘は実施されていない。ここは京都平野から筑豊へぬける要衝の地である。

4. 広幡城についての文献

広幡城のことに触れた文献が江戸時代以降に幾つかあるので、知りえた範囲で以下に引いておく $(\hat{\mathbf{1}}\sim\hat{\mathbf{5}})$ 。

また、広幡社(八幡宮)については中世に遡る文献があるので該当する部分のみ抜きだしておく($ar{(A} \cdot B)$ 。

① 『豊前国古城記』 宝暦 7年 (1757)

城跡 一ケ所 廣末村水原村堺廣幡山

右昔宮原中将と云ふ者切開き,其後城井民部重房出城に取立,瓜田春永と云ふ者城代此 は如水に内通城井の郷案内せしよし。

② 『大宰管内志』 天保12年 (1841)

豊前国六巻 築城郡

〇廣幡社

〔字佐大鏡〕に築上郡桑田郷云々……。廣幡は比呂波多と訓ムべし……。 〔城井闘争記〕に鎮房家臣瓜田・春永両人水原村廣幡城に在し由見えたり、 〔小出氏云〕築城郡廣幡八幡ノ社は越路村南,水原村ノ北に有て,両村ノ堺なり,此社地ノ事早く論ありて,今は何れの内とも定め難し,此社より半町許上に,廣幡城のあとあり……。

③ 『豊前志』 文久3年(1863)

六之巻 築城郡

茅切山城阯

本城村にあり。………

城井谷物語云, 大野, 勝又討死して, ………

宇都宮鎭房は、廣幡城に御馬をとべめ、寄手大方退散と見えたり、………

廣幡城山城阯

廣末村と水原村との堺にあり。宮原忠将築く。後、城井民部修造して、瓜田讃岐守春永 を城代に置きしに黒田家に内通し城井城への嚮導せしとぞ。

④ 『築上郡誌』 明治44年 (1911)第十六章 名所舊跡 第二節 舊跡

廣幡山城趾

廣末村と水原村との堺、岩力山の峯尾にありて、東西一町、南北三十間なりと、往昔、 宮原中将の築く所にして、宇都宮鎭房之を修築し、家臣爪田讃岐守春永を置きしが、天 正の役に黒田氏の東道を為して亡ぶと。

- (1916) 大正 5 年 (1916)
 - 一. 旧城名称及城主名

廣幡城 宮原中将ノ築ク所ニシテ宇都宮鎭房之ヲ修築シ家臣爪田讃岐守春永之ニ居ル

二、位置及面積

葛城村大字水原岩力山ノ峯尾ニアリ東西一丁南北三十間

三、建物

建物ナシ

四, 現在ノ所有者

葛城村大字水原共有

五,維持方法

維持方法ナシ

- ⑥ 『八幡宇佐宮御神領大鏡』(到津文書)建久8年(1197)頃
 - 一, 国々散在常見名田 の項に

築城郡 桑田郷 田百六十二町六反冊代 畠

四至 東限赤幡社 南限伝法寺堺二石 西限船坂峯 北限熊瀬木大路

廣幡社 田十町 或注文六丁 近来被押領奈古庄天,所残僅一丁余也云々,

B [到津文書] 天福 2 年 (1234) 頃 (#28)

注進 三ケ社#一丁二反内

除諸免事 広幡社十三丁七反 赤幡社七丁四反 橘社十一丁一反

- 註1 文化財保護委員会『全国遺跡地図(福岡県)』1968 椎田町は石堂北古墳群で4基,石堂南古墳群で6基の古墳が示されているのみである。築城町は船迫, 上野池(比丘尼原),船迫大池の各遺跡と船迫南西古墳群,船迫南古墳群,船迫窯跡である。
- 註2 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)』1976 椎田町・築城町ともに76までの番号が付けられているが、古墳群等を1ヶ所として数えると少くなる。
- 註3 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-4-』1991
- 註4 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-8-』1992
- 註5 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-5-』1991
- 註6 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-7-』1992
- 註7 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告ー2ー』1990
- 註8 1990年 椎田町教育委員会調査
- 註9 1991年 椎田町教育委員会調査
- 註10 1991年 椎田町教育委員会調査
- 註11 1991年11月試掘, 1992年調査予定
- 註12 築城町教育委員会『安永遺跡』に所収(築城町文化財調査報告書 第1集) 1984
- 註13 築城町教育委員会『安永遺跡』(築城町文化財調査報告書 第1集)1984
- 註14 1986年,築城町教育委員会調査
- 註15 築城町教育委員会『城井谷 I』(築城町文化財調査報告書 第2集)1992
- 註16 1991年11月の試掘にて発見。1992年調査予定。
- 註17 福岡県教育委員会「福岡県中世山城跡」

(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIX』 1979 付録)

『日本城郭大系18(福岡・熊本・鹿児島)』新人物往来社 1979

註18 苅田町教育委員会『豊前国松山城』(苅田町文化財調査報告書 第8集)1988

苅田町教育委員会『豊前国松山城(土塁)』(苅田町文化財調査報告書 第14集)1991

註19 勝山町教育委員会『障子ケ岳城趾調査報告書』(勝山町文化財調査報告書 第4集)1991

註20 香春町教育委員会『香春岳』1992

註21 1992年報告書刊行予定

註22 『西州軍談』の著者・僧良喜が編したものという。巻首の序に宝暦七年とあるというから、その年まで には成っていたと考えてよいだろう。

『福岡県史資料』第六輯 書目、解題

註23 伊藤常足によって文化元年 (1804) から天保12年 (1841) の間に完成された地誌。歴史図書社 1969復刻

註24 渡辺重春著。 雄山閣 1971復刻

註25 福岡県教育会築上支会

註26 福岡県教育委員会が県内各郡ごとに調査を依頼した結果の綴り。

註27 『宇佐神宮史』史料篇 巻四 1987より

註28 『字佐神宮史』史料篇 巻五 1988より

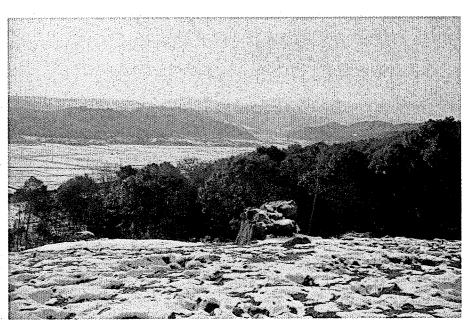


Photo. 11 雪のあと求菩提方向をのぞむ

Ⅲ 広幡城遺跡の調査

〈概 要〉

広幡城跡については、当初は中世期の山城の遺構が存するのみとみていたが、調査をすすめていく中で、弥生時代や奈良時代の遺構も存することがわかった。よって、ここでは広幡城遺跡として各時代を包括するものとするが、もとより遺跡の主体は中世山城であるとして大過ない。今回の調査で検出された遺構、遺物を時代別に記すと、次のようになる。次項以下においてはその時代毎に順次説明してゆく。

◎中 世

●山城跡……堀・土塁を巡らせた郭3 (調査したのは I 郭と II 郭の一部) 縦堀・虎口など

〈 I 郭内〉 — 礎石と思われる大石14個 土壙 7基(SK1~SK7) 建物跡 1 棟(SB1)

ピット

〈南斜面〉——建物跡 5棟 (SX1, 5~8)

出土遺物…… 瓦質・土師質の摺鉢・壺・鉢・鍋・釜等の土器、白磁片 1、永楽通宝 1 その他

◎奈良時代

● 火葬墓 1 基

出土遺物……・・骨蔵器・須恵器・土師器

◎弥生時代

- ●竪穴住居跡 6軒
- 貯蔵穴 9基
- ●ピット

出土遺物……弥生土器・磨製石斧・打製石鏃

上記遺構のうち、礎石とした石はI郭内にあちこち点在し、土壙はI郭中央に空白地帯を設ける如くに周縁に位置する。SB1とした建物は虎口を守護する所にある。南斜面の建物跡は

SX1 & SX8が縦堀をはさんでI郭直下にあり、 $SX5 \sim 7$ はこの山城への登っていく途中にある。

火葬墓は I 郭 S Z II の西南に単独で存した。周辺の須恵器等の分布状況からみて調査区外に もまだ存するかもしれないので、1号としておく。

弥生時代の住居跡はI郭内の周縁部に位置する如くであり、貯蔵穴は西側に集中している感がある。

なお、この広幡城跡の I 郭とした所はもと地元水原区の区有地となっており、以前は桜の木が植えられていて、春には花見をする場所であったと聞いた。上記していない遺物の中に近世あるいは近代の所産になる磁器やボタン等がある。これらは花見の時の"置きみやげ"かもしれない。城跡の遺物のところでその最後の方に図示して説明を加えたい。

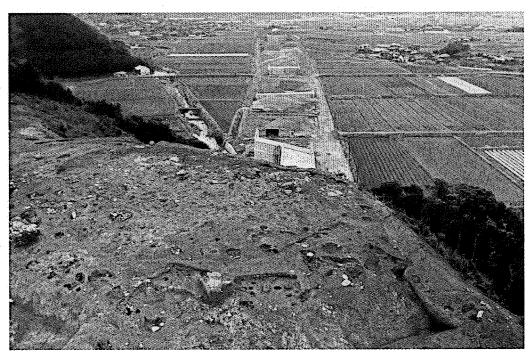


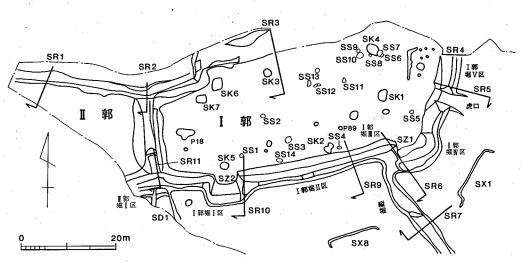
Photo. 12 広幡城跡空中写真(虎口付近)

A. 広 幡 城 跡

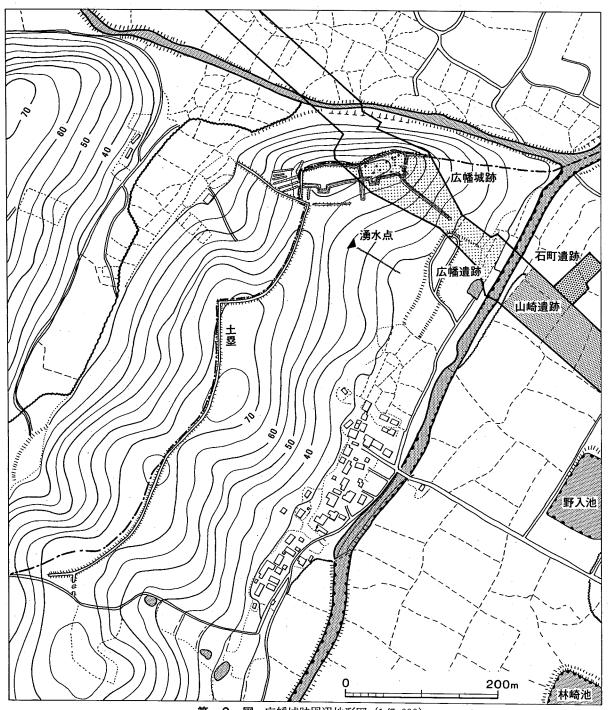
1.調査区内外の遺構の状況(付図1・2,第96・97図)

城跡の各部分についての名称は、特に近世城郭史の立場から専門的な用語が多々使われているようであるが、それを中世の山城にまで敷衍して使用するのは何如か、とする意見も出されている。しかし、中世に山城をつくり、使用していた時点でどのような名称が存したのかを知ることは至難のことであろう。ここでは、これまでの用語を援用しつつも、本報告の便宜上、土層図等の場所もふくめて第5図に示すような呼称にて説明していくこととしたい。その一部について簡述しておく。

- ullet 堀………濠・壕の字もあるが、ここは堀とする。遺物の取上げ部位もあるので $\mathbb{I} \sim \mathbb{V}$ 区に分けておく。
- 虎口……郭への出入口のことである。
- S Z……横矢掛りの一種で、折を二重にした形状にて張り出し部を形成する。出桝とする呼称もあるようだが、いまは略称としておく。
- S K……土壙の略称。塵芥捨て場・トイレ等の可能性がある。
- S S……建物の礎石に使用されていたらしい大石を略称しておく。



第 5 図 広幡城跡調査部分名称・遺構配置図 (1/800)



第 6 図 広幡城跡周辺地形図 (1/5,000)

- SX……建物跡として捉えうるもの($1 \cdot 5 \sim 7$, 8)とその他の性格不詳の遺構で南斜面に存するものの略称。
- S R……山城に残っている土塁の土盛の仕方,あるいは堀の埋没状況を知るために設定した土層観察用の土堤をこのように略称しておく。
- S D……溝状のものをこのように呼んでおく。
- SB……建物の略称。

広幡城のうち、バイパスの路線として発掘調査を行ったのはⅠ郭の全部とⅡ郭の東端部分、 Ⅰ郭の南東斜面ということになるが、山城としての遺構はまだ西側の尾根上に広がりをもって 遺存している。まず、周辺部分をも地形測量を行ったので、その平板測量図をもとに全体の様 相を説明しておこう。

広幡城の郭の縄張りは連郭式と称すべきと思われるが、Ⅰ郭(本丸)とⅡ郭(二の丸)を東西に配し、Ⅱ郭の西南部にⅢ郭が配される。Ⅰ郭・Ⅱ郭とも南面に張り出し部(SZ1~3)を配した堀が巡り、その堀の外側(南側)には土塁がつくられる。Ⅰ郭・Ⅱ郭の北面は土塁を配するのみで、土塁の外側は急崖となる。

I 郭南東斜面には1本の縦堀が走り、II 郭西斜面にも6本ほどの縦堀がある。Ⅲ郭の東西南の三方には土塁が配されるけれども、東側のそれは小谷の谷頭上部にあたり、あまり高いものではなく目立たない。西側から南側へとL字状に屈折してのびる土塁は高さ120 cm程のもので、特に南から南西へと伸びてゆくそれは途中でL字形に屈折しつつ、尾根上を延々と600 mの長さまで確認され

る。またⅡ郭の 南面の小谷の谷 頭からは湧水が あり、そこには 石組がみられる。

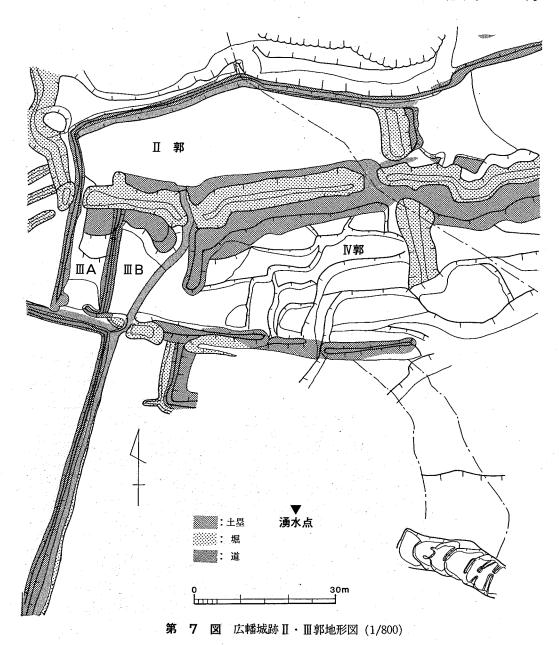


Photo. 13 広幡城跡尾根上に残る土塁

2. Ⅲ・Ⅲ郭の様相(付図1・2,第7図)

I郭については次項で詳述する。

Ⅱ郭は北面土塁が中央付近で尖っているので平面形は五角形状を呈す。平坦面のみで東西長63m,南北長11~22mを測り面積1180m。中央部がやや高くて東西へと少し低くなってゆく。



— 24 **—**

礎石らしき石材は小さいもの1,2個を見たのみで,Ⅰ郭のような大石はない。北面土塁は西側で屈折して西面を画し,堀を分断してさらに南へ延びてⅢ郭の西面をも区画する。南面の堀の手前には土塁の名残りかと思われる僅かな高まりがある。中央よりやや西寄りの南面に巾5m程のSZ3(張り出し部)がつくられ,現状ではこのSZ3の西側部分が小道となっている。また,南面の堀はかなり深く掘られているが,東端近くで溝底が高くなる部分がある。おそらく虎口が存するのだろう。

なお、Ⅱ郭西北コーナーの外側には直径8m程の古墳のような高まりがある。中央部は盗掘により陥没しているが、円墳である可能性はきわめて高いものの断言しえない。あるいはこの古墳状の高まりを避けるように堀が巡るので、ここは隅櫓の基礎の如きものであるのかもしれない。

Ⅲ郭は西面はⅢ郭から続く土塁があり、東面はⅢ郭のSZ3の所から延長したような格好でのびる、あまり高くない土塁で区画される。南面は低い土塁と浅い堀とで区画される。東西長25m、南北長22mで約500㎡の方形プランとなるが、中央やや西寄りに低い土塁状の高まりがあって郭内を東西に分けている。その西側の南端は土塁が途切れて門の如くになっている。ここを勢溜りとする見解もある。その西側ⅢA部のみでは150㎡である。

Ⅱ郭, Ⅲ郭の西にはあまり深さのない縦堀が6本ほど走っている。しかし、それも30mほど行った所で急崖となって消え去る。

Ⅲ郭の東側・Ⅲ郭の南側は段々になってテラスがいくつかあるが、Ⅲ郭南面から延長した低い土塁がのびてきているので、あるいはここも郭と称してよいのかもしれない。これを仮にⅣ郭としておこう。Ⅰ・Ⅲ郭を画する堀の南方延長上に浅い溝状のくぼみがあり(SDI)、ここまでをⅣ郭とすれば、東西長43m、南北長25~32mの長方形プランとなる。面積は1280㎡。

このⅣ郭の南方に湧水点がある。



Photo. 14 広幡城跡 II · III郭西端の土塁

3.調査の内容

発掘調査を行ったのは前述のように I 郭の全てと II 郭の東端部分, それに I 郭の南側斜面である。調査の主眼は, 郭内に建物跡が遺存しているか否か, また堀と土塁の残存・埋没の状況はどうか, 南側斜面に遺構は存しないか等に置いていた。これを達成するためには人力にて表土から剝いでいたのでは到底対応しえないとの判断より, 重機 (パワーショベル) を入れて, 随所に土層観察用の土堤を残しつつ, 全面を剝ぐこととした。

以下、各遺構を説明したあと、出土遺物についてはまとめて後述する。

i.調査前の状況(図版7,付図1)

まず、【郭内外の調査前の状況から説明しよう。

I 郭は北面に高さ30cmに満たない土塁が残存し、その外は急崖となっている。4 m程下った所には狭小なテラスがある。

西面はⅡ郭とを画する堀切があり、その内側には低い土塁の名残りが見られた。この堀切の南北にはⅡ郭へ通ずる狭い通路(土橋)が付いている。

南から東にかけてはSZI・Ⅱの張出し部2ケ所を配しながら堀が巡り、堀の外にはその掘削土によって盛り上げた土塁がある。SZIの東北に虎口としうる出入口があり、石を置いてつくった階段と小さな石垣が遺存する。また、その北端の崖に近い所にも土橋があり、その東側の崖線際には土塁が残っている。SZ1 西端部にも出入口らしきスロープがあり、そのすぐ横から縦堀が走っている。

I郭の南斜面は目立った遺構らしきものは見えなかったが、虎口から下方へは通路状の踏み固めた部分が蛇行しつつ存した。また、のちに $SX1 \cdot 5 \sim 7 \cdot 8$ とする建物の存した所は、やはりテラスとして意識しうる広さの段が存した。

以下に、土塁と堀・虎口、郭内の遺構、南斜面の遺構に大きく分けて、土層図・測量図等を もとにしつつ説明してゆく。

Ⅱ. 土塁と堀(図版7~18, 第10図)

① Ⅰ・Ⅱ郭北端部の土塁・崖を含む北面

 $I \cdot II$ 郭北面の土塁は、郭内から見たとき西に高く東に低くなっていく。郭内の高さと比べれば、SR1の所で 110 cm、SR2 で60cm、SR3 で50cmの高さが残り、I 郭東端部付近では土塁の高まりそのものが見当らない。

Ⅱ郭の土塁前面は幅80cmくらいの浅い溝状のくぼみになっており、武者走りとして機能していたものであろうか。SR1・3には版築状の叩き締めは見られない。



Photo. 15 広幡城跡 I 郭北端くびれ付近

I郭の西端付近(SR2と3の間)は、SZⅡの張出しと対称の場所においてL字状の削り出しを行っていて、この部分がくびれ状となる。ここからⅡ郭の方へは幅100~150cmの犬走り状のテラスおよび溝状のくぼみが削り出されている。SR1で見ると、この犬走りの外に若干の盛土を行っている。また、SR3の西には長さ10mにわたって、斜面ながらも緩やかなテラス風の段がつくられている。

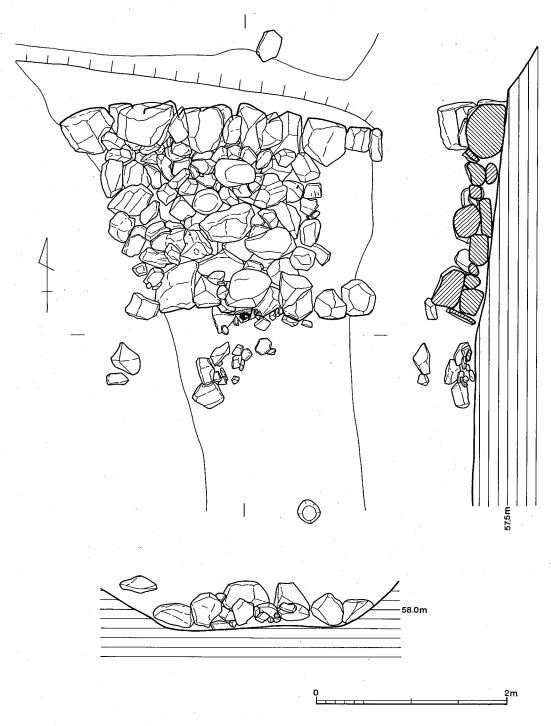
これらを見ると、北面としては急崖にて特別の防御工作を施さなくとも万全であったかのように思えるけれども、実際にはやはり最少限の対策は講じていたことが伺われる。

SR2と3の土塁盛土中からサヌカイト石鏃や黒曜石剝片,弥生土器,瓦質土器,磁器片が出土している。

② I・Ⅱ郭間の堀切と土橋

 $I \cdot II$ 郭間の堀切は幅 $5.5 \sim 7\,m$,長さ $16\,m$ にわたり,約 $1\,m$ の深さで掘られている。この堀と並行してI 郭の端には僅かな高まりの土塁の残存部分が存した。堀の横断面は緩やかな傾斜の逆台形状となる。

この堀を掘削してのち、北端と南端には礫石を敷きつめて土塁・土橋の基礎としている。S R2もSR11もその石組上の盛土は、黒色系の砂質土と地山の黄褐色系の土を混ぜた砂礫土と



第 8 図 広幡城跡SR2下の石組実測図 (1/40)

を版築状に積上げており、崩れないようにとの配慮がみられる。なお、SR2の高まりは北面 土塁の延長であり、土橋はその内側に土を埋め込んでつくられている。

SR2下の石組(図版11·12,第8図)

北端に10個、南端に8個の石を置き、その両者の210~220cmの間に、敷き並べるというよりは空間をうめていくようにして石を置いて石組としている。基本的に重複のない一段のみの石組だが、所々で二段積みの部分がある。頁岩質の角張った石塊を用い、一部に地山に入りこんでいる凝灰岩質のくされ礫の大きなものを使用している。最大のものでも直径50cm程の大きさしかない。

南端に8個置かれた基礎の石の前面(南面)に、幅20cm強、長さ30cm、厚さ4cm程の板状の石(スレート)があたかも立てかけたかのように置いてあった。この石の表面は黒く煤けた如く変色しており、何か書いてあるようにも見えるが定かではない。土塁の基礎として石組をつくったときに、普請の一環として地鎮的な意味あいで置かれたものかもしれない。

SR11下の石組 (図版12・13, 第9図)

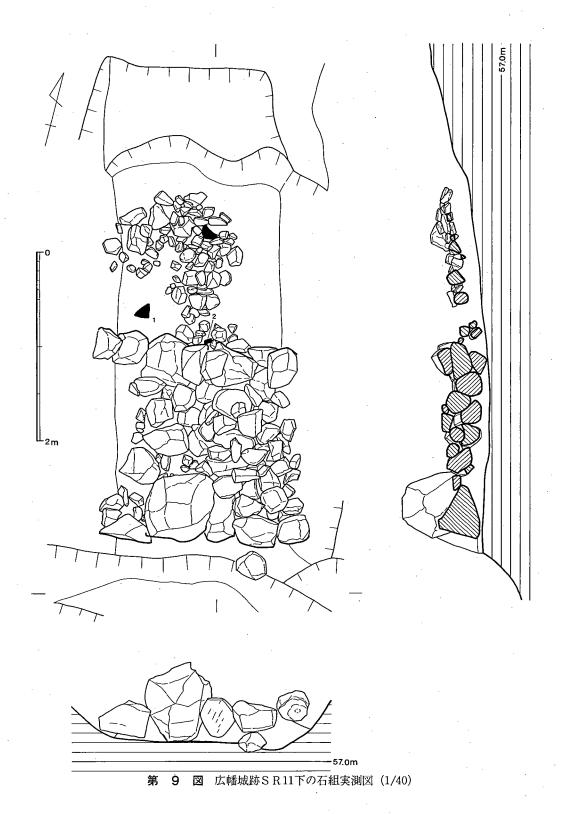
SR2の下部と同様の石組である。北端部は7個、南端には5個の石を置き、その210~220 cmの間には石が二重に置かれている部分が多い。南端の5個のうち1個は直径70cmをこす大きさである。他の石はSR2下のそれと大差ないが、玄武岩・頁岩・凝灰岩といった石材がある。さらにはこの石組の北側に、より小さな礫石の集積があった。これらは地山面より15cm程浮いていて、その下には若干の炭化物層が存した。

この石組内から土器片と砥石が出土している。土器も砥石も底面より少し浮いた状態での出土であるが、この山城を築造した当初に関わる遺物とみてよいだろう。

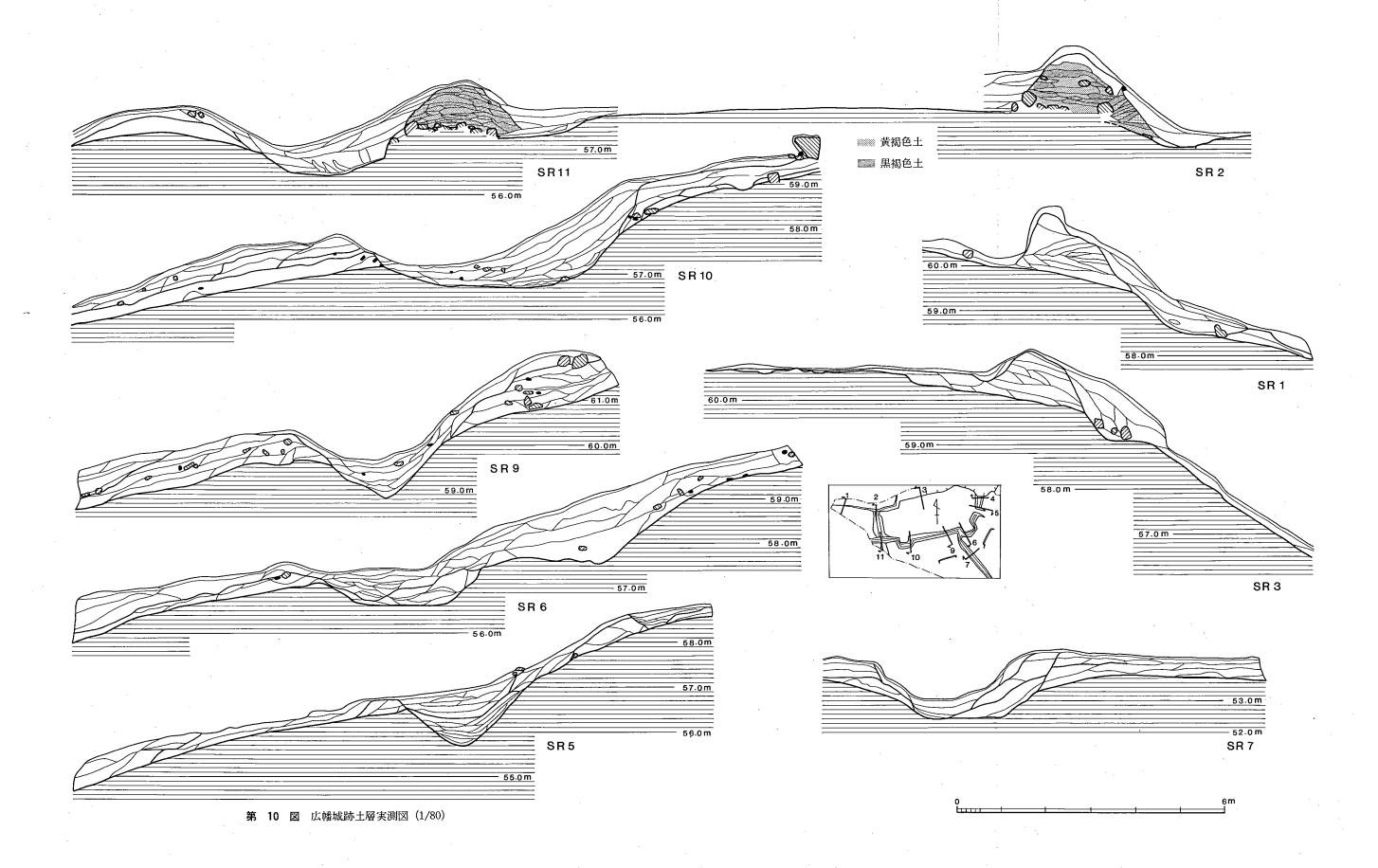
③ 南面の堀とSZⅠ・Ⅱ (図版14~17, 第10・11図)

調査区内では、Ⅱ郭の南面の堀のごく一部とⅠ郭の堀がSZⅠ・Ⅱを取り込んで検出された。堀の外側にはこの堀を掘削したときの排土を盛り上げた土塁がある。また、SZ Ⅲの所にも僅かながら土塁の名残りがあった。

堀については $SZI \cdot II$ の部分を除くと、薬研掘りに近いV字形断面にて掘削されている。当然のことながら、郭内である北側が高くて、南側が低いという横断面の形状になる。地山面で上端幅 $3.5\sim4.5$ mを測るが、もとの土塁の存在を考慮すれば幅も深さも更に大きな数値になることは言うまでもない。虎口の北側(V区)は8 m、SZIの東は7 m、SZIとIIの間は32 m、SZI0 の西は10 m、II 郭部分は5 mで、これに $SZI \cdot II$ 0 のそれぞれ8 m 程を加えれば総延長 $80\sim90$ mを発掘したことになる。



— 30 —



虎口の北側(堀V区)の底面西端には、幅 $12\sim13$ cmの刃幅を有するクワのような工具で掘削した浅い溝(深さ約5cm)が走っている。この溝は後述するSX1・SX8の壁溝と同一の工具にて掘られているとみてよい。

SZIとSZIIの間(堀II・III区)は、堀の底面が何ケ所かで段を有している。またSZIIの西(堀II区)にも底面に段がある。

SZI & SZIIは平面が方形状の張出し部であるが、上面(郭内)部分にて幅 $5 \sim 6$ m、長さ $2.5 \sim 3$ mにわたって突出している。SZIは東に21.5°、SZIIはやはり東に3°ほどふれる方向で張り出している。

堀の中からは少量の遺物が出土しているが、多くは須恵器と弥生土器であって、中世期の山城に関わりのあるもので図示しうるのはⅡ郭堀I区から出土した1点しかない。堀Ⅳ区上面からは近世の磁器がいくつか出土している。その他SR5~11の土塁や埋土中から弥生土器や須恵器の破片が出土している。

また、堀 I 区・ II 区・ V 区などでは、その底面に礫石の集中して出土した部分があった。それは挙大から人頭大程度までの礫であるが、これらはあるいは防禦の投石用として郭内に置かれていたものが転げ落ちたものかもしれない。



Photo. 16 広幡城跡Ⅱ郭堀Ⅰ区の発堀

(4) 虎口 (図版18・19, 第11図)

I 郭全体の中では東端に近い所に位置する。上端の幅220~270cm,堀Ⅳ区とV区底面から見れば幅5.1 m間を掘削することなく出入口としてつくり出している。郭内に向かう角度としては N-67°-W。地山面では階段など造り出してはいないが、ここの上層に石を利用しての階段と簡単な石垣があった。この階段と石垣は時期の特定は難しいが、堀Ⅳ区の陶磁器あたりがその時期の一端を示しているともみてとれる。

階段は7段が約50cm間隔で存し、おおよそ15~20cmの段差を有する。最も高所にある石のすぐ前面に、多い所で四段積みの無雑作な石垣がある。乱積みと言ってよい積み方である。

Ⅲ. 郭内の遺構

① 礎石〈SS1~14〉と建物〈SB1〉(図版19~21, 第12図)

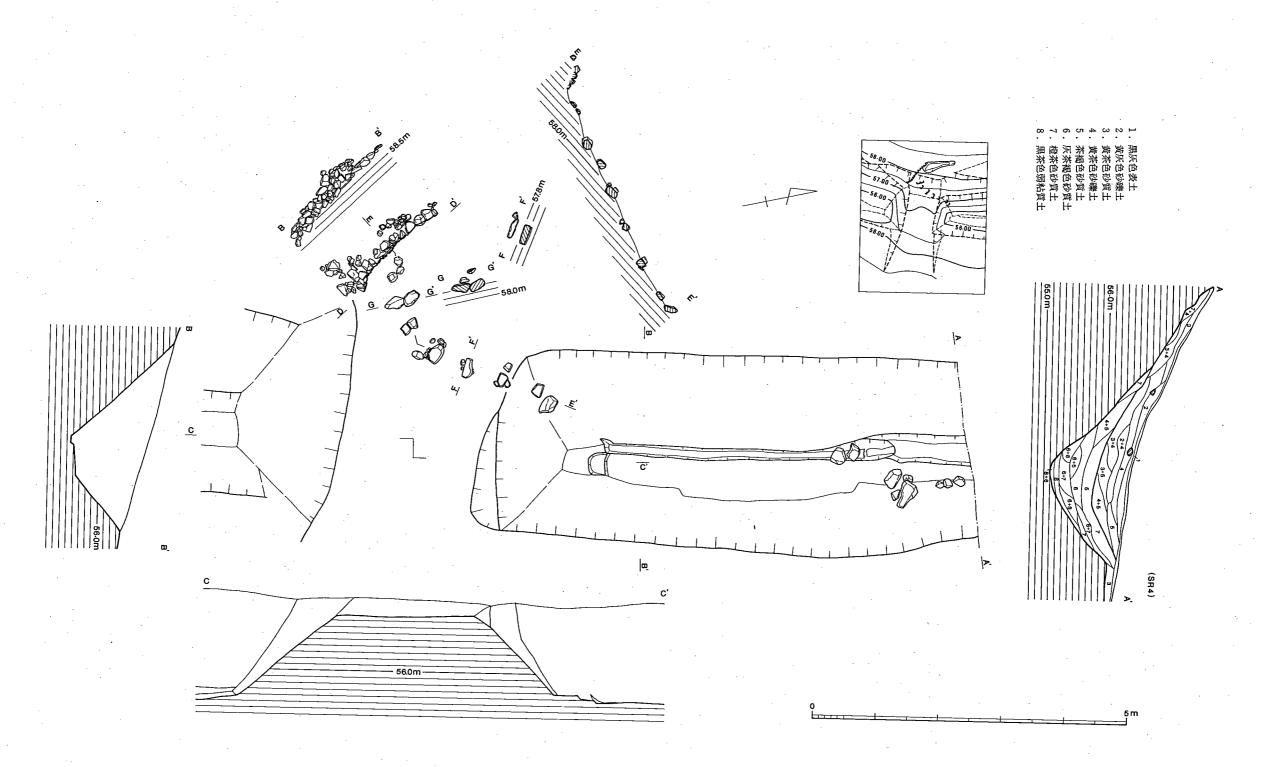
郭内にもと存したであろう建物の礎石として使ったと思われる大石10数個が遺存していた。これらはSS $1\cdot14\cdot3\sim5$ が郭の南縁に近く存し、 $6\sim13$ は北端近くに存する。 $12\cdot13$ の2個はもともと地山に入りこんでいる石が露出しているだけであるが、他は全て人為的に置かれたものである。しかしこれらも上面を平らにするとか、柄穴を穿つとかの造作を施したものはなく、自然面を残したままの石が置かれている。

また、もと礎石が置かれていたらしい掘り形のピットも幾つか見られたので、礎石とそれらピットとを基礎として建物が建つのかどうか、現地においても柱間を測り、図面上でも配置について検討してみたが、適切な建物配置は得られなかった。全ての礎石を結ぶほどの大規模な建物はまず考えにくく、もしこの"礎石"を使った建物があったとすれば数棟が存したと思われる。礎石周辺から土器等の出土した所があるが、山城に関連すると思われるのはSS5~7の周辺である。

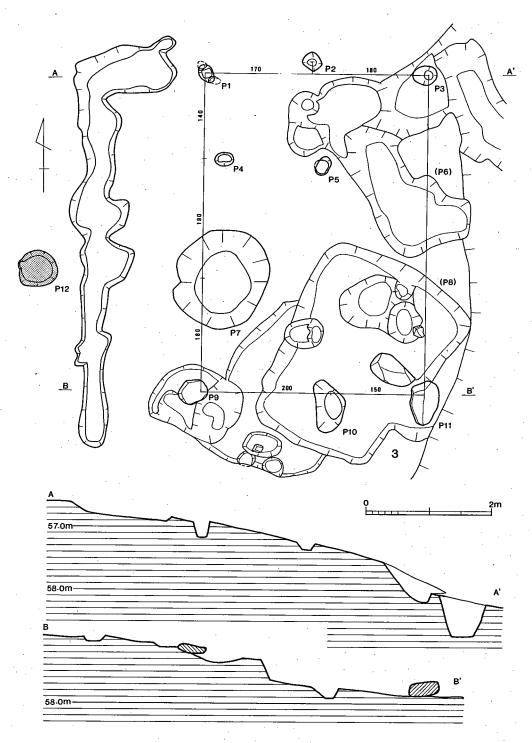
SB1については確実に建物とする根拠を持ちあわせないが、南北に約6mの長さがあり北端でL字状に折れ曲がる浅い溝を雨落ち溝と考えて、その内側に建物を想定した。

SB1 (第12図) ほぼ南北に主軸をおく2×3間の建物になろう。梁行3.5m, 桁行5.1mの心心距離を測り、P9とP11は小さな礎石を使用する。P5は使わないのが妥当かもしれない。P7の西、雨落ち溝より50cm程離れてP12が存する。このピットは直径60cmの円形プランで深さ約10cmの浅いものであるが、中には炭がつまっていて、さらには西端部が幅15cmにわたって焼けていた。どのような用途のピットかわからないが、SB1と無関係とも思われない。出土遺物は全くない。

虎口から郭内に入ってすぐの北面に位置するので、出入口に関連した性格の建物と考えることも可能である。



第 11 図 広幡城跡階段・虎口・堀∇区実測図 (1/60)



第 12 図 SB1実測図 (1/60)

2 土壙

SK1~SK7の7基がある。SK4と6・7には礫石が多量に入っていた。

SK1 (図版22, 第14図)

郭内東端に近く位置し、虎口のほぼ真正面に近い。240×170cm程の楕円形に近いプランで、最も深い所でも30cm程しか残存しない。長軸をほぼ南北にとる。東端部中央付近の床面近くにて「永楽通宝」1枚が裏面を上にして略水平の状態で出土した。また、埋土中より土器片1が出土している。

SK2 (第14図)

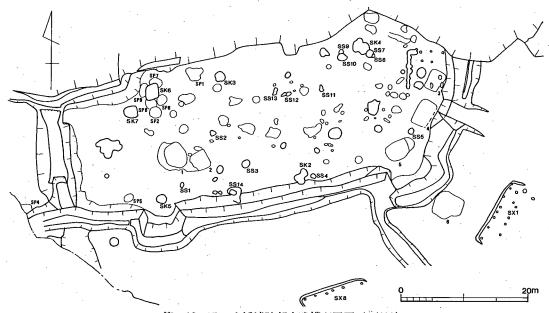
SS4の西に存する浅い土壙で、長軸 246 cm, 短軸95cmの瓢簞形プランを呈する。埋土中より鉢の小破片が出土している。

SK3 (図版22, 第14図)

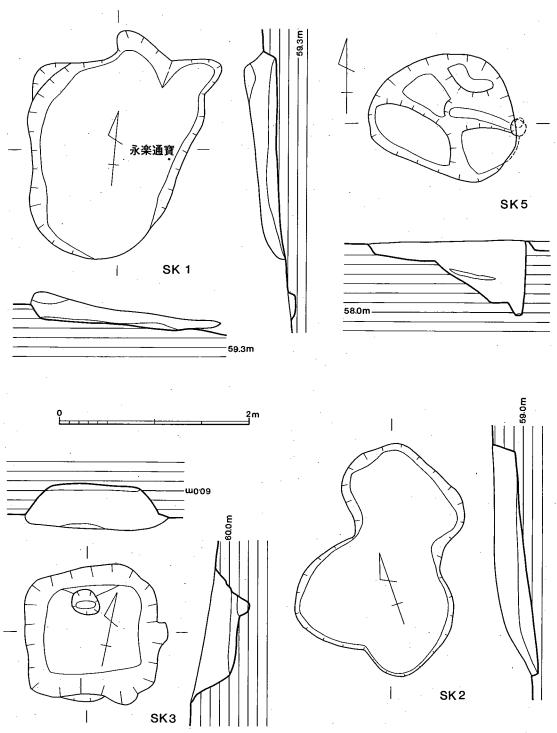
郭内の中央よりやや西の北寄り、SR3の西に位置する。一辺が約140cmの隅円方形プランを呈し、最深40cmを測る。擴底北端に小ピットがある。土錘1点が出土している。

SK4 (第15図)

SS7の東隣りに主軸を東西方向において存する不整形の土壙である。掘り形はSS7をも取込むようにしており、長軸350㎝、短軸170㎝程を測る。壙内には玄武岩や頁岩の礫が多量に入っており、中には二次火熱を受けて赤変したものがある。東端付近より瓦質土器の破片が出



第 13 図 広幡城跡郭内遺構配置図 (1/600)



第 14 図 広幡城跡土壙実測図1 〈SK1~3・5〉 (1/40)

土した。

SK5 (図版22, 第14図)

SS1の西南, SR10の西に位置する不整円形プランのもので, 擴内は段堀り風になる。長軸155cm, 短軸135cm。弥生土器片と瓦質の鉢が出土した。

SK6 (図版23, 第15図)

郭内西端寄りの北面くびれに近い所に位置し、弥生期の貯蔵穴 6~9号を切っている。平行四辺形もしくは菱形と称しうる平面プランをなし、対角線の長軸 290 cm、短軸 245 cmを測る。中には大小さまざまの礫石が入っている。擴底は東側が高くて二段掘りとなる。少量の土器片の出土がある。

SK7 (図版23, 第15図)

SK6の西南方にあり、隅円の長方形プランをなす。長軸210cm、短軸170cm。これも壙内に多量の礫石が入っていた。弥生土器片と瓦質土器片が出土している。

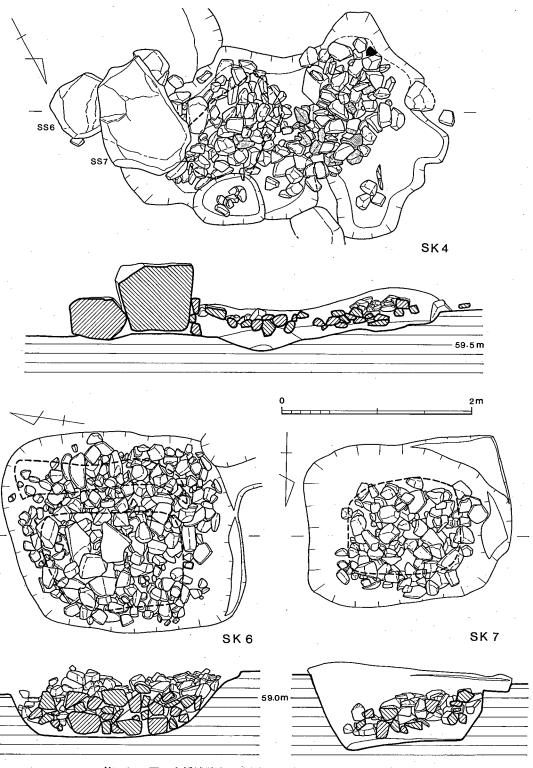
③ ピット (付図3)

郭内で土壙としたもの以外にも幾つか山城が機能していた時点のピット等があろうとは思うが、弥生時代の遺構も存することとて、遺物の出土したもの以外にはどれを中世とするか判じえない。いま三つをとりあげる。

P18 西端の II 郭に近い所で浅い掘込みが存した。この中から青銅製品が出土している。弥生期にかような青銅器の存することを知らないので、とりあえず中世として報告する。

P89 SK2・SS4の東北にある小ピットで、中に石が置かれている。瓦質の摺鉢の破片が出土している。

P95 虎口前面の北側にある土壌状の掘込みである。弥生土器と土師器片それに鉄器片が出土した。土師器片は奈良期のもののようにも思えるが断じえないので、とりあえずここで報告しておきたい。



第 15 図 広幡城跡土壙実測図2 〈SK4・6・7〉(1/40)

IV. 南斜面の遺構

縦堀(図版15,付図1・2)

これはSZ1の西側堀部分より始まり、北から140°の角度をもって東南方向に走っている。 掘削した土で堀の東側に土塁状の高まりを持たせている所があるが、あまり目立たない。幅は 170~370cmと広狭あるも、下方になるに従って狭くなっていく傾向にある。深さは150 cm程を 測る。

(2) 建物跡

明確に建物跡としうるのはSX1・5~7・8の5棟である。いずれも高い方の傾斜面を削り、その削った土を低い方へ盛って整地し平坦面を広く造り出したのであろう。竪穴住居風のあり方を示すが、いまは建物跡としておく。5棟ともに壁直下に排水溝と覚しき壁小溝を有している。SX5~7は三棟が接するように検出された。重複関係を捉えきれなかったが、通常ではSX6→SX7→SX5の順に新しくなろう。ただ三棟が軒を接して建っていた可能性もないではない。

SX1 (図版24·25, 第16図)

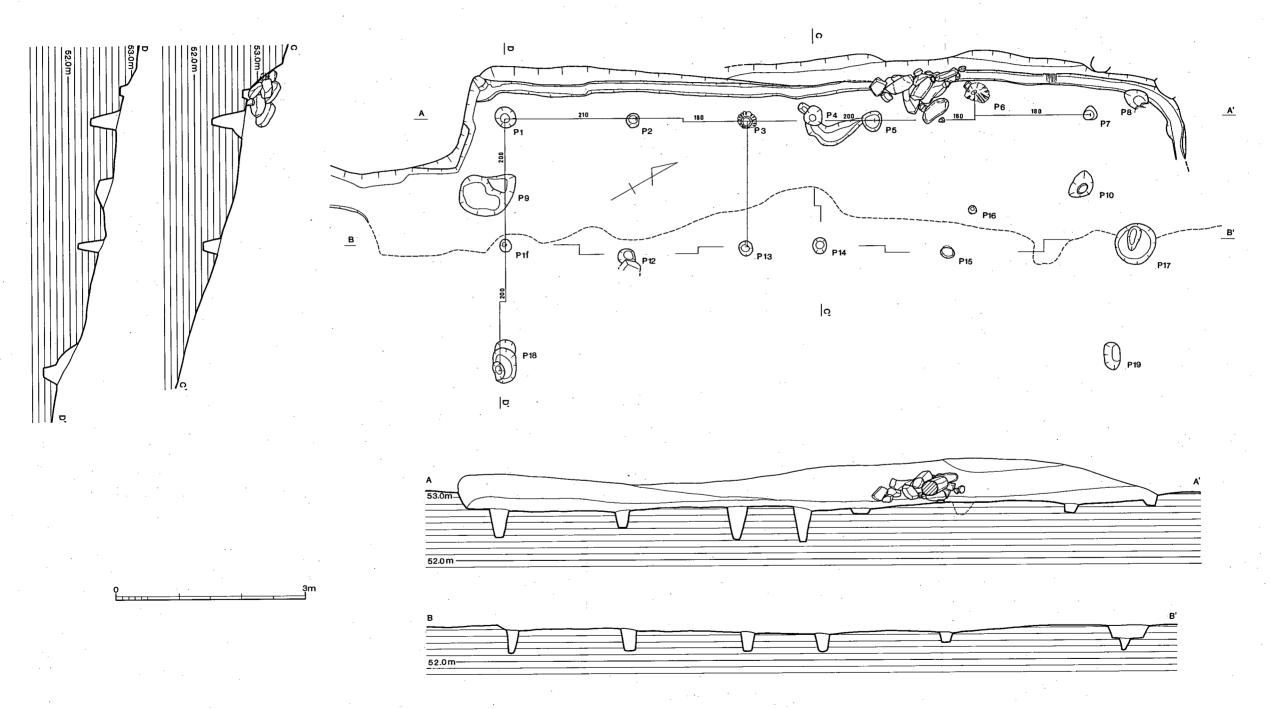
I 郭の虎口の南方、SZIの東南方、SR7の東に位置する。主軸を北東 — 南西にとり、 $P1\sim P7$ を結ぶラインで $N-40^\circ$ — Wとなる。主軸長は11.2m。下方への壁の延びは1.5m程までが確認される。床面の硬い面というのは壁より $1.6\sim3$ mの範囲に認められた。柱穴は $P1\sim P18$ までを検出し、 $P1\sim3\cdot6\cdot8\cdot11\cdot13$ には掘削した際の工具の痕が明瞭にわかる。 $P1\cdot2$ 間は210cm、 $P2\cdot3$ 間180cm、 $P3\cdot5$ 間200cm、 $P5\cdot6$ 間160cm、 $P6\cdot7$ 間200cm、 $P1\cdot1$ 間と $P11\cdot18$ 間、 $P3\cdot13$ 間はいずれも200cmとなる。

壁小溝は刃幅12cmのクワ状の工具を打込んで削り込む。P6とP7間の小溝内にはそのクワを南から北へ $1\sim2$ cm間隔で打込んだ痕がはっきりと見られた。この壁小溝のあり方は、I郭堀V区の底面に残るそれとよく似ており、同一工具によって掘削されたものであろう。

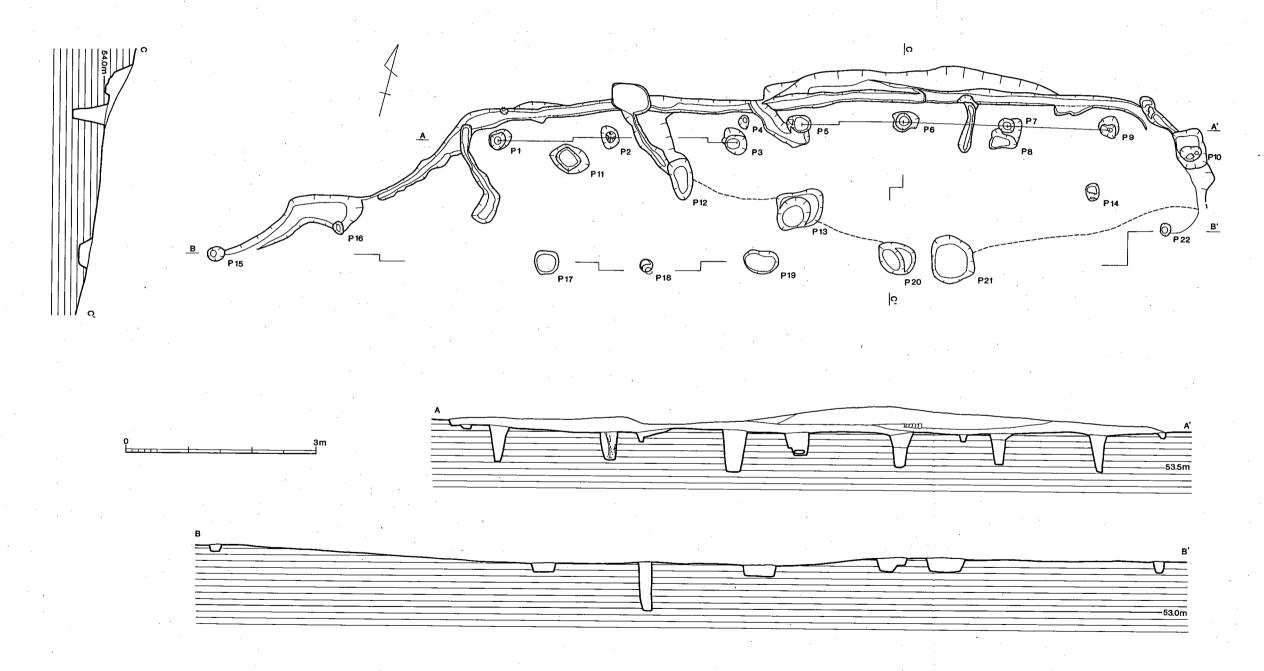
P5とP6の間の壁小溝上に頁岩・砂岩等が10数個積み上げてあり、当初は横穴墓の閉塞石かとも考えたが、結局のところ性格不明の石組として取扱うしかなくなった。この周辺から土器が出土している。

SX8 (図版26, 第17図)

縦堀をはさんで西方に、SX1と対峙するかのような位置にある。主軸を $N-76^{\circ}-E$ の略東西におき、壁小溝の長さは15.3mまで確認しているが、建物としてはP1のすぐ西まで11.7m程の長さであろう。柱穴は $P1\sim P22$ までを検出しているが、 $P13\cdot 17\cdot 19\sim 21$ については掘り形も大きく埋土の状況から見ても柱穴ととしてやや怪しい。 $P1\cdot 2$ 間 180 cm、 $P2\cdot 3$



第 16 図 広幡城跡SX1実測図 (1/60)



第 17 図 広幡城跡SX8実測図 (1/60)

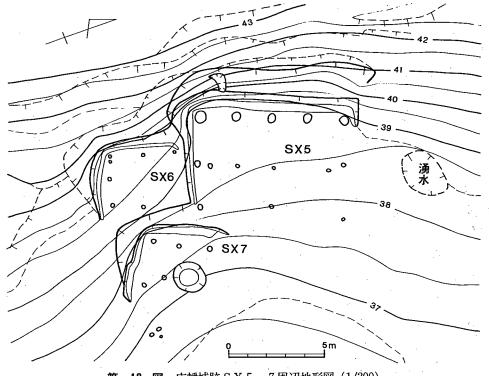
間200cm, $P5 \cdot 6$ 間 160cm, $P6 \cdot 7$ 間 165cm, $P7 \cdot 9$ 間 160cmという柱間寸法をとる。床面の硬い部分は壁より $1.5 \sim 2.6$ mあたりまで認められるが,それも北側に片寄ってP12の付近までである。

壁から直交するような小溝がP1の西, $P2\cdot 3$ 間, $P4\cdot 5$ 間, $P6\cdot 7$ 間に認められることと, $P1\sim 3$ と $P4\sim 9$ の並び方(柱筋)が少しずれることを考慮すれば,建替え(建増し)のあったことが予想される。 $P1\sim 3\cdot 5\sim 9\cdot 22$ には工具痕が明瞭に認められた。また,SX1と同様に壁小溝にも工具痕があり,やはり南から北へ向かって"クワ"を打込んで削ったことがわかる。出土遺物は全くない。

SX5 (図版27~29, 第18·19図)

I 郭からかなり降りてきた所の縦堀の北東にあり、山城全体からすればかなり下方になる。ここに集中する三棟の中では最も大きい。西壁側などは 2 m以上を削り込んで壁をつくり出している。 $P1\sim P5$ の柱筋を主軸とすれば $N-18.5^{\circ}-E$ をさす。床面で南北8.7 m、東西 6 m $+\alpha$ の規模となる。西と南の壁下には小溝が走るが、西壁下のそれはかなり幅広くなっている。

P 1・4・6は工具痕が明瞭にわかり、また P 3・5・7・10には根石が置かれていた。 P 1・2間と P 2・3間は200cm, P 3・4間180cm, P 4・5間190cm, P 7・9間210cm, P 9・10間190cm, P 1・7間250cm, P 7・13間240cm, P 3・10間260cm, P 10・14間210cmという柱



第 18 図 広幡城跡 S X 5~7周辺地形図 (1/200)

間寸法をとる。

P1とP2の西方壁面中に縦長の方形掘込みが存したが、これは何のためのものかよくわからない。ここに柱を入れ込んだとすれば、それは屋根より上に出ていたかもしれない。床面の硬い部分は西南に集中している。

なお、P12の北方4 m付近には、水量はあまりないけれども少しずつ湧き出してくる所がある。 **SX6** (図版 $27\sim29$, 第 $18\cdot20$ 図)

SX5の南、SX7の西にあり、床面レベルはSX5より70cm、SX7より200cmも高い。西壁側床面で南北3.5m、南壁側で3.6mの規模となり、北側は削平された格好になる。P1と P3を結ぶ主軸はN-12°-Eをさす。西壁は床面より80cm程がほぼ直に立上り、それより上方は斜めに立上る。 $P1 \cdot 5 \cdot 8$ には工具痕がよくわかる。 $P1 \cdot 2$ 間と $P2 \cdot 3$ 間は170cm、 $P1 \cdot 5$ 間90cm、 $P5 \cdot 7$ 間150cmの柱間寸法をとる。

S X 7 (図版27~29, 第18·21図)

SX6の東にあり、三棟の中では最も低い所にある。西壁と南壁の床面で $4.6 \text{ m} \times 3.3 \text{ m}$ の規模になり、P1とP3を通る主軸は $N-25^\circ$ -Eとなる。周壁溝のほかに、それとほぼ並行する小溝が内側にL字形に存するので、建増しがあったのかもしれない。P1・2 ll の西で壁小溝に被さるように頁岩の礫が存するが、これは床面にくっついてはいない。P1・2 ll 150 cm, P2・3 ll 170 cm, P1・4 ll 220 cm, P5・6 ll 270 cm となる。

P5の北に大きな土壙が1基ある。P4の最上面から鉛と思われる金属の玉が1個出土した。 土壙 (図版29,第22図)

東西160cm,南北152cmのほぼ円形に近いプランで、深さは最深 123 cmを測る。床面の西壁寄りに頁岩のわりと扁平な石が置かれている。この土壙の埋土は地山と同じ黄灰褐色砂礫土であった。掘りこんだあと埋戻したのだろう。

③ その他

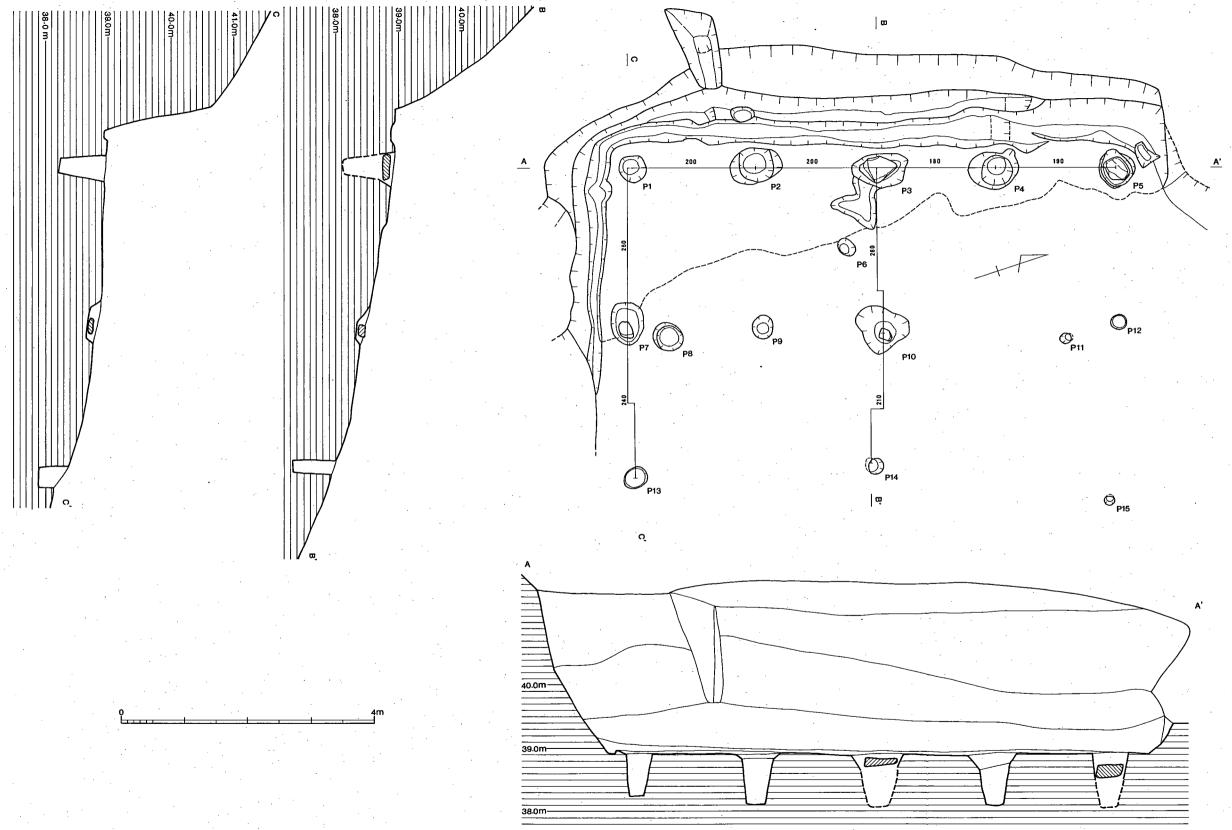
調査中にはSXの名称を付していたものの、建物跡とは捉えきれないが、さりとて全く山城と無関係とも思われない遺構があるので、それらを取上げる。

S X 2 (図版30, 付図 2)

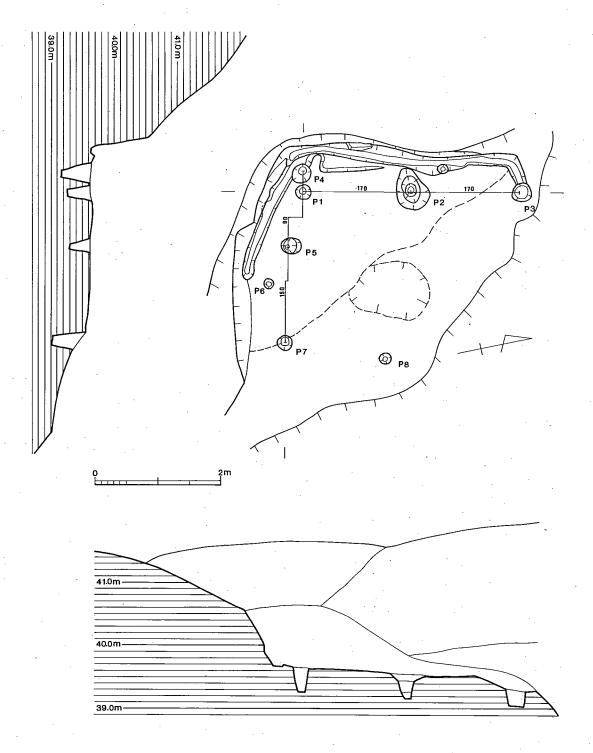
S X 1 の東側10 m 程の所に、最も狭い部分で50cm、最大で180cm、平均100cm程のテラスが長さ23 m にわたって存した。このテラスの北半部に直径30cm程の小ピット 3 個が存したものの、建物としてまとまることはない。

SX3(付図2)

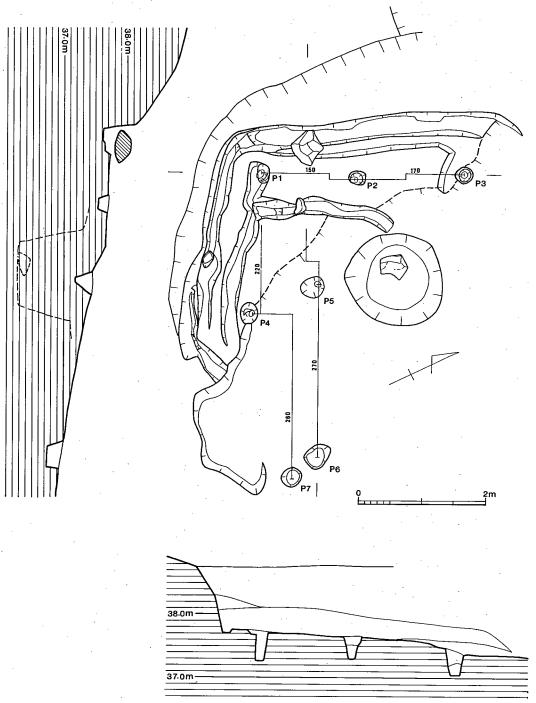
 $SX5 \sim 7$ の西方約 $10\,\mathrm{m}$,縦堀より東方に存する楕円形の掘込みである。 $5 \times 7\,\mathrm{m}$ 程の平面プランで、床面も傾斜があり、そこに10数個の小穴がある。埋土は周囲の土とよく似ているも



第 19 図 広幡城跡SX5実測図 (1/60)



第 20 図 広幡城跡SX6実測図 (1/60)



第 21 図 広幡城跡SX7実測図 (1/60)

のの除去できる土であった。しかし掘込みとして明確なものではない。遺構として明瞭に捉え きれないけれども何らかの施設であった可能性はある。

SX4 (図版30, 付図2)

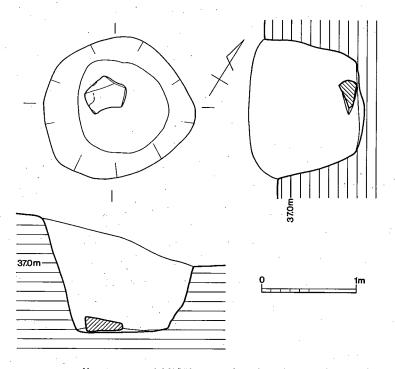
SX5の北方にテラス状になる部分があったので、ここをSX4とした。幅2m前後で長さ10m程が見た目にもテラス状となる。しかし、ここに柱穴等は確認できなかった。

SX9 (図版30, 付図2)

SX3の西方、縦堀よりも西に溝状の遺構が存した。幅は $80\sim150~{
m cm}$,長さ $15.5~{
m m}$ までを認めたが、はっきりとした溝になるわけでもない。これのほぼ中央付近から土器片が出土した。

SD1 (付図3)

Ⅰ・Ⅱ郭間の堀の南方、その延長上にⅠ・Ⅱ郭を巡る堀とは直交する溝状の部分がある。幅は4m以上で深さはあまりない。この溝はおそらく山城の通路に関連するものだろう。



第 22 図 広幡城跡 S X 7内土壙実測図 (1/4)

Ⅴ. 出土遺物 (図版38~41, 第23~29図)

土器と土製品・石器・金属器・近世磁器等に分けて説明してゆく。

① 土器 (図版38·39, 第23·24図)

SR11下の石組内 $1\sim 6$ はいずれも瓦質に近いが、 $1\sim 3\cdot 6$ は土師質としたがよい。この $1\sim 3\cdot 6$ は鍋になろう。いずれも外面はヘラケズリで、内面は明確でないもののミガキが入るようだ。 $2 \ge 6$ には煤が付着している。 $2 \ge 3$ は同一個体破片の可能性もある。 6 は復原径 51.8cmの大振りのものとなる。 4 は摺鉢の破片で内面に 6 本単位の櫛目がある。 5 は鉢になろうか。復原径36.2cm。

SK1 7は須恵質で壺になろうかと思われる底部片である。外面は横なでと擦過が入る。復原底径11.8cm。

SK2 8は瓦質の鉢になろう。内外ともに磨滅が著しい。復原口径36.6cm。

SK4 9は瓦質で大形の鉢の破片である。外面は淡黒色を呈し、断面M字に近い突帯を付す。 内面は黄灰色を呈する。約½の残存破片であるが、この破片で高台部分が途切れることはない。 復原底径45.8cm。

SK5 10は須恵質に近い瓦質の鉢で、口縁は玉縁状となる。外面は横方向にヘラケズリを行ったあと、縦方向に工具使用のナデを行う。内面はナデ。約½が残存し、復原口径25.8cm。緑灰色~白灰色を呈する。

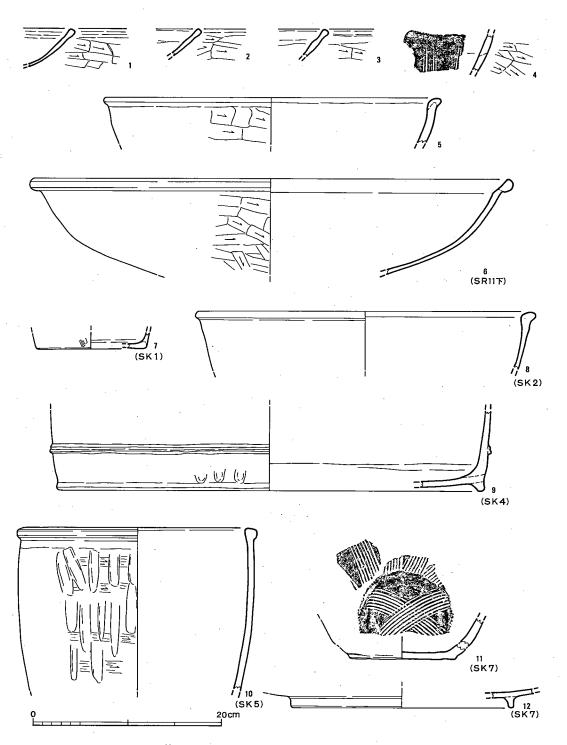
SK6 13~15が埋土中より出土している。13は白磁の小片で皿になろう。やや濁った白色釉がかかる。14は瓦質の皿か鉢で灰白色を呈する。復原高台径16.5cm。15は瓦質に近い土師質土鍋の破片であり、かなり大ぶりである。復原口径30cm。外面はヘラケズリを施す。

SK7 $11 \cdot 12$ はともに瓦質であるが、11は須恵質に近いとした方がよい。11は摺鉢の破片であり復原底径12.1cm。櫛目は8本を1単位としている。12は高台の付く皿か鉢で、復原高台径24cmを測る。

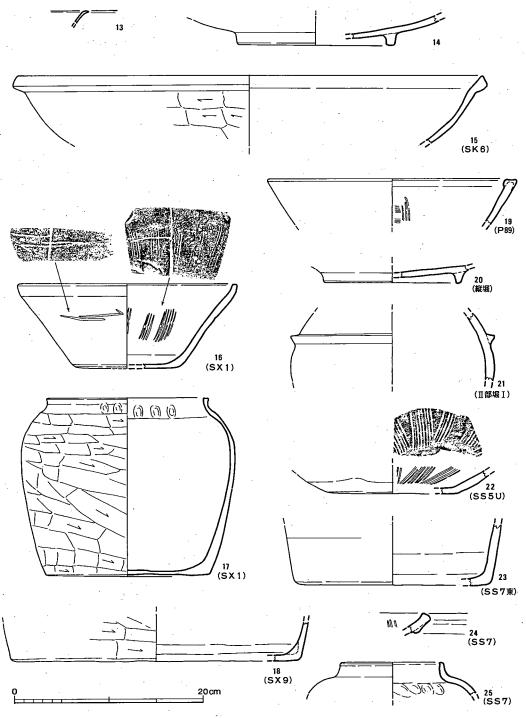
SX1 16・17の2点が出土している。16は瓦質というより土師質に近い摺鉢片である。口縁直下は僅かに内湾している。茶褐色~橙褐色を呈し、遺存状態はあまりよくない。櫛目は6本を一単位とする。外面の胴中位に横方向の部分沈線があるも、当初から意識的に付けたものかどうかわからない。口径23.6cm、底径11.8cm、器高8.8cmに復原される。17は瓦質に近い須恵質の直口壺である。½が残存し全形は復原できる。口径17.3cm、底径17.5cm、胴部最大径23cm、器高18.6cm。外面はヘラケズリを行い、内面はナデている。

SX9 18は瓦質の鉢の底部片である。外面は白い化粧土をかけているらしい。復原底径31.2 cm。焼成がややあまい。

縦堀 20は縦堀内の、SX1とSX9を結んだライン上のあたりから出土した瓦質土器片であ



第 23 図 広幡城跡出土土器実測図1 (1/4)



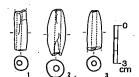
第 24 図 広幡城跡出土土器実測図2 (1/4)

る。小片からの復原で高台径14.5cm。鉢か皿になろうか。

P89 19は瓦質の摺鉢片である。磨滅が著しいが、外面はヘラケズリらしい。復原口径26.7cm。その他 21は [[郭堀]区出土の瓦質釜胴部片である。断面三角形の突帯を有し、そこの部分で復原径21.8cmを測る。角閃石・赤褐色粒子を含んでいる。22はSS5の北側にて出土した瓦質の摺鉢片であり、軟質の焼成である。櫛目は8本を一単位とする。復原底径13.6cm。23はSS7の東側から出土した瓦質の鉢か壺の破片であり、復原底径21.2cm。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。24・25はSS7周辺にて出土の瓦質土器の破片で、24は鉢になろう。25は短頸壺で、胎土中に角閃石を含む。復原口径11cm。

② 土製品 (図版40, 第25図)

いずれも管状土錘。1は端部が窄まらず、平坦になる形態。孔は 片寄って穿たれる。色調は茶褐色を呈す。残長3.2cm、径1.2cm、孔 径0.4cm。S K-3 出土で、中世の時期。2 はラグビーボール状を呈 す完形品。ねずみ色を呈し、須恵質。長3.7cm、径1.4cm、孔径 0.4 cm、重7.8g。表採資料である。3 は半欠資料で断面は正円形に近い。 赤褐色を呈し、化粧土を塗布する。残長3.2cm、径1.2cm、孔径0.35 cm。礎石6・7付近より出土。



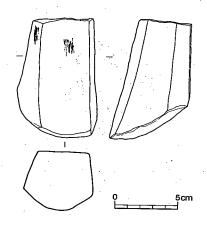
第25図 広幡城跡出土 土錘実測図 (1/3)

③ 石器 (図版40, 第26図)

SR11下の石組内より出土した砥石である。結晶質の石材で花崗岩のようにも見えるが硬砂岩であろう。現存長 9.4cm。

④ 金属製品 (図版40, 第27図)

1はSK1より出土した中国は明代の銅銭・永楽通宝である。周縁の一部を欠失するもほぼ完形としてよい。直径25.15mmの中央に5.9mm四方の孔がある。表面には孔の上下に「永楽」、右左に「通寶」と陽鋳されているが、「永」の字は少し左に、「楽」の字は右に傾いていて、全体として字のバランスがよくないようにみえる。裏面には文字はない。永楽通宝は明代・成租永楽年間(1403~1424年)の鋳になる銅銭である。



第26図 広幡城跡出土石器実測図 (1/3)

2はSX7より出土した鉛製と思われる玉である。直径13mm、厚さ3.6mmで内径5.2mmの孔が

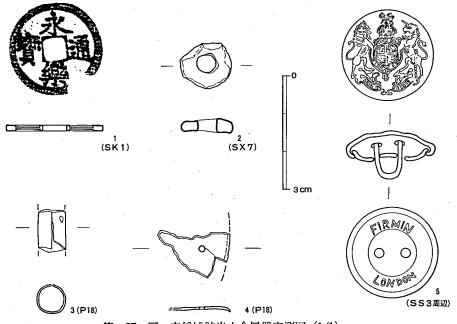
ある。大きさの割に重量感があり2.2gを量る。表面は白っぽい。

3・4はP18出土の青銅製品である。3は円筒状製品で現存長11mm,径は7~7.3mm。きわめて薄く0.6mmの厚さしかない。外表面は金の鍍金を施す。4は厚さ0.6mmの薄っぺらい板状品で、表面には金鍍金の痕跡がある。全体の形状を把握しきれないが、平面形は円くなりそうな気がする。穿孔がある。3・4ともに同一製品の部分かと思われるが接合もしないので元の形がわからない。

5は表面にいわゆる「大紋章」といわれる紋章を陽鋳にてあしらったボタンである。礎石3 (SS3)の周辺にて採集した。直径23.65mm,厚さ7.9mm,重さ5.9gをはかり、赤茶色を呈する。銅を主体とした合金製であろう。裏面には中央に縫い付けるためのU字形の金具があり、それをはさんで上下に同方向から読めるように「FIRMIN」・「LONDON」の文字が陰刻されている。以下、紋章について少し説明する。

中央にクォータリングの方法で四分割した楯(escutcheonと呼ぶ)が置かれ,その周囲にガーター勲章のベルトが配される。このベルトには、全ての文字が見えてはいないが,正面左のバックルの所から「 \underline{H} oni soit qui \underline{m} al y \underline{p} ense.」(下線が見えている文字)というフランスの諺が右回りに書き込まれている。楯の真上,ガーターの上にヘルメットはなく直接に冠が乗せられている。王冠であろう。その上にクレストとしての獅子が乗っており,こちらに顔を向けている。

楯・ガーターの左右にはサポーターとしての獅子と一角獣とが,互いに前脚1本をガーター にかけて向かい合って配される。獅子の顔はこちら側に向けられる。



第 27 図 広幡城跡出土金属器実測図(1/1)

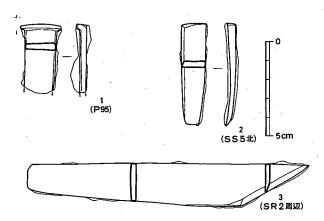
楯の下方には花木を表現したと思われる台座 compartmentがあり、獅子・一角獣ともに後脚の一本をその上に置いている。台座の下には左右に分かれて "Dieu et mon droit"(「神とわが権利」)というモットーの書き込まれたスクロール scroll (リボン状の巻物) があって、これが紋章の図柄全体のバランスをとるのに一役買っているようにみえる。

以上のこの紋章は英国王家のそれに由来すると考えられる。しかし、このボタンが裏面にロンドンと刻んであることを根拠にイギリスで作られたとしてよいのか、どのような服に付けられるボタンであったのか、など不明な点は多々存する。

(5) 鉄器 (第28図)

1 は P 95より出土したくさび風の板状品である。現存長 3.7 cm,幅1.6 cm。頭部は片方に折れ曲がった形状のようである。

3 はSR 2周辺から出土した切 出しナイフである。刃部は片刃に



第28図 広幡城跡出土鉄器実測図 (1/2)

つくる。全長14.6cm, 刃わたり4.3cm。これも新しいものだろう。

⑥ 近世陶磁器(図版41,第29図)

1 は白磁の小壺で底径 5.4 cm。青白磁に近い色調をなす。SR 5 内出土。

2 は猪口の破片で、白磁胎に透明釉をかけ、その上に色絵付をする。外面は緑色の笹葉文様、内面は赤黄色・黄色で花と「入湯旅館」と書いた短冊をあしらう。口径5.7cm、高台径2.8cm、高さ3.2cm。SS13周辺出土。ごく最近のものである。

3 も近時の湯吞碗の破片で、白磁胎に外面口縁は鉄釉がかかり、胴部には花びらをあしらう。 口径7.5cm。SS11周辺出土。

4 は染付磁器の小型の鉢である。外面に蝶と花、内面に岩山と花木をあしらう。これらは手描きであり、呉須は群青色に発色する。胴部は一部がくぼむ器形となる。口径17.2cm。SS10の周辺より出土。

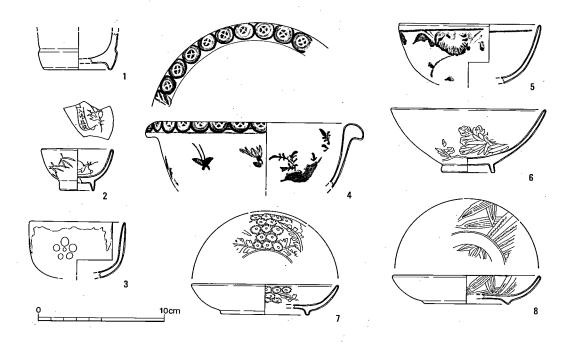
5 も染付の碗で、呉須はやや淡い群青色に発色している。外面に草花を描き、内面は口縁直下に横線を入れる。口径11.2cm。 I 郭堀 IV区上面の出土。

6 も染付碗であるが、これはスタンプによる草花模様が外面に描出されている新しいものである。口径12.3cm、底径 4.2 cm、器高 5 cm。 I 郭堀 N区上面と S S 10周辺の双方から出土。

7・8 はやはり近時の磁器皿で、ともに内面に型紙摺による文様が緑色の発色で釉上にあしらわれる。7 はあざみらしい草花で、8 は笹葉である。口径は7 が11.5cm、8 は11.6cm、底径は7 が7 cm、8 は6.7cm、器高は7 が2.4cm、8 が 2.3 cmとほぼよく似た器形・法量だが、高台のつくりが異なる。7 はSR3 内出土。8 は I 郭堀IV区上面からの出土。

4. 小 結

広幡城跡のI郭内に礎石を使っての建物が存したことは間違いないところであるが、その具体的な建物配置等については明らかにすることができなかった。土壙としたSK1~7が、その用途を明確にはできないけれども生活関連の施設(例えばゴミ穴、あるいは廁等)であったとするならば、これらからの遺物の出土が少ないこと、さらには堀の中からも殆ど遺物が出ていないことなどを考えあわせると、この山城においては長年月にわたって多くの人が活動していたとは考えにくい、という結論が導かれる。多くの人がうごめいていたならば、あるいは長期間にわたっていたならば、もっと遺物が出土していても不思議ではない。ここに、この山城はあまり長期間使用されてはいないという結論を得ておきたい。



第 29 図 広幡城跡近~現代陶磁器実測図 (1/3)

南斜面における遺構(S X 1 ~ 9)は山城に付随するものとしてまちがいないであろう。その付随するとした根拠は、位置的にみて城の防禦に関与しての建物とみられることがまずあげられる。さらには、堀 V 区の堀の底面に刻まれた細い溝が S X 1 , S X 8 のものと同じ道具を使ってあらわされている、ということも挙げよう。このような建物の存在はきわめて注意されるものである。

山城の築造と存続の時期については総括において検討を加えて提示したいが、16世紀中頃を 遡るものではないと考えている。

註

- 1. 森護『紋章の切手』大修館書店 1987 その他を参照した。
- 2. 「思い邪なる者に災いあれ」という意

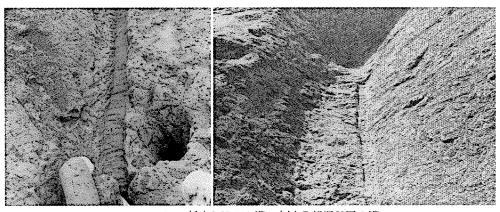


Photo. 17 (左) S X 1 の溝・(右) I 郭堀 V 区の溝

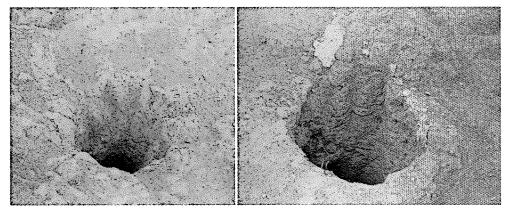


Photo. 18 (左) S X 1 の pit・(右) S X 8 の pit.

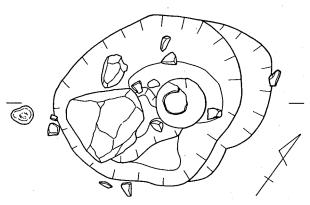
B. 奈良時代の遺構と遺物

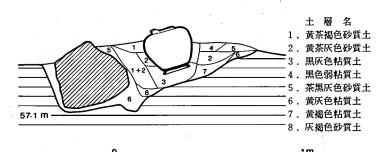
奈良時代に属するものとして火葬墓1基が存した。これ以外には須恵器の出土した小ピットがあるのと、明確な遺構として捉えにくいものの須恵器が出土した所がある。須恵器が特に目立つのは1号火葬墓の周辺部である。

1. 1号火葬墓 (図版31,第30図)

山城跡におけるSZ2とSD1との中間にて検出した。火葬骨を納めた骨蔵器を埋置したものである。115×90cm程の不整な楕円形プランの南端に頁岩質の大きな石があり,その横でやや離れて須恵器の壺が少し傾いて,底面から7~8cm浮いて出土した。壺の周辺は炭化物の入った黒色土が充満していた。また,壺の中には人骨片と土師器皿の破片が入っており,この土師器皿は壺の蓋として使用していたものである。

なお,これより10cm強離れた所で凹石が出土しているが,これは弥生時代の遺物の中で扱う





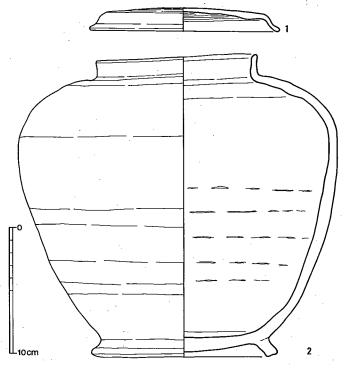
第30図 広幡城遺跡 1 号火葬墓実測図 (1/20)

こととする。 **骨蔵器**

(図版41,第31図)

1は蓋として使用された 土師器皿である。割れて本体の骨蔵器(壺)の中になる。の中にないた。不安定なでいた。不安定ないないなられてなられてない。本のではないないのでない。なが、これででで、の門域はないででで、の門域が、いる。にないでは、いるのでで、の門域が、いるのででで、の門域が、いるのでで、いるのでで、いるのででは、いるのででは、いるのでは、いるでは、いるのでは、いるでは、いるでは、いるのでは、いる

2は須恵器の直口壺であ



第 31 図 広幡城遺跡出土骨蔵器実測図(1/3)

る。丸底の底部には踏んばりのきいた少し高い高台が付けられ、ここから内湾気味に立上っていって胴上位で最も張りをもち、頸部で締まった所に直立した口縁部がとりつく。胴部中位外面がケズリに近い擦過を行い、内面の胴中位以下になでつけ痕をみるほかは回転なでにて調整する。内面には粘土紐巻上げの接合部分がみえる。つくりとしてはやや雑なほうであろう。完形品で口径12.6cm、高台径14.5cm、胴部最大径25cm、器高23.1cmを測る。

この上下のセットは8世紀前半~中葉のものとしてよいだろう。

2. その他の遺物 (図版41, 第32図)

土師器も少し出土しているが図示しうるのは須恵器のみである。以下,器種ごとに説明を加えて最後に出土地点を示すことにする。

蓋 $(1 \sim 3)$ 1の口縁部はL字状に屈曲し、2はそれを丸くおさめている。3はつくりとしてはスマートである。復原で口径は1が19cm、2が20cm。

坂 $(4 \sim 8)$ 4 は傾きは違うが15とよく似ている。 5 の高台はあまり高くない。 6 の底部は平らにならないが 7 は平底である。 8 は坏とした方が妥当か。 7 の口径13.6cm。

高坏(9) 脚端部は蓋の口縁部と同様の形状となる。裾部径11.3cm。

壺(10~20) 10は器形がよくわからない。蓋になるのかもしれない。11~14は同じような形態の壺になろうか。11・12とも肩部が灰被りとなる。13と14は同一個体の破片らしいが接合はしない。15は鉢としてもよい器形である。16~20は長胴の瓶の如き器形の一部であろうか。ともに内面はなでによる凹凸が見られる。

以上の土器は、1 がP24、6 がP53、2 が縦堀のS X 1 とS X 8 を結ぶ線上の付近、11・16・17は I 郭堀 I 区、3・4・10は同じ堀Ⅲ区、5 は同堀 V 区、9・13・14は II 郭堀 I 区、8・12はS D 1 上層、7・18~20が1号火葬墓の東側掘込み中より、そして15がS S 7 の東から出土した。

これらの須恵器のうち、11~14あるいは16~20については本来は火葬墓の骨蔵器として使われていたものが、山城をつくる際に削平されて散存したという可能性も考えられよう。1号火葬墓の周辺にこれらの出土が多いということはその感を強くする。

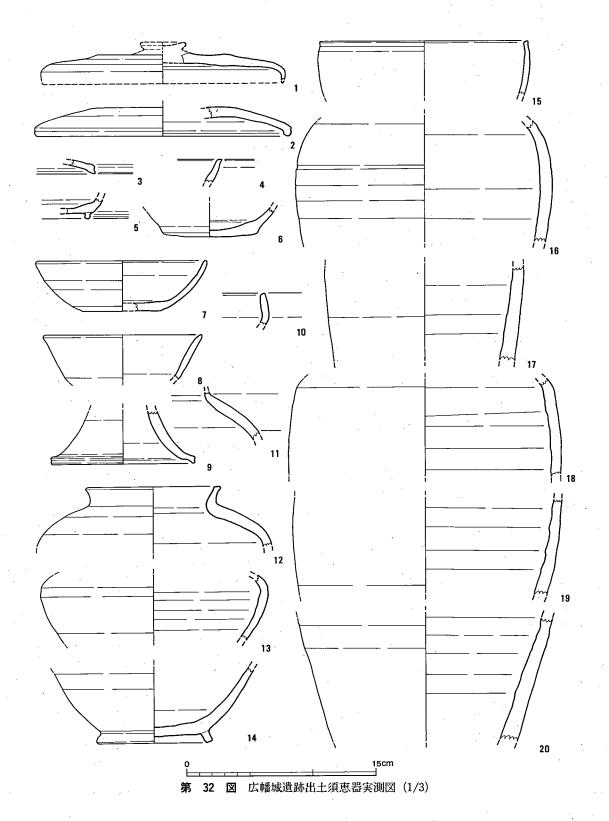
以上の殆どは8世紀中葉を前後する頃に比定される。

3. 小 結

奈良時代については、明確な遺構は火葬墓のみであった。火葬墓としているが、火葬骨を入れた容器(骨蔵器)を埋置した遺構であって、この場で茶毗に付したのではないことに注意しておかねばならない。

検出したのは1基であるけれども、先に触れたように、周辺から骨蔵器に使用したものとしても不当でない須恵器の破片がいくつか出土しているので、まだいくつか存したものと考えられる。8世紀代にこのあたりで火葬が行われ、骨蔵器に納めて埋置されたことを示すこの事実は、従来あまり明確でなかった豊前地方の葬制を考えるうえで興味深い。

なお, 麓の広幡遺跡に奈良時代の住居が営まれており, この骨蔵器と無関係とすることはできまい。



— 55 **—**

C. 弥生時代の遺構と遺物 (第33図)

広幡城遺跡の概要の中で述べたように、広幡城跡のⅠ・Ⅱ郭内外で弥生時代の竪穴住居跡や 貯蔵穴・ピット等を検出している。当然のことながら、新しく造営された山城の堀などによって 削平されているものも多々存するようであるが、以下においては調査時点での判断を基準に説 明していくこととしたい。竪穴住居跡6軒、貯蔵穴9基が主たる遺構である。

1. 竪穴住居跡

 $1 \cdot 2$ 号はI 郭の西半部,SZI の北側にあり, $3 \sim 6$ 号はI 郭東端部の虎口あるいはSZI の周辺に存する。これら相互に重複関係はない。

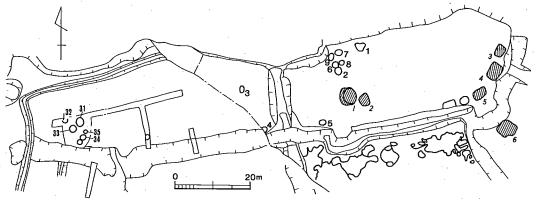
1号住居跡 (図版32, 第34図)

2号住居跡の北西にあり、長軸4.15m、短軸3.2mの長楕円形プランを呈する。これの西側が5cm程高くなってこの住居跡の西半を取巻く格好となるが、この部分までもが住居に含まれるのか否かわからない。これを含めても 5.3×4.4 mの楕円形プランを呈する。内側の低い部分のみで10.73m。柱穴は $P1 \cdot P2$ のみ深みがあり、他は総じて浅い。

出土遺物は弥生土器少量があって,かろうじて前期の所産であろうことは伺い知れるが,図示にたえない。姫島産の黒曜石剝片1がある。

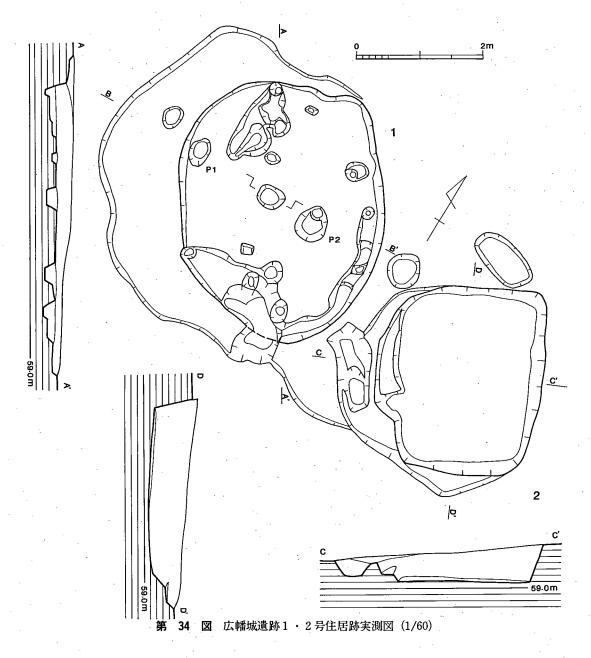
2号住居跡 (図版32, 第34図)

1号住居跡の東南にあり、主軸をN-27°-Wにおく長方形プランである。2.95 × 2.65m程



第 33 図 広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,000)





の大きさで 6.9㎡ の面積を有する。南辺に三角形状の張り出しが、また西壁側にもテラスがあり、どちらかは出入口の用をなしていたのだろう。床面には柱穴は全く検出されなかった。

出土遺物 (図版42·43, 第38図)

壺7, 饗10の個体数と水晶のコア1, 姫島産剝片2が出土している。 $1 \sim 3$ は壺で、1 は肩部にヘラ先にて羽状文が施される。 $2 \cdot 3$ はともに上げ底となり、底径は2 が7.3cm、3 は9.8 cm。 $4 \sim 7$ は甕になる。 $4 \cdot 5$ はともに口唇下端部に刻目を施す。 $6 \cdot 7$ ともに底径7.2 cm。前期後半。

3号住居跡(図版33,第35図)

4 号住居跡のすぐ北にある。長軸 $3.3\,\mathrm{m}$,短軸 $2\sim2.55\,\mathrm{m}$ のあまり大きくない長方形プランを呈する。主軸は $N-31^\circ-E$ 。面積 $7.26\,\mathrm{m}$ 。主柱穴は主軸上の $2\,\mathrm{a}$ な考えるしかない。

出土遺物(図版42·43, 第38, 47図)

壺5,甕7の個体数と、石斧片、姫島産黒曜石コア1がある。 $1\cdot 2$ は壺になろう。1は肩部にヘラ先によって羽状文が施文される。2の底径 $8.2\,\mathrm{cm}$ 。 $3\sim 5$ は甕で、3は口縁下に沈線を、4は突帯を付す。4の突帯は刻目の存否は不明である。5の底径 $5.1\,\mathrm{cm}$ 。前期後半。

第47図12は、頭部・刃部を欠損する扁平な打製石斧。両側縁の中間から刃部にかけて調整を施す。残長 9.1 cm,最大幅 5.4 cm,厚 0.9 cmで緑泥片岩製。他に磨製石斧の小破片出土。

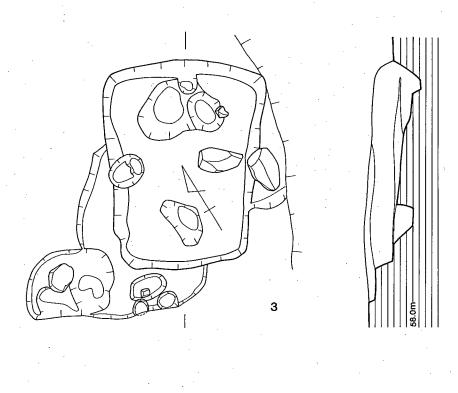
4号住居跡 (図版33, 第35図)

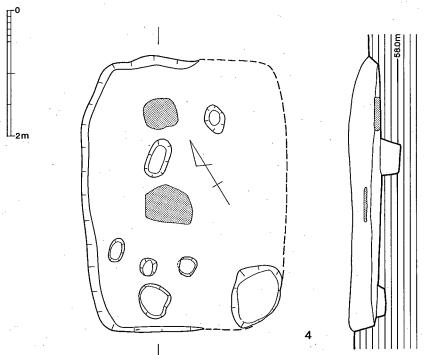
3号と5号の中間に位置する。東壁が遺存しないが、南北は4.3 m を測りこの方向に細長い長方形プランであろう。主軸N-32°-Eとなって3号住居跡とほぼ同じ向きになる。東西壁間が3.2 m くらいであるならば約13 m の面積を有することになる。中央付近で床面より約21 cm上位で焼土が50~70 cm の範囲に検出された。また北壁寄りの所でも12 cm程浮いて50 cm 四方の間に焼土が存した。柱穴は6 個ほどあるものの、どれを主柱としうるかわからない。

埋土中より甕3個体分11片と姫島産黒曜石片1が出土したのみである。弥生前期ではあるが、 図示しえない。

5号住居跡(図版34, 第36図)

4号住居跡の西南にある。主軸を $N-56^{\circ}$ -Eにおく長方形プランで、主軸長3.6m、短軸長 $2.25\sim2.85m$ を測る。東西両壁ともにその外側に掘込みがあるが、伴うものと断定できない。面積は8.67m。中央北寄りで床面から12cm程上位に焼土の広がりが $60\sim85cm$ にわたって認められた。柱穴は床面に4個が存するものの、これらが主柱穴となりうるかどうかわからない。





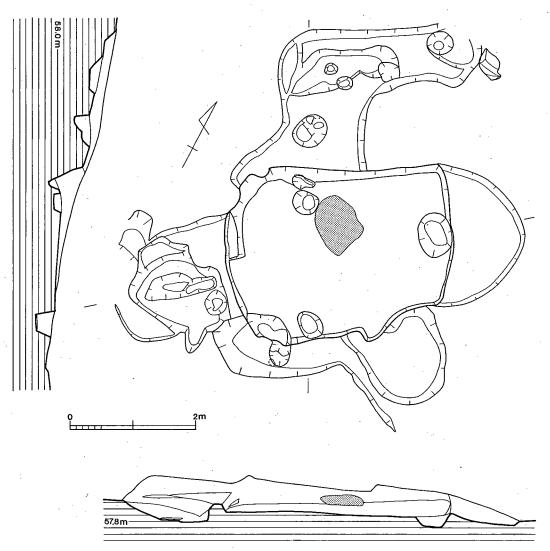
第 35 図 広幡城遺跡 3 · 4 号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版43, 第38図)

壺1, 甕6そして黒曜石剝片7 (うち姫島産4), サヌカイト剝片1が出土している。1は壺の肩部片で貝殻腹縁にて羽状文を施すようだが明確でない。2~4は甕で, 3の底径8.6 cm。4 は下城式で内湾する器形となる。口縁下の突帯は刻目があるのかどうか磨滅していてわからない。口径20.1cm。前期後半~末。

6号住居跡 (図版9·24, 第37図)

山城におけるSZ1とSX1の中間に位置する。主軸をN-69°-Wにおき、長軸4.5m,短



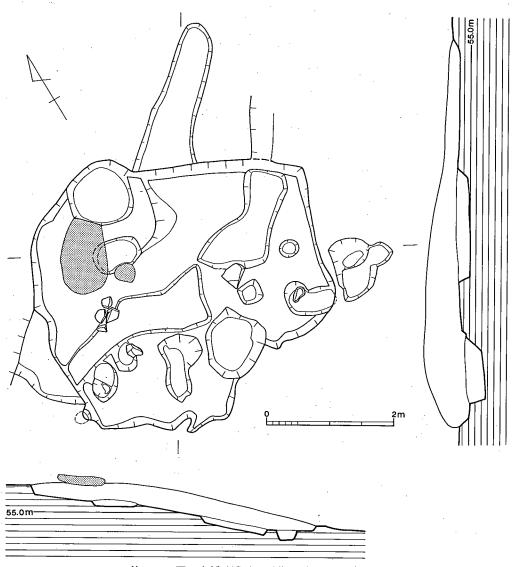
第 36 図 広幡城遺跡 5 号住居跡実測図 (1/60)

軸 3 m 程の長方形プランの南西側に張出し部が付く。面積15.9㎡。内部に掘込みやピット等がいくつかあるものの柱穴としてまとまりそうなものは捉えられない。

出土遺物 (図版44, 第38, 46図)

壺1,甕4の土器と黒曜石製鏃2(姫島産),スクレイパー1(姫島産),剝片62(うち姫島産60),サヌカイト剝片2が出土している。剝片の多さは工房跡的な性格を思わせる。1は壺の底部で径8cm。磨滅が著しい。前期後半。

第46図 $1 \sim 3$ は石器で、1は抉りの浅い基部を有す完形品。二等辺三角形に近く、やや荒い



第 37 図 広幡城遺跡 6 号住居跡実測図 (1/60)

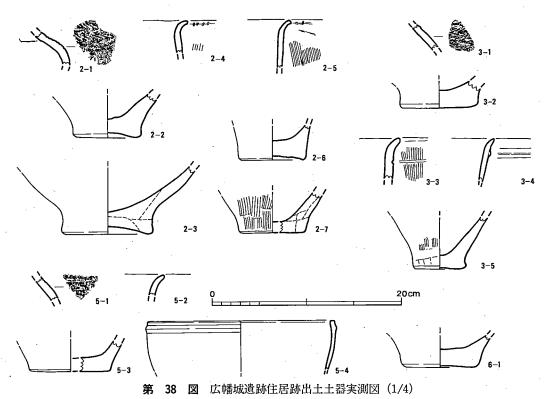
調整を施す。長 2.4 cm,幅 1.6 cm,厚0.35cm,重1.2 g。 2 は片側縁に膨みを有す石鏃で,抉りはやや深い。横長剝片を素材とし周縁の調整は丁寧。長 2.6 cm,幅1.8 cm,厚0.45cm,重1.4 g。両者とも姫島産出の黒曜石製。3 は幅広の縦長剝片を素材とし,片縁に刃部を作り出すサイドスクレパー。残長 3.6 cm,幅3 cm,厚0.6 cmで,やはり姫島産出の黒曜石製。

2. 貯 蔵 穴

I 郭西半の北端に近い所で $1 \cdot 2 \cdot 6 \sim 9$ 号の6 基が集中して存し、残り3 基はやや離れて位置する。遺存状態を見ると、 $1 \cdot 2 \cdot 6 \sim 8$ 号の5 基はかなり深くて袋状の断面を示すが、残り4 基は浅い土壌状の形態をとる。2 号と6 号は2 号が新しい。 $6 \sim 9$ 号は5 K 6 に切られている。全体として出土遺物は少ないが、前期の中頃~末の時期に営まれたものである。

1号貯蔵穴 (図版35, 第39図)

SK3の西,SK6の東北に位置する。上面プランは崩落もあって出入りのある不整円形状となっているが、本来は破線で示したような直径1.2m前後の円形プランであったろう。底面



は直径 $1.9\sim2.1\,\mathrm{m}$ の楕円形に近いプランとなる。底面中央には幅約45cm,長さ78cm,深さ15cmの長方形掘込みがある。底面の南端には間口30cm,奥行30cmの,また北側には底面より $10\mathrm{cm}$ 以上高い位置で間口 $25\mathrm{cm}$,奥行45cmの小さな横穴がある。現状で深さ $1.7\,\mathrm{m}$,底面より $30\mathrm{cm}$ 程の最も胴張りを有する所で $2.15\mathrm{m}$ を測る。

出土遺物 (第42図SP1-1)

甕とわかる土器片 5 個体分が存したのみでごく少ない。図示しうるのは 1 点である。 1 は甕の口縁部片であるが磨滅著しく調整はわからない。二次火熱を受けているらしい。前期中頃。

2号貯蔵穴 (図版34・36, 第40図)

SK6の南側にあり、6号貯蔵穴より新しい。もとの開口部分は崩落もあってはっきりしないが、現状では短軸1.1m、長軸1.7mの楕円形部分が残る。底面も1.62m×1.8mの楕円形プランとなる。最も深い所で0.9m。北端の6号貯蔵穴側に、あたかもその一部を塞ぐかのように10数個の石材が置かれていた。内部は自然に堆積したものとみてよく、茶褐色土を基調とする埋土が存した。2・3層には堅果類種子が多く見られた。

出土遺物 (図版42、第42図SP2-1~6)

上層・下層とに分けてみたが差異はない。破片のみから壺7, 甕14の個体数を得たが図示し うるのは少ない。姫島産黒曜石剝片4, サヌカイト剝片1そして炭化した栗・カシの実の堅果 類が出土した。また, ウリカエデと同定された炭化材も下層に存した。

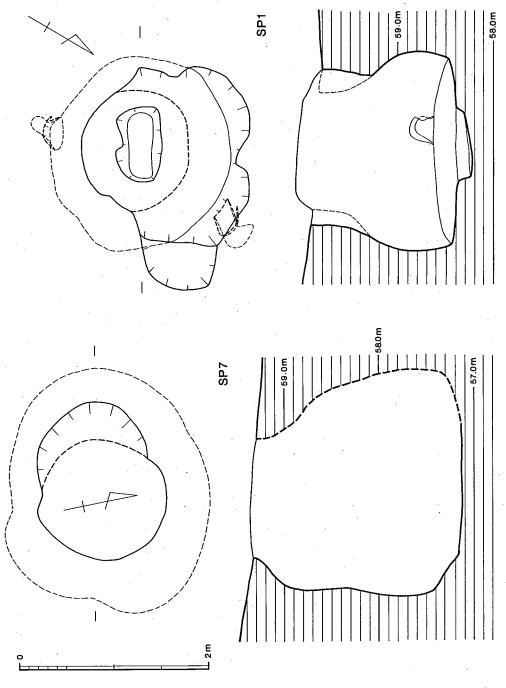
1・2は壺の破片である。1は内面に断面台形の突帯を有し、口唇部下端には小さな刻目を施している。2は頸部片であり、口縁部と胴部との境目には突帯が付され、その間にヘラ状の工具による線刻の山形文様があるが全体像を推測できない。肩部突帯の下には無軸の羽状文が施されている。頸部突帯部分で径15.2cm。3~6は甕の破片であり、いずれも如意形口縁をなす。3・4は口唇下端に刻目を施し、5は剝離が著しい。6は口縁直下に浅い沈線が入る。5の口径24.4cm、6は30.4cm。前期後半~末。

3号貯蔵穴(図版37, 第41図)

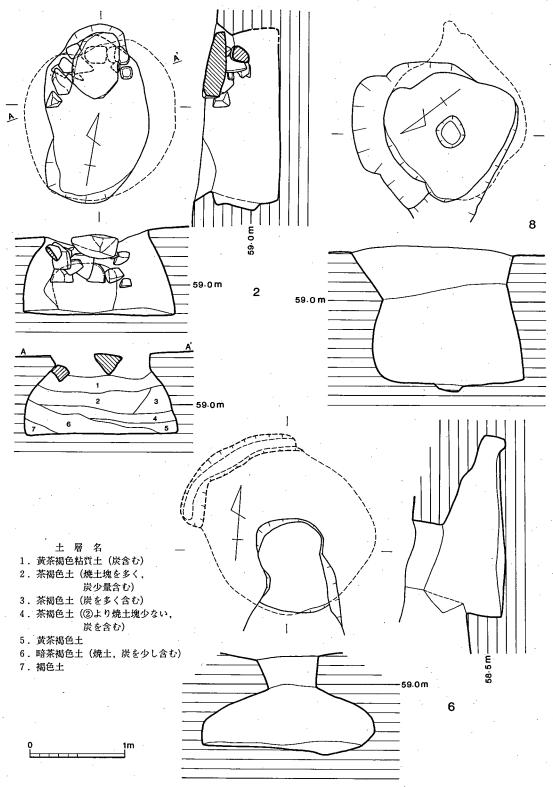
Ⅱ郭内にあり、南北方向に細長い 1.2 × 1.8 m 程の不整楕円形プランを呈する。深さは最深で40cm。底面南東隅に深さ10cm程の小ピットがある。

出土遺物 (図版42、第42図SP3-1~4)

壺3個体, 饕2個体の土器片と石斧片が出土している。1は甕の破片で如意形に開く口縁の下3cmに突帯を有するが、剝離している。2・3は壺の底部になろう。2は磨滅が著しく調整は殆どわからない。底径8.3cm。3は内外ともにミガキのあとがある。化粧土をかけているようだ。底径11cm。前期後半。



第 39 図 広幡城遺跡貯蔵穴実測図1 〈1・7号〉(1/40)



第 40 図 広幡城遺跡貯蔵穴実測図2 〈2・6・8号〉(1/40)

4号貯蔵穴(図版37, 第41図)

[[郭の南東端部にあり、一部は未調査区にかかっている。不整形なプランであり、北側には テラスが、底面東寄りにはさらなる掘込みがある。南北方向で1.6 m を測る。

出土遺物 (図版42 第42図SP4-1·2)

出土量はきわめて少なく、壺1、甕3を見るのみである。1は壺の肩部片であり、突帯の下にはヘラ描らしい羽状文がある。2は甕の底部であり、底径9cm。前期後半。

5号貯蔵穴(図版37,第41図)

I 郭のSK5の西方にある。長軸1.4 m, 短軸1.25mの隅円方形プランを呈し, 深さは40cm。 床面より10~20cm上位にて打製石鏃が出土している。

出土遺物 (図版44、第46図)

土器は甕の破片が2個体分,20片程出土したものの図示にたえない。前期後半のものである。 鏃以外に黒曜石剝片4(うち姫鳥産2),サヌカイト剝片4が出土した。

打製石鏃2点あり。第46図4は先端部を欠く資料で、残長1 cm、厚0.3 cmの安山岩製。5は横長に近い部厚な剝片を素材とし、背面の左側縁及び基部側では直角に近い調整を施す。また基部には自然面が残る。長2.8 cm、幅2.4 cm、厚0.8 cm、重3.4 gで黒色良質な黒曜石製。

6号貯蔵穴(図版34・36, 第40図)

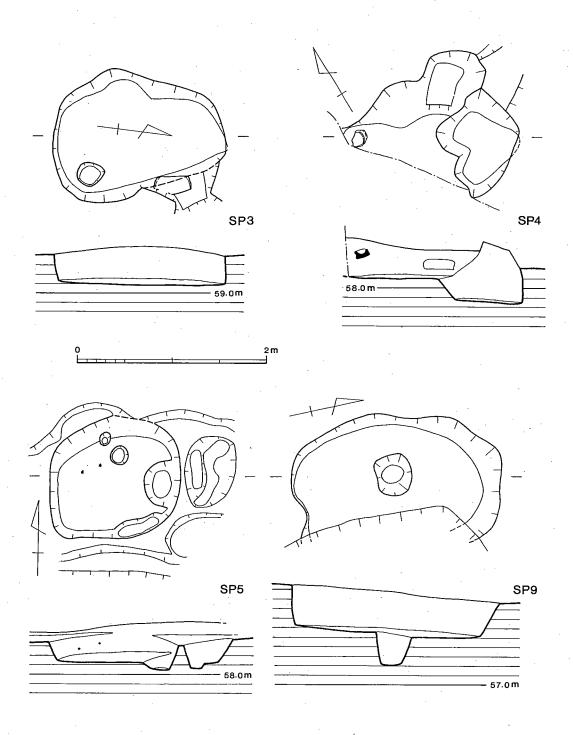
2号貯蔵穴の北にあって、これに切られている。開口部はもと径70cm程の円形プランであろう。底面は1.65×2mの楕円形プランを呈し、北西部には幅15~25cmの溝が約1.5mにわたって掘られている。竪穴内部は最も高い所でも底面より65cmしかなく、その断面形は洞窟のような感を呈している。

出土遺物 (第42図SP6-1~3)

壺・甕ともに 5 個体分の破片が存したのみである。それ以外に炭化した種子(栗・カシの実類か)とウリカエデと同定された炭化材が出土している。1 は小形の壺で口径10.4cm。2 はやや大きくなる壺の口縁部で、内面に小突帯を有する。この小突帯は注ぎ口を形成するものとなる。3 は甕の破片で口唇全体に刻目が施される。 $1\sim3$ ともに磨滅が著しい。前期後半。

7号貯蔵穴 (図版35, 第39図)

SK6の北にある。開口部は1.25~1.35mの円形プランで、その直下から広い空間となるが、西半部は危険性もあって全掘できなかった。底面は2.1~2.65mの楕円形プランになると考えたが、深さ2.2mまで行ってそこからまた30cm下がり、さらに西半部はそれよりもっと深くなっていくことが確認できた。これは下位に別の貯蔵穴の存することも考えてみたが、むしろ二



第 41 図 広幡城遺跡貯蔵穴実測図3 〈3~5・9号〉(1/40)

段・三段の底面を持つ貯蔵穴とする方が適当であろう。しかし実際にはその下層部分は掘ることができなかった。

出土遺物 (図版42、第42図SP7-1~7)

壺2, 29の個体数を認めたが小片ばかりである。下層から石斧が出土している。 $1 \sim 4$ は 甕の口縁部片である。1はいわゆる下城式と称されるものであるが,刻目のある突帯は口唇部外端刻目部分とともに貼り付けられている。刻目の原体は不明。内面には磨きがよく残っている。 $2 \sim 4$ はやや厚ぼったくて胴の張らない器形となる。いずれも口唇に刻目はない。4 は器胎断面により成形時の貼合せの様子がよくわかる。 $5 \cdot 6$ も甕の底部になる。ともに少し上げ底となる。 $5 \cdot 6$ ともに底径は7.8cm. 7 は壺の底部になる。底径9.8cm。前期後半 \sim 末。

8号貯蔵穴 (図版36, 第40図)

6号貯蔵穴の東隣りにある。開口部は崩落で変形しており、直径 $1.2\sim1.4\,\mathrm{m}$ の不整円形プランとなる。深さ $1.4\,\mathrm{m}$ 。底面は一辺 $1.4\sim1.5\,\mathrm{m}$ の隅円方形状となり、東端部は突出している。中央には径30 cm で深さ $7\,\mathrm{cm}$ の浅いピットがある。やや粘質の茶褐色土を埋土としていた。

出土遺物(第42図SP8-1)

土器は壺1、甕2の個体で少ない。炭化した栗・カシの実の類とウリカエデと同定された炭化材が出土している。1は甕の口縁部の小片である。口唇に刻目はない。前期末。

9号貯蔵穴(図版34、第41図)

SK6の西にあってこれに切られている。長軸2.2mの楕円形プランを呈し、中央に径40cmで深さ34cmのピットを有する。全体としては残くて深さ45cmしか残らない。

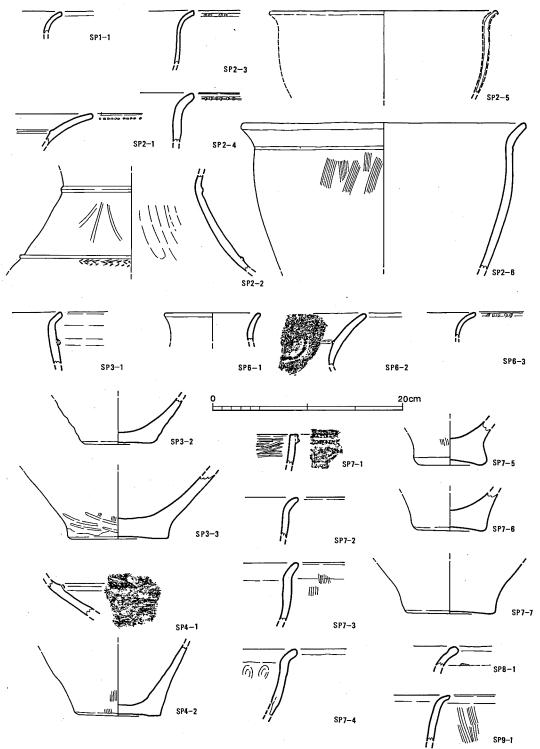
出土遺物 (第42図SP9-1, 第47図)

きわめて少なく、壺1、甕2の個体を数えたのみである。別に石斧1が出土している。1は 甕の破片で胴がほとんど張らない。外面は刷毛目がよく残る。前期末。

第47図13は短冊形の打製石斧。周縁から刃部にかけて荒い剝離がみられる。図の右側縁は縦 方向の磨きを施す。残長11.2cm、最大幅 4.8 cm、厚 1.5 cmで緑泥片岩製。



Photo, 19 降雪中の発掘



第 42 図 広幡城遺跡貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

3. ピットその他の土器・石器

ピットとして取上げた土器・石器などを説明してゆくが、そもそもピットとしたものが本来の柱穴状のものもあれば、土壙状のものをもピットとしている場合もある。特に山城跡の堀の外に存した掘込みは住居跡とも貯蔵穴とも捉えきれないもので、かつ土壙とするのも躊躇したのであった。これらも本来は何らかの遺構であったのが後世の削平等によって性格不明瞭なものとなってしまったと考えられよう。P46・47とした周辺は土器の量も多く、もともと何かが存したことは確かである。以下に説明してゆく土器は、前期の中頃から末の中に大半が納まるものの、一部に中期初頭に下るものもある。

① 土器 (図版43, 第43~45図)

P30 甕の底部片である。穿孔があり甑として使われたものだろう。底径 8.4 cm。

P32 壺の底部片である。底径11.7cm。内面は黒く煤けている。

P37 1 は壺の肩部片で、外面はヘラ先にて描いた羽状文がある。 $2 \cdot 3$ は甕の破片で、 2 は 口縁下に沈線を持つ。 3 の底径 5.7 cm。

P40 1は鉢になりそうな甕だろう。2は壺であろう。口唇下端の刻目は爪か棒の先端による施文である。口径20.1cm。3は甕の口縁で口径23.2cm。胴は殆ど張らない。

P44 1は壺の肩部片で貝殻腹縁による羽状文がある。2は甕だろう。断面M字の突帯が口縁下に貼付されている。3は壺の底部か。底径4.2 cm。

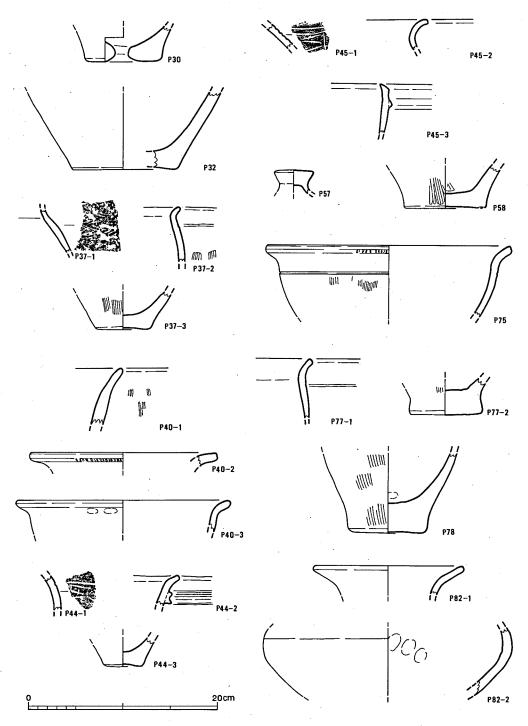
P45 1の壺肩部には貝殻腹縁による羽状文がある。2はかなり外反する口縁である。あるいはずっと新しい土器かも知れない。3は直口の内面が肥厚する下城式の甕の破片である。

P46 1・2は壺でこの両者は一個体だろう。1 の口径19.8cm、2 の底径 9.4 cm。ともに磨滅が著しい。2 は外面に黒斑がある。3 は鉢で口径17.4cm。4 は沈線を入れる甕で胴は少し張りがあるものの口径をこえない。口径23.5cm。

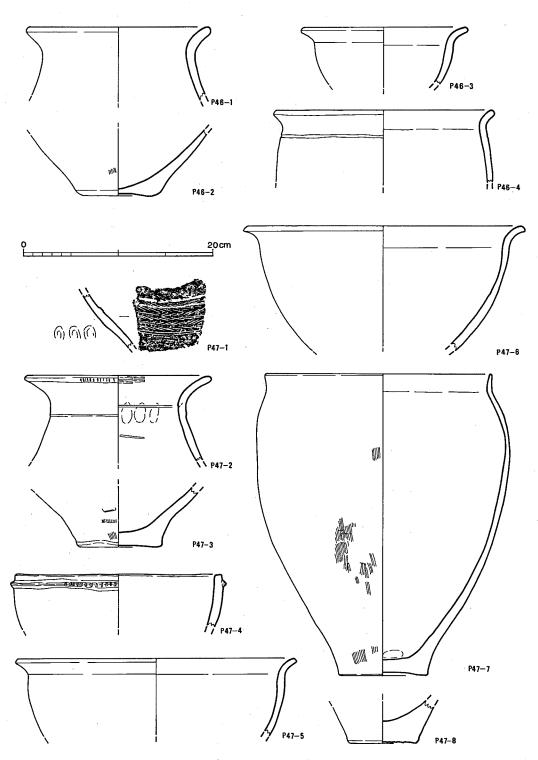
P47 1~3は壺になる。1の台形突帯上の格子文とその下の羽状文ともに繊細な施文である。この土器は胎土も良質。2は口縁を内外ともに沈線と段とで区分している。口唇下端部には細い刻目を入れる。また内外ともに黒塗りの痕跡が伺える。口径19.6cm。3は底径 8.9 cm。外面に細かい刷毛目が残る。4は下城式の甕で口縁下1 cmの所に突帯がある。内湾したままの器形を呈す。口径21.6cm。5・6 は鉢と称した方がよいかもしれず同一個体と思われる。口径30.3 cm。7は口縁が直口気味に立上る甕で、やや特異な形態を示す。底部は少し上げ底となる。口径23.6cm,底径 9.4 cm,胴径26.2cm,器高32.5cm。8 は甕底部で径 9.6 cm。

P 57 蓋の撮みである。上端の径 4.1 cm。

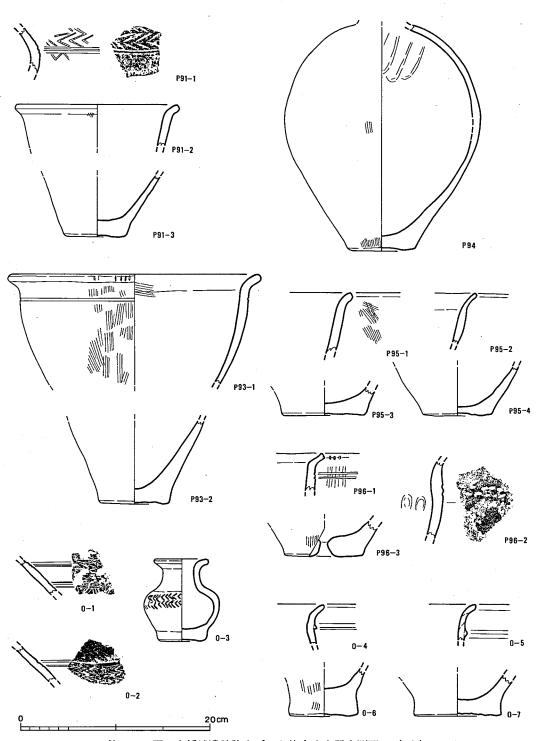
P58 甕の底部片で径 8.9 cm。



第 43 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図1 (1/4)



第 44 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図2 (1/4)



第 45 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図3 (1/4)

- P75 鉢形になろう。口唇下端に細い刻目を施し、その下方に沈線を入れる。口径26.4cm。
- P77 1は口縁下に沈線を入れる甕である。2は甕の底部で径7.7 cm。
- P78 甕の底部でかなり分厚い。径8.5 cm。
- P82 1は壺の口縁で径15.8cm。2は1の胴部とするには張りがそぐわない。
- P91 1 は壺胴部片で貝殻による羽状文を施している。 2 · 3 は甕で, 2 は口径17.7cm, 3 は底径 6.8 cm。
- P93 1 は鉢に近い甕で口径27.2cm。口唇全体に細い刻目を入れる。 2 は底径 7.5 cm。
- P94 壺の破片で頸部はかなり締まっている。胴径20.9cm, 底径 7.3 cm。
- P95 1~3は甕であろう。3の底径9cm。4は壺の底部で径7.4cm。
- P96 1 は口縁下に 2 条の沈線を持つ甕で、 2 は沈線でなく長さ $7 \, \text{mm}$ 程の列点文を二段に有する。 3 は甑に転用の穿孔された底部片であり、径 $8.5 \, \text{cm}$ 。

その他($0-1\sim7$) $1\cdot 2$ は壺肩部でともに羽状文を施すが,1はヘラ先,2は貝殻腹縁にて施文される。3は小壺のほぼ完形品である。分厚い底部の上に,上位に張りを持つ球形胴をのせ,ややすぼまりながら外反してゆく口頸部が付く。胴部には羽状文がヘラ先にて施される。口径 5.7 cm,胴径 7.9 cm,底径 5.1 cm,器高 8.9 cm。 $1\cdot 3$ はSR 5 の中より,2 はSS 1 周辺より出土した。 $4\cdot 5$ は如意形に開く口縁直下に三角突帯を貼付したものだが,甕ともしうるし大形の壺の可能性もないではない。4 はSR 3 の中,5 はSK 7 中より出土。6 は甕,7 は壺の底部である。6 の底径 7.1 cm,7 は 9.1 cm。6 が SR 5 の中,7 は 1 郭堀 1 区の南側より出土。

② 石器 (図版44、第46図6~11、第47図14~16、第48図17)

6~11は石鏃で、図示した以外にも4点出土した。14~16は石斧。

P19 6 は正三角形に近く,浅い抉りを有す。調整はやや荒い。完形品で長さ $1.5~\mathrm{cm}$,幅 $1.6~\mathrm{cm}$,厚 $0.4~\mathrm{cm}$,重 $2.5~\mathrm{cm}$ 。安山岩製。

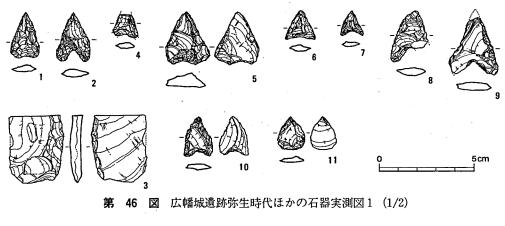
P32 7は小型品で、片側縁が内湾する。長さ1.4cm、幅1.2cm、重さ0.25g。姫島産黒曜石製。 P57 9は横長の剝片を素材とし、図中の右側縁・基部に調整を施した段階の未製品。残長3 cm、幅 2.5 cm、厚さ0.65cm。漆黒の黒曜石製。

P65 8は先端,基部を欠損する抉りの深い石鏃。残長 2.7 cm。安山岩製。

P11 15は扁平な磨製石斧の刃部破片。刃部はあまり鋭いものではない。全体に風化、剝落が著しい。残長4cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm。緑泥片岩製。

P31 14は扁平片刃石斧の頭部破片。研磨は丁寧だが,風化著しい。残長4cm,幅2.8cm,厚さ0.7cm。泥岩製。

その他 10は横長剝片を素材とし、背面の周縁のみに調整を施す。完形品で長 2.1 cm、幅1.55



12 13 第48図 広幡城遺跡出土 石器実測図(1/3)

第 47 図 広幡城遺跡弥生時代ほかの石器実測図 2 (1/3)

cm, 厚0.35cm, 重1.1 g。SR2内より出土し,安山岩製。11は平基式の石鏃で,打瘤部を先端にとる縦長剝片を素材とする。10と同様に周縁のみに調整を施す。SR11内出土で,姫島産出の黒曜石製。16は蛤刃石斧で,刃部を欠損する。全体の研磨は丁寧であるが,器面風化し稜線・方向等不明な部分が多い。残長15.2cm,最大幅5.6 cm,厚3.1 cm。広幡城のⅠ郭堀Ⅰ区の最上層より出土した。蛇紋岩製。

17は玄武岩の凹石で、長さ10.6cm、幅8.2cm、厚さ5.9cm。くぼみはあまり深くない。1号 骨蔵器のすぐ西より出土。弥生時代のものという積極的理由はないが、ここで紹介しておく。

4. 小 結

弥生時代の遺構は竪穴住居跡 6 軒, 貯蔵穴 9 基を主なものとし, その他に遺物を包含した所があるけれども明瞭な遺構とならなかった。

竪穴住居跡 6 軒は 1 号が楕円形であるほかは皆長方形プランとしてよい。しかし、どの住居跡もプランに歪つなところがあり、かつ主柱穴を明確にし難い。また、4~6 号住居跡には焼土のブロックが検出されたけれども、全て床面より浮いた状態であって、これが炉の痕跡を示しているとは言い難い。また焼失住居であるといえるものでもなかった。このような住居としての機能にかかわる条件を欠くものではあったが、これらを住居跡として認めないわけにもゆかないだろう。貯蔵穴があるのに住居がないのも不自然である。

なお、6 号住居跡において姫島産黒曜石の剝片が多量に出土していることは注意しておかねばならない。

貯蔵穴は9基を示したが、断面が袋状を呈して遺存状態もよいものは1・2・6~8の5基であって、これらは接近した所に密集している。広幡城の2次調査でⅡ郭を調査した折にも、数基が密集して検出されている。これは貯蔵穴を特定地に集中して設置し、管理をしやすくしていたのであろう。また、2・6・8号より栗・カシの実と思われる種子が出土し、稲(米)が見られないことは、ここの立地と環境を想うとき興味深いものがある。

ここで出土した弥生土器は最も古いもので前期中頃であり、この点も当遺跡の立地とも相俟って注意されることと考える。



Photo. 20 作 業 風 景

IV 広幡遺跡の調査

〈概 要〉

広幡遺跡は、便宜的なものではあるが、広幡城跡における $SX5 \sim 7$ の東南方 $6 \sim 7$ mより下方の部分をさすこととする。標高36 mより低い方で、標高20 mまでの間に下記の遺構を検出した。標高 $25 \sim 29$ mの間に平坦面があって、遺構の大半はここに存する(付図 $2 \cdot 4$)。

◎中世期以降

●掘立柱建物跡〈SB〉 2棟

●石垣〈SW〉

4

●溝〈SD〉

15条以上(暗渠含む)

●土壙〈SK〉

3基

●慕〈ST〉

2基

●窪地又は包含層〈SG1〉1ケ所

出土遺物 ― 土師器・瓦器・青磁・白磁・陶器・染付・鉄器など

◎古墳時代~平安時代

●竪穴住居跡

9軒

●掘立柱建物〈SB〉

2棟

●包含層〈SG2〉

1 ケ所

出土遺物 ― 土師器・須恵器・緑釉陶器・子持勾玉・スラッグなど

◎ その他

遺構は捉えきれなかったが、遺物として縄文土器・打製石鏃等がある。

上記の遺構は、標高の高い方から石垣1・2、暗渠とがほぼ並行するように並んで走り、石垣1・2は北方の調査区外の石垣と関連するものとしてよい。石垣1の上方に1号土壙墓が、西に1号住居跡があり、石垣2との間に土壙1と3、建物1がある。他の住居跡や建物跡は暗渠よりも東方の崖線までの間に集中して存する。溝もこの付近に東西に走るものがある。調査区東北部の溝2~4、10~14の付近は少し低くなっており、他の遺構は見られない。

今回検出の中世以降の遺構については、用地外の北側に残る石垣等と関連するのであろう。

A. 中世以降の遺構と遺物

1. 調査区外の現況 (付図1・2)

今回調査した広幡遺跡の北方には石垣が広範囲に見られ、この石垣によって区画された部分が幾つか存する。これらは調査区における1・2号石垣などとも関連するものと思われるが、 それらについて平板測量を行ったので、測量図をもとに現況の説明をしておこう。

なお,調査区の南方については果樹園に造成されている。

説明していくにあたっては広い範囲を一括できないので、石垣や段差で区画された面を便宜 的に記号で呼ぶこととする。

まず、調査した所も低い方から $A\sim E$ 面を設定する。調査区外は $F\sim S$ に分けておく(第96図、第97図参照)。

A面は2段に分かれ、その東半分が包含層として多くの遺物を含んでいた。

B面は削平された部分であり、遺構は何もない。

C面は遺構が最も多く検出された所であり、中央付近の暗渠によって更に 2 分割できる。 この面は隣の H面と一連としてよいだろう。

D面は1・2号石垣の間にあたる。ここも隣のK面と一連であろう。

E面はこれまでの面に比して傾斜が急になってくる。

F面はA面と一連なのであろうが、ここにも包含層があるか否かは不明。

G面はB面の続きとしてよいだろう。

H面はC面と一連であり、低い石垣をおいてI・J面ともレベル的にはかわらない。

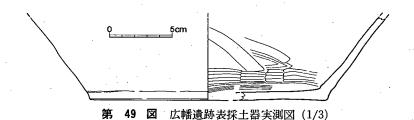
I 面はその西南部を石垣でL字に区画するが、北部に至ると石垣は絶え絶えに蛇行していく。この 北端あたりには石垣というよりは石組とすべき所作のなされた所があり、その一角に井戸かと思わ れる丸い掘込みらしきものがあった。この付近一帯は庭の如き景観を呈していたのかもしれない。 J面は狭長な面となる。

K面はD面の続きとみてよいだろう。

L面はO面とは大きな段差でもって分けられる。その西南部にはやや大きな石垣を築き、南面する所には出桝が設けられる。M面とは一連であろうが、その間に出入口らしき部分がある。このL・M面が、ある時期に屋敷地の中核をなしていたことは間違いないだろう。

M面は上記のとおりで、東端の石垣もしっかりしているのでここまでが屋敷地内であろう。 N面はM面に従属する場所と思われる。

O面~S面は斜面がこれまでより急になっているが、ここも屋敷地に付属しての重要な空間



であったらしいことが、P・Q間の溝やP・R面北側の溝(これはE面にて検出していた溝と連続するものであって、おそらくは屋敷地と城とを連絡する通路的なものではなかったかと考える)、S面の南隅に積石が見られることなどからも伺える。

以上を要するに、C・D、H~Mの面は特に屋敷地としての中核部分をなしていたと思われ、 しかもそれは石垣のあり方等を見ると単一の時期に営まれていたものではなく、時期差がある ようである。

なお、第49図は 0面の L面にのぞむ崖面、 L字形石垣の東端部付近(付図 1 の X 印)で採集 した瓦質土器片である。大型の甕になろう。内底面とそれより少し上位までは粗い刷毛目のあ とが見える。内外ともに茶灰色。復原で底径18.8cm。

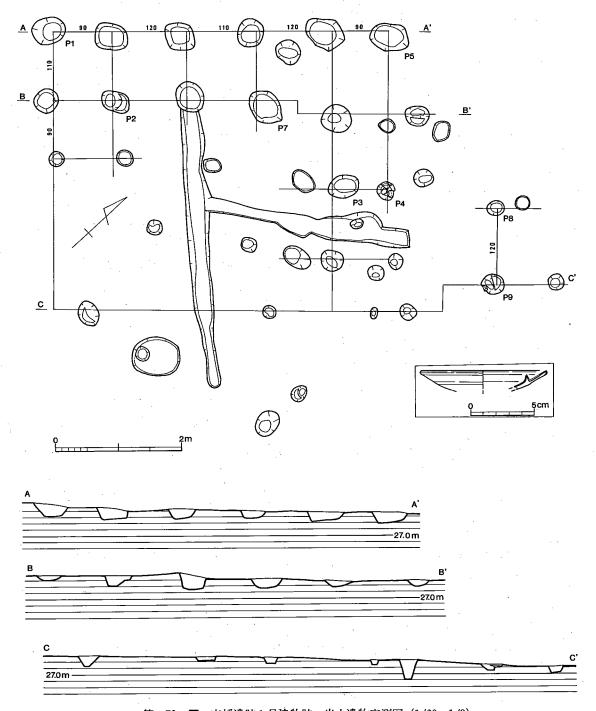
2. 建物·石垣·溝 (付図4)

建物は掘立柱型式のもの 2 棟がある。 3 号石垣の北東あたりにまだ存するものと思うが確認できなかった。石垣は 1~4 号まであるが、4 号についてはごく近時のものとの判断により当初から除去したので、いまはその位置のみ示すこととする。溝は14まで数えたが、2~4 号と10~14号の間、14号の東側にはほぼ等間隔にて同じような浅い溝が存した。これらは近時の所産であることもあって全部は掘っていない。5・6 号溝は新しい遺物も混じっているものの、ともに中世まで下るとは思えないのであるが、時期決定が難しいのでこの項で説明する。

1 号建物跡 〈S B1〉 (図版46, 第50図)

1号石垣の東前面にあるが、この石垣の方向と $P1 \cdot P5$ を結ぶ柱筋とは平行にならないのでお互いが同時期とは捉えにくい。主軸方向は $N-42^\circ-E$ とされるが、東側の低い方は柱の数・配列とも不規則である。 $P1 \cdot P5$ 間は $90 \sim 120$ cmの間隔で規則的に並び、 $P6 \cdot P7$ 間も同様であるが、それ以外は柱筋が揃わない。 $P1 \cdot P5$ の軸を基線に柱間を結んでいくと第522回のようになるが、そのとき $P8 \cdot P9$ の2個は $P5 \cdot P4$ のラインから 180 cm離れて対置するようにして存する。ここも何らかの付帯施設であろう。

建物内部にT字形に浅い溝があるけれども,これは建物に伴うものではないようだ。P 2~



第 50 図 広幡遺跡 1 号建物跡・出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

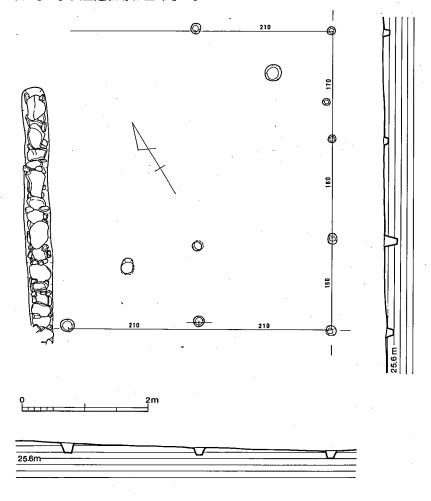
4より土師器・須恵器・瓦質土器・陶器の破片が出土した。

出土遺物 (第50図)

P3より出土した陶器の灯明皿である。内面には黄灰色の釉がかかり貫入が目立つ。外面は口唇部を除いて露胎のままとなる。約%の破片で口径10cmに復される。磁器質の陶器である。 筑前高取系であろう。

4号建物跡 **くSB4**〉(第51図)

3号石垣から続く暗渠の先端の付近にある。主軸を $N-31.5^{\circ}-E$ にとるが、西北隅の柱穴は見つからなかった。柱穴が直径 $12\sim22$ cmときわめて小さいこともあり、建物として少し疑問の点もないではない。出土遺物等は全くない。



第 51 図 広幡遺跡 4 号建物跡実測図 (1/60)

1号石垣 〈SW1〉 (図版47, 第52図)

調査区外に遺存する石垣と一連のものであろうが、その並びは直線とはならず、また 1 号建物跡の並びの所で一度途切れている。現存長12 mのうち途中で 3 m程が崩壊し去っていて石を見ない。石垣の方向はN-34°-E。

もともと緩やかな斜面になっている所を約25°の傾斜で1.7mにわたってカットし、最も低い 所に野面積みで最高4段までの石を高さ60cmに積む。その背後には茶褐色系の土を裏込めしつ つ、上段部分には控え積みを行っている。石材は単一でなく、花崗岩・凝灰岩・玄武岩・安山 岩などが使われている。掘り形内や周辺より須恵器や陶器片が出土した。

出土遺物 (図版57・60, 第53図SW1-1~5)

1は須恵器の甕口縁部片である。波状文は6本の櫛歯が一単位となっている。2・3は瓦質の破片で火鉢であろうか。2は口径15.4cm、3は16.3cmに復原される。4は常滑焼の底部で、底径11.6cm。黒っぽい茶灰色を呈する。これのみが掘り形内から出土した。5は陶器片で小さいことからして落し蓋になろう。口径9.5 cm。内底面に黄緑灰色の釉がかかり、それ以外は黄灰色の露胎に一部茶褐色の鉄釉を塗布する。4以外は石垣の周辺から出土した。

2号石垣 〈SW2〉 (図版47, 第52図)

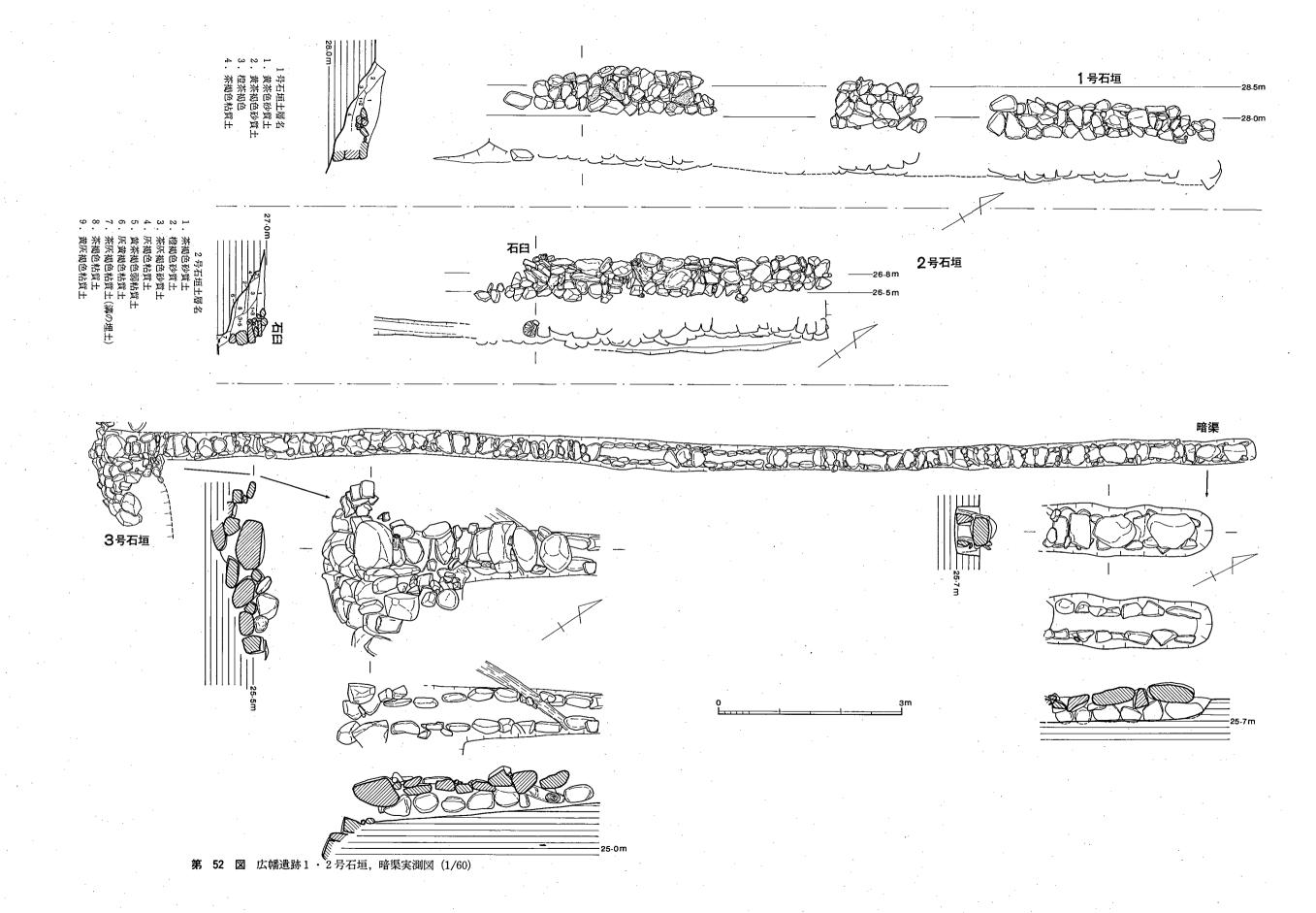
1号石垣の東南10m付近にあり、N-38°-Eの方向をとって 1号石垣とは若干のずれがある。いま 6 m程しか残っておらず、南半部分は取り除かれている。 1号石垣よりもやや急な傾斜で斜面をカットし、そこに $3\sim4$ 段の石垣を野面積みにて高さ60cmに築く。この石垣の真下に幅 15cm、深さ20cmの溝(1号)が走っている。

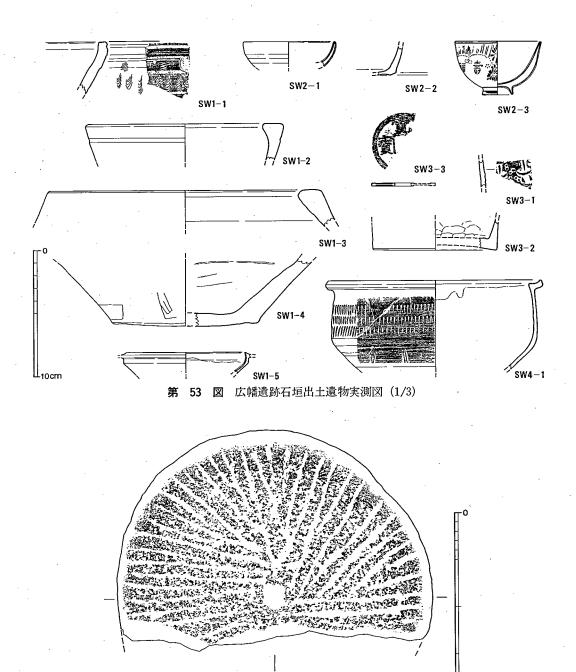
石垣の周辺より陶磁器片が出土したのと、石臼1個が石垣の石として使われていた。

出土遺物(図版65、第53図SW2-1~3、第54図SW2-4)

1は白磁で猪口にしてはやや大きいが、小碗とするには浅い。口径 7.2cm。少し灰色がかった白色を呈す。 2は陶器の壺底部片で残存部は露胎のままである。 3は染付の小碗で、外面は乳白色地の上に施文する。口縁下と高台部分のみ手描きであるが他はスタンプによるもののようだ。「福壽」の文字と菊花文・線文が入る。

4は石臼の半欠品であり、下臼に使われたものである。径33.9cmで、周縁厚5.5 cm、最大厚は7.8cmを測る。中央に一辺2.2cmの一見方形に見える軸受孔があるが、実際は丸い孔である。この孔を中心に径9cm程が周辺より少し高く残っているのは、この臼が使い込まれてすり減った結果とみることができる。上面の碾面に現状で35本の溝がほられているが、何度も彫りなおした結果としての現状であろう。当初は6~7分割による割付けがなされていたものと思われるが今ではその原形を知る由もない。裏面は孔の周囲がアリ地獄状に傾斜をもち、それ以外の部分は平滑である。多孔室の凝灰質玄武岩であろう。





第 54 図 広幡遺跡 2 号石垣出土石臼実測図 (1/4)

3号石垣 〈SW3〉 (図版48. 付図4)

2号石垣とほぼ並行した暗渠が南西端で果つる所、その出口に直交して存する石垣である。 暗渠と同時に築かれたものであることは間違いない。暗渠開口部と直交するように長さ約5 m が残存していた。5~6段の野面積みで、控えには小さめの石を多く使用している。この周辺 からも土器・陶磁器片が出土している。

出土遺物 (図版65、第53·73図SW3-1~4)

1は瓦質土器の破片だが、どのような器形のどの部分になるのかわからない。外面はレリーフ状に弧線や珠文があしらわれる。きわめて薄手のつくりである。2は硬い土師質の小鉢で、復原底径10cm。内底面には指押えの痕跡が明瞭である。外面には丹塗りの痕跡をみる。

3 は寛永通宝の破片で約½を欠失する。寛と寶の字が残るがともに手擦れの痕を認める。裏面に文字はない。1625年以降の鋳造にかかるものである。石垣の近くで採集した。

第73図SW3-4は鉄鏃の茎かと思われる破片で、現存長5.3 cm。

暗渠 (図版49. 第52図)

3号石垣と同時につくられたもので、ごく僅かに蛇行気味に北東から南西へ $S-58^\circ-W$ の方向へ約18.5mが走る。幅約40cmの掘り形内に、選んできたやや扁平な石を横位置に置き並べて幅 $10\sim17$ cmの石組水路をつくり、これの上に掘り形のラインまでも隠れる程の大きさの石を蓋石として被せたものである。蓋石の間には小石をつめて空隙をなくすように努めている。

暗渠内の高さは $10\sim15$ cmで,箱形の断面となる。底面レベルは北東端の取付き部分で25.75m,南西端の3号石垣の所の開口部分で25.20mであって,18.5mの間に55cm低くなっているので約2°前後の傾斜ということになる。

この暗渠を必要とした建物が存するはずであるが、現状ではその両側いずれにも見出していない。出土遺物はない。

4号石垣 (SW4)

石垣については前述のとおり調査前に除去していたのでここでは触れない。この周辺から陶 器片が出土していたのでそれについて述べる。

第53図SW4-1は陶器の鉢形になるもので、胴部上半は鉄釉の上に飛びカンナが施される。 受口になっているので蓋付となる。小石原焼であろうか。

1 号溝 〈SD1〉(付図4)

2号石垣の真下にあり、それよりは古く位置づけられる。石垣をこえて東北の方へは延びてゆかないが、西南方向へはずっと続いてゆく。確認した長さは約20m。溝の幅は25~40cm、深さが20cm前後を測り、溝底レベルは西南方向へだんだん低くなっていく。須恵器や瓦器・陶磁

器等が出土している。

出土遺物 (図版59, 第55図SD1-1~6)

1は須恵器の杯身で½程が残存し、復原口径10cm。口縁の立上りは低い。混入品であろう。 2は須恵器甕の胴部片であるが、古墳時代のものではない。外面は擬格子の平行タタキ、内面 はなでを施す。3は青磁碗で、灰青色の胎の上に濃緑黄色釉をかけている。内底面は貫入が多 い。畳付から高台内の一部に釉のかからない所がある。高台径5.6 cm。龍泉窯系のものだろう。 4は無釉の陶器摺鉢である。砂粒を多く含み胎土は粗い。赤茶色を呈する。復原口径24.6cm。 高取系か。5も陶器摺鉢片で、胎土は紫灰色の良質なものを使用している。器表面は内外とも に黄灰色。内面の櫛目は密である。6は染付の皿である。白い磁胎の見込中央と体部とにコバ ルトで絵付けされ、その上にやや青みがかった透明釉をかける。見込の高台直上部分と畳付の 所は釉をかき取っており、重ね焼きしたことがわかる。高台径7.8 cm。

2号溝 くSD2>(付図4)

2号石垣の延長線上あたりにあり、ここから東南方向へ3号・4号……10号・11号……と等間にて溝が並んでゆく。これらは近時の、おそらく畑の畝間の溝であろう。ただこの2号のみはその中央付近から瓦質土器や陶磁器・瓦の破片などがまとまって出土している。1号溝の延長線上にも近いことから、あるいはこの2号溝のみは古いのかもしれない。幅50~90cm、深さ10cm。

出土遺物 (図版57・59, 第55・73図SD2-1~7)

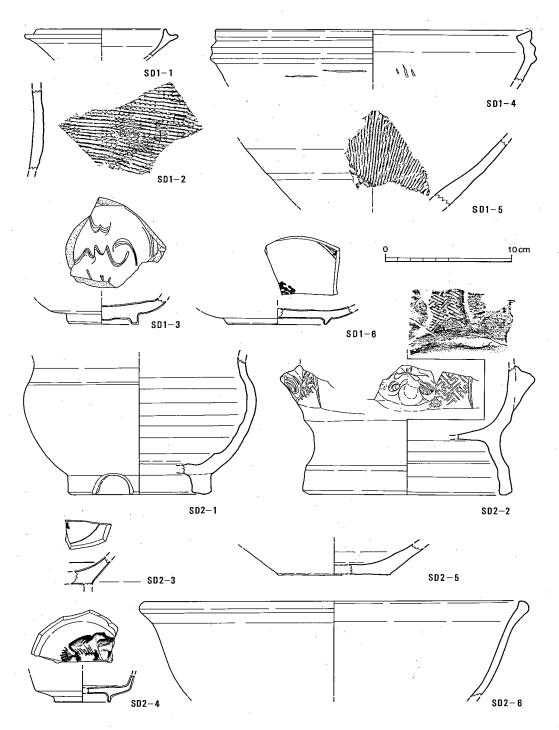
1は瓦質の壺形土器で、三方か四方に半円形の切込みを入れた高台が付く。肌色を呈し焼成は良い。復原で底径11.4cm、胴径18.2cm。2も瓦質で壺形になろう。高い脚台が付く。内外ともに黒く燻されている。胴部外面は卍印を主体とした斜行線文が浮彫式にあり、その上に獣面が逆向きに貼付されている。復原で底径16.4cm。3は染付の小片である。見込に巻線と文様の一部が見える。やや青みがかった釉調をなす。4も染付の碗で見込には岩山と松の木を描いている。畳付は露胎である。高台径4.4cm。優品としてよい。釉は少し青みを帯びる。明代のものであろう。5は瓦質の、おそらく捏鉢になるものであろう。外底部には糸切り痕がわかる。底径8.8cm。6も瓦質の鍋になる破片である。やや土師質に近い。復原口径31cm。

第73図SD2-7はくさびのような鉄片で、現存長 $4.2 \, \text{cm}_{\circ}$

3·4,10~14号溝(付図4)

3・4号は幅30~50cmで2号溝よりやや狭い。10~14号は幅50~65,深さ10~30cmを測る。

3 号溝からは瓦質土器片・陶磁器片・瓦片が出土し、4 号溝は黒色土器片・陶器片があった。 10~14号溝からは土師器・須恵器・陶器・磁器の小片とともに黒曜石片もあった。



第 55 図 広幡遺跡溝出土遺物実測図1 〈SD1・2〉(1/3)

出土遺物 (図版59, 第56図SD3-1·2, SD10-1)

3 号溝の1は薄手の陶器で鍋としてよいだろう。黄褐色の器胎で内面は薄い釉がかかり、外面は露胎で煤が付着している。復原口径23cm。同2は唐津系の陶器片で、黒褐色釉の上に外面は白灰色釉の模様がある。

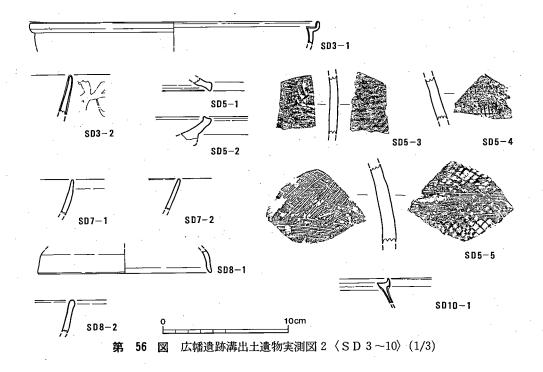
10号溝の1は器形的にはSD3-1とよく似るが、これは磁器に近い陶器である。蓋受け部と口唇直下は露胎のままである。釉はうす緑を帯びた白灰色を呈し、貫入が著しい。

5号溝 〈SD5〉(付図4)

2号住居跡と5~10号住居跡の中間で、途中を暗渠に切られながらほぼ東西に23mのびている。幅はほぼ一定していて約70cm、深さは15cm程である。遺物はわりと多く、土師器・須惠器・白磁の破片とスラッグ、黒曜石の石鏃が出土している。石鏃については後述する。この溝はもっと古く住居群と同じ頃のものかもしれない。

出土遺物 (第56図SD5-1~5)

1は須恵器蓋の口縁部片である。2は須恵器であるが、落し蓋の破片になるかと思われる。 内面は灰被りである。3は須恵器甕の破片で、内面は同心円当具痕の上をなでているが、その 同心円には弦状の直交線が入る。4は須恵質であるが常滑産大甕の破片であろう。5も須恵質 甕の破片で、これの内面は細かい刷毛目調整を行っている。



-87-

6号溝 〈SD6〉(付図4)

2号住居跡のすぐ南にあり、ほぼ東西方向に長さ8mを検出した。幅40~70cmと広狭あり、深さは5cm程しかない。土師器・須恵器・黒色土器片が出土しているが図示しえない。黒色土器は流入で本来は住居群と同様の時期の可能性もある。

7号溝 **くSD7** > (付図 4)

SG1と10号住居跡・8号溝を切って東西に走る細い溝である。幅25~30cm,深さ10~15cmで6 mの長さを検出した。土師器・須恵器・瓦器埦の破片とスラッグが出土している。

出土遺物 (第56図SD-1・2)

1・2ともに瓦器埦の小片であり、外面の口縁下約1.5 cmは黒色となる。1はその下 7 mm程が白いベルトとなり、下方は黒色である。ともに焼成があまくもろい。

8号溝 **くSD8** > (付図4)

SG1・10 号住居跡を切り、7 号溝に切られる。幅0.9 mで長さ4.6 m、深さ $5\sim10$ cm なので、溝というより浅い土壙とした方がよいかもしれない。土師器・須恵器・瓦器焼・青磁の破片とスラッグが出土しているが、これらは本来がSG1のものかもしれない。

出土遺物 (第56図SD8-1・2)

1は瓦器埦の破片で、口縁下1.4 cmまでの外面は黒色に変ずる。焼成あまい。2は須恵器坏蓋片で口径14cm。混入したものだろう。

9号溝〈SD9〉(付図4)

暗渠のところ、5号溝と交差するあたりからはじまって7・10号住居跡を切っている。長さ10mまでを確認した。幅は50~60cmで深さ20cm。土師器・須恵器・瓦器・青磁の破片とスラッグそして粘土塊が出土しているものの小片ばかりで図示しえない。

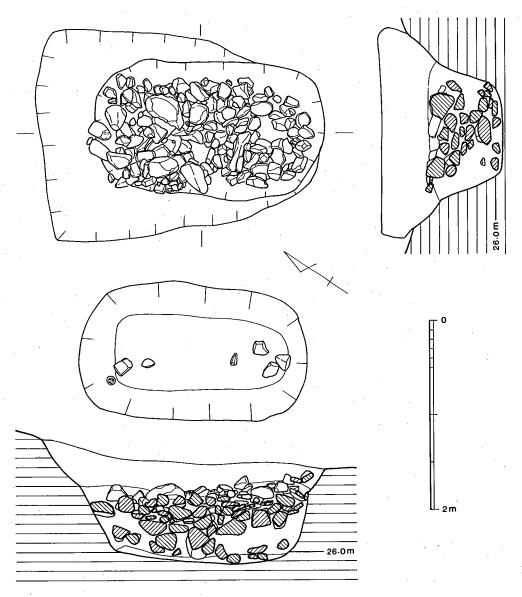
3. 土 塘

土壙としたものは3基がある。1号と3号は1・2号石垣間の平坦部に,2号は2号石垣の南側に位置する。

1号土壙 **くS K1 〉**(図版50, 第57図)

1号建物跡の位置する面、1号溝の西に位置する。平面プランは将棋の駒のような五角形に近い形状を呈するが、 $40\sim50$ cm下がった所で長楕円形プランの段があり、ここの所より以下に

多量の礫が入っていた。上面で295×190~225 cm, 中段は240×140 cm,底面は隅円長方形を呈し180×75 cmの規模となる。最深部で130 cmの深さがあり、底面より80 cm上までは礫が充満している。主軸はN-35°-W。底面より約15 cm上位にて、北西隅より二彩の三足小壺が倒立にて出土し、それ以外には埋土中に土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・白磁・瓦等の破片があった。



第 57 図 広幡遺跡 1 号土壙実測図 (1/40)

出土遺物 (図版58, 第58・59図)

1は小さく低い三足を有する小壺であるが、残存部での見かけは黄釉のみであって単彩と捉えられる。しかし内底面に1.5~2mmくらいの点となった緑色の釉が1ケ所、他の同大の黄釉7~8ケ所とともにこびり付いている。これを口縁から肩部付近に施釉したときの飛抹が落下したものと捉え、緑色と黄色に発色した二彩とする。なお、黄釉の下地に白色の化粧土を用いている。胎土はやや粗さも感ずるが良質としてよく灰黄色陶土を用いる。焼成はやや軟質。底部は径4.8 cmの平底をなし、3ケ所に小さな足を貼り付けるが、いま2本は欠損する。足の高さは5mm。外底面には基本的には施釉されないが、一部に黄釉が流下して付いている。器体は底部から内湾気味に立上り、底部より1 cmと3.5 cmの所に断面台形の突帯がある。これは削り出したものだろう。黄釉は底部を除いた外面全体にかかるが、薄くて貫入が多く入り、大半が剝落している。胴部最大径7.2 cm、現存高4 cm。二彩三足小壺と称しうるが、茶入れに使ったものであろうか。

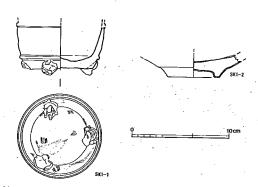
2は白磁の底部片である。きわめて良質の磁胎に乳白色の釉がかかるが、内底面は 1.5 cm幅で環状に釉がかき取られる。高台畳付には一部に砂が付着している。復原高台径 4.3 cm。

3 は土師器甕の破片で薄手のつくりをなす。器表面の磨滅が著しく調整の詳細を見極め難いが外面は刷毛目、内面はヘラ削りらしい。復原口径21.5cm。

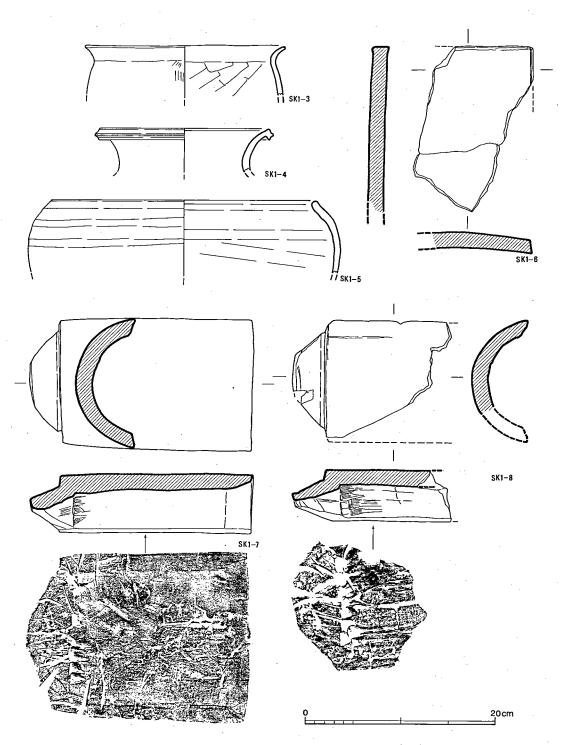
4は須恵器の甕である。黒灰色を呈する良好な焼成の土器で、復原口径18cm。

5は瓦質とするよりは須恵質とした方がよいという感じの土器である。無頸の壺になろう。 外面はなでに近いヘラミガキを行う。復原口径28.5cm、肩部径33.7cm。

 $6\sim8$ は瓦である。ともに胎土は白灰色ながら外面は黒褐色を呈する。 6 は平瓦(女瓦)で長さ17.2cm,幅10.8cmを残す。厚さは1.7 cm。上面はなで,下面は刷毛目のあとミガキが施される。 $7\cdot8$ は丸瓦(男瓦)で同形同大のつくりをなす。完形に復された7 でみると,胴長23 cm,玉縁長3 cm,幅14cm,厚さ $1.7\sim2.1$ cmを測り,総体に寸詰まりの感を受ける。内面には布目痕をみるが,玉縁と本体の接合部は植物質の原体を用いての刺突痕がある。



第 58 図 広幡遺跡 1 号土壙出土遺物実測図 1



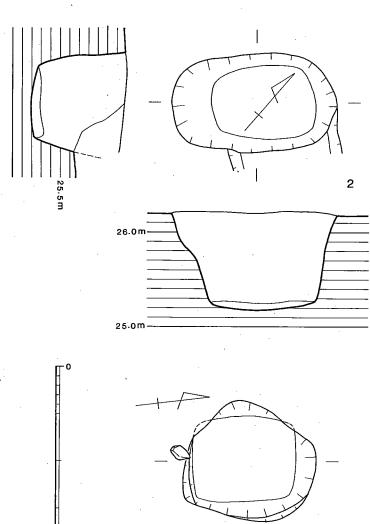
第 59 図 広幡遺跡1号土壙出土遺物実測図2 (1/4)

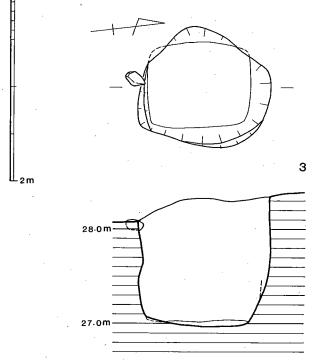
2号土壙〈SK2〉

(図版51,第60図) 2号石垣の南にあり、 主軸はN-49°-Eを示して石垣とほぼ同じ方の である。173×102cmの長 楕円形プランを呈し、深 さ100 cm。東壁を別の掘 込みに切られている。出 土遺物は全くなり、明 本 に である。に もといる。 は いっようにもとれるが 同形状のものが近在しない のものとしておく。

3号土壙 〈S K3〉

(第60図)





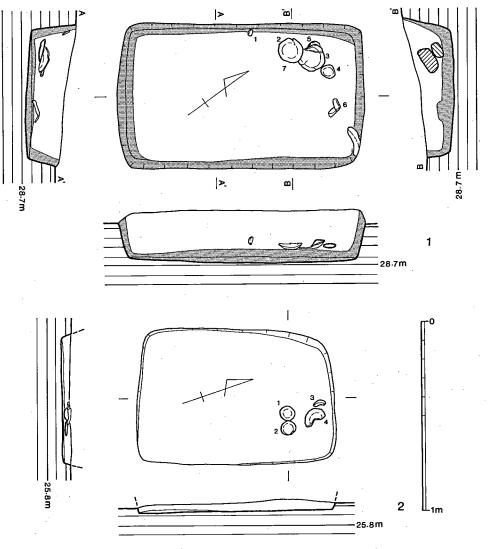
第 60 図 広幡遺跡 2・3 号土壙実測図 (1/40)

4. 墓

2基があった。ともに北東方向に主軸を持ち、両墓間は25mを距てる。

1号墓〈ST1〉 (図版51, 第61図)

1号住居跡のすぐ東に位置する。主軸を $N-35^\circ-E$ にとり、1号石垣とほぼ同じ方向を向く。長さ $130\,\mathrm{cm}$,幅 $75\,\mathrm{cm}$ の長方形プランをなし,深さは $27\,\mathrm{cm}$ が残る。四周壁と,床面から $3\,\mathrm{cm}$ 程間層があってその上 $4\sim5\,\mathrm{cm}$ には炭化材が囲繞しかつ敷かれていた。炭化材は丸太材が炭になっ



第 61 図 広幡遺跡1・2号墓実測図 (1/20)

たものであるが、これは棺材が焼けて炭化したものではなく、敷かれたものである。埋土は茶 褐色土であった。北東小口壁寄りに土師器小皿・坏・鉄器が副葬してあった。土師器の坏②・ ③と小皿④が南から並び、坏②の下に小皿⑦が3個、坏③の下に小皿⑤があった。坏①はやや 離れて、また鉄器も少し離れて出土している。

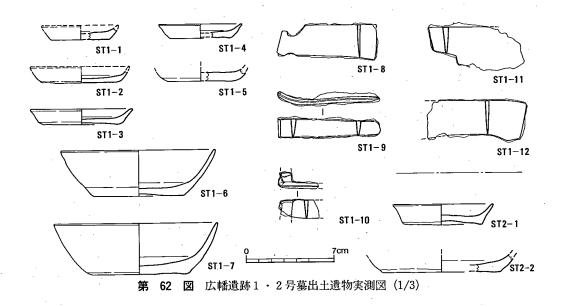
なお、炭化材の検出状況をみると、木棺を埋置していたと考えるのが妥当と思われる。また、 この炭化材についてはユズリハと同定されている。

出土遺物 (図版57·60, 第62図ST1-1~10)

1-5は小皿で、 $6\cdot7$ が坏、 $8\sim11$ は⑥の鉄器である。小皿と坏は磨滅が著しいものの底部は全て糸切り離し痕があり、 $6\cdot7$ についてはその上に板状圧痕がある。

1は①の小皿で%の破片である。復原で口径 6.2 cm, 底径 4.6 cm, 器高 1.2 cm。底部が分厚い。2は④にあたり口径 7.8 cm, 底径 6.2 cm, 器高 1.3 cmとなる。3 は⑤で口径 8 cm, 底径 6 cm, 器高 1.2 cm。少し上げ底となる。4・5 は⑦にあたり、4 の口径 6.6 cm, 底径 4.8 cm, 器高 1.1 cm。5 は丸みを帯びた器形を示し底径 5.3 cm。これの底部もかなり分厚い。6 は②にあたり口径12.2cm, 底径 7.2 cm, 器高 3.6 cm。7 は③で口径13cm, 底径 8.2 cm, 器高 4 cmとなる。6・7 は体部がともに内湾気味に立上る。7 は底部が分厚く、その端部は高台を意識したかの如く少し高くなっている。

8~12は⑥の鉄器にあたる。この5点いずれをとっても原形・用途が何であるのかよくわからない。8・12は鎌のような刃部がある。9は完形であって長さ8cm。10は片方の端部をねじって折り曲げている。



2号墓〈ST2〉 (図版51, 第61図)

2 号石垣と暗渠との間にあり、削平が著しくて遺存不良である。主軸をN-18°-Eにとり、長さ103cm、幅71cmの長方形プランをなす。深い所でも5cm程しか残っておらず、北側小口に近い所で土師器小皿3と坏1がかろうじて残っていた。このうち②と③については復原しえないほど遺存状態が悪く図示しえない。

これが木棺墓であったか否かは徴証となるものがなく不明である。

出土遺物 (第62図ST2-1·2)

1は①の土師器小皿でかなり上げ底となる。糸切り痕があるようだがはっきりとは見えない。 口径 7.7 cm,底径 6.2 cm,器高 1.6 cm。 2 は坏の底部片であり④にあたる。復原底径 9.3 cm。 底部から体部へは分厚い。

5. SG1 その他

5 号溝の南、のちに 5 ~ 8・10号住居跡としたあたりの上面は黒褐色土が拡がっていて容易にプランを把めなかった。掘り下げていく中で検出したプランに番号を付したが、この時 4 号住居跡としていたものは不整方形プランをなし、その中から炭化米やスラッグ、青磁、白磁等が出土した。しかし、この 4 号住居跡は柱穴もなくプランもしっかりしないということから、住居跡とするには無理が多いので、これを中世期の遺構 S G 1 として報告する。

そしてそれ以外の遺構に伴わない遺物も紹介しておく。

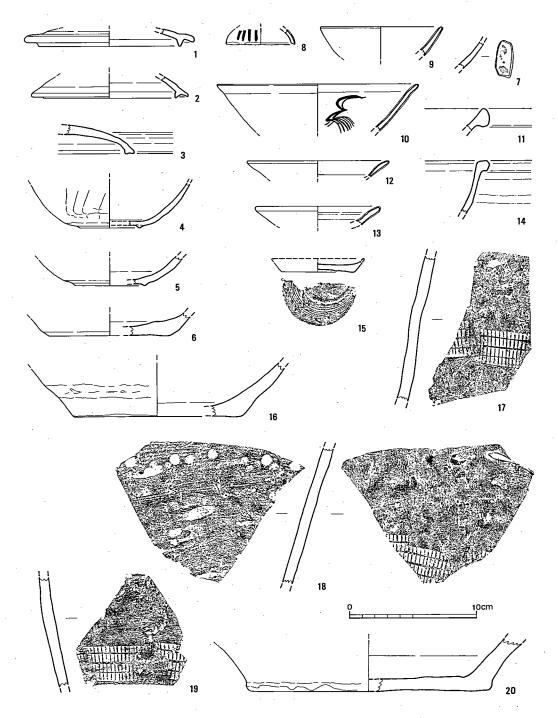
SG1 (Photo. 3, 第74図)

ほぼ10号住居跡の直上にのっており、東西方向に 5.5 m 、南北方向は南側が溝状に落ちてゆくのでそこまでの 3.5 m をプランとして捉えたが、これ以外の所からも中世期の遺物が出ているので、本来もっと広い範囲になるものと思われる。あるいは、明確な掘込みとしてではなくくぼみ状の所が包含層を形成していたのかもしれない。ここの北西一帯に多数のピットがあり、それらを建物としてまとまらないかどうか検討してみたものの適切なものは得られていない。

出土遺物は10号住居跡を中心とした付近の上面一帯から出土したもののうち、図化しうるものを示す。須恵器・土師器もあるが、黒色土器・緑釉陶器・瓦器・青磁・白磁・陶器・青白磁のほかに、鉄器・スラッグ・ふいご羽口片・粘土塊・炭化米・炭化種子そして黒曜石・サヌカイトの剝片や鏃などまで出土している。炭化米は全てジャポニカと思われる。石鏃については後述する。

出土遺物(図版57・59・60・64、第63・64・73・85図 S G 1 - 1 ~ 25)

1~3は須恵器の蓋である。復原口径は1が11.2cm。2が10.5cm。



第 63 図 広幡遺跡SG1出土土器実測図1 (1/3)

- 4 · 5 は内外とも黒色を呈する瓦器埦であるが、非常にもろい。高台径は 4 が 4.8 cm、 5 が 5.6 cm。
- 6・15は糸切り痕を持つ土師器で、6は板状圧痕もある。6の底径9.5 cm。15は復原口径7.3 cm、底径5.8 cm、器高1.1 cmできわめて浅い。

7 は緑釉陶器の小片である。土師質の胎の上に薄い緑釉が表裏ともにかかるが、大部分が剝落している。釉は淡い黄緑色をなす。

- 8は青白磁の蓋である。小片からの復原だが、口径 5.4 cm。内面は露胎である。
- $9 \sim 11$ は白磁で、9はいわゆる口禿げの皿になる。灰白色の釉がかかり貫入が多い。復原口径 $9.7~{\rm cm}$ 。10は白磁碗だが青磯と見まがうような緑黄灰色の釉調である。口径 $16 {\rm cm}$ 。11は玉縁を有するもので黄灰色の色調を呈する。
 - 12・13は青磁の皿でともに同安窯系のものと思われる。
 - 14は黄釉陶器の破片であり、鉄彩を施す盤になるものと思われる。

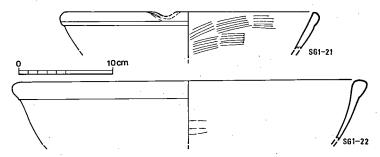
16は瓦質の鉢の破片で底径13.6cm。

17~20は須恵質の様相を帯びた陶器片である。いずれも大甕の破片だが、17~19の外面には 長格子目のタタキがあり、これが常滑産陶器の破片であることを教えてくれる。内面は茶灰色、 外面は茶色を呈するが、20の内底面には緑黄色の釉がかかっている。これと同色の釉が肩部に かかっていたであろう。20の底径19.1cm。

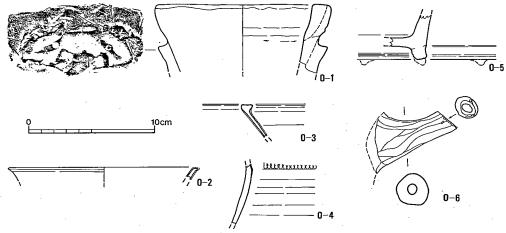
21・22は瓦質の土器片で、21は片口が付く。内面が横方向の刷毛目を施しており捏鉢としたものだろう。22はやや深めとなるが、鍋になるか否かは不明。復原口径は21が26.6cmで、22は38.2cm。

第73図24・25は鉄器の破片で、24は三叉の鏃かと思うが、あるいは三本の銛をまとめたヤスかもしれない。銹化がひどく逆刺の有無もよくわからない。25は24と同一個体とはならないようだが、これも鏃でなくヤスの茎部分と考えることも可能である。

第85図2は滑石製紡錘車。上・下面はわずかではあるが凹む。周縁は面取り後に磨かれている。復原径4.5 cm. 厚さ1.3 cm。



第 64 図 広幡遺跡SG1出土土器実測図2(1/4)



第 65 図 広幡遺跡出土遺物実測図 (1/3)

その他の遺物 (図版57・65, 第65図01~6)

1は瓦質に近い土師質の土器片であるが、これの外面は天狗のような顔面を表現している。 ハの字形に垂れ下がった眉の下にはやはり垂れた目があり、目の中央に直径 4 mmの瞳を竹管に て表わす。この目に一部被さるように鼻翼が押し潰されている。鼻全体が少し左目側に傾いて 貼付される。鼻より下方は欠損して不明である。天狗のような顔としたが、ひょっとこの如き 面がまえかもしれないし、ただ単に老翁をあらわしているのみかもしれない。ともかくユーモ ラスな表情の顔面である。1・2号石垣の中間から出土した。

- 2は黄灰緑色を呈する白磁碗の口縁部片である。SG1の北側から出土した。
- 3・4は陶器片で同一個体の破片らしい。3の口唇部と4の内面,外面屈折部以下は施釉されない。ともに黄緑灰色を呈する釉である。5 号溝東半部の南側より出土。
 - 5は瓦質の火鉢の破片であろう。5号溝西端部付近の攪乱部より出土。
 - 6は瓦質土器の注口部で、外面はいぶしたような黒色を呈する。表採資料。

6. 小 結

これまで述べてきた各遺構は全てが同じ時期に営まれたものではない。時期比定の難しいも のもあるがわかるものについて示しておく。

建物跡は1号の柱穴より陶器片が出土しているが、これはいくら遡っても江戸前期であろう。 4号については不明である。

石垣は1・2・4号ともにほぼ同様の方向に築かれ、また3号はそれらと直交する方向であるから同じような時期に4基ともに築かれたとみることも可能である。しかし時期を押えうる

のは1号石垣掘り形内出土の常滑陶器片と2号石垣の石臼くらいのものであって、これらにしても築造の上限を知りうるにすぎない。1号石垣の常滑陶器は時期決定の判断に苦しむところであるが、16世紀代と捉えておきたい。2号石垣は1号溝より新しいことから上限を16世紀後半と考える。

溝は1号が16世紀後半、 $2\sim4$, $10\sim14$ 号は明治以降、 $5\sim9$ 号は $14\sim16$ 世紀の間と思われるが、2号については一括して出土した遺物が遡れば16世紀代において大過ないものと考えられる。

土壙においては、1号出土の二彩小壺について寡聞にしてその類例を知らない。これが国産なのか輸入品であるのかも、現時点では判断を留保せざるを得ない。1号土壙の上層より出土した瓦については、他遺跡出土例を参考にしても16世紀後半~17世紀前半のものと考えてよさそうである。よって、1号土壙の年代を今のところ16世紀後半代と捉えておく。2・3号については不明とするほかない。

1・2号墓はその出土土師器の位置づけが問題となるが、確言しにくいけれども現時点では13世紀後半代と捉えておきたい。

SG1には $12\sim14$ 世紀代に位置づけうる輸入陶磁器があり、この頃にはその近辺に建物があったということの証左になる。ここで、広幡八幡宮が12世紀末には存在していたという記録が想いおこされる。

B. 古墳時代~平安時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

9軒を調査したが、1軒を除いて調査南端に近い所に集中し、5~10号の6軒は重複している。3号住居跡・3号建物跡の東側が崖線でなくなっているということは、この住居・建物の営まれていた時分には台地がもっと東までのびていたことを証するものといえる。

1号住居跡 (図版52, 第66図)

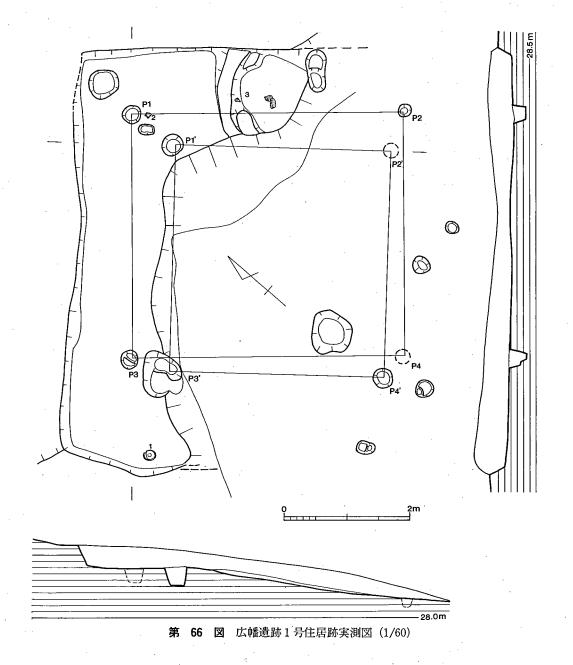
1号石垣の西にあり、東南部分は削平されている。カマドを北東壁中央に造りつける方形プランとなろう。カマド中心を通る主軸の方位は $N-49^\circ-E$ をとる。残存する北西壁は長さ6.3mを測る。主柱穴配置は二通りが考えられるものの、 $P1\sim P4$ の配置ではP4が、 $P1'\sim P4'$ とするとP2'が各々検出できていない。 $P1'\sim P4'$ を主柱穴配置とすると復原で43.3m

の面積を有していたことになる。

カマドは左袖のみ残存し、右袖は削平されていた。

出土遺物 (図版61, 第71・72図1~5)

床面・カマド内・埋土中から土師器・須恵器・石鏃等が出土している。打製石鏃については



別の項で述べる。1~3は須恵器、4・5は土師器である。

1はほぼ完形の蓋で口径15.3cm, 器高3.8cm。宝珠形のつまみが付く。口縁の身受け部分は高い。この内面に身とセットで焼成した痕跡が色調の違いとして存する。住居内の①にあたる。2は高坏脚部で裾部径8cm。内外ともに灰被りとなる。3は埦で口径10.2cm, 器高5cm。胴部中位に浅い沈線が入る。

4 · 5 は甕の破片で、4 が②、5 がカマド内の③にあたる。復原にて口径が4 は33cm、5 は22.5cm。

2号住居跡 (図版53, 第69図)

 $5 \cdot 6$ 号住居跡の北にあって, $2 \cdot 3$ 号建物に切られている。東西長 $3.8 \sim 4.0 \, \mathrm{m}$,南北長 $4.3 \sim 4.7 \, \mathrm{m}$ とやや台形気味のプランとなり,主柱穴配置図もそれに倣っている。カマドは西壁のやや北寄りにあり,主軸線はカマド左袖の内側を通る。東壁と北壁の一部に細い周壁溝がある。床面の $4 \cdot \mathrm{r}$ 所に直径 $30 \, \mathrm{cm}$ 程の焼土・炭の広がりがあった。面積 $18 \, \mathrm{m}$ 。主軸 $N - 65 \, \mathrm{cm}$ 一W。

出土遺物(図版61·65,第67·71·72図2-1~8,第85図)

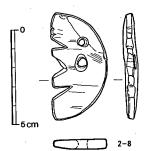
残存度がよくないわりには遺物がよく残っていた。カマドの周辺から多く出土している。土器以外では黒曜石の剝片・鏃に加えて紡錘車と子持勾玉がある。1・2・4・7は須恵器,3・5・6は土師器で,2・5~7は床面から出土している。

1は坏身で復原口径14.5cm。2は高坏の脚部で裾部径9cm。焼成があまい。4は壺になろう。 丸底の底部は接合痕を伺うことができるが、ここに高台を付そうとしたのかもしれない。胴径 17.6cm。7は生焼け状態の甑で、カマド内外から出土している。図上での復原になるが、口径 28cm、底径14.2cm、器高30cm。把手の有無はわからない。

 $3 \cdot 5 \cdot 6$ ともに甕である。 3 は復原口径17cm。 5 は薄手で長胴気味になる。器表面はわりと凹凸があり,また二次火熱により黒変した所がある。口径22.8cm。 6 はなで肩で,胴部はやはり二次火熱で変色する。復原口径21.4cm。

第67図2-8は滑石製の子持勾玉である。半月形の背をもち、腹部に切り込みを3ヶ所入れて2つの突起を造り出して子としている。背には子を持たない。表面は擦過痕がみえる。穿孔は中央付近と頭部近くの2ヶ所にあり、両面から穿たれている。全長55.75mm、最大幅28.75mm、厚さ6.35mm。蛇紋岩とした方がよいような滑石であり、濃緑黄色を呈する。きわめて薄いつくりであることが特徴的である。

第85図1は, 径 4.7 cmに復原できる緑簾片岩製紡錘車。孔径0.7 cm. 厚 0.9 cm。住居内P-74出土。



第67図 広幡遺跡 2 号住居跡出土 子持勾玉実測図 (1/2)

3号住居跡(図版52, 第69図)

2号住居跡の北東にあり、半分近くが崖線で消滅している。また、3号建物跡にも切られている。いま北西辺が $2.8\,\mathrm{m}$ 、南西辺が $3\,\mathrm{m}$ を残すのみである。北東部分は床面はなくなっているが主柱穴とみなされるピットは残っており、これをもとに復原すれば2号住居跡と同様の方向をとり、規模的にもあまりかわらぬものとなろう。カマドは北西辺中央に存したと思われ、焼土と土器が遺存していた。主軸方位は $N-47^\circ-W$ くらいになろう。

出土遺物 (図版61、第71図3-1)

残存度に応じてきわめて少ない。カマドが存した所に土師器の甑があり、内外に刷毛目を有する円筒形を呈するものであるが図示しえない。他に黒曜石剝片とスラッグが1点ある。

1は須恵器の高坏の坏部であろう。復原口径11cm。このように内湾する口縁部の高坏はあまり類例がない。

5号住居跡 (図版54, 第74図)

2号住居跡の西南部,住居群が密集した中にある。SG1に切られ,6・10号住居跡を切っている。7号住居跡との関係はわからない。北辺の約4mと東西辺の一部のみが知られ,方形プランになることはわかるが,それ以上については不明である。主柱穴もよくわからない。カマドの痕跡も不明であった。

出土遺物 (第68・71図5-1~3)

残存状況が悪い分,遺物も少ない。青磁片・スラッグ・ふいご羽口片などもあったが,これらはSG1からの混入とした方がよいだろう。土錘も3点ある。

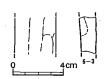
1は須恵器の甕か壺の口縁部片である。口縁下2条の突帯が特徴的で、胎土がよい。2は土師器の甕の破片で、内面には粗い刷毛目が入る。

第68図 5-3 は羽口の破片で、外径 6.4 cm。外面は強い熱を受けている。

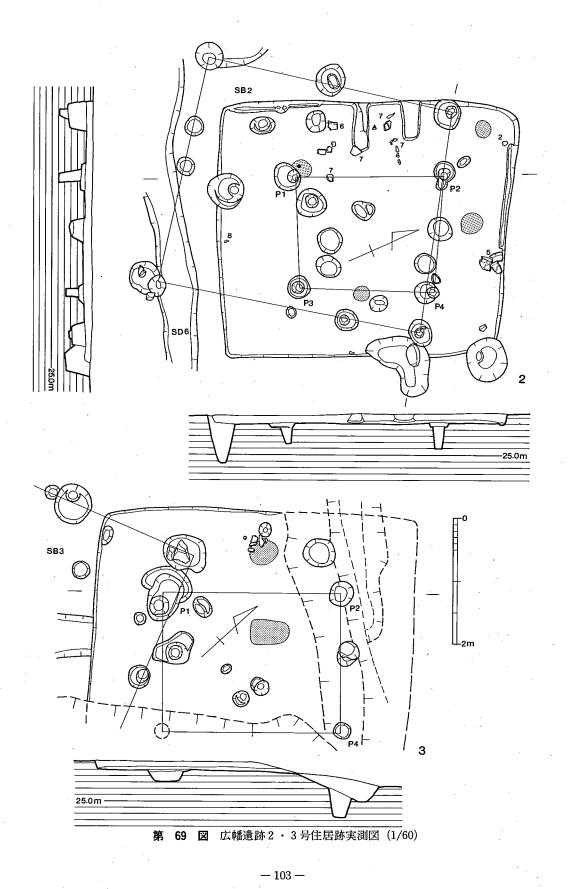
第85図 $3 \sim 5$ は、いずれも住居跡の覆土中より出土した管状土錘。小型品の 3 とやや大きい $4 \cdot 5$ に分けられる。 3 は径 0.9 cmと細身で内径は 3 mm。灰色を呈す。 4 は完形品で長4.7 cm,最大径 1.55 cm,内径 5 mm,重 9 g。化粧土を塗布し,暗赤褐色を呈す。 5 は破損品で残長 3.8 cm,最大径 1.6 cm。灰白色を呈す。

6号住居跡(図版54,第74図)

5・10号住居跡に切られる。北東辺の4.7 m とそれに取付く辺の一部があるのみで、詳細はわからない。カマドについてもわからなかった。この住居跡はその北西コーナー部分で2軒の重複を捉えていたが、これは6Aから6Bへの増築として考える。



第68図 広幡遺跡 5 号住居跡出土 羽口実測図(1/3)



出土遺物 (第71図)

これもあまり多くない。 $1 \sim 3$ は須恵器,4 は土師器である。 1 のみ 6 A から出土した。 1 は蓋とする。復原口径10cm。 2 は身とすべきか。口径8.7 cm。 3 は蓋としておくがよくわからない。最大径8 cm。

4 は口頸部のすぼまる器形で、口径12.8cm。

7号住居跡(図版54, 第70図)

10号住居跡の西にあり、9号住居跡を切っている。北西壁と北東壁のみが残存しているが、主柱穴P1~P4の配置によって一辺4.7~5mの方形プランであろうことが知られる。北東壁中央付近に焼土があるので、ここがカマドであろう。このカマド部分を通る主軸はN-45°-Wとなる。なお、北東壁の近く、P2とP4の中間あたりにも焼土の広がりが存した。

出土遺物(図版61, 第71·72図7-1~6)

土師器・須恵器のうち図示しうるのは須恵器のみである。埋土中に糸切り底の小皿があったが、SG1からの混入であろう。

1は坏蓋で口径12cm。2・3は坏身で、3は完形である。3の外底部は回転台から切り離したままで調整を行っていない。また口唇部は僅かに面をとり、そこに打欠きを施した部分がある。2の口径11cm、3は10.5cm。4は坩蓋になろう。口径9cm。この土器は8号住居跡埋土中出土の破片と接合した。破片としてはこちらが大きい。5は坏身で口唇は3と同様の手法をみる。底体部に焼き膨れがある。蓋をして焼成したことのわかる資料である。口径10cm。6は甕の口縁で大きくなると思われるが器壁は薄い。口径32.8cm。

8号住居跡 (図版54. 第74図)

10号住居跡に切られて、その北東辺の一部が 2.2 m だけ残っているにすぎない。

出土遺物 (第71図)

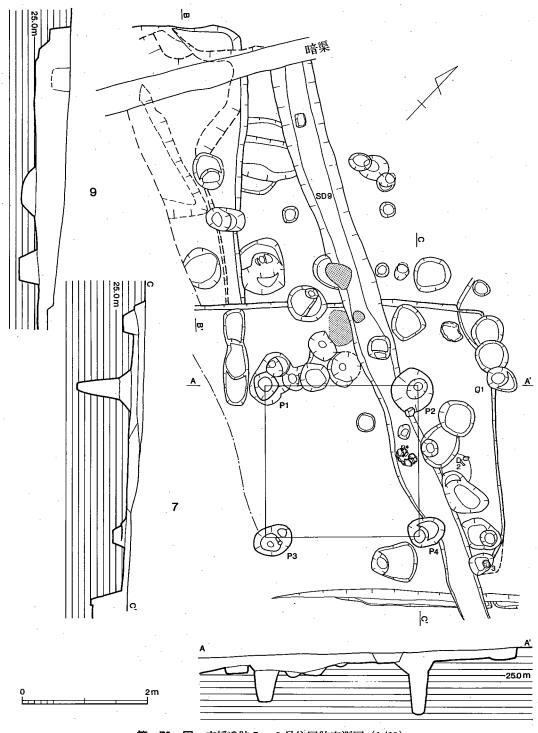
1は須恵器の甕胴部片で、内面の当具痕は同心円の孤線に直交する線が表出される。外面は 平行タタキの上にカキ目を施している。2は小さな土師器の甕で、復原口径13.3cm。

9号住居跡(図版55, 第70図)

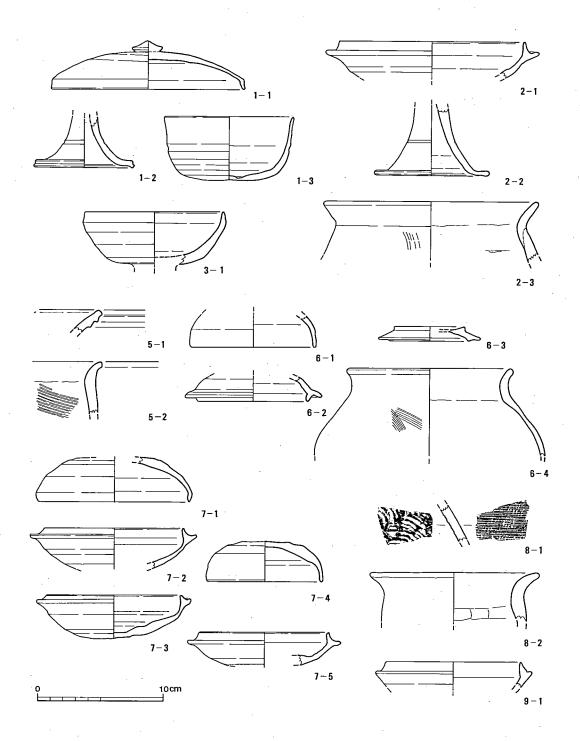
7号住居跡に切られつつ西にあり、さらに暗渠にも切られて北東壁4.4 m, 北西壁1.7 m を 残すのみである。検出した範囲にはカマドはない。床面下には更に掘込みがあり、その北側部 分から縄文土器片が、また埋土中から打製石鏃が出土している。これは後述する。

出土遺物 (第71図)

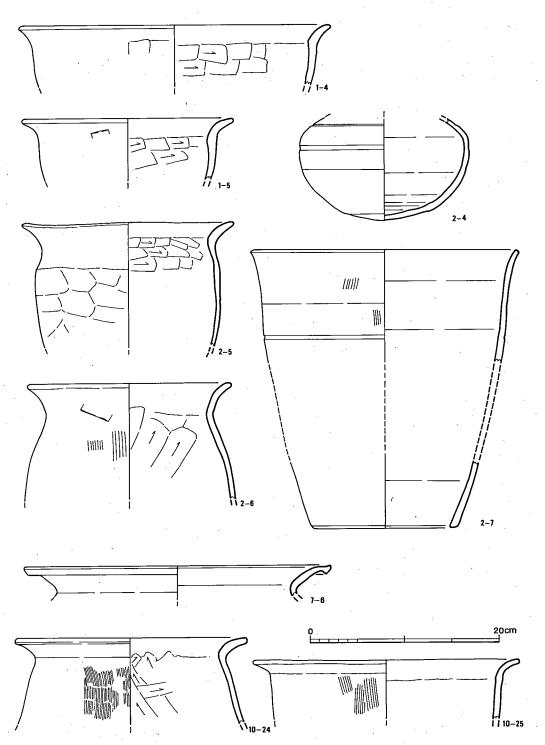
1は埋土中出土の須恵器坏身で、復原口径10.5cm。



第 70 図 広幡遺跡 7・9 号住居跡実測図 (1/60)



第 71 図 広幡遺跡住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第 72 図 広幡遺跡住居跡出土土器実測図2 (1/4)

10号住居跡 (図版54, 第74図)

SG1と5号住居跡,そして7~9号溝に切られ,6・8号住居跡を切っている。西側が溝状に大きく落込むことで削平されるが,全体の規模は察せられる。完全に残る北東壁は長さ $6.1\,\mathrm{m}$ で,その中央付近に焼土があったので,ここにカマドが存したのであろう。北西壁は $5.4\,\mathrm{m}$ まで存するが,おそらく $6.3\,\mathrm{m}$ くらいまであったものと思われる。主柱穴 $P1\sim P4$ はP4が遺存しないもののかなりの長方形配置になるようだ。北西・北東辺には周壁溝がある。カマドは焼土のみで全くわからない。このカマドの所を通る主軸は $N-46^\circ-\mathrm{E}$ をさす。

出土遺物 (図版61・62、第72・75・76図)

ここの住居群の中では最も多かった。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器そして鉄器・土錘・スラッグ・黒曜石などがあるが、SG1よりの混入と思われる瓦器が床面直上からも出土しているのは、SG1が部分的に深くなっている所があるのだろう。ここでは平安期以降の土器は除外している。なお、土師器の蛸壺が口縁のみを数えても102個分が出土している。同一個体があるとして半分でも51個であり、かなりの数にのぼっている。 $1\sim18$ は須恵器、 $19\sim25$ は土師器、 $26\sim35$ が蛸壺である。石鏃については後述する。

 $1\sim6$ は蓋である。 $1\sim3$ が床直上および下層, $4\sim6$ は埋土中からの出土であるが,4 が最も古く,2 が最も新しく位置づけうる型式である。 $3\sim6$ あたりは混入であろうか。1 の口径16.2cm。 $7\sim9$ は坏でこれらは蓋 $3\sim6$ に組み合うものである。7 は白灰色を呈する良質の土器で金属的な感じを強く受ける。口径14cm。 $10\sim16$ は高坏で, $14\sim16$ の裾端部は蓋の口縁と形状がよく似ている。10の口径11.4cm,15の裾部径11cm。17は平瓶の口頸部であろう。18の甕は粗々しい当具痕をもつ内面にスラッグが付着したままである。

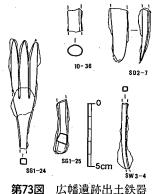
19は高坏の柱状部で精製土器である。20~25は甕もしくは甑の破片であり、24が復原で口径25.2cm、25は28.5cm。

26~35の蛸壺は、図示しえなかったものも含めて、ほぼ同様に円錐体状の形状をなす。口径は内径で4.7~6.0 cm、深さ5~6 cmであって、口縁下1~1.5 cmに直径0.74~1.12cmの紐通し用の穿孔がある。また底部にも

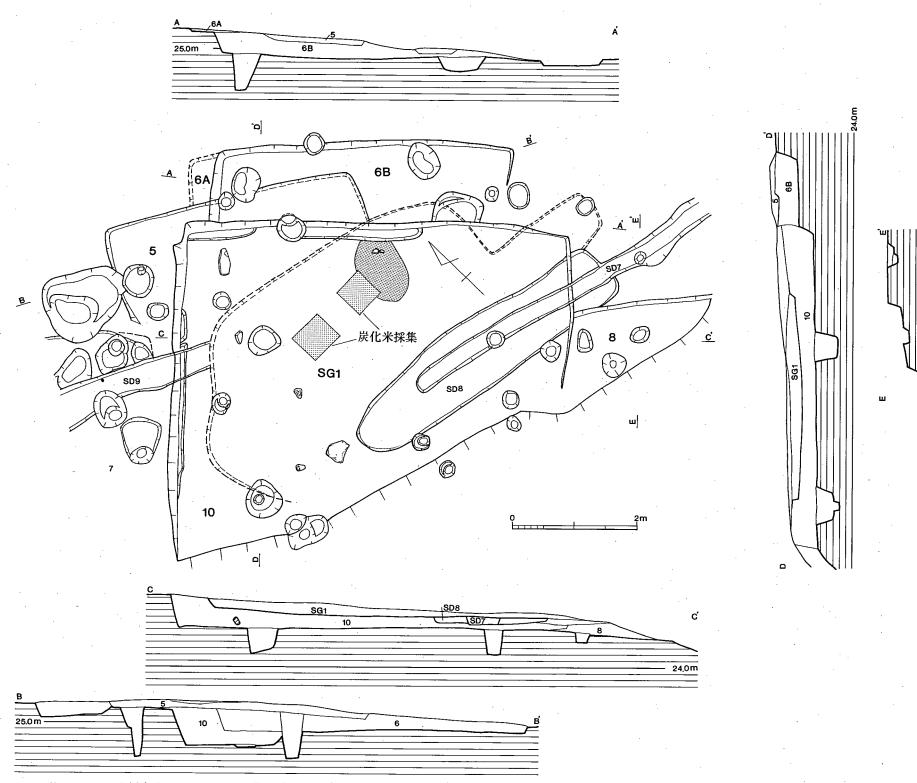
中心より少しずらして直径1cm内外の孔を持つ。内外面ともに 指頭でのなでの痕跡が著しい。

第73図10-36は床直上出土の鉄器片だが、これが何の一部であるのかわからない。

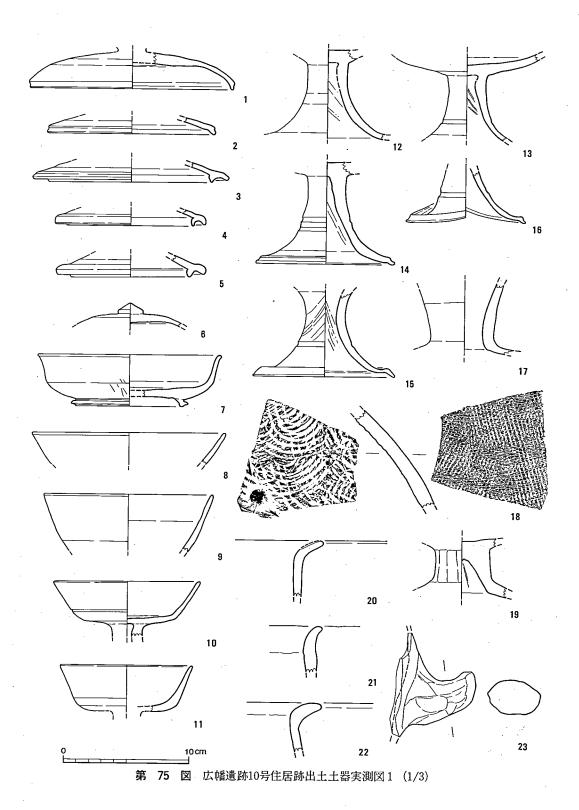
第85図6は管状土錘の完形品。整形時の指圧痕が著しい。中央部の断面は卵形に近い。色調は暗灰色を呈す。長さ4.7 cm,径1.6 cm,孔径0.6 cm,重さ9.95 g。



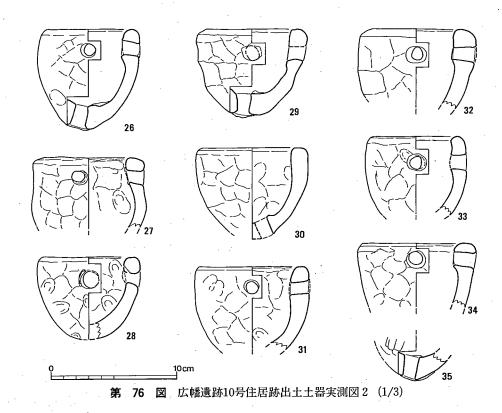
第73図 広幡遺跡出土鉄器 実測図 (1/3)



第 74 図 広幡遺跡 5 ・6 ・8・10号住居跡実測図 (1/60)



- 109 -



2. 掘立柱建物跡

2棟をとりあげるが、7号住居跡の北あたりにまだ存するであろう。

2号建物跡 〈SB2〉 (図版53, 第77図)

2 号住居跡と重複しており、それよりは新しい。 2×2 間の総柱で東西長 $355 \sim 375\,\mathrm{cm}$ 、南北長 $395 \sim 420\,\mathrm{cm}$ となり、主軸は $N-36^\circ-E$ にとる。東側の柱穴 $P2 \cdot P3$ はやや外へ出張っていて正方形のプランにならない。

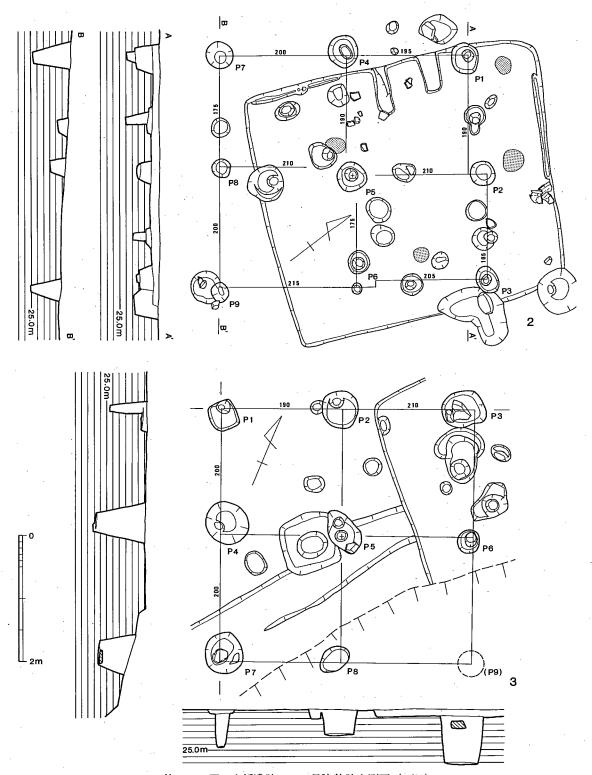
出土遺物 (第78図)

P3·P4·P7より土器が出土しているが図示しうるのは1点のみである。

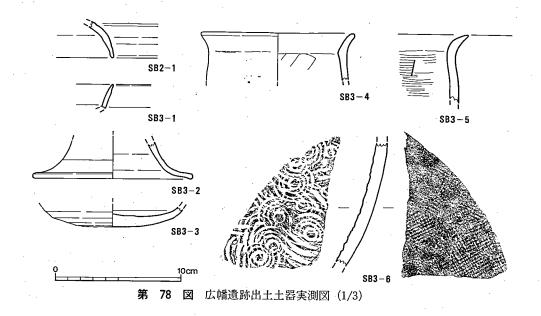
1は須恵器の蓋の破片である。P7より出土。

3号建物跡 〈SB3〉 (図版55, 第77図)

2号建物跡のすぐ東にあり、 $2 \cdot 3$ 号住居跡の上に営まれている。 2×2 間の総柱で4m四方の正方形プランとなる。主軸は $N-23^\circ-W$ としておこう。P9のみが削平でなくなっている。



第 77 図 広幡遺跡 2 · 3 号建物跡実測図 (1/60)



P3とP7に石が置かれていたが、P7のそれは柱穴底面にあるので根石としたものだろう。P3のものはかなり上位にあるから後で置かれたものと考えられる。

出土遺物 (第78図SB3-1~6)

P5を除く7個の柱穴から土器の小片が出土している。 $1 \sim 3$,6は須恵器,4・5は土師器である。

1 は高坏であろうか。 2 は高坏の脚部である。復原で裾径12.4cm。 3 は坏の身とする。 6 は甕胴部片で、内面の当具痕は粗々しい。 $1\sim3$ はP2、6 はP3より出土した。

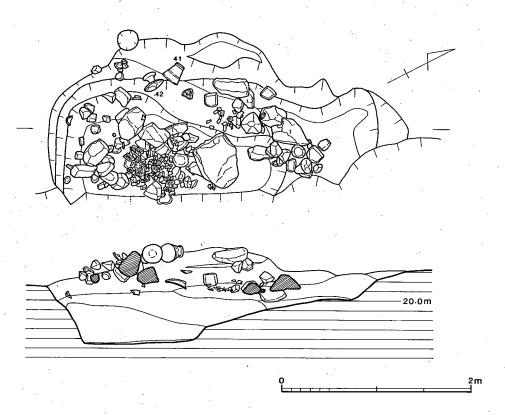
4 · 5 は甕の破片で、4 の口径12cm。4 がP1、5 はP4より出土。

3. 包含層 (SG2)

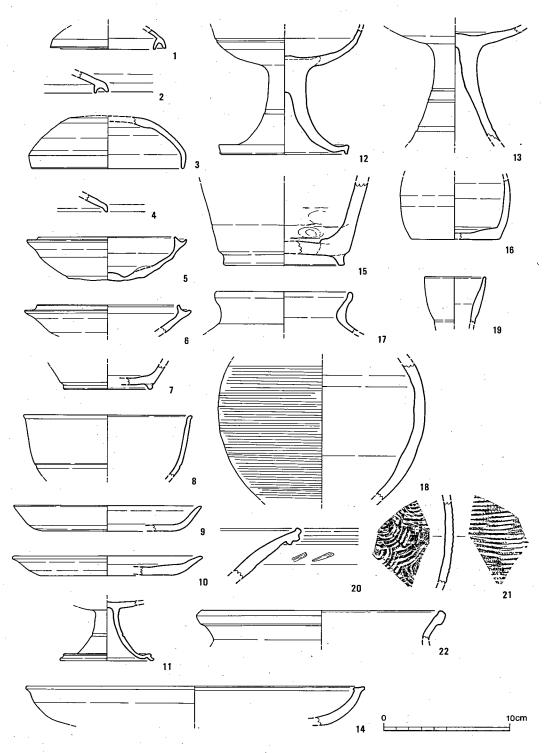
 $2\sim 10$ 号住居群の東方、A 面とした所に柱穴が20個弱と、遺物を多く含む包含層が存した。 柱穴は何らまとまるものではない。

包含層〈SG2〉は上面に砂質土が、下層に粘質土があり、それらは上方(西方)から流れこんできた堆積状況を示す(第79図)。この土層のトレンチを境に北半と南半に分けて遺物をとりあげたけれども双方に差異はない。ただ、スラッグ・羽口片などは北半部の方が多かった。また、北半部には一ヶ所に土壌状の落込みがあり、ここの上面に石や土器が集中して出土した(第79図)が、これも上方からの流入である。

9. 濃褐色粘質土 1. 灰褐色砂質土 10. 桃黄褐色粘質土 2. 灰橙色砂質土 11. 桃黄色粘土 3. 灰橙褐色弱粘質土 12. 灰黄褐色弱粘質土 4. 茶灰褐色粘質土 13. 茶黄褐色砂礫土 5. 茶褐色粘質土 6. 黒褐色砂質土 14. 灰褐色粘質土 15. 灰黄褐色粘質土 7. 黄灰褐色砂礫土 16. 黄灰色粘土と礫 8. 茶黄褐色粘質土 1+2 11+3 +8 -19.0 m 13 13+5 15 15+14 13+14 16 18.0 m



第 79 図 広幡遺跡包含層土層図・土器出土状態実測図 (1/40)

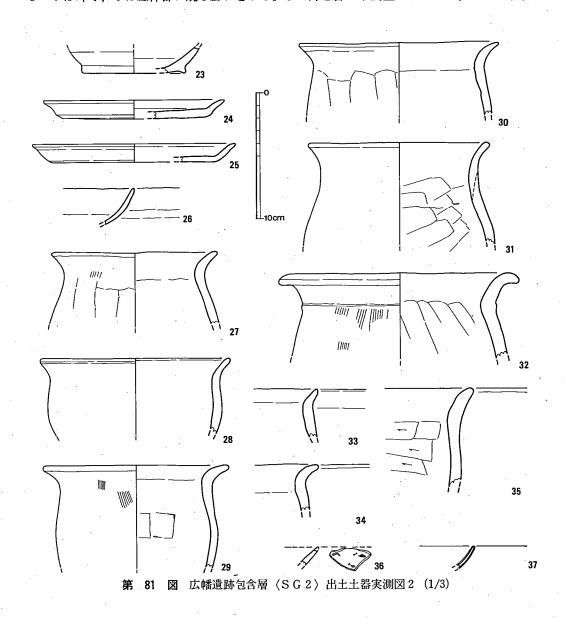


第 80 図 広幡遺跡包含層 〈SG2〉出土土器実測図1 (1/3)

出土遺物 (図版63~65, 第80~85図)

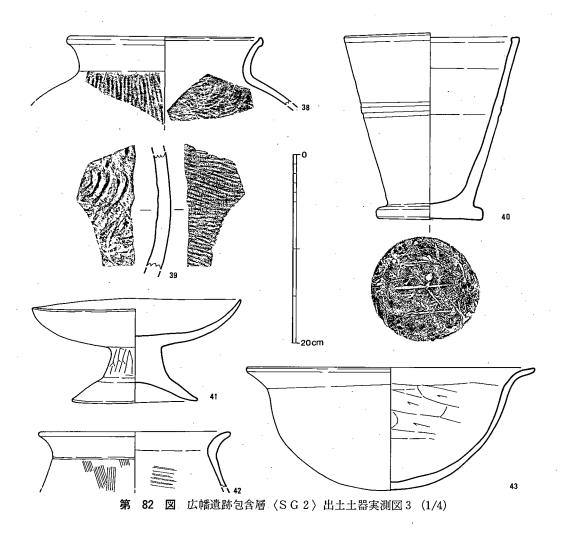
かなりの量が出土している。土師器・須恵器が大半を占めるが、スラッグ100点、羽口片35点、焼塩土器片12点は注意される遺物といえよう。他に染付磁器・白磁・陶器・瓦器・緑釉陶器・石斧・黒曜石の鏃・剝片・石核、サヌカイト剝片、弥生土器片、縄文土器片、土錘などが出土している。石鏃と縄文土器は後述する。

須恵器 $(1 \sim 22, 38 \sim 40)$ $1 \sim 4$ は蓋で、1 はかなり小さい。口径 7.5 cm。3 の口径 12 cm。 $5 \sim 7$ は坏で、5 は底体部に焼き膨れをみる。また外底部は未調整のままだが、そこに十字形



をしたへラ記号らしきものがあるもかなり浅い。口径10.8cm。 7 は高台から体部へはほとんど一直線である。 8 は境になろう。つくりがよくて金属的な感じを受ける。口径13.2cm。 9・10 は皿でともに焼成がややあまい。11~13は高坏脚部である。14は高坏の坏部になるのであろう。15~18は壺になろう。15の底部は円盤をはめこむようにして成形した痕がある。16は瓶形とすべきか。19は平瓶の口頸部であろうか。20~22・38・39は甕で,21の破片は内面の当具痕に弧線に直交した線が入っている。38は焼成不十分で白くなっている。39の破片も内面の当具痕に弧線に直交した線がみえる。40は捏鉢の完形品である。口径18.1~19cm,底径11.1cm,器高は19.5cm。外底面にはワラかと思える圧痕が付いている。

土師器 (23~35, 41~43) 23は高台の付く坏になる。24・25は皿で須恵器をまねたものとしてよい。26は埦になろうか。27~35は甕で,いくつかに分類しうる形態的特徴をもつ。41は高



— 116 **—**

坏で、口径22.4cmと大きい。脚部にも特徴がある。42は内面に粗い刷毛目を持つ甕である。43は洗面器のような鉢になり、口径31cm。

緑釉陶器 (36) このSG2からは 小片1点のみの出土である。土師質 の白灰色の器胎に淡黄緑色の釉がか かる。

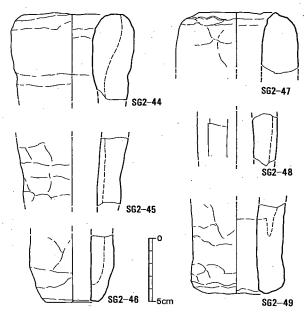
染付(37) 小さな碗になるであろう破片で、内面の口縁直下に幾何学文を、外面には草花文を呉須にて絵付している。地肌は少し黄色味を帯びた青に変色している。

ふいご羽口 (44~49) 100点のうち図示しうるのは少ない。炉本体に挿入されていた部分およびその近辺は高熱で青灰褐色に変色し、それ以外の部分は黄橙色を呈する。内径は2.5cmから4.4cm程である。46と48にはスサと籾殻とが粘土中に混ぜられている。

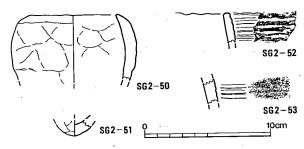
焼塩土器 (50~53) 4 点を図示し うる。50は内湾した器体のもので口

径 6.5 cm。51は尖底部分である。52・53は外面に沈線のように みえるタタキを施したものである。4点ともに布目は有しない。 また等しく強い二次火熱を受けている。

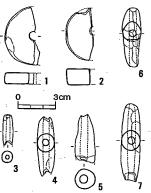
土錘(第85図7) 管状土錘の完形品である。整形時の指圧痕が若干観察される。色調は灰白色で軟質。長さ6.1cm,径1.5cm,孔径0.6cm,重さ13.25g。



第83図 広幡遺跡包含層 (SG2)出土羽口実測図 (1/3)



第84図 広幡遺跡包含層〈SG2〉出土焼塩土器実測図 (1/3)



第85図 広幡遺跡出土石器 ・土製品実測図(1/3)

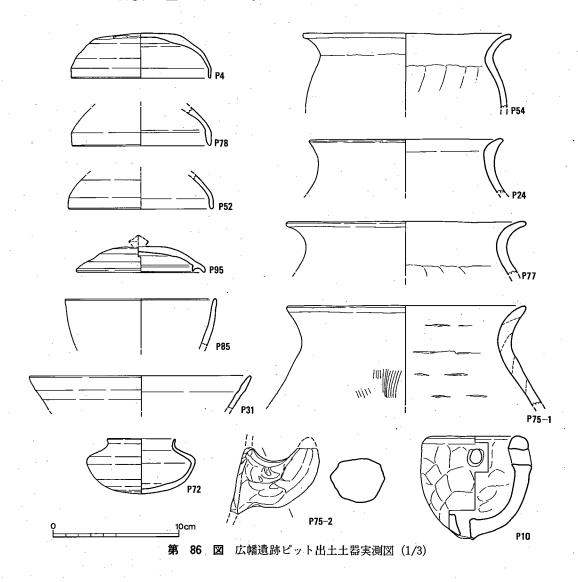
4. その他の遺構と遺物

上述してきた以外の遺構としてはピットがあるくらいで、特別なものはない。ピットは建物の一柱穴となっているのかもしれないが、現時点において把握しきれないので、遺物のみを掲示しておこう(図版63・64、第86図)。

P 4 1 号住居跡よりずっと北の斜面にあるピットで口径10.8cmの須恵器蓋が出土している。

P78 須恵器の蓋で、きわめて精良な胎土である。

P 52 これも須恵器の蓋で口径11.2cm。



- P95 撮みの付く須恵器の蓋である。口径10.2cm。
- P85 須恵器埦の破片である。
- P31 須恵器の大型の埦になろう。
- P72 須恵器小壺で口径 5.2 cm。
- P54 土師器甕で口径16.4cm。
- P24 きわめて特徴的な口頸部の土師器である。
- P77 口径14.8cmの土師器甕になる。
- P75 1は内面に粘土紐の接ぎ目がよくわかる。口径19cm。2は1に付くのかわからない。
- P10 1 号住居跡と1号墓の中間にあるピットで、土師器の蛸壺が出土している。口径6.5cm。 器高8.2cm。10号住居跡出土のものと同形態である。

5. 小 結

古墳時代以降,平安期までの遺構としては竪穴住居跡が9軒,掘立柱建物跡2棟,いくつかの柱穴であり、これ以外に包含層が存した。

竪穴住居跡は6世紀末から8世紀代にかけて営まれており、2号・9号が6世紀末頃、7号・8号が7世紀初、3号・6号が7世紀前半、1号・10号が7世紀末から8世紀代、最も新しい5号が8世紀後半~末の頃に比定されよう。7世紀前半代では一辺4m前後の規模でカマドを北西壁に造りつけていたのが $(2\cdot3号)$ 、7世紀も末になると一辺6mを越すほどに大きくなり、カマドも北東壁に造りつけている $(1\cdot10号)$ 。この変遷がどのような要因によるものか(多分に内的要因と思えるが)、現時点ではわからない。10号住居跡における蛸壺は注意されるところであろう。

掘立柱建物は 2 棟の検出にとどまったが、この 2 棟は $2 \cdot 3$ 号住居跡よりも新しいので、その南西に存する $6 \sim 9$ 号住居跡が機能していた頃に倉庫として使用されていたものだろう。

包含層(SG2)は竪穴住居群が営まれ始めた6世紀末から形成され, $7\sim8$ 世紀を中心として10世紀頃までの遺物が出土している。中世以降の項で説明したSG1から緑釉陶器片・瓦器片が出土し,このSG2からも同様の遺物が検出されているので,SG1の周辺に $9\sim10$ 世紀代の建物が存したことは間違いないとみてよかろう。

また、包含層中よりスラップ・ふいご羽口片が多数出土しているのは、遺構は検出されていないけれども、10号住居跡かその近辺で製鉄(大鍛冶)が行われていたことを示している。これは時期的には8世紀中頃前後のことと思われる。

C. 縄文時代ほかの遺物

縄文・弥生時代については、この広幡遺跡では明確な遺構を確認できたわけではないが、柱 穴や住居跡の埋土中などから土器片、石鏃が出土しているのでここで一括して説明する。

9 号住居跡の床面下から縄文土器片が出土していることなど、このあたりに縄文期の遺構も予想されたが確認できていない。

岩丸川をはさんで対峙する石町・山崎遺跡は縄文時代後期を主体とした集落であり、この広 幡遺跡で確認された土器もほぼ同じ頃のものである。現在の川を隔てただけの至近の位置にあ ることから、お互いが無関係であるとは考えられない。

1. 出土遺物

土器 (第87図)

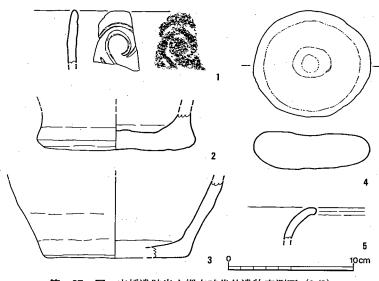
1・2は包含層(SG2)南半部の下層より出土したもので、1は縄文後期・北久根山式の口縁部片と思われる。遺存状態がよくないが、外面に渦巻状の沈線が入る。2は底部でやはり後期のものであろう。底径12.4cm。

3 はP76出土の縄文土器底部で、後期のものと考えられる。底径11cm。P76は2号住居跡の西にある。

5 はきわめて砂粒の多い口縁部片で、磨滅が著しくて調整等はわからない。一見して縄文土

器かと思えたが、よく わからない。混入であ ることは間違いない。

SG1の出土。



第 87 図 広幡遺跡出土縄文時代他遺物実測図 (1/3)

石器 (図版66, 第87・88図)

第88図1は先端・片脚を欠損するが、脚部が大きく拡がる石鏃。残長2.7 cm, 厚さ0.3 cm。 姫島産黒曜石製で、1号住居跡床面より出土した。混入品である。

2 は平基式の石鏃で鋸歯状の側縁を有す。図中の右側縁は破損後再調整している。長さ1.85 cm。幅1.2cm, 厚さ0.4cm, 重さ0.75 g。姫島産出の乳白色黒曜石製。SG1上層よりの出土。

3 は脚端部を平坦に整えた石鏃で長さ 2.3 cm, 厚さ 0.4 cm。 4 は横長の剝片を素材とする大型の石鏃で,両側縁に細かい調整を施す。残長 3 cm,厚さ0.55cm,重さ 3.0 g。両者ともに安山岩製で,9号住居跡の埋土中より出土。

5 は長身で抉りのやや深味のある石鏃。先端部を欠くが、調整も丁寧で良品。覆土上層出土で姫島産出の黒曜石製。9 号住居跡出土の第88図3と同様に縄文時代の所産と考えられる。残長2.7 cm,厚さ0.4 cm。

6 は内湾状の基部を有す石鏃の完形品。長さ 1.9 cm, 幅 1.6 cm, 厚さ 0.4 cm, 重さ 0.95 g。 P-21出土で乳白色を呈す姫島産黒曜石製。

7 は基部を欠損する鋸歯鏃。残長 1.9 cm, 厚さ0.35cm。包含層北半の下層出土で, 黒色を呈す良質の黒曜石製。

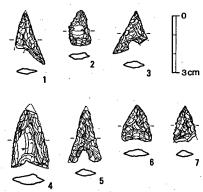
第87図4は表採の凹石である。玄武岩質の石で表面は粗い。長さ9.2 cm,幅8.4 cm。

2. 小 結

広幡遺跡では、2号住居跡や9号住居跡等の6世紀末葉より遡る確実な遺構は確認できていない。広幡城遺跡では、山頂部に弥生時代の住居跡等も存したが、この山裾の広幡遺跡は6世紀末以降に人々の営みの痕跡をはっきりと見出すことができる。ただ、縄文時代後期とされる土器片や、打製石鏃等が他時期の遺構に混入して出

土しているのは、もと該期の遺構が存した可能性も あるし、また近在することも考えられる。

もしこの広幡遺跡で縄文期の遺構があったとして、 それが後期のものであるならば、石町・山崎遺跡と 有機的に関連するものであることは疑いない。



第88図 広幡遺跡縄文時代他の出土 石器実測図(1/2)

V 自然科学系の調査

A. 広幡遺跡から出土した炭化材

琉球大学農学部 林 弘 也

広幡遺跡は、福岡県教育委員会が発掘調査した遺跡である。本遺跡から出土した遺物の一部である炭化材4点の樹種同定を行ったので、結果を報告する。

炭化資料はいずれも約3cm以内の小片の炭化材であり、元の材の形態を保っていなかったので、材の用途や形態を推定することはできなかった。

同定は炭化材を木材の3断面に沿って割断し、金属顕微鏡で木材の組織構造を観察した。材の組織に基づいて樹種を同定すると同時に、現生種のプレバラートと対照して樹種名を判定して同定した。資料の写真は反射電子顕微鏡で撮影した。

同定されたウリカエデは落葉性の小高木または低木であり、小径の木材である。材は経木、 経木真田や箸に使用され、材質は加工し易く、可撓性がある。本材は貯蔵穴から出土している ので、貯蔵穴の底に敷いた底木や穴の側面に沿って配置し、貯蔵物を土から隔離するものとし て、または穴の蓋等に使用されたのであろうと考えられる。

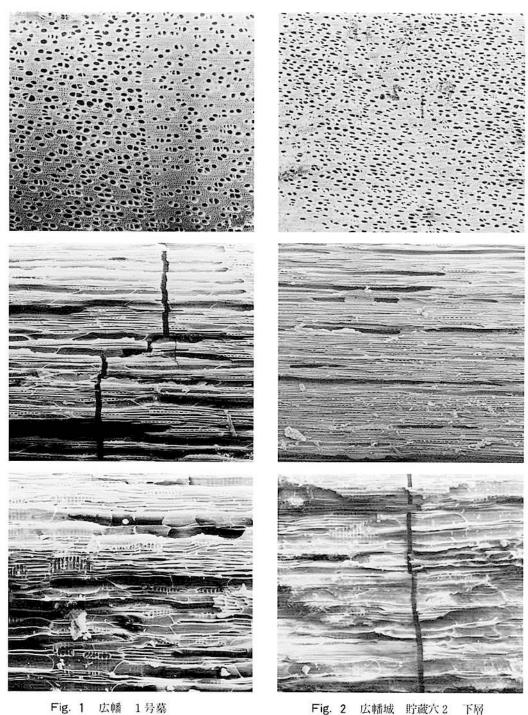
出土した炭化材4資料の同定結果を次表に示し、顕微鏡写真をFig.1~Fig.4に示した。

資	料	名	樹 種 名
広幡	1号墓		ユズリハ Daphyniphylium sp.
広幡城	貯蔵穴2	下層	ウリカエデ Acer crataegifolium
広幡城	貯蔵穴 6		ウリカエデ Acer crataegifolium
広幡城	貯蔵穴8		ウリカエデ Acer crataegifolium

広幡遺跡出土炭化材

顕微鏡写真について

- 1. 写真の配列は上から横断面、接線断面、放射断面である。
- 2. 写真の倍率は横断面写真は45倍、接線、放射断面写真は100倍である。



広幡 1号墓 ユズリハ Daphyniphylium sp.

Fig. 2 広幡城 貯蔵穴2 下層 ウリカエデ Acer crataegifolium

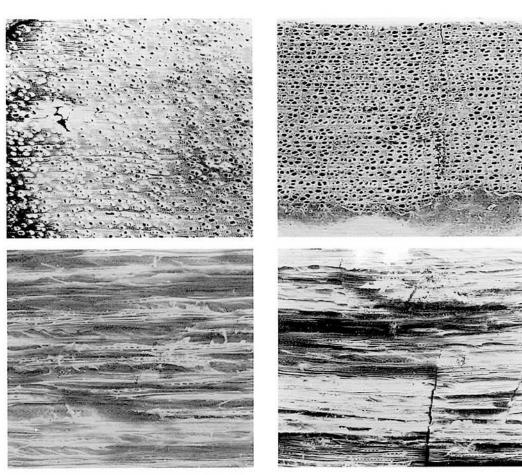




Fig. 3 広幡城 貯蔵穴 6 ウリカエデ Acer crataegifolium

Fig. 4 広幡城 貯蔵穴 8 ウリカエデ Acer crataegifolium

B. 広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査

新日本製鉄 大澤 正 己

概要

広幡遺跡の古墳時代から奈良時代に比定される住居跡出土の2点の鉄滓を調査して次のことが判明した。

- (1) 出土鉄滓の1点は、鉄器製作の為鉄素材を鍛接用に高温加熱した場合に派生した鍛錬鍛冶 滓に分類される。鉄滓中の砂鉄特有成分である二酸化チタン(TiO₂) は1%未満、バナジウム(V)0.011%と低減される。鉱物組成は、ヴスタイト(Wüst it e: FeO) とファイヤライト (Favalite: 2 FeO·SiO₂) が基本組成となる。
- (2) 残る1点は、始発原料をチタン分の高い塩基性砂鉄とした荒鉄(製鉄炉から出た直後の不 純物の多い小鉄塊)の成分調整時に排出された精錬鍛冶滓に分けられた。

鉱物組成は、ヴスタイト結晶中に微小チタン析出物のウルボスピネル (Ulvöspinel: 2 Fe $0 \cdot TiO_2$) を含む晶癖を示す。又、二酸化チタン (TiO_2) は、6.95%、バナジウム (V) が0.16% と高いことを特徴とする。10号住居跡は、鍛冶滓を遺存させていた。

1. いきさつ

広幡遺跡は、築上郡椎田町水原に所在する。古墳時代から奈良時代に属する10号住居跡から 鉄滓が出土した。この住居跡は、保存状態よろしくなく、鍛冶工房か否かさだかでない。出土 鉄滓から遺構の性格をみきわめる為、福岡県教育委員会より、鉄滓調査依頼の要請を受けた。

なお、広幡遺跡からは10号住居跡の下方の包含層より 100点近い鉄滓が出土している。遺跡内には鍛冶工房の存在が濃厚である。

2. 調査方法

2-1 供試材

Table. 1に2点の供試材の履歴と調査項目を示す。

符号 試 料 出土位置 推定年代 大きさ(mm) 重量(g) 顕微鏡組織 CMA調査 化学組成 10号住居跡 古墳~奈良 FK 16 鉄 滓 25×23×12 10 0 0 (7C末~8C代) FK17 37×25×15 0 0 0 (床面直上)

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

2-2 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査
- (3) 化学組成

全鉄分 (Total Fe), 金属鉄 (Metallic Fe), 酸化第 1 鉄 (FeO): 容量法。炭素 (C), 硫黄(S): 燃焼容量法,燃焼赤外吸収法。二酸化硅素(SiO₂), 酸化アルミニウム(Al₂O₃), 酸化カルシウム(CaO), 酸化カリウム(K₂O), 酸化マグネシウム(MgO), 酸化ナトリウム(Na₂O), 酸化マンガン(MnO), 二酸化チタン(TiO₂), 酸化クロム(Cr₂O₃), 五酸化燐(P₂O₅), バナジウム(V), 銅(Cu): ICP法(Inductively Coupled Plasme Emission Spectrometer), 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調查結果

- (1) 鉄滓 (FK16)
- ① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、粗鬆な肌に木炭痕や気泡を露出させる。10gの小塊。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の①②に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)が多量と淡灰色長柱状結晶のファイヤライト(Fayalite: 2 FeO·SiO₂), それらの粒間を暗黒色ガラス質スラグが埋める。典型的な鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe) は43.1%と鍛冶滓としては多くなく,そのうちの酸化第 1 鉄(Fe₂O₃)は23.3%,金属鉄の錆化を含み,酸化第 2 鉄(Fe₂O₃)が35.5%と多い。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)も32.11%と多い。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)0.54%,バナジウム(V)0.011%と低減されている。他の随伴微量元素らも減少傾向にあり,酸化マンガン(MnO)0.16%,酸化クロム(Cr₂O₃)0.019%,五酸化燐(P₂O₅)0.22%となる。但し,銅(Cu)は鉄中に固溶するので鍛錬鍛冶滓となると増加し,0.010%を呈した。硫黄(S)も0.066%と増える。

- (2) 鉄滓 (FK17)
- ① 肉眼観察

表皮側は黄褐色を呈し、肌は粗鬆面と流出状の滑らか面の2面を併せもつ。裏面は表と同色で反応痕をもつ。緻密質である。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の③~⑥に示す。鉱物組織は、大量のヴスタイト(Wüstite: FeO)で、粒内には茶

Table. 2 鉄滓・鍛造剝片の化学組成

- 1	刔	- O O					<u></u>						9							
	TiO, Total	0.604	0.685	0.673	0.523	0.074	0.088	0.026	0.031	0.309	0.018	0.013	0.037	0.003	0.102	0.022	0.023	0.004	0.013	0.136
	造津成分 (Total) (Fe	1,466	1.229	1.336	8,536	0.427	0.413	0.336	0.442	0.610	0.255	0.759	4.024	0.039	0.213	0.231	0.472	0.052	0.745	0.437
	路海	43.103	37.409	39.515	80.754	22.50	21.87	19.00	23.80	24.59	14.13	34.44	71.10	2.80	11.84	12.90	24.23	3.70	32.11	22.35
	(Cu)	0.002	0.00	0.002	0.002	0.00	0.002	0.002	0,002	0.029	0.051	0.042	0.030	0.024	0.028	0.033	0.034	0.026	0.010	0.004
	ナ ジウム (V)	0.117	0.158	0.164	0.045	0.11	0.13	0.030	0.040	0.28	0.017	600.0	0.012	0.004	0.11	0.025	0.029	0.007	0.011	0.16
	京 (C) 殊	0.01	0.12-	90.0	0.12	0.11	0.12	0.17	0.11	0.14	0.41	0.10	0.08	0.18	0.25	0.54	0.25	0.25	0.20	0.11
	五酸 化燐 (P,0°)	0.467	0.458	0.596	0.254	0.22	0.28	0.31	0.36	0.27	0.29	0.21	0.16	0:12	0.57	0.30	0.42	0.14	0.22	0.40
	硫黄 (S)	0.019	0.014	0.007	0.004	0.022	0.039	0.020	0.026	0.029	0.041	0.031	0.017	0.026	0.037	0.031	0.027	0.059	990.0	0.035
	酸化 クロム (Cr ₁ 0 ₃)	0.056	0.079	0.063	0.069	0.034	0.032	0.025	0.021	0.07	0.03	0.02	0.01	0.03	0.04	0.02	0.02	0.04	0,019	0:15
	二酸化 チタン (TiO ₃)	17.76	20.87	19.90	4.95	3.92	4.68	1.46	1.67	12.45	0.98	0.59	99.0	0,19	5.68	1,22	1.19	0.29	0.54	6.95
	酸化マ ンガン (MnO)	1.21	2.57	1.40	0.37	0.21	0.23	0.23	0.19	0.75	0.70	0.21	0.07	0.07	0.19	0.11	0.09	0.05	0,16	0.41
WH/IX	酸化ナトリウム (Na ₂ 0)	0.231	0.152	0.181	0.549	0.16	0.22	0.26	0.26	ı	ı	ı	1	ı	ı	I	1	Ι.	0.24	0.16
戦迫利 マバムチ配成	酸化カ リウム (K,0)	1,282	0.757	1.004	2,365	0.41	99.0	0.55	1.19	1	ı	1.	1	ı	ı	ı	ı	ı	0.79	0.82
WUT V	酸化マグ ネシウム (MgO)	5,40	6.34	6.40	1.86	1.12	1.30	0.72	0.97	3.30	0.43	0.67	0.35	0.12	0.82	0.52	0.73	0.13	0,93	1,70
救炬	酸化カ ルシウム (CaO)	4.36	3.96	5.27	1.69	1.14	1.43	2.00	3.82	1.65	0.38	1.38	06.0	0.23	0.61	0.72	1.28	0.20	2,32	3.12
坏件	酸化アル ミニウム (Al,0,)	7.55	6.43	6.34	16.66	5.87	4.96	4.07	4.76	5.52	3.48	8,89	11.25	0.79	3,33	3.86	90.9	1.05	6,83	4.55
7	二酸化 珪素 (SiO ₃)	24.28	19.77	20.32	57.63	13.8	13.3	11.4	12.8	14.12	9.84	23.50	58.6	1.66	7.08	7.80	16,16	2.32	21.0	12.0
aD G	酸 化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	25.55	24.81	26.93	2.37	22.6	19.8	22.2	16.9	5.21	34.8	8.47	17.01	43.3	22,19	22.21	11.26	1	35,5	15.8
-	酸 化 第1鉄 (FeO)	32.48	31.77	30.41	2.87	47.4	50.3	52.8	54.0	47.1	39.9	50.7	7.45	53.0	51.7	51.9	55.9	1	23.3	51.3
	金属鉄 (Matallic) (Fe	0.30	0.12	0.30	0.14	20'0	0.10	01.0	01.0	-	_	1	Į	1	-	ı	_	1	0.14	0.21
	全鉄分 (Total) (Fe	29.40	30.45	29.58	9,46	52,7	53.0	9.95	53.8	40.3	55,4	42.4	17.67	71.5	. 2.39	6.33	51.3	8.07	43.1	51.1
	推年的公子	70 4~80	*	*	*	奈良~平安	4.		4	13C後半	*	*	*	*	*	*	4		古墳~奈良	*
	種別	砂鉄製錬滓			(ガラス質鉄滓)	精錬鍛冶滓	*	最終精鍊鍛冶滓	4	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	*	羽口先端溶着スラゲ	銀造剝片	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	*	鍛造剝片	鍛錬鍛冶滓	精錬鍛冶滓
	出土位置	1号炉西土壤			1号炉内	1 号 炉	. 4	2 号 炉	4	土壤3(鍛治炉)	4	4	"		土壤4(鍛治炉)	4	4	4	10号住居跡上層	10号住居跡床面直上
	遺跡名	松丸				赤幡森ヶ坪	"	4		土佐井	*	*	,	٠		ı	,	"	広幡	
	試料番号	A -911	A -912	A -913	A -914	FK5	FK6	FK7	FK8	V168- L	B	၁.	a	3	L-892A	B	o .	· Q	FK17	FK17

Table.2の註。

① 大澤正己「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」「城井谷I」(築城町埋蔵文化財調査報告書第2集)業城町教育委員会 1992。
 ② 大澤正己「赤幡森ヶ坪遺跡出土鍛冶関連遺物の調査結果と遺構の検討」「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告ー8ー」 1992。
 ③ 大澤正己「土佐井遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剝片の金属学的調査」「土佐井地区遺跡」(太平村文化財調査報告書第5集) 1990。
 ④ 大澤正己「広橋遺跡出土鉄滓の金属学的調査」「推出バイパス関係埋蔵文化財調査報告 9ー」 1992。

褐色微小結晶のウルボスピネル(Ulvöspinel:2 FeO·SiO₂) を析出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

CMA調査

Photo. 2のSE(2次電子像)に示したヴスタイト(Wüstite: FeO)と、その粒内に析出した微小ウルボスピネル(Ulvöspinel: 2 FeO·TiO₂)の分析結果である。

検出元素は強度順に並べると次の様になる。硅素(S), 鉄(Fe), カルシウム(Ca), アルミ (Al), チタン(Ti), カリウム(K), マグネシウム(Mg), アンチモン(Sb), ナトリウム(Na), マンガン(Mn)となる。

ヴスタイト、ウルボスピネル、ガラス質成分に見合った構成成分である。

これら検出成分を、視覚化したのが Photo. 2 の特性X線像である。白色輝点の集中度によって分析元素の存在を知る事ができる。例えば、白色粒状結晶のヴスタイト (Wüstite. FeO)粒内の微小析出物は、チタン (Ti) で白色輝点が集中する。ヴスタイトは FeO で表わされる如く、鉄 (Fe) にも白色輝点は強く認められる。鉄 (Fe) ーチタン (Ti) 化合物であるウルボスピネル (Ulvöspinel: 2 FeO·TiO₂) が析出物と判る。

該滓は,まだチタン濃度の高い成分系で,前述したFK16鉄滓とは,明らかに差異のある事は明白である。

④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は51.1%と高い。このうち、酸化第 1 鉄(FeO)は51.3%、酸化第 2 鉄(Fe₂O₃)は15.8%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は22.35%となる。ガラス質成分中の塩基性成分(CaO+MgO)は4.82%と多い。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)は6.95%、バナジウム(V)0.16%らも高目である。他の随伴微量元素らもやや多く、酸化マンガン(MnO)0.41%、五酸化燐(P₂O₅) 0.40%らとなる。精錬鍛冶滓としての成分系である。

4. まとめ

広幡遺跡の10号住居跡から出土した2点の鉄滓は、鉄器製作時の折り返し曲げ等の鍛接加工時の排出滓で鍛錬鍛冶滓に分類されるものと、製鉄炉から出された直後で不純物の多い荒鉄の成分調整を行って鉄素材とした時点で排出された精錬鍛冶滓であった。両者は鍛冶作業で形成された鍛冶滓である。

この結果から、10号住居跡は鍛冶工房の可能性はもつが、火窪ともいうべき鍛冶炉の検出がなく、鉄滓出土量も多くないので、結論を出すまでには至らなかった。

しかし、古墳時代から奈良時代のこの10号住居跡出土鉄滓は、松丸製鉄遺跡出土の製錬滓の成分系と繋がるものであり①、今後は両遺跡の考古遺物との総合的検討が必要であろう。

Table, 3 広幡遺跡出土精錬鍛冶滓(FK17)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

					+ .	
	10-6PR-90		INTENSITY(1.06)	+**	+++++++++++++++++++++++++++++++++++++++	
e		L.X.F	INT	++++++++++++++++++++++++++++++++++++++		
READY (PAGE)		(2)113	COUNT	R 4 R 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	4 000044 0000404	
REARY		_	Ä	444444 4884846 848446	e en en en en en en en	•
	·		ند ندا	### X Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z	60 60 61 61 61 61 61 61 61 61 61 61 61 61 61	
COMMENT(8 CHARACTER) FC.R./SAMEJ EKLZ		Cha	INTENSITYCLDG)	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	**************************************	
COMMEN FC. R FK17		CH(3)	COUNT	2 4 2 4 3 4 5 5 4 7 5 3 4 5 5 4 5 6	STEEL BY	
2.(MM)			311.	ななななななどのなるなどなるなりものものものものものものものものものものものものものものものものものものもの	4000000 000000 0000000 0000000	·
•	11000		Ē	G @ 0 c	THE TENA	بر ح س
Y (MM)	80		(00)	*** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** **		T FE SR :< PRESI
жб. х(нм) ПП 46.000	K17 KU): 15 1: 5.000F-08 (A) X 40000 Y 40000	TAP	UNTERSTITEDO	**************************************	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	RESULTS: THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT NA MG AL SI K CA II MN FE SR THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBADLY PRESENT
HOLDER NO. 10.5 TO SENDI	F ~ F ~	CHCIO	COUNT	2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 200		VO ELEMEI SI K VG ELEMEI
P05. NO.	COMMENT : ACCF1 . VOLT. PROME CURRENT STAGE POS. :		ž	6667788 4867888 8688847	***	TS: TOLLOWIN
X 15 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00	9 PRC		립	######################################	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	RESULTS THE FOL THE FOL

´Photo. 2のSE (2次電子像)に示したヴスタイト(Wüstite:FeO) とその粒内の析出物の分析結果である。検出元素を強度順に並べると次の様 チモン(Sb)92, ナトリウム(Na)69, マンガン(Mn)53となる。チタンを含むヴスタイトとガラス質成分から構成される。鍛冶に供した荒鉄はチタ になる。硅素(Si)6528,鉄(Fe)4950,カルシウム(Ca)1940,アルミ(Al)1858,チタン(Ti)1386,カリウム(K)579,マグネシウム(Mg)487,アン ン分の多い塩基性砂鉄を始発原料とすることが想定される。 なお、広幡遺跡から出土した精錬鍛冶滓と同系鉄滓が、築上郡では赤幡森ヶ坪遺跡②及び土 (註2) 佐井地区遺跡③でも検出されている。築上郡一帯では、チタン分の高い塩基性砂鉄を始発原料 (註3) とした鉄生産は広く行われたと推定される。

Fig. 1は、Table. 2の化学組成のうち、砂鉄特有成分のチタン(Ti)とバナジウム(V) をもとに、鉄(Fe) との比をとってプロットした結果である。製鉄一貫作業工程において、Ti/Fe とV/Fe が漸次減少してゆく傾向がよく読みとれる。すなわち、地元賦存の高チタン含有の塩基性砂鉄を始発原料とし、第1工程の製錬で排出された製錬滓から、荒鉄の成分調整の精錬鍛冶、半製品となった鉄素材を鉄器製作における鍛錬鍛冶までの滓中のチタン(Ti) とバナジウム(V)の工程推移である。築上郡、更に地域を拡げて豊前地方までから出土する古代製鉄関連遺物は、Fig. 1に示された線上に乗ってくると想定される。

(1992.2.18)

註

- 1 大澤正己「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『城井谷 I 』(築城町文化財調査報告書 第2集)築城 町教育委員会 1992。
- 2 大澤正己「赤幡森ヶ坪遺跡鍛冶関連遺物の調査結果と遺構の検討」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 -8-』福岡県教育委員会 1992。
- 3 大澤正己「土佐井遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剝片の金属学的調査」「土佐井地区遺跡」(太平村文化財調査報告書 第5集) 1990。

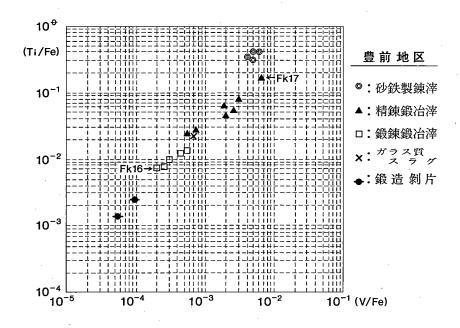


Fig. 1 築上郡地区出土製鉄関連遺物の Ti - V 成分変化

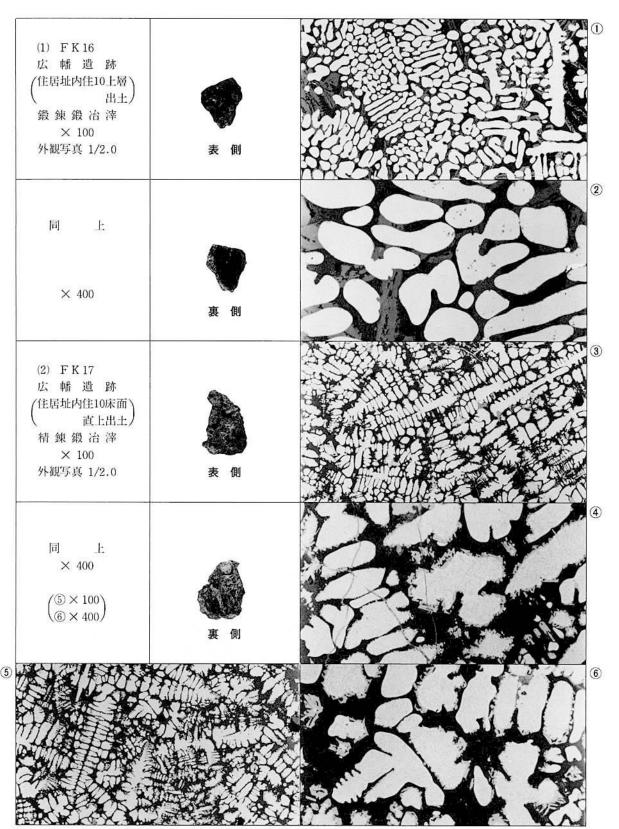


Photo. 1 鍛錬鍛冶滓,精錬鍛冶滓の顕微鏡組織

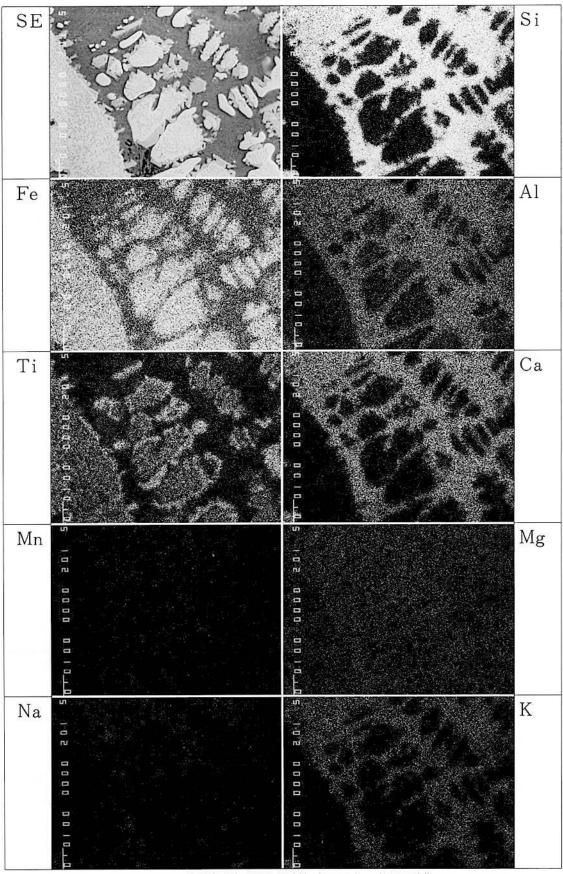


Photo. 2 広幡遺跡出土精錬鍛冶滓 (FK17) の特性X線像

C. C-14年代測定

広幡城跡のⅠ郭とⅡ郭間の堀にかかる土橋の下部に存した石組(SR11下石組)の中〈協会コードN-6135〉と、広幡遺跡の1号墓〈協会コードN-6136〉から出土した炭化材について、社団法人日本アイソトープ協会(東京)に依頼して年代測定を行った。その結果は次のとおりである。

協会のコード 依頼者コード C-14年代 N-6135 K-14 310±70yB.P. (300±70yB.P.) N-6136 K-15 890±75yB.P. (860±70vB.P.)

年代は"Cの半減期5730年 (カッコ内は Libby の値5568年) にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数 (years B.P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、"C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約95%となります。なお "C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

(1992年1月24日付の回答報告書)

上記のC-14年代を5730年の半減期で、年代誤差をも含めて西暦で示せば次のようになる。

N -6135 1570 \sim (1640) \sim 1710 A.D.

N-6136 $985\sim(1060)\sim1135$ A.D.

すなわち、N-6135〈広幡城跡 S R 11下石組〉は1640年(17世紀中葉)を前後する頃の年代を、またN-6136〈広幡遺跡 1 号墓〉は1060年(11世紀中葉)を前後する頃の年代を示したということになる。

Ⅵ 総 括

1. 広幡城の築城と存続年代

山城の上限・下限

広幡城の築城については、それを文献史料から知ることはできない。もとより、広幡城のことを記した同時代の古文書は知られておらず、また広幡城のことに触れた最古の文献と思われる『豊前国古城記』に"宮原中将と云う者切開き"とある記事にしても、仮にこの記事が信じうる内容であったとしても、その宮原中将なる人物がいつの頃に生存していたかは皆目わからないのである。

これまでに広幡城は鎌倉時代あるいは戦国期の築城であろうとの俗説があったけれども、それについては多分に広幡八幡宮が鎌倉時代には存したという事実から派生したものであろう。

広幡八幡宮は、鎌倉時代初めには文献に見えており、宇佐神宮の系列として荘園を領していたことが知られる。その所在地は今回の調査地である広幡遺跡の周縁、おそらく北側に残る屋敷地と見做されるあたりが社殿の存した所と思われる。もちろん、今次調査の広幡遺跡において12~14世紀の間の遺物と若干の遺構が検出されているので、ここもその"社殿"地の範囲に含まれていたことであろう。しかし、広幡八幡宮がここに存したからといって(まだ確定したわけではないが)、広幡城が同じ頃からここに存したことにはならない。広幡城の築城は、やはりまだ後のこととせねばならない。

さて、今次の発掘調査においてはごく少量ながらも、広幡城の築城あるいは存続年代を知るのに有用な土器の出土があった。それは主に I 郭とした郭内の土壙と、 I ・ II 郭間の堀の中から出土しているが、礎石の周辺や南斜面の建物跡からの土器も取上げてよいだろう。

土器を扱う前に遺構のあり方を見ると、郭内において礎石を使っての、あるいは掘立柱形式での建物は明確には確認できていないので、果たして建物の変遷があったのか否かわからない。しかし、土壌(SK)のあり方や堀からの遺物の出土状態を見ると、この山城が機能していたのはそれほど長くなかったのではないか、と考えざるを得ない。特に、堀の中から山城の時期に関連すると思われる土器が出土したのはごく僅かであり、このことは郭内における居住(生活)の期間がきわめて短かかったことを示しているのではないかと考える。

山城というもの自体が日常的な生活の場ではなく、危急時に立て籠って対処する所であった はずだから、平常の生活空間に比べれば土器の出土量は少ないのが当然であろう。でも、この 広幡城における土器の量はあまりに少ない。そしてまた、以下で検討するように、出土土器全 体の時間幅があまり大きくないように考えられるのである。

なお、築城の上限としては、SK1より出土した永楽通宝の鋳造年を遡らないものと考えたい。SK1がいつ掘削されたのかについては確証は得られないが、永楽通宝の初鋳年(1403年)以降にこの土壙が廃棄されたことだけは間違いない。SK1が広幡城に関係するものとして築城の上限を15世紀前半におくことをまず提示する。

さらに城の下限については、全国の山城の殆ど全てが戦国時代の終結とともにその命脈を絶ったと考えてよいが、この広幡城については、これも確たる証明手段を欠くものの、黒田孝高(如水)が豊臣秀吉より豊前の京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の6郡を与えられ、中津に入封した天正16年(1588)には宇都宮氏が滅び去ったとされるので、この16世紀の末に近い頃を考えておきたい。

土器の検討

第23・24図に示した25点の土器を器種別に分ければ次のようになる(第89図参照)。

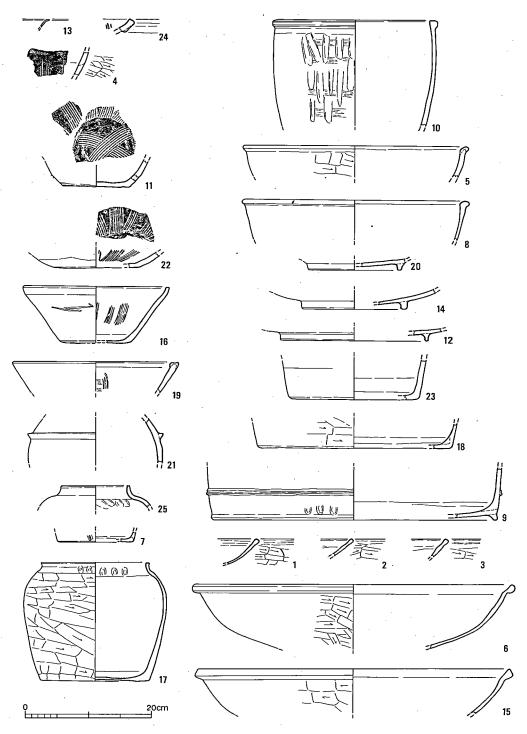
- 白磁 —— 13
- ・摺鉢 ── 4 · 11 · 16 · 19 · 22 · 24
- 釜 ——— 21
- 壺 7 · 17 · 25
- 鉢 ——— 5 · 8 · 10 · 12 · 14 · 20
- 火鉢 —— 9・18・23
- 土鍋 —— 1 · 2 · 3 · 6 · 15

これらは13の白磁を除いて、土師質・須恵質・瓦質の3者があるけれども、前二者もどちらかといえば瓦質に近いといってよいものである。

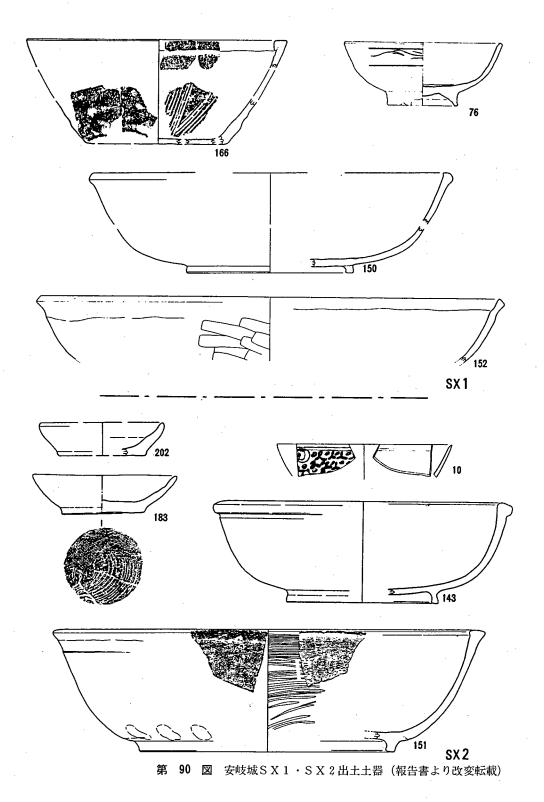
さて、上記の器種一覧でわかる如く、この出土品中には坏や皿といった供膳用の食器が含まれていない(13の白磁を除く)。これは図示しえなかった破片中でも全く見られなかったので、供膳具は磁器(といっても1点しかないが)か木器(漆器)であった可能性が高い。

坏や小皿があればそれを基準にもできるが、いまは土鍋と摺鉢と鉢とを他遺跡出土品と比較 検討することとする。

まず、大分県東国東郡安岐町に所在する安岐城跡からは輸入陶磁器・国産陶器・瓦質 土器・瓦などかなりの量の遺物が出土している。この安岐城跡の建物等は3期の変遷が捉えられ、それらは16世紀中頃から17世紀初頭の間に営まれたとされている。第92・93図に示したのは第2期とされるSX2やSX1その他の出土遺物を抽出したものであるが、これと広幡城から出土した土器等(第91図)を比べてみよう。次に示すものは互いに形態的によく似たものとしてよいだろう。



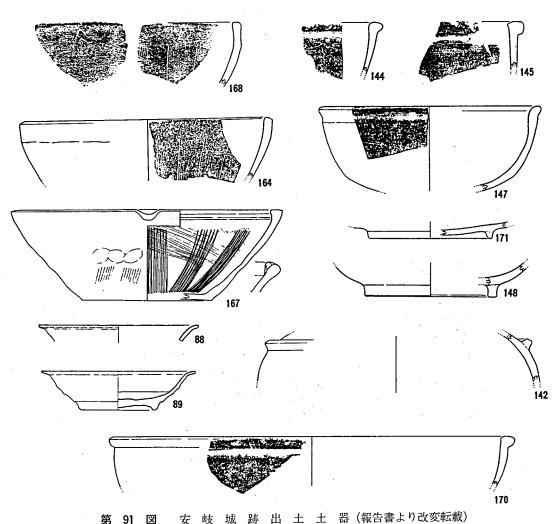
第 89 図 広幡城跡出土土器実測図 (1/6)



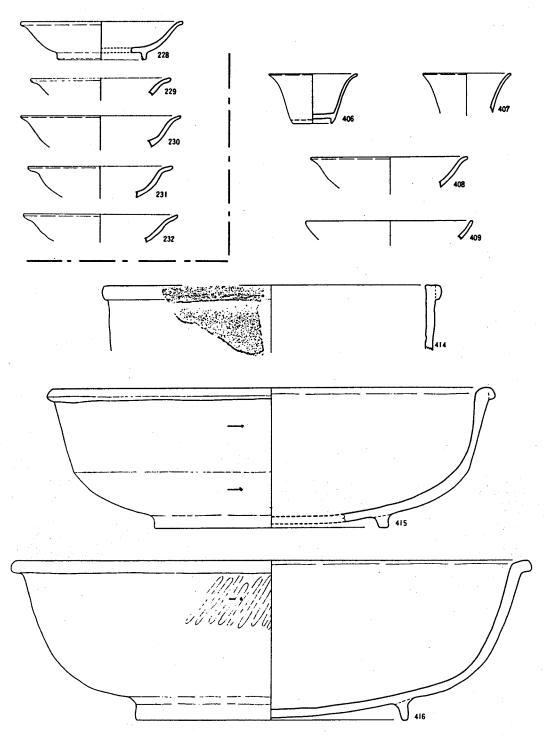
- 133 -

	摺 鉢	鉢	土 鍋	白 磁
安岐城(第92・93図)	166 • 164	$143 \cdot 144 \cdot 145 \cdot 170$	152	88 • 89
広幡城(第91図)	19 16	$10 \cdot 5 \cdot 8$	$1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot (6)$	13

これらの中で特に注意しておきたいのが土鍋と白磁の口縁形態である。安岐城S X 1 はその所在も何期に属するかも報告書からは知りえないが、土鍋 152 は広幡城のS R 11下石組より出土の $1\sim3$ と非常によく似ている。また、広幡城の郭内より出土した唯一の磁器であるS K 6 の13は皿形になるもので、安岐城の88と同形態とみてよい。



91 図 女 岐 城 跡 山 上 上 鉛 (和口音より以及和報



第 92 図 伐株山城跡第5土塁遺構3号土壙ほか出土土器 (報告書より改変転載)

同じ豊後国に属する大分県玖珠郡玖珠町の伐株山城跡では、1979~1983年の間の 4 次にわたる調査において、第1・第5の土塁遺構その他から多量の土器・陶磁器類が出土している。それら1400点近い遺物は遺構に伴っていないものも多数あるが、山城が機能した時期を示しているものではあろう。

それらの中の白磁で皿Gに分類されたものは、やはり広幡城SK6出土のそれと同一形態のもので、口縁端部が反りを持つという特徴がある。この皿Gについては、15世紀後半から出現し、16世紀後半には衰退するものと捉えられている。

また,第5土塁遺構で白磁皿Gが出土した3号土壙からは瓦質の鉢も出土しており,これの 形態(第94図414・415)と広幡城出土鉢(10・5・8など)とは口縁のみならず高台のあり方 なども酷似している。

伐株山城跡については、古く鎌倉時代から高勝寺という山岳仏教の寺院が営まれ、南北朝期にはその寺院が城郭として使われることもあったが、大規模な山城として築造されたのは戦国時代・天文元年から3年の間 (1532~1534) であった、と推測されている。

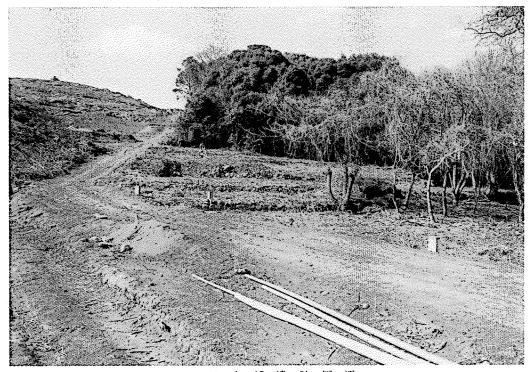
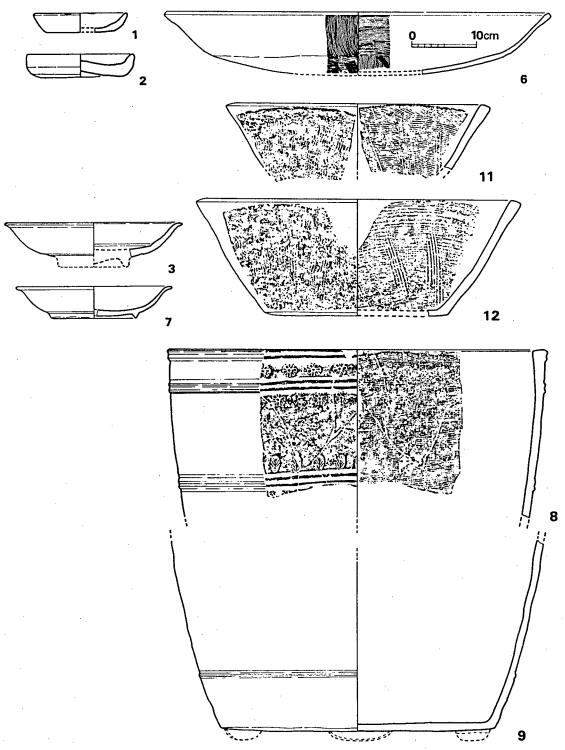


Photo. 21 広 幡 遺 跡 周 辺



第 93 図 波多江遺跡SD003 その他出土土器 (報告書より改変転載, 3:SD002, 7:SD004 出土)

次に、旧国制では筑前国になるが、糸島郡前原町波多江遺跡では、戦国期の遺構が 2期に大別されており、 I 期は1500年を前後する頃、 II 期は16世紀後半(1586年以前)に比定されている。第95図に I 期に属する S D 003の土器等を掲げたが、この中の土鍋 6 はその口縁がやはり広幡城出土の 1 ~ 3 に類似する。ただ内外面の調整は異なっている。 3 と 7 は II 期に属する白磁であるが、これは広幡城の13と同一形態のものと考えてよい。

築城・廃城の年代

以上の比較検討してきた結果として、広幡城跡にて出土した土器――それは図示しえたもので僅か25点であるが――はおおよそ16世紀中葉を前後する頃に位置づけて大過ないであろう。 遡っても16世紀前葉の頃と思われる。

戦国時代の後半期,豊前国の政情があわだだしく不安定さわまりなくなってくるのは天文年間 (1532~)以降のことと言われる。

豊前守護であった大内義隆は1532(天文元)年以降少弐・大友の連合軍と戦い,1536(天文5)年には大宰大弐に任ぜられている。その大内義隆が家臣の陶隆房(晴賢)に攻められて自殺した1551(天文20)年以降,豊前地方はますます風雲急を告げる情勢となってくる。

以前より北部九州一帯を狙っていた大友宗麟は、これを機に北上をはじめて豊前も攻略し、 やがて博多も手中におさめて1559(永禄 2)年までに六ケ国の守護職を手に入れた。さらには九 州探題にまでのしあがっている。しかし、中国地方の雄となった毛利元就も九州へ食指を伸ば し、このあととくに豊前・筑前を中心とした北部九州は戦乱に明け暮れる状況が続いていくの であった。

これらの極限までの戦乱状態が収拾されるのは、日向耳川の戦い(1578=天正6年)で島津軍に大敗して以降勢力の弱まった大友宗麟が豊臣秀吉に救援をもとめ、それをうけて秀吉が九州に入り、島津氏の降伏でもって九州平定が達成されたときである。時に1587(天正15)年5月のことであった。

さて、如上の世相をも含めて考えるならば、広幡城の築城については16世紀、天文年間の頃 (1532~1555)が最も妥当性が高いということになろう。廃城(破却)はやはり天正15(1587)年を前後する頃と捉えたい。

註

- 1 大分県教育委員会『安岐城跡・下原古墳』(大分県文化財調査報告 第76輯)1988
- 2 玖珠町教育委員会『伐株山城跡』1984
- 3 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 第6集 1982

2. 広幡遺跡と広幡城跡

広幡遺跡と広幡城遺跡においては、古くは縄文時代後期から、新しくは江戸期、明治期から昭和期の遺物が出土している。ここでは、それらの時代ごとに遺構と遺物を概観して、遺跡全体のまとめとしておきたい。

i. 縄文時代

縄文時代には、広幡遺跡において後期・北久根山式の土器片少量と、その時期に属すであろう打製石鏃・石斧があるが、いずれも明確な遺構に伴ったものではない。9号住居跡の下層から少しがまとまって出土したものの、これもはっきりした遺構とは捉えられなかった。

岩丸川をはさんで広幡遺跡のすぐ東側に石町・山崎遺跡がある。ここでは縄文後期の 堅穴住居跡や土壙が検出され、該期集落の一端が明らかにされた。この広幡遺跡における縄文土器・石器については、遺構の存否に拘らず石町・山崎遺跡と深い関係を有するものであることは疑いないところである。岩丸川の川縁から、山崎遺跡・広幡遺跡の遺構の存した所までの距離は、各々15m、30mとごく短い。このことは、現在の岩丸川が古くは流路を異にしていたのではないか、との想定を抱かせる。

ともかく、縄文時代後期にはここ広幡遺跡にも人々が足跡をしるしていたのである。

ii. 弥生時代

弥生時代がはじまって、前期中頃には広幡城遺跡の標高60mの所に住居跡が営まれる。なぜか、より条件がよかったはずの広幡遺跡の方には居住した痕跡が見られない。

広幡城遺跡には竪穴住居跡 6 軒,貯蔵穴 9 基(さらに第 2 次調査で 6 基を検出),その他ピット等が存したが,その遺構の分布状況は片寄りがある。すなわち,3~6 号住居跡が城跡における I 郭の東端に近く集中し,1・2 号住居跡と1・2・6~9 号貯蔵穴が中央付近に集中する。第 2 次調査分の貯蔵穴は II 郭の西端に近く位置する。これを見るに,丘陵頂部においては2~3 グループが住居を営んでいたといえそうである。

注意しておきたいことに、2・6・8号貯蔵穴から栗・カシと思われる堅果類が出土したことが挙げられる。北部九州で稲作が開始されてしばらくの時を経ているが、この広幡城遺跡の2・6・8号貯蔵穴の中には米は貯蔵されていなかった。また、大陸系磨製石器としては第2次調査でSP32から太型蛤刃石斧が出土したのみである。さらには、6号住居跡から姫島産黒曜石の剝片が多量に出土したことは、この住居内で石器製作を行っていたことを伺わせる。

この周辺では弥生期でも最も古く位置づけうるこの広幡城遺跡において、なぜこのような小

高い所に住居を営まねばならなかったのか。北方の眼下 600 m程の所には弥生中期前半を主体とする広末・安永遺跡があり、集落が営まれている。また、十双遺跡や、赤幡森ケ坪遺跡、下(註3・4) 清水遺跡においても少量ながら前期後半以降の土器が出土しているが、これらは広幡城遺跡と比べると皆少し新しい。つまり、広幡城遺跡が放棄されてのち、平地部に集落が営まれるようになってきているのである。弥生前期の中頃から後半の頃に、平地には住みにくい何らかの要因があったものと思われる。

ⅱ.古墳時代~奈良時代

古墳時代後半の6世紀末頃に至って、広幡遺跡には住居が営まれ始める。まず、2・9号住居跡がつくられ、それと時を同じくして下方にある包含層(SG2)も形成されはじめる。住居群は7世紀を経て8世紀末頃まで連綿とつくられている。

2号住居跡から出土した子持勾玉は腹のみに突起(子)を造り出した扁平なもので、子持勾玉としては退化した形態である。近年、豊前市荒堀中ノ原遺跡からも出土している。

奈良時代になってその半ば、8世紀中頃には広幡遺跡で10号住居跡が営まれる。この住居内では、具体的内容は知りえないが、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶とが行われていた。つまり大鍛冶と小鍛冶である。その結果として、住居内のみならず包含層(SG2)からも鉄滓やふいご羽口片などが出土しているのだろう。この住居が鍛冶工房として使用されていたことはほぼ間違いないものと思われる。岩丸川流域の谷筋にも、築城町松丸F遺跡のような製鉄遺跡が存するのかもしれない。

また、同じ10号住居跡から飯蛸壺が50個体近く出土したことも注意しておく必要があろう。 赤幡森ケ坪遺跡でもやはり飯蛸壺があり、当時の海岸線は今よりもっと内陸側にあったものと ^(注6) 考えられよう。

なお、同じ頃に広幡城遺跡では火葬墓が営まれている。

iv. 平安時代

この時期の遺構として確かに把握できるものは今のところない。ただ、10号住居跡の上層に存したSG1や、その下方にあったSG2などの包含層中から緑釉陶器・黒色土器の破片が出土していることより、 $9\sim10$ 世紀の遺構がSG1の近辺に存したであろうことを想定するのみである。あったとすれば掘立柱建物であろう。

緑釉陶器については、豊前地方においても近年ますます発見例が増えている。赤幡森ケ坪遺跡や犀川町下木井遺跡、行橋市崎野遺跡等でも最近発見され、いわゆる「長門国瓷器」の問題(は1) がさらに追究されるほどに資料がふえてきた、ともいえよう。

なお、緑釉陶器の破片が含まれていたSG2は、それより新しい遺物としては染付磁器1点

のみしかない。この染付磁器片に伴う遺物が他に全くないことから、これを混入とみれば、広 幡遺跡においてその東端部の崖面、すなわち2・3号住居跡等が削られ去った部分は、多分に 9世紀以降に岩丸川の氾濫によって形造られたとみることができる。

V. 鎌倉時代~室町時代前期

広幡遺跡では確実なところとしては、SG1が $12\sim14$ 世紀に形成された包含層と考えうるので、その周辺に建物跡が存した可能性は高い。SG1には $9\sim10$ 世紀代の遺物もあったが、 $12\sim14$ 世紀の輸入陶磁器片も20数点が出土している。点数としては少ないが、岩丸川東岸の石町遺跡でも13世紀後半代と目される遺物があるので関連するものとしてよいだろう。

また、 $1 \cdot 2$ 号墓が13世紀後半と考えうる土師器を出土しているが、この墓の年代は土器の位置づけによって変動することもありうる。

さらには1号石垣の掘り形内より常滑陶器が出土しており、これも古く考えれば12~14世紀におくこともできる。しかし、2号石垣との絡みもあるので16世紀代と考えたい。

溝の5・6号が14~16世紀の可能性もある。

この鎌倉期以降の広幡遺跡については、やはり「広幡八幡宮」との関わりを無視するわけにはゆかない。「広幡八幡宮」の位置を特定できない今は、この広幡遺跡もその一部に含まれている可能性があることのみ考慮におくこととしよう。

Vi. 戦国時代

広幡遺跡では石垣や溝がつくられ、建物が建てられてくるが、はっきりと知りうるのは石垣くらいである。1号建物跡はその全体の形状を摑みにくい。2号石垣の前面には大きな建物が存したはずと考えるが、捉えきれない。3・4号石垣については江戸期の所産ではないかと考えている。この広幡遺跡において、15~16世紀に建物が存したであろうことは予想されるし、一部の遺物についてもこの時期に属するものがある。1号土壙などは、16世紀後半代の建物に付属した遺構と捉えているけれども、周辺の具体的様相が知りえない。

広幡城跡は、16世紀中頃には築城され、同後半代には破却されたと考えられる。この山城で最も注目されるのは、まず東南斜面における建物跡の存在である。SX1・5~8とした建物跡がこの山城跡に伴うことはほぼ間違いないところであり、その性格が重視される。第一には見張番をおいた小屋の跡とする捉え方もできるが、それだけのものであろうか。現時点ではその位置づけを十分に行いえないので、今後の調査事例等も加味して後日再考したいと思う。

次に、横矢掛りの一種たる出桝(本文中ではSZの略号を用いた)の存在、その在り方も注意されよう。 I 郭に2ケ所、Ⅱ郭に1ケ所を配したその位置は、縦堀・虎口の近くであったり、尾根筋の進入路の突き当りであるなど、山城の防禦性を十分に考慮したものである。

この広幡城を鳥瞰すれば、その縄張りの整然とした配置に感心させられる。やはりこの地が 常に防衛の最前線におかれたがための工夫として整備されたものであろう。

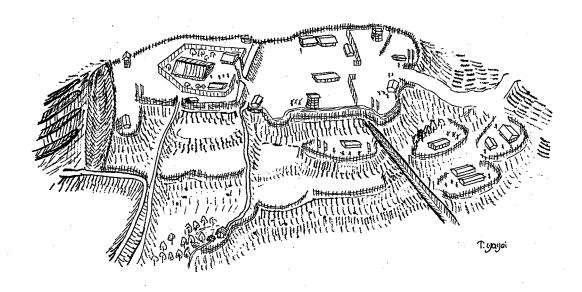
VII. 江戸時代以降

陶磁器類の中に江戸期以降に位置づけうるものがあるけれども、そのときの遺構は特定しえない。ただ、広幡遺跡 3 · 4 号石垣と暗渠は中世にまで遡りえないものと思われる。

広幡城跡の I 郭堀 IV区上面出土の陶磁器類は、明治期以降の花見の時に使われたものかもしれない。礎石 3 の近くから採集されたボタンについてはいろいろ調べてもみたが、いつ、どこで作られたのかという肝心な点が不明のままである。表面にあしらわれた紋章は生半可な文様ではないと見ているがどうであろうか。

註

- 1 椎田町教育委員会『石町遺跡』(椎田町文化財調査報告書 第2集) 1988
- 2 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 ― 7 ― 』1992
- 3 築城町教育委員会『安永遺跡』(築城町文化財調査報告書 第1集) 1984
- 4 福岡県教育委員会『椎田パイパス関係埋蔵文化財調査報告 5 』1991
- 5 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 ― 8 ― 』1992



第 94 図 広幡城復原イラスト (豊福弥生原図)

- 6 註5と同じ
- 7 註3に所収
- 8 豊前市教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 Ⅲ 』 (豊前市文化財調査報告書 第7集) 1991
- 9 築城町教育委員会『城井谷Ⅰ』 (築城町文化財調査報告書 第2集) 1992
- 10 犀川町教育委員会『城井遺跡群』 (犀川町文化財調査報告書 第3集) 1992
- 11 行橋市教育委員会が1990年に調査した。現在確認できているのは 3 点であり,うち 1 点は須恵質である。 小川秀樹氏教示。



Photo. 22 広幡遺跡の石垣

宇都宮氏について

福岡県教育庁文化課 磯 村 幸 男

1. 宇都宮氏について

宇都宮氏については、恵良宏氏論文「豊前国における東国御家人宇都宮氏について」(『九州 史学』24号,1963.7)及び『築上郡志』(築上郡教育支会刊,明治45年)に詳しいが、その 概要は次のとおりである。

平安中期関白右大臣となった藤原道兼(藤原道長の兄)が宇都宮祖とされ、道兼の曽孫宗圓 (石山寺座主)が前九年の役の時、反乱の中心人物であった安倍頼時の調伏祈祷のため下野国 に下り、その後反乱が平定されたため下野国宇都宮座主に迎えられた。この頃より下野国との 関係が生じ、宇都宮惣領家は後々宇都宮検校及び日光山の別当職を継いでいる。

源頼朝の挙兵後、宇都宮氏は頼朝に属し、以後有力御家人として活躍し、豊前国宇都宮氏の祖となった信房も御家人としての活躍により、文治元年(1185)平家没官領を与えられた。それは、平氏方の有力武将であり、平家全盛時代に北部九州に勢力を張っていた大蔵一族である板井種遠の所領であった。板井氏は、豊前国仲津郡城井郷、築城郡伝法寺庄や豊前国衛田所、税所職を有しており、信房は、種遠の旧領をそのまま与えられたのである。信房は、その後も南九州の平家残党追討に功があり、豊前国伊方庄や日向都於院などの地頭職を得ている。こうして信房の子孫は、豊前の地に土着し、庶子は多く豊前国内に勢力をはるようになる。その一族は多く『太宰管内志』、『宇都宮系図』等に記載されているとおりである。宇都宮氏の本拠地は、板井氏と同様に城井郷であり、そのため城井氏とも称するようになるのである。なお、宇都宮氏の本拠地は、その後築城郡に移され、ここも城井谷と称されるようになる。この地は伝法寺庄内であったと思われ、仲津郡の紀伊谷より広く奥が深い場所であり、本庄城を本城として勢力を張ったのである。宇都宮氏は、4代目の通房(道房)の代には宇佐郡佐田庄の地頭職を得、筑後国守護職にも補任せられたりしており、子の頼房と共に鎮西宇都宮氏の勢力を最も伸ばした時である。

このようにして、宇都宮氏は豊前国一帯にその勢力を及ばし、子孫は国内各所に土着し、山田氏・中間氏・成垣氏・西郷氏・如法寺氏・佐田氏・野仲氏・友枝氏等を称するようになるのである。

この鎖西宇都宮氏は,南北朝期以降も活躍し戦国期までその勢力を有したが,豊臣秀吉の九

州統一後、領地を失ない、かつ黒田氏の謀略により、鎮房・朝房親子が殺されることは、よく 知られているところである。

なお、豊前宇都宮氏についての詳細な解説は、小川武志著『豊前宇都宮興亡史』(1988刊)に 記載されている。

2. 宇都宮系図について

宇都宮系図については

- (1)『姓氏家系大辞典』宇都宮の項,豊後の宇都宮氏
- (2)『太宰管内志』豊前之六,築城郡の項
- (3) 『豊前志』六之巻築城郡、茅切山城阯の項
- (4)『尊卑分脈』

に所収されており、その他に県文化会館(現県立図書館)の古文書調査の中で確認された『佐藤文書』の「宇都宮系図」がある。

このうち、『太宰管内志』及び『佐藤文書』所収の宇都宮系図は、資料編記載のとおりである。 特に『佐藤文書』所収の宇都宮系図は、鎮房・朝房親子の宇都宮本家滅亡後、朝房の孫の信隆 が家再興と代々の記録を後世に残さんがために作成したものらしく、各時代の記録はかなり詳 細にかかれている。『太宰管内志』所収の系図は、基本的には『佐藤文書』のものと同一であり、 途中若干の差異もみられる。

この『佐藤文書』の系図は、前述のように詳細に記載されており、この系図の内容を見れば 豊前宇都宮氏の本家の動向及び一族、家臣のあり方がよくわかる。

3. 宇都宮氏と広幡城

広幡城については、後述の松下辰章氏の論じてあるとおりであるので特にここでは書かない。 ここでは『太宰管内志』所収の「城井闘争記」に「鎮房家臣瓜田・春永両人水原村広幡城に在 し」としている点について若干考察したい。

宇都宮家の一族郎党は、かなりの数となるのであろうが、一応一つの城の守り手(城代)ともなればかなりの重臣と考えて良いと思われる。

『太宰管内志』豊前之六,紀井家の項には「城井家記」所収の一門の士が記載されている。 それを列記すると次のとおりである。

上毛郡山田城代山田右近

中津西郷ノ城代西郷刑部

馬岳城代長野三郎左衛門

角田尾城代賀来孫兵衛

上毛郡廣津ノ城代廣津角兵衛 川底ノ城代川底弥三郎 下毛郡津田城代城井五郎 日吉崎ノ城代原田伊豫 宇佐ノ立山城代真賀四六郎 宇佐龍王ノ城代城井三郎兵衛 伝法寺ノ城代伝法寺兵部 神楽城代白石加兵衛 田川郡岩石ノ城代佐々木雅楽 九十谷城代九十谷玄蕃 香春城代高橋九郎 海老野城代遠山孫六・末松加賀 上毛郡日野瀬定番渡辺右京 求菩提山定番塩田内記 友枝光明寺ノ城代友枝忠兵衛 壹戸城代壹戸與平

以上18ケ所の城代と2ケ所の定番が記載されている。また前述の『佐藤文書』所収の「宇都宮系図」の長甫の項には、自分は出陣せずに「城代十九ケ所ヨリ替々為将出陣ス」とあり、19ケ所の城に城代をおいていたともとれる。そうすると上記の18ケ所にあと1ケ所追加した位のものであり、この広幡城の守り手の将は、出陣の際に将となるべき一門の士ではなく、家臣団の一員であったものと思われる。

また、『太宰管内志』には、続けて「城井闘争記」の宇都宮家臣団を載せているが、この中にも瓜田・春永の名はない。系図中にも家臣の名として記載されていない。そのことで宇都宮氏にとっての広幡城の位置付けを考察するまでに至れるかは疑問であるが、一つの考え方は出せるかも知れない。

4. おわりに

以上、宇都宮氏について若干記載して来たが、宇都宮一族を含めた豊前宇都宮氏の全体像をつかむのは、まだまだこれからの課題であり、今回は、宇都宮系図を資料として提出することにより、宇都宮氏理解の一助になればと考えた次第である。

なお、宇都宮氏及び系図については、『如法寺』(豊前市教育委員会、1983、豊前市文化財調査報告書第 4集) II-3 如法寺関係資料で記したことを多く題材にしたことを追記しておく。

『太宰管内志』豊前之六,築城郡〔紀井宇都宮系図〕

関白藤原道兼 —— 中納言兼隆 ——	一 中宮亮兼房	
	——石山寺座主宗圓 —	宇都宮宗綱
		宇都宮宗房
		宇都宮朝綱
· .		
従五位下兼仲 —— 備後守宗房 —	— 宇都宮大和守信房 ^從	五位下法名道蟲建久六年
		1也 —— 成恒太郎昌俊 —— 遠江守政義
		一中間三郎房俊 ^{下毛郡内三十町}
	— 西郷刑部左衛門尉業	政自建久三年八月 —— 左近将監政家 ——
	四州市中土州门州来	八二日供奉
•	── 刑部業俊 ^{法名}	七 5 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年
	—— 刑部来後 昌資	— 右兵衛尉有家 —— 道有
	一在	
—— 宇都宮壹岐守景房 從五位下法名道友安貞三 二月五日七十六歲卒於約		<i>₩</i> - अ गार्थ
一字都宮次郎左衛門尉有房 —— 三河		
—— 如法寺信政 ^{法名} —— 新左衛門尉資信	一 太郎左衛門尉信定	^{法名} —— 又太郎盛信 ————————————————————————————————————
	太郎信言 —— 仲八屋 ^{五十}	町 —— 秀直
:		
── 肥前守公信 ^{法名覚豆} ── 弥太郎直信 ·	左衛門信貞	
——信冬 ^{法名} —— 讃岐守信家 —— 小山田		
一信言	件珍	
—— 宇都宮左衛門尉信景 從五位下左衛門	" 引导建久五年九州四頭奉行評定衆	
	病死,法名義閑云々	
一家房		
└── 参河守行房		
A/ ma //		•
宇都宮薩摩守道房程五位下評定衆,海海元年二月二六	法名尊覚後ノ名ハ可泉 日卒七十三歳	
友枝次郎	法名尊竟後1名八可泉 日卒七十三歳 左衛門道範	
── 太郎左衛門信範── <u> </u>	左衛門道範	
── 太郎左衛門信範── 友枝次郎	左衛門道範 太郎	

——宇都宮大和守頼房 從五位下評定衆,九州四頭奉行之随一也	
—— 次郎左衛門経房 貞和六年二月屬将軍 —— 次郎左衛門経房 _{任伊豫守}	
一 八郎道氏 ^{属官軍}	
上一 九郎實景 ^{道房宛行四十町}	
—— 宇都宮常陸介冬綱正四位下評定衆 法名宗開 曆應二年三月豊前守護職 ————————————————————————————————————	
—— 薩摩守豊房	
能登守仲房	
一 周防守公景	
—— 中務少輔師冬	
参河守隆冬 延文五年属官軍於筑後鰺坂ノ合戦討取少貳忠資·松浦吉種·佐志将監等 於權中報死,年三十一同年十二月征西将軍良懷為慰隆房之忠魂崇祭明神也 (房)	
—— 宇都宮常陸介 ^{中務} 友保 —— 大和守親綱 ^{豊州駅館川合戦之大将} —— 兵庫助重信	
一 宇都宮常陸介 兵部 家綱 從五位下法名義安母者名和伯耆守ノ女也 一 宇都宮常陸介 少輔 家綱 建五三年京都並中国合戦之時属官軍,人数三千餘騎 ————————————————————————————————————	
	_
———- 宇都宮常陸介直綱 ^{初名弥三郎} —— 宇都宮出羽守盛綱 従五位下弥六章名藤者丸、永和年中 <u>——</u>	\neg
唐船家士多戦死	.
14 A	
——宇都宮民部少輔家尚 法名道珍,至德三年 —— 常陸介俊房 道名 —— 越後守俊明 自應永十三年為 ——	
——宇都宮左馬助尚直應永九年十一月十六日卒六十九歲————————————————————————————————————	<u> </u>
——宇都宮播磨守盛直 ^{渡名義長} ————————————————————————————————————	\neg
女子 ^{伊藤重綱室}	
一 女子 ^{吉田宗種室}	- 1
—— 女 丁	
— дт	

	文明十八年二月五日	1午ハイハ収	宇都宮常 	المرسد الاسد	江州御陣之左 永正六年十二	.符也 .月二日卒八
	· .		│ ├── 女子 ^{彦山座}	主ノ室		
			— 日向守直			
	•		宇都宮豊		左馬助従五位 文明八年四月 母者大内義隆 義種公ノ時ノ	ノ女云々
					一生之間臨于 箇度遂不復献 月五月卒八十	·戦場五十七 ·弘治三年七
— 女子 ^{彦山成圓坊室} 典長甫異腹也	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1					:
— 宇都宮常陸介長甫	永正十四年八月一日 小戦則自身無出十九	l生,永禄三年四月 L所ノ城代,交為。	7上洛城井大藏赤隈 大将出陣,天正十七 ²	両人供奉云々 年四月廿二日	卒八十二歲 -	<u> </u>
— 宇都宮民部少輔鎖	方 初称與房遠国近 方 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	国自身出陣云々天	正十七年四月廿二日			
•	************************************	黒田長政所誅法名	宗永云々			-
— 弥次郎長房 ^{鎮房ノ身}	埋屍於城中	黒田長政所誅法名	宗永云々			
— 右近甫房 ^{鎮房ノ異母}	埋屍於城中 ^提 母弟也	黒田長政所誅法名	宗永云々			
	埋屍於城中 ^提 母弟也	黒田長政所誅法名	宗永云々			
— 右近甫房 ^{鎮房ノ異母}	埋屍於城中 ^提 母弟也	黑田長政所誅法名	宗永云々			
— 右近甫房 鎮房/異母妹 — 女子 鎮房/異母妹 — 女子 鎮房/異母妹 — 女子 鎮房/異母妹 — 女子 伸八屋藤右衛門室 — 宇都宮弥三郎朝房	埋屍於城中 埋屍於城中 為也	「公九州征伐之時 「公九州征伐之於肥 (故殿下之命济肥 (征伐之時清政為5	用房為先手云々 後ノ国為清政見誅干U 1.鈴朝房之怨霊成崇佐	寺十九蔵 《之		
— 右近甫房 鎮房/異母妹 — 女子 鎮房/異母妹 吉賀江六郎/室 — 女子 鎮房/異母妹 — 女子 伸八屋藤右衛門室	理院於城中 理院於城中 弟也 弟也 弟也 一天正十七年四月 下下 一月名宗傳, 清政陽朝之後, 養	「公九州征伐之時 「公九州征伐之於肥 (故殿下之命济肥 (征伐之時清政為5	用房為先手云々 後ノ国為清政見誅干U 1.鈴朝房之怨霊成崇佐	寺十九蔵 《之		

宇 都 宮 (佐藤文書) (一部略)

- 真楯 -		後長岡二位右大臣	—— 冬膈 点器	《政大臣正一位 "院藏人頭始 ——"位在大臣	—— 良房 摂改		
−基経。	哈宣公 《政大臣授政從一位		 数 数 句	— 師輔 号九條殿		徒一位 摂政大政大臣,	
- 道業 -	牙栗田関白正二位関白右大臣 —于時宮祖		c栗田左衛門 上 位中納言	—— 兼房 ^{HE:}	坐下中宫苑右将 _		
- 道長.	7.御堂殿《政大臣従一位						٠
* 	父字都宫 人後為兼仲絶而其身! 亦國為相猶子宗綱生! 亦仲朝臣依無子息取。 以五位下	作 医	不網 寶文八宗園	句			
- 张國字	子都宫座主 5山寺座主 ——中都宫小田等祖			七 层也		* *	
			快三郎 伊豆宁 万備後守 —— 従五位下	真父宗——信房 宗綱為			
	20111	1 インベビイロ mンボ	P 등 ML 1V jimit	(年韶八幡太郎	- 412 hv 15 11 Hm	ᄣᄱᄮᄮᇷᆔᄔ	मा कार

- 信一房 法号道 觀父者宗房也- 信一房 所來大和守徒五位上

仰下候仍執達如件 九州可被相鎮 事 綸旨此殊可致其沙汰之被仰使廳條可令存其之状所被

権中納言親俊

字都宮大和守殿文治元 200 六月十三日

人郡之内一萬五千餘町也文治元年頼朝公鶴岡八幡宮詣信房勤供奉 公於拝殿命信房為執行豊前国

寺参詣之時使信房掌豊州之一職也是時下賜綸旨然鎮房没落之時焼失焉 建久六年五月十六日右大将家天王内三百三十餘町宇佐八幡宮御領同二千九十一町十六人地頭職世々配分之

百里之外ョリ先例地頭六人成御家一百三十六町宛配分三百町西ュ三百町上下六百町此間百里ト云此内ョリ十六人之地頭職配分紀井三百町之事同国仲津郡今井之津ュ信房始着岸之時定云此津ョリ東江

豊前国岩戸見大	春日大明神明神 天昭大神 内侍所卜云大己黄命 贺茂之御事	信房勧請也大月	3 <u>대</u>	
—— 政房 3845/2 ——	—— 昌俊 成垣太郎 ——	一 政義 ^{選江守}		
	下後 下毛郡内三十町 中間三郎			
供奉 供奉人三年人月二日 第以 自建久三年人月二日西鄉刑部左衛門尉	」———政家 在近海艦—	——	——	
—— 業後 張号昌資				
— 景 房 法名道太安貞二年二年一章 房 意味守五位下	月五日卒七十六歲於鎌倉			
		房長 違馬兔行	之 字位内可	
—— 信政 #法寺主図		信足 姚佛 上京 大郎左衛門尉 —		
	────────────────────────────────────	信秋 門 門 門 市	一 満 信 重名鶴政	— 樲信 _{将大郎} -
•	信冬 茶葉	信家談學	— 重信 神弥	
	T Turtur			旧貞 九右ェ門太夫———
— 帐皿			<u></u>	
— 康信 区大郎 ———	武师 _{十名华} ——— 信神 _华	·太郎 ——— 信良	秀直宛行之仲八逞五十町	
		·	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· ·
—— 信息系 法号魏附寅治二年王信县 從五位下左衛門尉	十月三日於鎌倉病死			

建久五年九州四頭奉行主後者評定衆

豊前仲津郡紀伊邑

すメ置建久三年八月十八日祭之也守両使以右祭直又則鞍求菩提山大権現宝殿ニラ下知安楽明神下崇毘時ま士兵等伊勢守津江伊賀立町前下馬トカメ有故徳治元 二月大和宁頼房行ト云因茲一祈信景祭之永仁二年ョリ神前ョリ光有寅刻ョリナリウコキ其後称宣ニ付テ神前二荒鞍明神者信房秘鞍也宝治二 二月七日ョリ夜宝治元 Int 年八月朔日信景崇之

建治元年二月廿六日本道房 法名英党後可录 薩摩守正五位下評定衆						
信鶴 _{大郎左衛門}	—— 道範 堡持	-		•	-	
—— 樗岷川景	—— 磁後 荒尾					
—— < 編 本	—— 資道 赤腹光明	•				· .
	九州四頭奉行隨一也					
—— 盛房 大郎左衛門 以) 滋服正顧二年七月新日	स		•			
—— 経房 伊与守						
類所会ス 類所会ス 一味天王寺合戦 一味天王寺合戦 信軍院京都中国	五百豊州ヨリ西宮ニテーノ時三千余人義貞					
寶具京四十町道房宛行之						*

大和守法名宗附貞治五年二月三日京都卒七十歲法免宗陽貞治五年二月三日京都卒七十歲殊隆任評定衆 鎌倉在予建武三年二本国下今綱 從五位下正四位下 文保元年ョリ元徳二年マテ京

i 崩云 亦雖有勝利然一族以下被討者多因茲退征西将軍宮亦 冬綱家土芳賀五郎房前者臻矢中征西将軍宮脇菊池 馳着鰺坂衛舎弟参河守堅陣即時切崩討取隆房 冬綱使城井出羽守 宇都宮諸土守本国而其身卒二于五 兵 △松浦吉種佐志将監等三時於参河守陸房陣中而討死是時 長免訴也 延文五年八月筑州鰺坂之役菊池武光少貳大友○ 韓王之兼保免訴之菊池ト合戦時所之士民等勤是之事感 階應二年三月豊前国守豫職先例御教書右同 同国下毛郡

建武三年三月三日尊氏公賜御内書菊池三原等討伐

變阪陣 左 芳賀内記 概内若狭守 兵藤源五郎 1 日川権鳴 破本。 右 城井三郎兵衛 二 - 日米 黄五 和 為 生 岩 備ハ頭「トカシラニ士二十五騎宛也先跡同前 嬢本七百 高瀬七郎両ハ定百組頭也 定衆五百人五頭也重石五郎緒方斉助徳元 対馬両ハ定百組頭也 定衆五百人五頭也實行入道緒方斉助 皇房 薩摩守 仲房態等 **公景 ^{周防守}** 師冬中務少輔 女親編室 隆房 参河守

死年李三十一歲同十二月後征西将軍良徳為僰隆房忠魂崇宇都宮明神也月於筑州鰺坂合戦討取小貳志資松浦吉種佐志将監等於城井常陸佐陣中討延文年中南朝帝依下賜綸旨隆房出陣属征西将軍摩下會菊池武光同五年八

—— 重網 女保 親綱 大和守 ——— 重信 兵庫助豐州人費川合戦之時大将是

延元元年八月四日賜義貞御教書八幡山崎合戦大将是也

- 房家 在馬佐出羽守

訴年也是時香春ヲ土民依防戦菊池太宰府ニ引取家綱士民小忠テ感所ヲ長免テ命ヲ助出羽守者于五百兵以征西将軍六萬之人数ヲ切崩終討死ス永和ニ為後征西将軍田川郡香春城討死是時中国之大内介者菊池方ヘカウサレシ

- 直網 常陸佐

不忠ト是ヲ云カ 此合戦終末テ細川頼之以雖言上不達 上間帰テ不忠ナル事忠ヲ有合戦攸武光命ヲノカル故房家昔不及カ赤星トサシチカへ死ス出羽守房春ハ偽菊池ュ和儀メ武光トサシチカヘントス赤星是時豊州香春ノ城ニテ大内介カ出羽守トヤリタクヲンシテ命ヲ助ル

永和ノ合戦大内即此奥構事ニ付結句義満公ヨリ悪コト人細川頼之ト不和故ト云

盛 網 徒五位下 建石位下 经抵押 体六重名藤若丸出羽守永德元六月四日卒五十八歲 是家ノ土白川藤左衛門忠勝 進藤太郎 山田次郎 筑州博多二子討死 二十九歲 ………以服 、永和ノモゴノ大将ヲ討取則居能ヲ切取 五十一装 緒方次郎 八田太郎 栗田三兵衛三人ハ重手負 家 尚. 法号道珍至德三年三月二日卒 後明 聴永士三年ョリ後 明 越後守 後房 道鑒 秀直後見 尚 直 法号宗保滕永元十一月十六日卒六十九歲 盛 直 法名義長應永十二年九月十二日 华播廖守 ¥ 伊藤重耀宝 K 岩田宗 健室 左馬佐常陸佐従五位下 秀 直 法号安永 女明十八年二月五日卒八十六歳秀 直 常陸佐従五位下 十二月二日本八十七歳 法号宗仙永正六年 方川 俊州を 江州之御陣左将也前奥房ト云 ¥ 逐山座宝室 直 重 日向守文明十八年ョリ正房後見

母大内裁险女- 正异 法名承永弘治三年七月五日卒八十歳- 正异 左馬佐魏後守正五位下文明八年四月十日生

天文三年三月豊後国山香郷大牟礼山合戦之時突崩敵陣有無雙之働凡一生知其数云マ 義種公ノ時陣左也猛勢政来正房接戦斬敵六百九十一人也因茲敵之猛勢既敗北正房遂斬敵不享禄元年八月九日至 度合戦正房無不力戦同十七日敵卒

之間臨テ戦場総五十七箇度遂不合敵見其後云々天文三年三月豊後国山香郷大牟礼山合戦之時突崩敵陣有無雙之働凡一生

在陣左二是時值人数三百弐十

赤松右京介 神崎河内 加久久七 其貝太兵衛 中間次郎 加藤久兵衛 同三介進野蘇藏 赤限十郎 横聞主計 白石入道 佐藤脊内 緒方五郎 同左内渡辺三郎 和田四郎 佐野鳴伊兵衛 白川藤内 同番介 高瀬九郎 同与一江州河河 雕江伊賀 平野伊与 八西内藏介 友枝三吉 寒田彦七郎 高橋檐八

核ノ首六十一首城有別帝

手負 赤松右京介 加来久七 高瀬九郎 白川藤内 赤隈十郎五人討死 進藤蔵 友枝与吉 栗田彦七郎 三八同定衆二十六人

女 彦山成円房室 長甫ト腹替り也

吳甫

永禄年中大友宗麟筑後筑前出陣是時合力頼来不同心事 永禄十三年立花ノ城辺ニモ右同同年龍造隆信ヨリ頼来宗麟ヨリ使臼杵鑑速ヨリ告来也諸 ノ敵エ請ハ長甫鎮房勇誉アリ原田下総守親種ヨリモ同前也

鎮 序 法名宗永 天正十七年四月廿日五十四歲鎮 序 民部少輔 近国遠国大二自身出陣ナリ無双力

元称與房

永禄元正月廿五日上洛之時豐後沖ニ子俄悪風廿三供船共不行方鎮房乗船沖在是時 鎮房太刀ヲ海神与因茲順風トナル同年十一月帰国之時右之中通時海中ヨリウ・ リクワエテ鎮房ノ船来則右ノ太刀也故ウクイト名作者波平長サニ尺九寸天正十二 年秀吉公迄廻文於九州有不論之旨然鎮房不應焉却攻筑州岩屋城先猛勢實破扇子櫓 有抜群之劆自是秀吉公悪鎮房云々

同十三年日向国土護土持氏者元来大友宗麟部下也頌年無宗麟屡有間隙故土持氏敍 宗麟属嶋津義久宗麟怒而接戦友数度然義久為土持氏後詣之故宗麟不得勝利 請援兵於鎮房鎮房與大友家有内緣之故勠力同之雖以而勢挑戦然鳩津有五ケ国勢四 萬五千宗麟鎮房之兵士進一万餘也以軍兵不可當多則得利亦難乎鎮房無宗麟番濺使 宮川三味遺京師宗麟亦遺羽子但馬共訴義久叛逆於秀吉公使仙石権兵衛討義久仙石 庆逆謀瀾盛也仙石氏再訴於秀吉公秀吉公大怒而師師被出馬既而接載若干吏義久 **屈伏而和戆成矣此後朝房到先鋒鎮房有病而不出陣同十五年六月廿一日鎮房放和開** 之命而蒙秀吉公勘気蟄居于毛利意岐守領内赤郷遺岐守謂鎮房日不意有此不幸吾校 時宣說秀吉公則可有赦宥也暫寓居于吾領可也乃田川郡之内四郷附之鎮房謂彼雖慰 我然密偽謀夜潛出欲入木江城木江城長政既領之使大村氏三和氏居之鎮房急攻之大 村氏三和驚而逃去焉鎮房竊遺使觸于所々而催聚其部族等于人餘木江城 之競米森右馬頭褲元遣兵士二万加長政五千之兵都合二万五千兵長政引率之同十一 月中旬欲攻木江城鎮房朝房撰釋精兵七百人為三隊出陣子岩丸山去城二里許也長政 使大野小辨褲元使勝間田彦六左衛門為大将大野勝間田卒数千兵備魚鱗接戦移刻鎮

云々今循在焉云々是時鎮房侍童松田小吉者持鎮房之太刀待次席奮戦斬敵十九人而自盡醉而殺之長政悦而使然捨其屍然於捨之屍不動長政性之乃埋屍於中津城中鎮房業祠日長政招請鎮房於中津城修婚儀既而斃應宴五献酬焉鎮房漸醉矣長政豫伏兵何鎮房謀而不肯之同十七年重殿下命使份到来告之如前於是鎮房不触拒之同十七年四月廿従宝縣逃退于馬嶽城其後数度難交戰長政不得利而訴 秀吉公熟案曰不如容和議而中監長政忽敗北逃鎮房遂北可三里斬敵不知其数長政不得近木江城而遂敗軍儘為主六之首級朝房後見若甘而頗動供気鎮房 脇指 二隊之郡兵一同舉開聲衝長政陣之

大友宗麟ト数度合戦 #義統 == 鎖房幕下中证廻文 == 国中逆

幕下中へ密ニ廻文使其子細ニハ鎮房為国中ト追朗ニヲイチ豊前国中有国人十一人ニモ今度是非共頼被入候条ト次第ハ右同亦鎮房返同前因茲吉弘左近将監ヨリ鎮房ヨセクル事モ可有用心ノタメフレワタス然所ニ重テ吉弘左近将監ヨリ告来ハ幾重因茲傳法寺兵部津江伊賀白川蔵内城井大膳ヲ以国中之幕下中示聞ス今度定テ大友承知彦山者ハ敬神也宇佐大神モ同前也於鎮房悪逆トクミスル事ニアラスト返事也席ヲ被変候条今度両所ヲ可被迫候条近国ト云先陣頼候儀也鎮房迄ニ日兼テ宗麟如天正六年七月十三日ニ大友ヨリ道雪ヲ以告来者今度秋月等彦山座主舜有有縁ノ座

城井鎮水 吉賀江六郎 山田右近 西江刑部 神田入道鎮仍靠下中三八鎮好靠下中二八長野:"郎 仲人足嫌左衛門 高橋元種 中間三郎 八田太郎,

ソ事思と後悔無限ト沙汰ス也 故義経モ秋月彦山貴事殊延城井秋月彦山三ケ所ヲ敵ニシテハ帰テ九国之乱トナラ居城ヲ責事同年十月ヨリ同十年マテ四方戦争五年也雖然鎮房叶天理終逆党討鎮也也因茲秋月彦山之事ハワキニナリ国中ノ乱トナリ天正六年ヨリ国中逆党却而鎮房逆党ニハ中間三郎仲八屋藤左衛門高橋元種八田太郎長野三郎此五人大友ニ一味ス守先例鎮房一味ノ人々ニハ城井鎮兼吉賀江六郎山田右近西江刑部神田入道五人也

年十一月3リ国中太平国中ノ逆党累祖ノ志重恩依天命五ケ年ノ合戦一度モ不得利事鎮房武勇ト云依之同国中ノ逆党累祖ノ志重恩依天命五ケ年ノ合戦一度モ不得利事鎮房武勇ト云依之同

也鎮房無用ニ付後ハ長甫ヲ頼和儀トナル依然秋月并彦山ト無戦候事也同十三年ヨリ秋月種實ノ息女朝房室トナル故大友ヨリ前ノヒヲカヘシ和儀使度々

★ 在同断
 ★ 在同断者数还六郎室
 — 無房 在同断者数 以六郎 第
 — 龍房 有近
 — 長房 魏 房 果 母 来 也

朝房崇傳

天正十五年三月廿五日秀吉公着岸干豊前小倉也

朝房謁秀吉公

同四月秀吉公使攻巌石城丹波少将秀勝為大将秀吉公命朝房日岩石城主佐々木雅楽 者元鎮房ノ部下也頃年叛鎮房且企遭為諸士之汝其可討平之也朝房奉命突戦而楚十 六日而抜城秀吉公被称誉之又薩州征伐之時朝房為大宰府同六月廿一日秀吉公召朝 房日我今豊州逆党其領地悉没収之鎮房領豊州之北郡十二萬石之食禄也今為汝以伊 豫国内十二萬石之地為豊州之替地而被行之乃被感覚朝房之軍功ママ・・・・・・・・ 戴之辞謝曰自我祖信房受頼朝公之封以来累代領豊州既四百年也今被罷旧領尤所不 忍去也願令旧領無替則為大幸秀吉公大怒拒其命於是鎮房朝房共蒙秀吉公勘気即使 毛利营收宁浅野弥兵衛奪感書印章而鎮房旧領八郡之内東宇佐郡下宅郡上宅郡中津 郡京都郡此六郡黒田勘解由孝高以規矩郡田川郡此郡毛利壹岐宁鎮房朝房蟄居子赤 江鄉其後楯籠于木江城與黒田長政合戦矣同十七年正月饮秀吉公命而與長政和睦同 三月廿六日秀吉公有密謀而使朝房黒田吉兵衛遣加藤肥後守之許朝房之襲猶豫矣乃 使家士遠藤八兵衛報鎖房日今為殿下之使欲徃肥州恐為殺我之謀我家運盡於此不如 拒命而死於此城今往亦死不往亦死請受喜辩而已遠藤氏受旨告鎮房日我亦預之漫不 可徃肥州也然以命之難黙首黨両端此時鎮房之父長甫時八十二猶存矣告朝房日殿下 之命其重矣何為不徃哉遂従長甫之旨而與黒田氏共赴肥州以殿下之命告請政饗之陣 設備矣此間消政潜兵欲新朝房然處朝房勇猛而不果既終變之事畢而朝房庸于隨緊経 **営戒役士等日馆政必乗夜襲来乎汝等努力哉莫敵怠情焉同廿三日夜子刻膺政率諸士** 圍朝房館之四方総令焼館急攻之朝房使寺野典五郎登屋上鳥銃雨装中滑政甲冑堅然 **筺被創朝房距言日吾命盡於何為擊我之拙弱哉他日黄泉之鬼而報然而己言畢而火自**

清政得朝之後慶長元年八月崇彼霊而宇都宮大明神即一所四所神是也例死矣時十九歲 秀吉公朝鮮征伐之時清政為先鋒其間朝房之怨霊成出崇若干度也

在人百三十人ナリ 朝房肥州沿行連人数百九十人内 二十人筑州ョリカへス

小路源太郎八滑政内滑原三介下サシチカエ死ス松田弥五郎八朝房ョリ背政〈御書置持谓改一見〉後助二有扶事也是そ自害ス清政被感候寺野三五郎八滑政二生捕卜イヘト翌日自書ス也術 永弥作兵術 同源兵衛 雑兵共百弐十九人 下 本庄甚兵衛形見持落ス井左内 佐藤與右衛門 緒方 同惣兵衛 同藤五 同甚兵衛 小野市介 傳法寺陳兵郎死 池永眷内 遠藤孫十郎 同内記 同忠五同 五同藤内 今村新八 高瀬五郎 長牌法古韓兵衛 糸原内記一日先へ遣朝两城本三十人二宅三太夫 高橋久右衛門以上五十人即法は

- 女子

- 朝 夫 法名微照 - 寛永十一年正月二十三日卒四十三歳- - 朝 夫 弥左衛門

云々產朝末得免命也大阪之役朝末欲奉属大神君摩下然不幸有病三年不愈焉故失其素志在胎内县政家士井上九郎小河傅右衛門謂長政令朝房妻而密逃也其後還子彦山寶珠天正十七年四月廿日黒田長政以偽謀家擊鎮房而木江城亦陥矣捕朝房之妻是時朝末

- 信隆 寬永九年四月十日生

- 漸௸ _{釋力}

- 女子

延寶四年 長/七月吉日

信隆 (花押)

廣幡城と城井宇都宮氏

廣幡山は、東に岩丸・奈古の谷、西に小山田谷、その間を北に向って延びた山稜の突端にある。西隣にも並立する山塊があり、之は「鳶山」という。北麓は岩丸・小山田の両川の合流する処、岩壁を噛んで渦を巻く景観は見るからに其の昔の要害を思わせる。歴史に徴するに此の地には、古社「廣幡八幡」が鎮座し、又中世には「廣幡城」の備えがあったという。西に並ぶ「鳶山」は其の名の如く「烽台=トビヒ台」の設けられていた処。共に「城井城塞群」の北の備えであった。

一、廣幡八幡

「越路村日吉神社」の項に「境内社。八幡神社、明治四十年十二月。水原宮悟より遷したる古社廣幡八幡社なり」(築上郡史)とあり、又「太宰管内志」には「廣幡は比呂波多と訓むべし。元享釈書廿巻に云"我は是第十六ノ王營田天皇廣幡八幡也"とある。其の御名を其ままにて祭れる社に負せたるものなり」……又云「築城郡廣幡八幡は越路村の南、水原村ノ北に有て両村の堺なり。比の社の事早くより論ありて今は何れの内とも定め難し」〔註・中世奈古の荘妙見宮の勢力比の社を覆い、社領押領の事あり〕……・更に小出氏云。「比の社(越路日吉社)より半町許上に廣幡城のあとあり。今は僅かに二尺許の小祠なれども、昔は神殿二間に三間、廻廊は二間半に五間ありて、又御供殿、古鳥居、大燈籠、御手洗などありて大なる社なりしと……」「今も越路村の内に二月田・九月田・御供田・鳥井田などの名残れり」

二. 廣 幡 城

- ○豊前古城記「廣幡城・右は宮原中将と云者切開く」。とだけ見える。比の要害の地をトし、八幡社を守護として砦を築いたものと推する。宮原中将なる武将については分明を欠くが、恐らく南北朝対立時代(南朝・正平年間、北朝・貞和年間1340年の頃)南朝宮方勢として、豊前に下向した新田義基(馬ヶ岳)世良田貞義=代々大膳太夫を称す(畑)等に組した部将ならん……とされている。
- ○時代が降り應永年間(1390~)南朝北朝の合一は成ったが、世情相変わらず騒然。城井谷に 盤居した宇都宮氏(専ら城井氏と称す)は時勢に應じ、十指に余る城塞群を築いて非常に備

えた。その北の備とされたのが廣幡城と赤幡城である。

應永 5 年(1398), 世にいう「應永の戦乱」が起った。豊前守護職大内義弘に対する大友氏鑑の「豊前独立戦」である。此の時「城井の党」は或は大内方に,或は大友方にと分裂加担した。当時大友方に加担した世良田大膳太夫(諱不詳)は大内守護勢に敗れ降伏した。(比の時宮原氏の動静不明)

- ○弘治2年(1556),豊後大友義鎮(宗麟)は、内乱によって滅亡した大内氏に代り豊前を征服せんとして侵攻してきた。豊前の将士抗し得ず、その軍門に降った。
 - ※ 郷党に残る傳承に依ればその時"切支丹大名宗麟の為比の地の社寺悉く破却された…… と"
 - ※ 其の後世良田氏の名は地方史から消えている。
 - ※ 前掲「廣幡八幡の項」にある如く、一小祠のみ永く残り、地人比の辺を「八幡堂」と称した。
- ○平文年中(1532~)城井正房 長房は時勢に即応して再び「城井城塞群」を強化した。「天 文年中戦出入人数積」の古記録によれば「廣幡城・瓜田讃岐春永・二千七百石・兵数欠」と なっている。〔註.二千七百石は勢力下の収穫高と考えられ、他の城塞の石高と兵数を勘案 すれば、十四~十五石が兵一人に当る。廣幡城の兵員百八十人か〕

三. 豊臣秀吉, 九州平定

失い、四百年間に亘る支配者は消された。

- ○天正15年(1587),春三月から豊臣秀吉の九州平定戦が始まった。前年暮から小倉に駐留した毛利勢は、緒戦として「城井党」の川底城及び宇留津城を攻略した。年明けて羽柴秀長は築城原に「陣揃え」をおこない豊後路へと向った。太閤秀吉は京都郡馬ヶ岳城に本陣を進めた。比の時「城井の党」は或は豊後勢に加わり或は本陣秀吉の軍に参じたが、宗家たる城井鎮房の動向は鈍かったという。それは硬骨を以て鳴る彼を想う時肯ける。今秀吉が馳向わんとする香春高橋元種も英彦山僧徒も添田巌石城も永年に亘る一味ではないか。特にその向うにある秋月家は嗣子朝房の室龍子の実家である。之は単なる優柔不断を以て律する事は出来ない。それはさて置き太閤秀吉の勢は疾風の如く南下した。皆その威風にひれ伏した。5月薩摩鳴津氏が降伏して征旅は終り7月博多(一説馬関)で論功行賞。各地の新領主が補任された。企救・田川二郡毛利勝信。他の六郡黒田孝髙(嫡子長政)とされ、「城井の党」は所領を悉く
 - 〔註. 陰徳太平記には「城井氏は上筑後に於て二百町を賜わる」とあり、城井闘争記等には「四国今治に於て十二万石を賜わる」とある。それに対して鎮房「御朱印返上・再考を願上……」となっている。

四. 城井谷合戦

- ○一旦は田川郡赤の郷に隠棲して「追っての御沙汰」を待った城井鎮房及一族も、十月一日遂に意を決して故城に帰り、黒田氏が置いていた城将を追うて挙兵した。これは黒田氏としてはかねて期した事でもあり、黒田長政は「城井討伐」に乗り出した。折柄同勢していた毛利氏の部将勝間田彦六左衛門〔陰徳太平記には内藤庄左衛門〕の援を請い総勢三千騎城井谷に向け進攻した。城井谷を攻めるに三路がある。(→)は城井谷を正面から攻める方法で、それには難険といわれ、過去何度か攻囲軍が苦闘した轍を踏まねばならぬ。(□)は犀川谷・伊良原谷を制圧し、途中から東へ越えて城井谷に踏み込む戦略。(□)は岩丸谷を押して行き、途中から西へ攀じ、小山田谷の谷詰の辺を廻って櫟原に突出する計。黒田長政は第三の路をとった。
- 〇此の攻め方では先ず「廣幡城」を陥さねばならない。廣幡城は正面たる南と東からは攻め難い。其処は自然の濠たる岩丸・小山田川があり、急峻なる竪濠も設けられている。黒田方は西隣に並立する「鳶山塞」を攻めとり広幡の背後に出る方策を樹てた。「鳶山」の西麓に今も其の名の残る「コベン坂」がある。先陣を承った大野小弁正重が攻め立てた処である。「鳶山」を攻略した黒田勢は広幡城を「袋の鼠」にした。
- 〇此の事態に至って城将爪田春永は降伏した。長政は「降」を容れて彼の手の者に「道案内」を命じた。南へ続く尾根道は割合坦々として「馬道」が続く。本隊は奈古・岩丸の谷を行く。行くこと二十数町、「中園」辺から右四へ山に登る。之もかねてから城井勢が設けた「騎馬道」である。山尾根伝いの道は行く程に狭まって、やがて右手に小山田谷を見下し、左手はこれも又岩丸谷を見下す処に出る。土地の人がいう「白岩道」又は「馬の背越」である。この道は約半里で櫟原の「黒岩越」いわゆる「城井谷の腹部」に出る……・筈であるが……。
- ○果然「馬の背越」に城井勢は伏せていた。城井闘争記によれば「……伏勢様々静まり返りて音もせず。敵何心なく打過ぐる時、伏せたる勢鉄炮の者、さっと懸出で散々に打放つ。敵思いも寄らぬ事なれば進退に迷いただよう処に後の武者鯨波をどっと作りかけ会釈もなく馳落す。寄手さわぎ引かんとすれば後に多勢満々たり。進まんとして打か、られ、立返らんとして途に迷い山より下にまくり落され、水田の深き谷底に人々雪崩を築いて落ち重なれば、敵に逢うて討死する者は少しと雖も大刀長刀に貫かれ死する者数を知らず……」と。先手の将大野小弁正重は黒田長政の身代りたらんとして「われこそ黒田長政なり」と名乗って戦ったが、あえなく塩田内記に打取られ、二番手の将勝間田重膳は山尾根を退きつ、兵を纒めんとしたが「市道」で急追して来た新貝荒次郎に討たれ、全軍潰滅した。主将長政は「小川谷=オゴ谷」といわれる小谷に迷い込み水田に踏込み、麾下の者の馬を乗り替え乗り替え辛うじて「馬ケ岳」の城に辿りついた。此の戦を世人「城井谷峰の合戦」といった。
- ※ 此の戦, 黒田勢の首級八百余は「黒岩越」の杣道に懸け連ねられたというが, 他日纒め葬られて「首塚」と称した。永年伝承ばかりで所在不明だったが, 昭和53年道路工事中, 夥だ

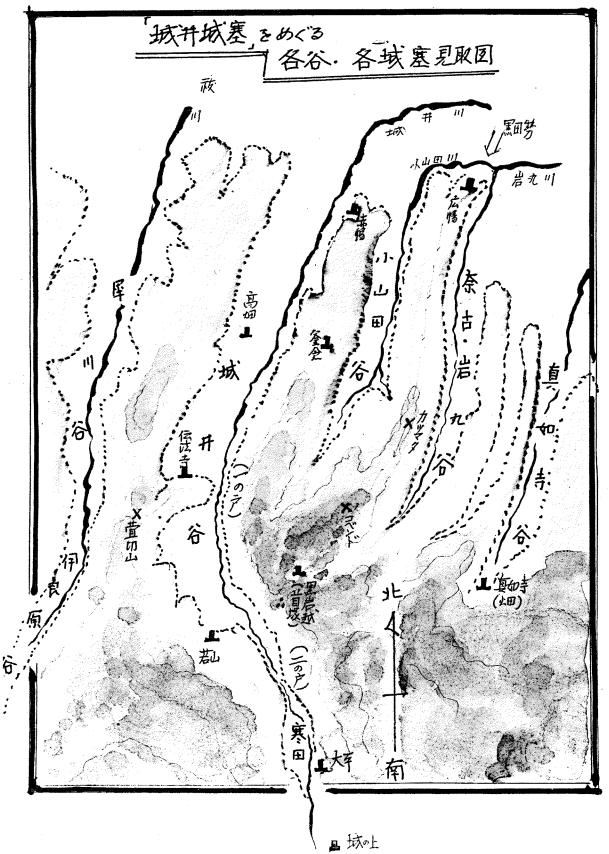
しい「石佛」が現れ」首塚には佛様が埋められている」という伝承が実証された。

- ※ 大野小弁の墓・勝間田重膳の墓、共に戦死した現場というに建っている。 [地名をもコベンド・カツマタと称す。]
- ※ 道案内をした爪田春永は其の儘求菩提山にこもり十余年の後水原の地に帰って「長寿庵 =現長寿寺」を建立専心回向の道に入った。子孫代々其の跡を嗣ぐ。
- ※ 挿話あり「椿の朸(オウコ)は滅多に使うな」と今も云う。此の戦に参じた里人、武器 代りに薪等を担う「オウコ」を振って黒田勢を突き落し、拂い落したが故……という。

五. 城井氏滅亡

陰徳太平記に云う「同年十一月十二日,太閤の台命により吉川径言(のち広家)雲伯の兵一万六千騎を率い小倉着。直に発して十六日萱切山〔註.犀川谷を上り横瀬という処より東に攀じて城井谷本庄を眼下に見る個所〕に到着,其の勢一万騎,黒田父子も二千騎を以て陣を布く………。」このたびは堂々の陣備えでひた押しに本庄盆地を攻めのぼり「寒田口=二ノ戸」に至って投降を奨める使者を出した。「………先日一戦の科は太閤殿下に御免願い……本領相違なく黒田より相渡す様申すべく候……。」本城大平城では軍議に手間どったが鎮房は之を容れるに決した。……「極月までに領内悉く平らぎぬ。」

- ○此の止戦条件、城井方は「和議成る」と受取り、黒田方は「他日機を見て……」とした。 ※ 城井闘争記等後年編纂された記録書には「此の時鎮房の娘鶴姫と黒田長政の婚姻が定まった」とあり、黒田家譜には「……弥三郎朝房、鶴姫は共に人質として差出された。」とある。
- 〇年明けて天正16年(城井方資料では天正17年)4月,世子朝房には「如水黒田孝髙に随い肥後の国人一揆鎮圧に赴くべし」とあり、当主鎮房には「新城中津城に参向されたい」と招請があった。朝房は部下24騎と共に肥後に向って進発した。一方鎮房は四月二十日意を決して中津城に参向。城中で消えた。遺骸は城門の傍に埋められたという。従う者23騎、「供待」に当てられた寺町の「合元寺」で襲われ全員斬死した。
- ○翌四月二十一日,長政は寸刻を置かず,寒田大平城を襲い,集落一帯に火をかけ焼土と化し,御隠居長甫を斬り,主だった女房共16名を中津に引立てた。不日此の女達は中津河原で磔刑に処せられた。(宇賀神社記・城井谷物語等)
 - ※ この挙極めて迅速なりしか、大平山麓の通称「溝口屋敷」には焼かれし遺構出土すれど 背後に聳ゆる山城跡には証跡見当らず。又「詰城=かくれ城」とされた「城の上城址」に も戦いの跡なし。憶うに老幼婦女子も避退の暇なかりしとみゆ。
 - ※ 但し伝承あり。「朝房室龍子は当時懐胎中なりしが老臣池永善右衛門謀り「身代り女房」 を立て密かに彦山へ逃れたり……と。他日彦山下宝珠山にて出産、遺孤と共に実家秋月氏



第 95 図 城井谷をめぐる見取図(松下辰章原図)

の鏑地日向高鍋に寄りたり……と。

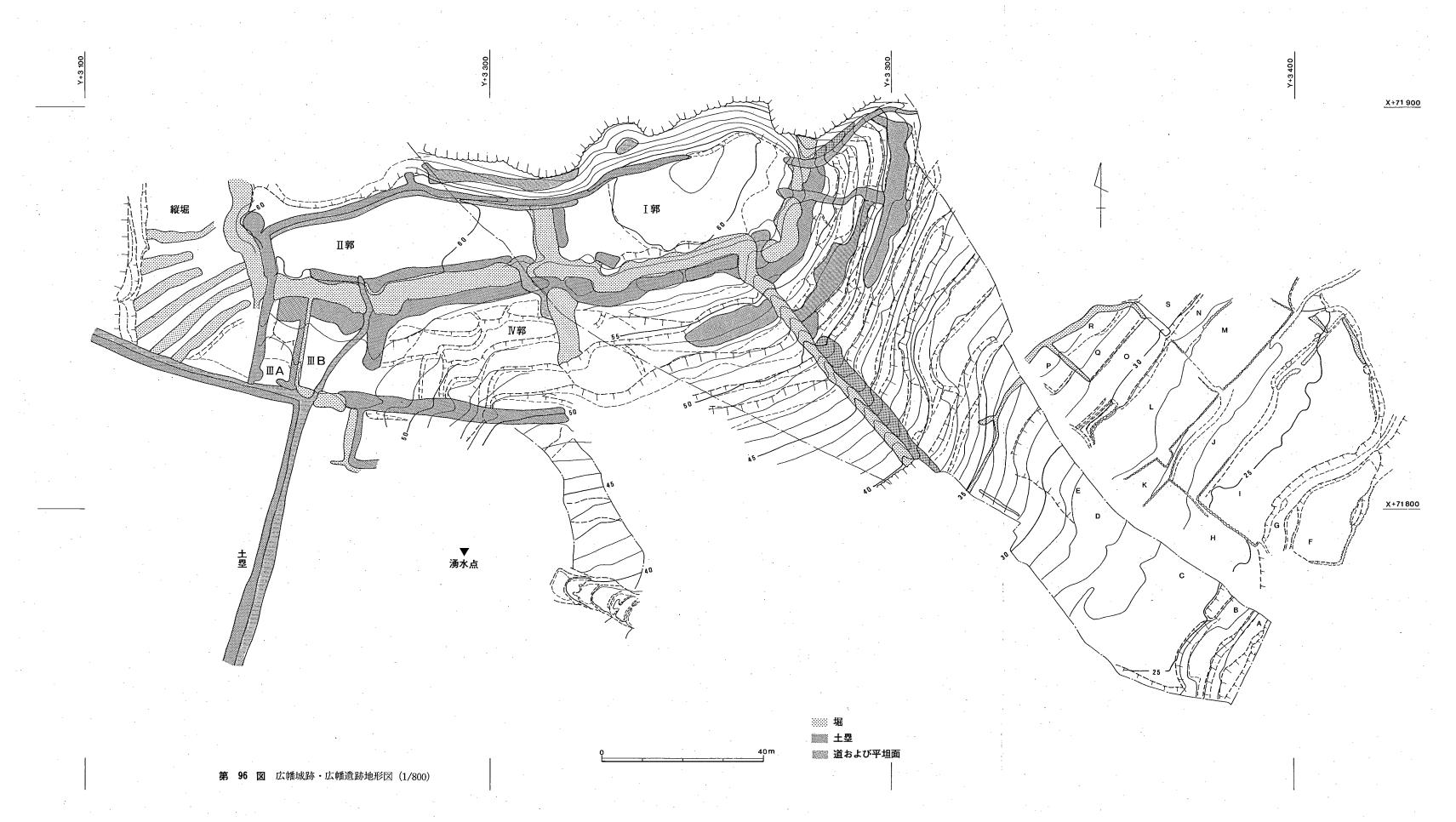
〇是より先,命により肥後に赴いた城井朝房は,四月二十三日肥後玉名郡木の葉宿にて,加藤 清正の手の者に襲われ摩下24騎と共に横死す。年十九才。同所宇都宮大明神(肥後宇都宮隆 房卿をまつる)に合祀せらる。城井寒田における変と同時に,朝房の許に馳せた家士達もあ りたれど,空しかりしという。

備考

(一)元禄年間,黒田氏に嘱されて「黒田家譜」を編纂した貝原益軒は,豊前を遍歴して「豊前紀行」を書いた。其の中に「城の上城」見聞を詳細に記している。そして其の後そこを戦の舞台と誤認して「城井谷合戦」を「家譜」に載せた。いわゆる「城の上城」は「詰城」であり本城は「大平城」たる事を知らなかったのである。



Photo. 23 宇 都 宮 鎮 房 の 墓



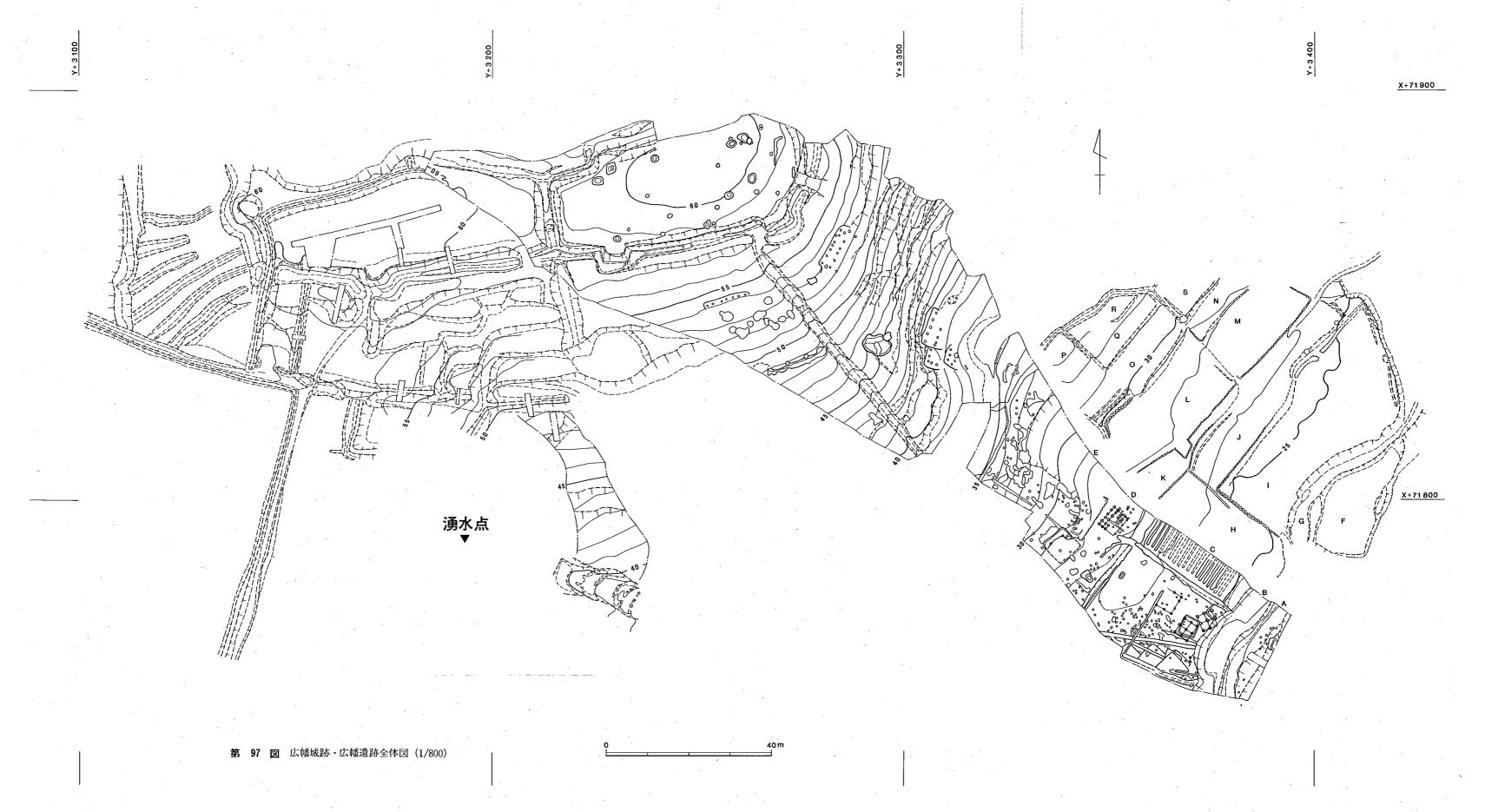


図 版



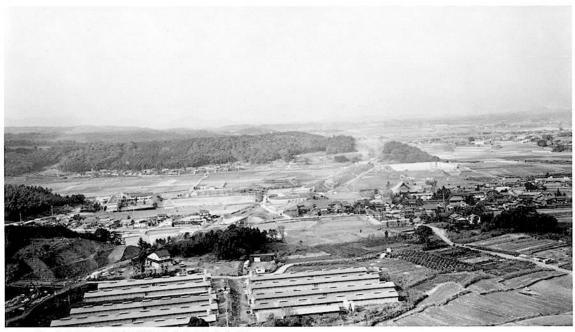
広 幡 城 跡 周 辺 航 空 写 真 (国土地理院 KU-72-IX CI-4)



広幡城跡全景航空写真(東から)



1 広幡城跡航空写真(東南から)



2 広幡城跡航空写真遠景 (東南方向から)



1 広幡城跡航空写真(東から)



2 広幡城跡航空写真遠景(北から)



1 広幡城跡航空写真(東から)



2 広幡城跡航空写真(西から)



 広幡城跡遠景 (北から)



 広幡城跡遠景 (東から)



3 バイパス開通 後の広幡城跡 (東から)



1 広幡城跡 調査前 気球写真 (東南から)



2 広幡城跡調査前 I 郭 部分気球写真 (東から)



3 広幡城跡調査前 I 郭 の堀・土塁気球写真 (東から)



1 広幡城跡と広幡遺跡全景(東南から)



2 広幡城跡全景気球写真(東南から)



1 広幡城跡全景気球写真(東から)



2 広幡城跡 I 郭気球写真(南から)

図版10



 広幡城跡 SR1 (東から)



2 広幡城跡 SR3 (西から)



3 広幡城跡 SR4 (南から)



 広幡城跡 SR2 (東から)



2 広幡城跡 SR2 下石組(東から)



3 広幡城跡 SR2 下石組(西から)

図版12



1 広幡城跡 SR2 下石組(南から)



2 広幡城跡 SR2 下石組(北から)



3 広幡城跡 SR11 下石組(北から)



1 広幡城跡 SR11 (東から)



2 広幡城跡 SR11 下石組(東から)



3 広幡城跡 SR11 下石組(南から)



1 広幡城跡堀I区 とSR11(東から)



2 広幡城跡堀Ⅲ区 とSR10(東から)



3 広幡城跡堀Ⅲ区 とSR9(東から)



1 広幡城跡 SR6



2 広幡城跡堀V区 とSR(東から)



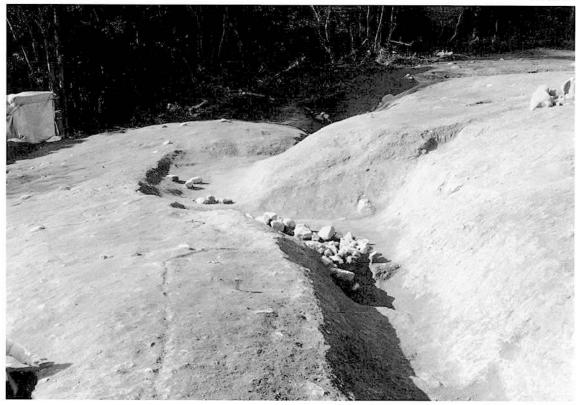
3 広幡城跡縦堀と SR7(東南から)



1 広幡城跡堀N区SZI (北東から)



2 広幡城跡 SZI (南西から)



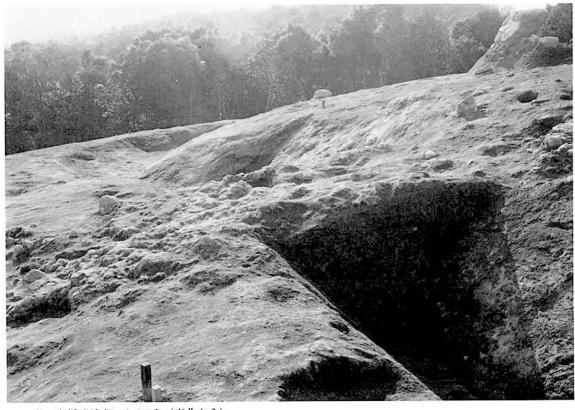
1 広幡城跡堀Ⅱ区とSZⅡ (東から)



2 広幡城跡 SZⅡ (南から)



1 広幡城跡 SR5と階段 (東から)



2 広幡城跡虎口とSZI (東北から)



1 広幡城跡虎口と I 郭内(南東から)



2 広幡城跡 [郭内礎石群 (東から)



1 広幡城跡 SS1 (東から)



 広幡城跡 SS4 (北から)



3 広幡城跡 SS5 (北から)



1 広幡城跡 SS2 (南西から)



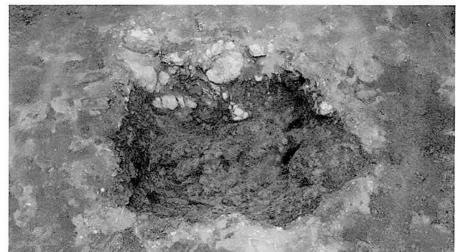
2 広幡城跡 SS3 (北西から)



3 広幡城跡 SS9 ・10 (西から)



 広幡城跡 SK1 (東から)



2 広幡城跡 SK3 (南から)



3 広幡城跡 SK5 (南から)



1 広幡城跡 SK6 (北から)



2 広幡城跡 SK7 (南から)



3 広幡城跡 SK7 (南から)



1 広幡城跡 SX1 (真上から)



2 広幡城跡 SX1 (北東から)



1 広幡城跡 SX1 (南西から)



2 広幡城跡 SX1 の礎石(南から)



3 広幡城跡 SX1の 壁溝 (南西から)



1 広幡城跡 SX8 (真上から)



2 広幡城跡 SX8 (東から)

3 広幡城跡 SX8 (西から)



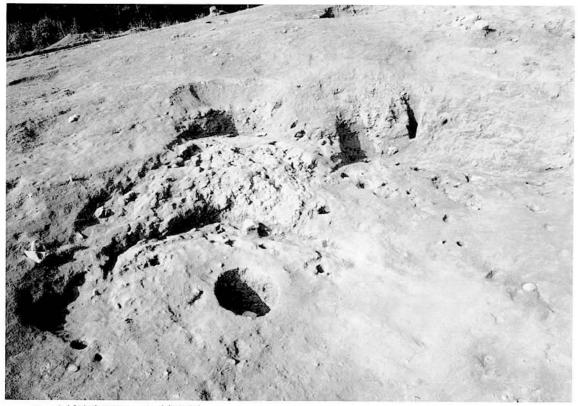
1 広幡城跡 SX5~7 (東から)



2 広幡城跡 SX5~7 (真上から)



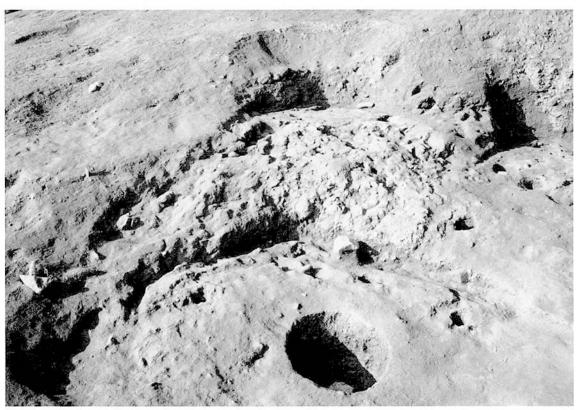
1 広幡城跡 SX5~7 (北から)



2 広幡城跡 SX5~7 (東から)



1 広幡城跡 SX5 (東から)



2 広幡城跡 SX6・7 (東から)



 広幡城跡 SX2・4 (南東から)



2 広幡城跡 SX2 (北から)



3 広幡城跡 SX9 (東から)



1 広幡城遺跡1号 火葬墓検出状態 (南から)



2 広幡城遺跡1号 火葬墓検出状態 (真上から)



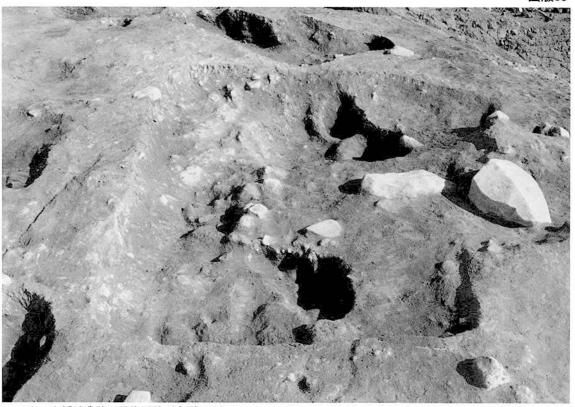
広幡城遺跡1号火葬墓断面(南東から)



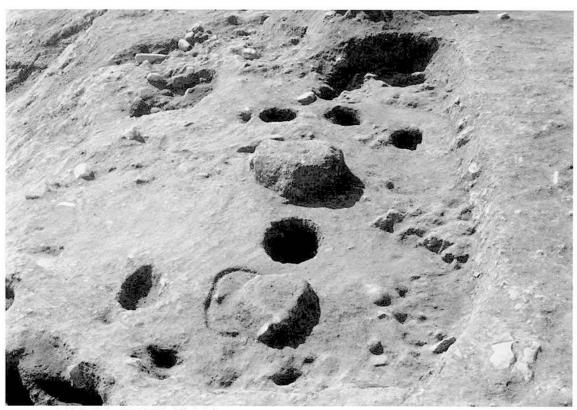
1 広幡城遺跡1・2号住居跡(北東から)



2 広幡城遺跡1・2号住居跡(西から)



1 広幡城遺跡 3 号住居跡(南西から)



2 広幡城遺跡 4 号住居跡(北から)



1 広幡城遺跡 5 号住居跡 (西南から)



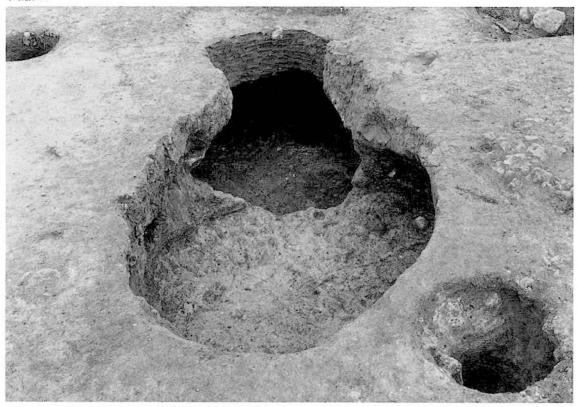
2 広幡城遺跡2~9号貯蔵穴(南から)



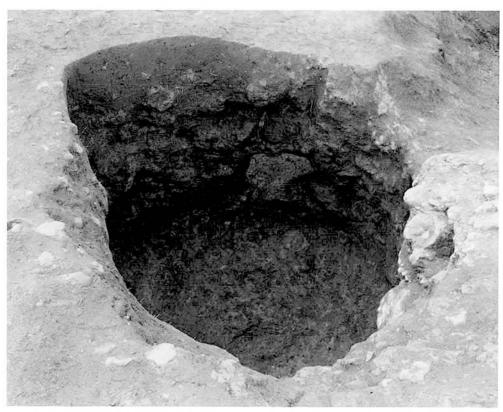
広幡城遺跡1号貯蔵穴(北から)



2 広幡城遺跡 7 号貯蔵穴(南から)



1 広幡城遺跡2・6号貯蔵穴(南から)



2 広幡城遺跡 8 号貯蔵穴 (東から)



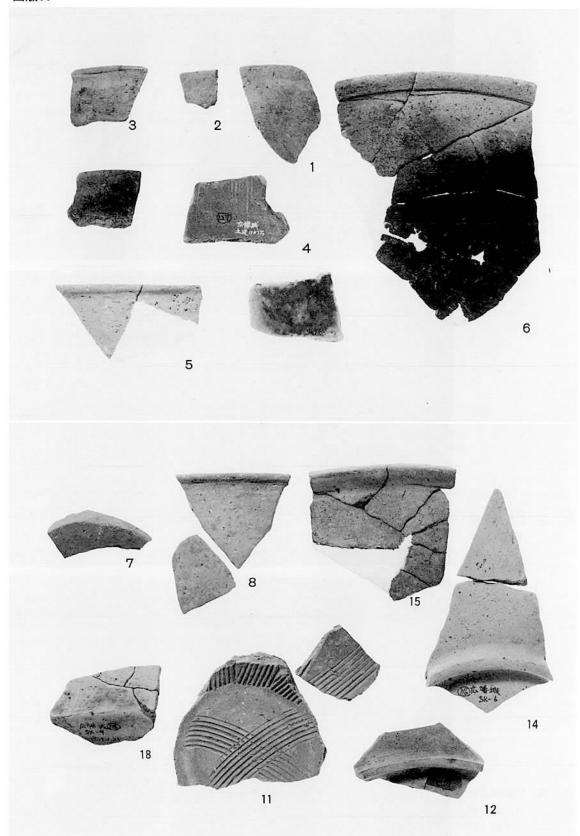
広幡城遺跡
 3号貯蔵穴
 (東から)



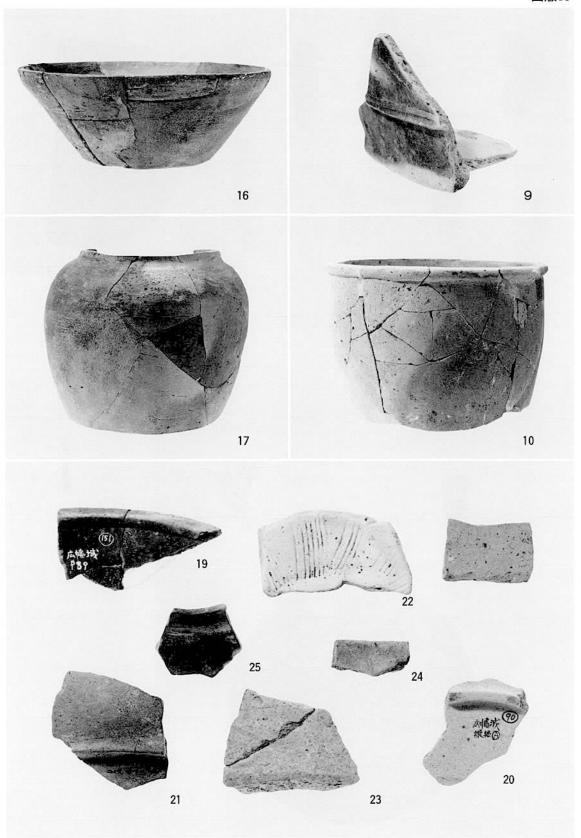
2 広幡城遺跡4 号貯蔵穴(東から)



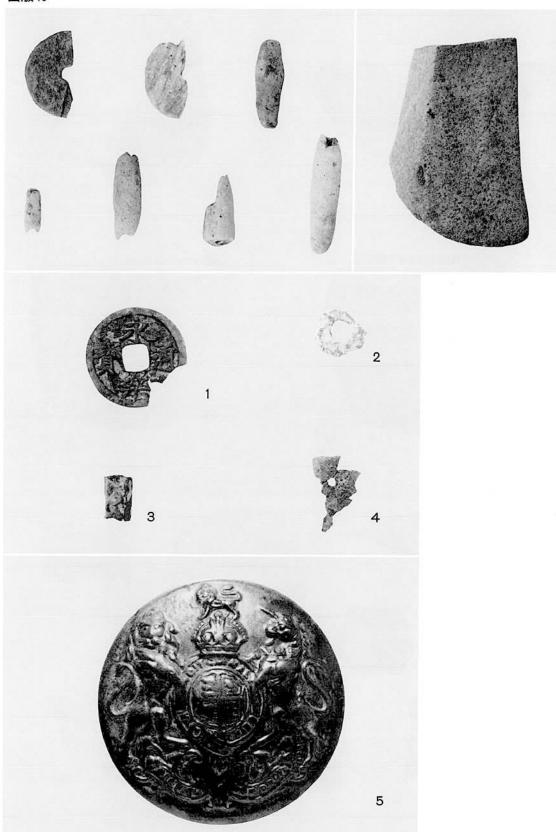
3 広幡城遺跡 5 号貯蔵穴 (北から)



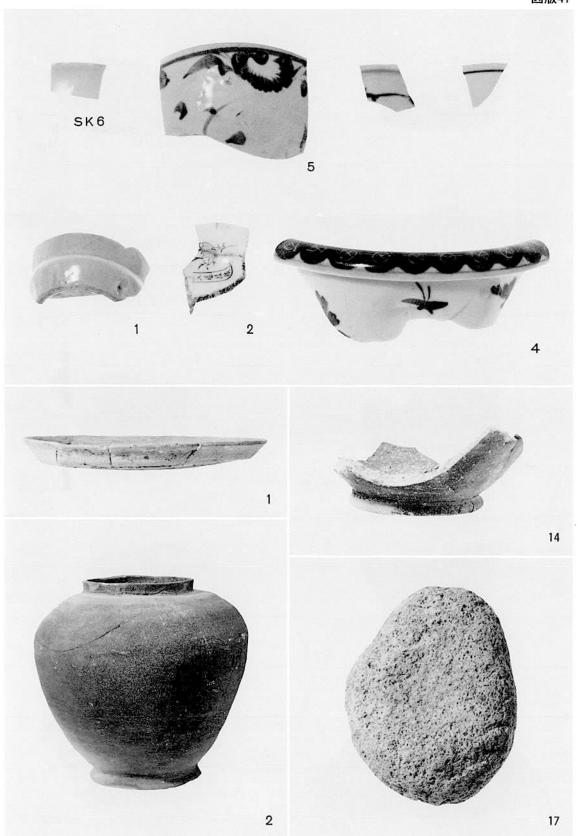
広幡城跡出土土器



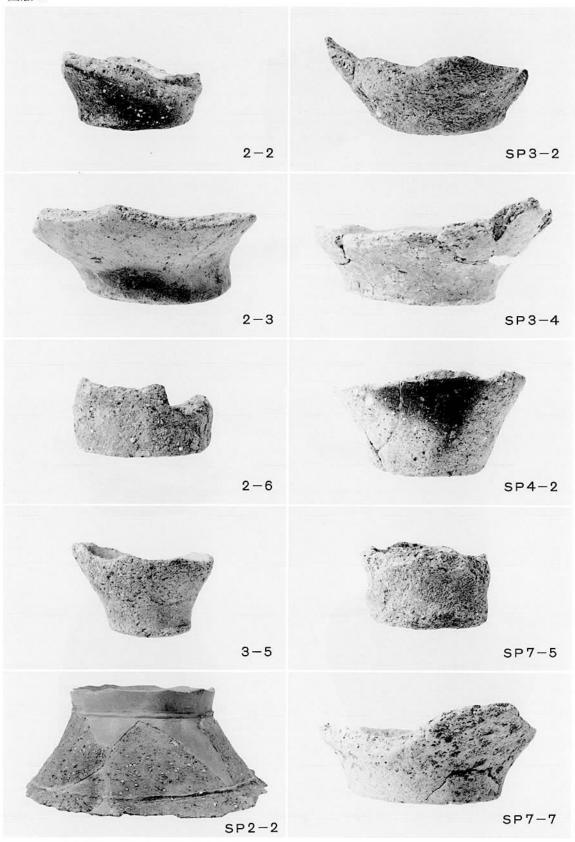
広幡城跡出土土器



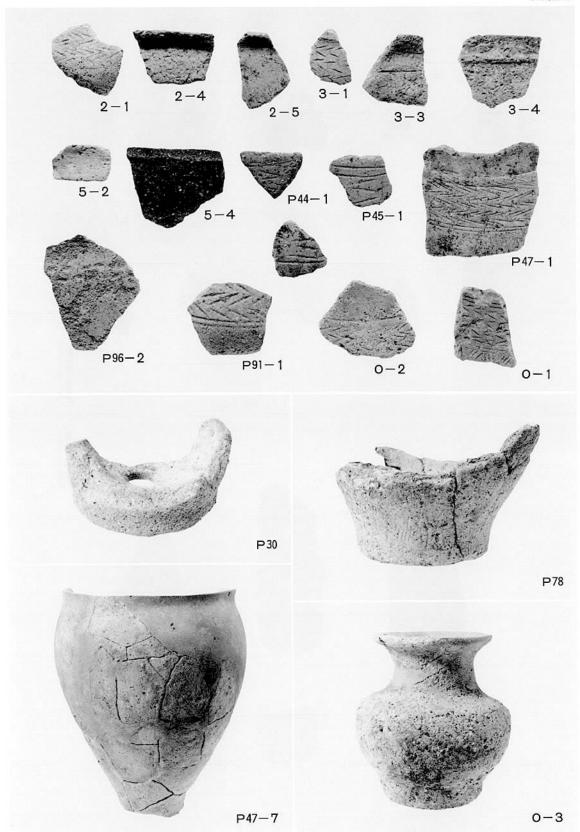
広幡城跡出土土製品・石器・金属器



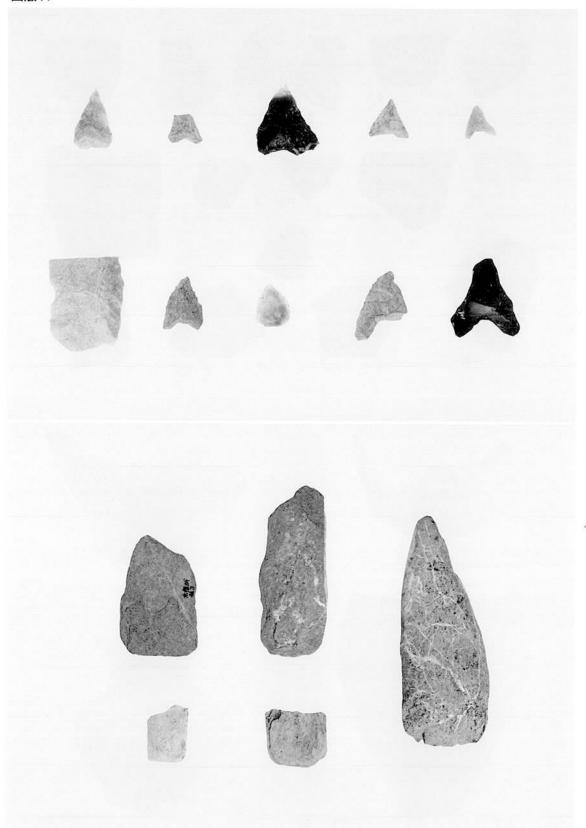
広幡城跡出土陶磁器・骨蔵器・須恵器・石器



広幡城遺跡弥生住居跡・貯蔵穴出土土器



広幡城遺跡出土弥生土器

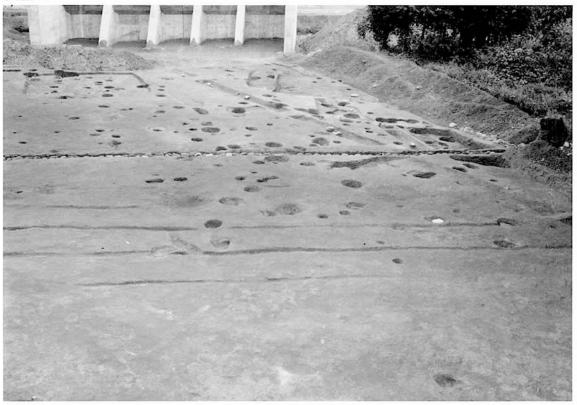




1 広幡遺跡全景(南東から)



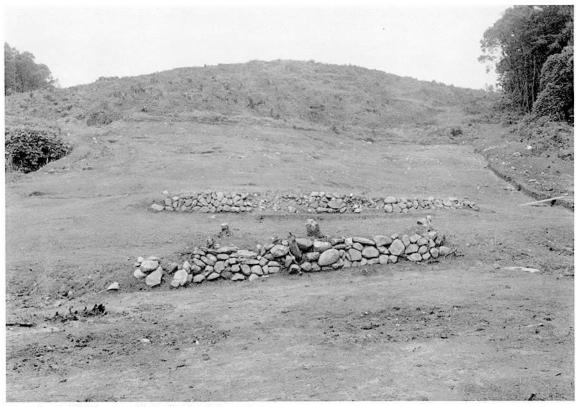
2 広幡遺跡全景(北西から)



1 広幡遺跡東半部全景(北西から)



2 広幡遺跡1号建物跡(南東から)



1 広幡遺跡1・2号石垣全景(東南から)



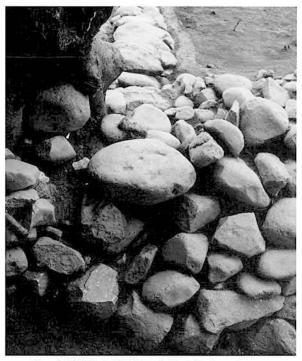
2 広幡遺跡1号石垣 (東南から)



3 広幡遺跡2号石垣 (東から)



1 広幡遺跡3号石垣(東南から)



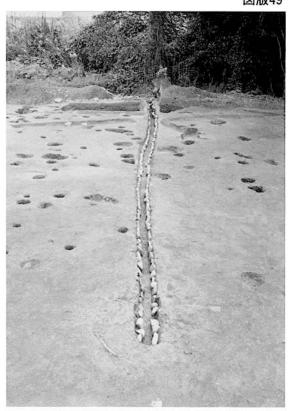
2 広幡遺跡3号石垣と暗渠(南西から)



3 広幡遺跡3号石垣と暗渠〈蓋石除去後〉 (南西から)



1 広幡遺跡暗渠全景(北東から)



2 広幡遺跡暗渠全景〈蓋石除去後〉(北東から)



3 広幡遺跡暗集全景(南西から)



4 広幡遺跡暗渠の一部 (東北から)



1 広幡遺跡1号土壙(東から)



2 広幡遺跡1号土壙〈礫石除去後〉(東から)



広幡遺跡
 2号土塘
 (南東から)



2 広幡遺跡1 号墓 (東南から)



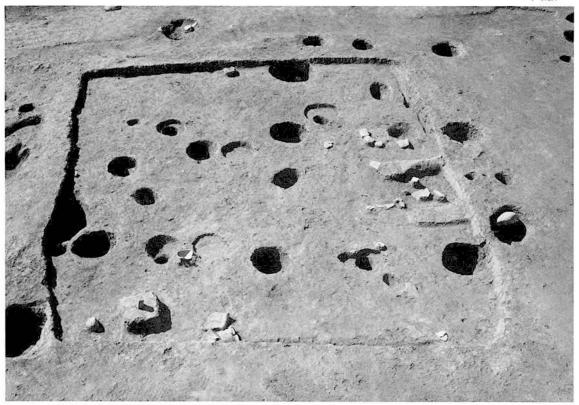
3 広幡遺跡 2号墓 (西から)



1 広幡遺跡1号住居跡(南東から)



2 広幡遺跡 3 号住居跡 (北西から)



1 広幡遺跡2号住居跡(北東から)



2 広幡遺跡2号住居跡カマド (東から)



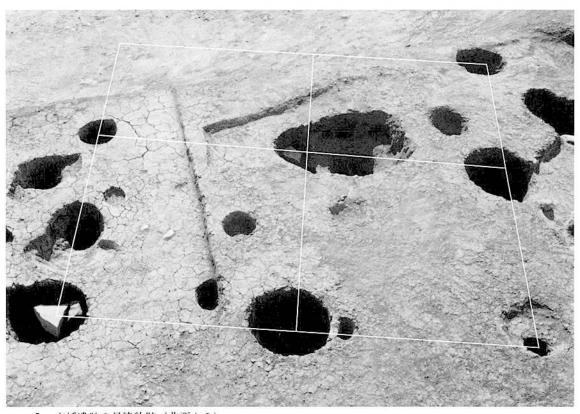
1 広幡遺跡5~10号住居跡(西北から)



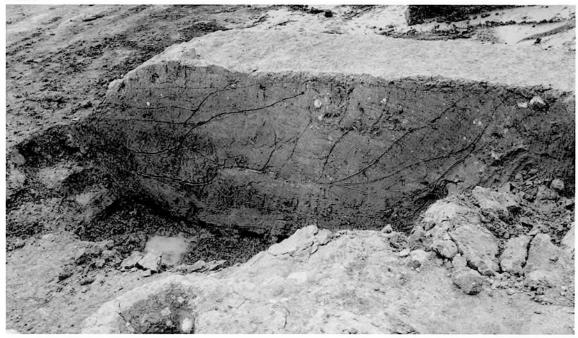
2 広幡遺跡 7 号住居跡(北から)



1 広幡遺跡 9 号住居跡と 3 号石垣・暗渠(北東から)



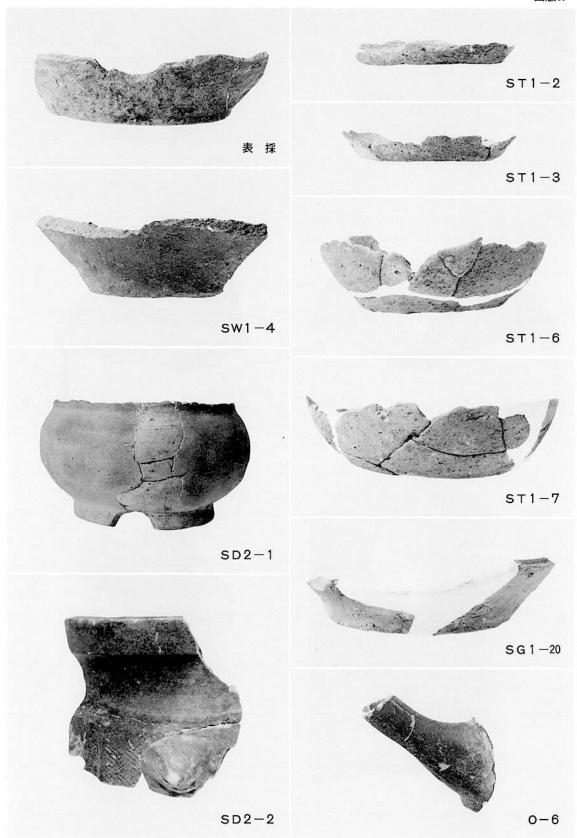
2 広幡遺跡 3 号建物跡(北西から)



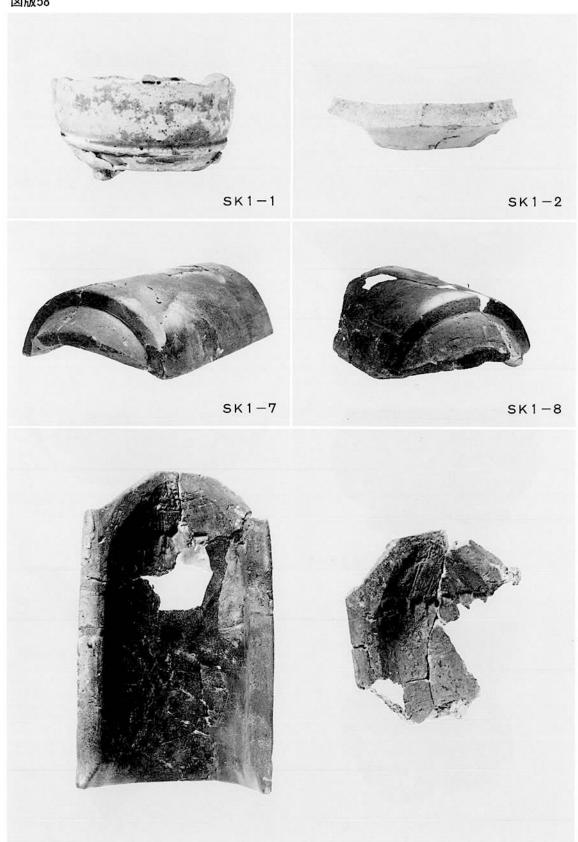
1 広幡遺跡包含層 (SG2) 土層 (北東から)



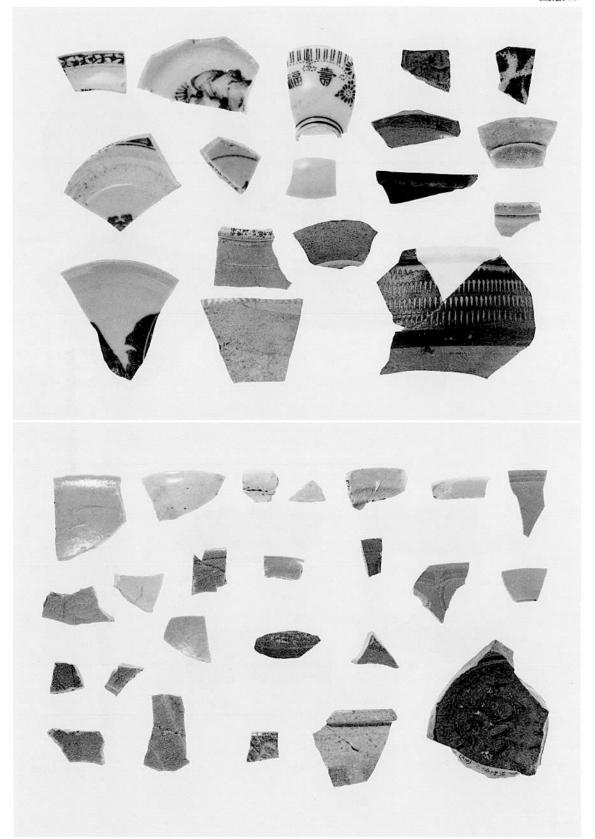
2 広幡遺跡包含層土器出土状態 (東から)



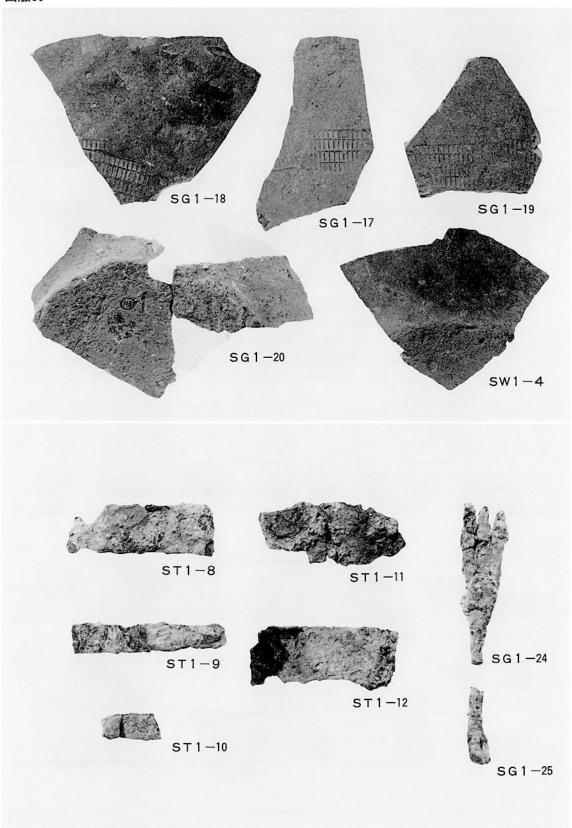
広幡遺跡石垣・溝・墓等出土土器



広幡遺跡1号土壙出土陶磁器·瓦

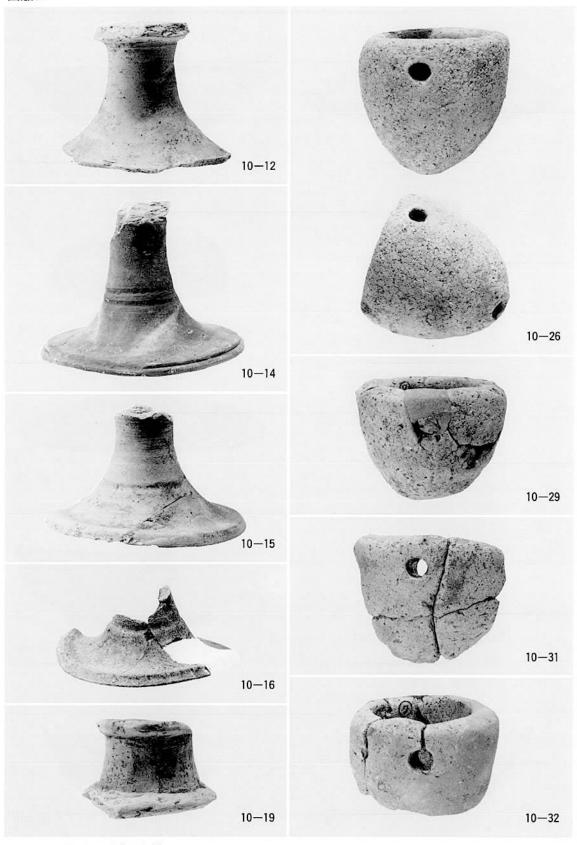


広幡遺跡出土陶磁器

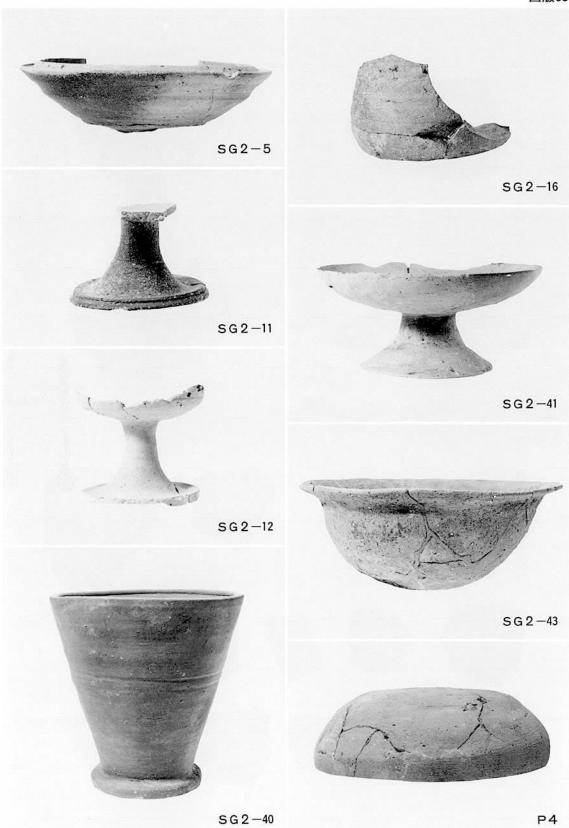




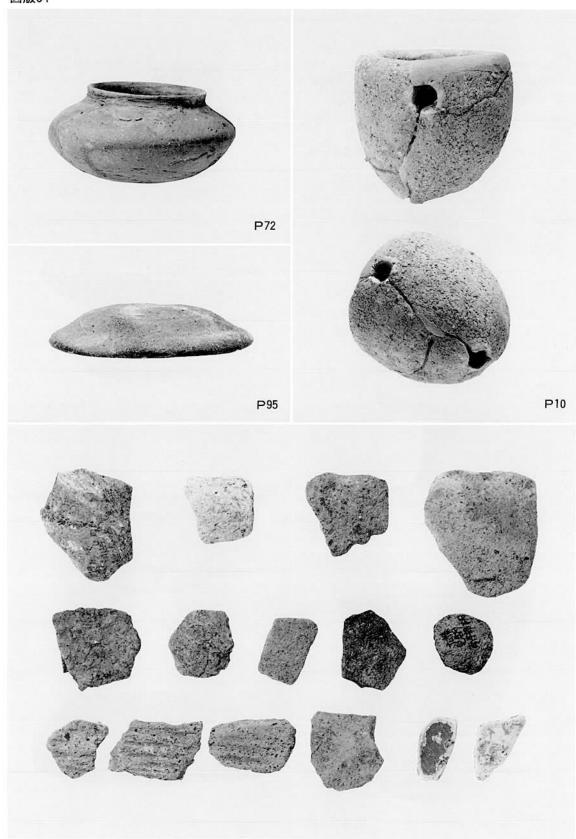
広幡遺跡住居跡出土土器



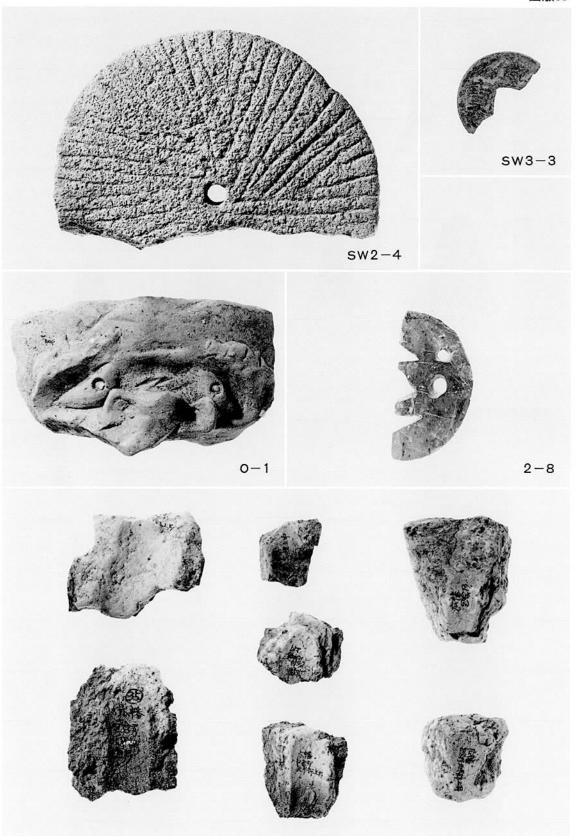
広幡遺跡住居跡出土土器



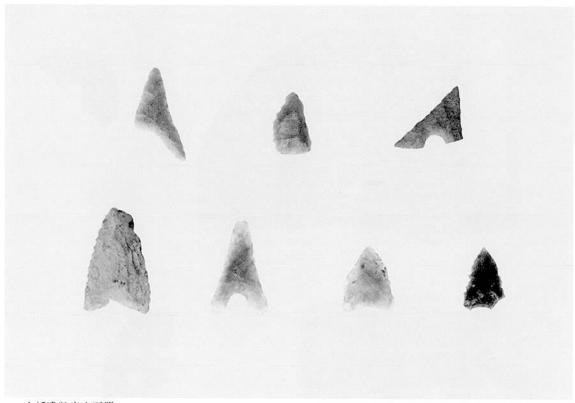
広幡遺跡 S G 2 等出土土器



広幡遺跡ピット出土土器:SG1・2出土焼塩土器・縁釉陶器



広幡遺跡出土石臼・子持勾玉・ふいご羽口など



広幡遺跡出土石器

付 編

椎田町は、まちづくり特別対策事業の広幡城歴史公園整備工事に伴い、県教育委員会の援助を得て埋蔵文化財の発掘調査を1991年(平成3年)5月から実施いたしました。

本遺跡は、昭和63年度に一般国道10号線椎田バイパス建設工事に先だって行われた、広幡城本丸発掘調査に付随するもので、今回の報告はその二の丸、三の丸等の発掘調査結果を取りまとめたものであり、鎌倉時代以降に作られた山城文化を探る資料として役立っていただければ幸いです。

なお,この度の発掘調査にあたり御指導,御援助を賜りました関係者各位,地 元関係者の方々に衷心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

椎田町教育委員会

教育長 松 尾 安

例言

- 1. 本書は、福岡県椎田町教育委員会が「広幡城歴史公園」の建設に先立って平成3年度に調査した広幡城跡の報告書である。
- 2. 以前に椎田バイパス建設に伴って調査されたのを1次とし、今回の調査を2次とする。
- 3. 調査中の写真は伊崎俊秋と緒方泉が撮影し、遺物写真は岡紀久夫が撮影した。
- 4. 遺構の実測は伊崎と緒方が、遺物実測は伊崎が行った。
- 5. 遺構・遺物の整図等は、豊福弥生・原かよ子・水野美奈・関久江・岡由美子・黒木美幸・ 塩足里美と伊崎が行った。
- 6. 本書の執筆・編集は伊崎が行った。

本 文 目 次

	じめに	
Ⅱ. 遺足	亦の立地と歴史的環境	2
Ⅲ.調3	≦の内容⋯⋯⋯⋯⋯⋯	3
А. "	成跡に関する調査······	3
		11
		15
Ⅳ. お	わりに	17
図版	目 次	
PL. 1	1. 広幡城跡航空写真(東南より)	2. 広幡城跡航空写真遠景(東南方向より)
PL. 2	1.広幡城跡航空写真(東より)	2. 広幡城跡航空写真(西より)
PL. 3	1.9トレンチ(東から)	2.9トレンチ(西から)
PL. 4	1. 7トレンチ(東から)	2.7トレンチ(東から)
•	3. 6トレンチ(東から)	
PL. 5	1.8トレンチ作業中	2.8トレンチ(東北から)
	3. 5トレンチ(南から)	
PL. 6	1.4トレンチ(西から)	2.3トレンチ(西から)
	3. Ⅳ郭付近(東南から)	
PL. 7	1.1・2トレンチ発掘中	2.2トレンチ(西から)
	3.1トレンチ(西から)	
PL. 8	1.9トレンチの貯蔵穴発掘中	2.9トレンチ貯蔵穴(SP31・33~35)
PL. 9	1. S P 31	2 . S P 33
	3. S P 34	
PL. 10	1. 谷水田の現況(北西から)	2. 谷水田の現況(東南から)
PL. 11	1. 谷水田周辺樹木片付け中	2. 谷水田(北東から)

PL. 12 広幡城〈2次〉出土遺物

挿 図 目 次

Fig.	1	一般国道10号椎田バイパス周辺地理図 (1/500,000)3
Fig.	2	豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)
Fig.	3	広幡城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)(折込)
Fig.	4	広幡城跡周辺地形図 (1/5,000)5
Fig.	5	広幡城跡Ⅱ・Ⅲ郭地形図 (1/800)・・・・・・7
Fig.	6	広幡城跡 〈2次〉トレンチ土層実測図 (1/80)9
Fig.	7	広幡城跡 〈2次〉トレンチその他出土土器実測図 (1/4)10
Fig.	8	広幡城跡 〈2次〉 Ⅱ郭内遺構図 (1/200)
Fig.	9	広幡城跡 〈2次〉貯蔵穴(SP31·32)実測図 (1/40) ······12
Fig.	10	広幡城跡 〈2次〉貯蔵穴(SP33~36)実測図 (1/40) ······13
Fig.	11	広幡城跡〈2次〉貯蔵穴出土土器実測図(1/4)14
Fig.	12	広幡城跡〈2次〉貯蔵穴出土石器実測図(1/3)14
Fig.	13	広幡城跡〈2次〉作業風景······15
Fig.	14	広幡城跡 〈2次〉近世谷水田平面図 (1/200)16
Fig.	15	広幡城跡〈2次〉弥生時代遺構分布図 ······18
Fig.	16	広幡城公園計画図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Iはじめに

昭和55年2月,一般国道10号の交通混雑を解消し,地域の健全な発展に寄与するため椎田道路(10号バイパス)建設の事業許可がおり,平成3年3月,開通の運びとなった。この間,道路用地内の文化財発掘調査には福岡県教育委員会があたり,本町区域においては,石堂中後ケ谷古墳群,菜切古墳群,頭無古墳群,山崎遺跡,広幡城跡の5ヶ所が遺構検出確認の後発掘調査された。

今回調査された広幡城跡については、昭和63年~平成元年に県教育委員会において調査された続編にあたる。本遺跡は、古くから町内の憩いの場として管理・保存され、史跡としても貴重なものであり、椎田バイパスとして一部消失したことから、椎田町では歴史的な文化遺産を保存し、かつ、豊かな緑との調和のもと、ふれあいとやすらぎ空間の創出を目指し、歴史公園としての整備を計画した。

この計画を達成するには予定地の発掘調査が不可欠であるとの観点から、平成2年(1991) 1月22日、椎田町役場において、福岡県教育庁京築事務所の文化財担当と企画担当者・教育委員会担当者が調査方法・期間等について協議した。その結果、国・県の補助金を得たうえで町教育委員会が事業主体となり、京築教育事務所及び地元各位の協力を得て、平成3年度事業として発掘調査を行い、歴史学習の資料としても活用すべく、記録保存することとなった。

発掘調査は平成2年5月29日から6月16日までの間に実施した。なお、当地が山頂上であり、現存するかきあげ壕、土塁等の分布が広範にわたるため、公園施設までの進入路(工事用にも使用)についても調査を行い記録保存に努めた。

調査関係者は次のとおりである。

椎田町教育委員会 教育長 松 尾 安

社会教育課長 津 田 勝 喜

社会教育係長 木 本 福 満(前任)・ 浜 田 俊 秀(現)

担 当 川 崎 道 雄(前任)・島 田 幸 隆(現)

同和・企画課々長 上 田 信 行

指導係長 加 来 篤 田 中 哲

福岡県教育庁京築教育事務所

主任技師 伊 崎 俊 秋

主任技師 緒 方 泉

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

広幡城跡の第二次調査で対象となったのは、福岡県築上郡椎田町大字水原679-1,680-1,685 等である。

ここは、一般国道10号椎田バイパスの路線内において第9地点として、昭和63年(1988)から翌平成元年(1989)にかけて発掘調査を実施した広幡城遺跡・広幡遺跡の西方に位置し、とくに広幡城跡の郭の続きにあたっている。さきの調査(これを第一次としておく)で、Ⅰ郭の全てとⅡ郭の一部が対象となって、それらは既に消滅したが、今回の対象地はⅡ郭・Ⅲ郭の丘陵頂部と、その下方にある小谷の一部ということになる。

遺跡の立地・歴史的環境については、バイパス関係の報告の中で述べたので再説を避けたいが、以下に簡略に触れておくこととしたい。

1. 立 地 (Fig. 1~4)

広幡城の立地する所は、英彦山・犬ヶ岳等から周防灘に向かって幾つも派生した丘陵の、その一つの先端付近にあたる。丘陵の東西には岩丸川と小山田川が流れ、この丘陵先端にて合流する。城跡の立地する丘陵頂部は標高約60mであり、周縁の田地面との比高40mを測る。この丘陵先端部は北急南緩の地勢であって、山城の縄張りを考えるとき見逃せない点である。

2. 周辺の遺跡(Fig. 2・3)

広幡城跡の所在する椎田町や築城町においてはこれまではあまり多くの遺跡は知られていなかった。それが、ここ近年の椎田バイパスの建設や圃場整備事業に伴っての事前調査というかたちで発掘の行われた遺跡がふえ続けている。

築上郡に限らず京都郡までも視野に入れたうえで、最近の発掘調査で得られた新知見を総合的に見ると、まず縄文後期の遺跡が大きな谷筋ごとに発見されている点が特筆されよう。豊津町節丸西、築城町松丸D、椎田町石町・山崎、豊前市中村石丸等である。次いで弥生期における特定集団墓の検出例が目立ってきたことも注目される。

また、古墳時代中期から奈良時代の頃の集落と製鉄関連遺構の検出例がふえていること、そして輸入陶磁器を持っていた中世期の遺跡も多く見られだしたことなど注意される点である。 特に中世の遺跡は豊前地方という地理的特性を考えるとき、時期ごとにどのようなあり方を示していたかが究明されてくれば、文献史料によってのみの歴史叙述の欠を補って余りあることであろう。それがやがて少しずつ達成されてくるものと思われる。

広幡城に関連しての周辺の山城跡は Fig. 2に分布を示した。これらの中でその内容が知られているのは殆どないと言ってよく、今後の調査に俟つところが多い。



Fig. 1 一般国道10号椎田バイパス周辺地理図 (1/500,000)

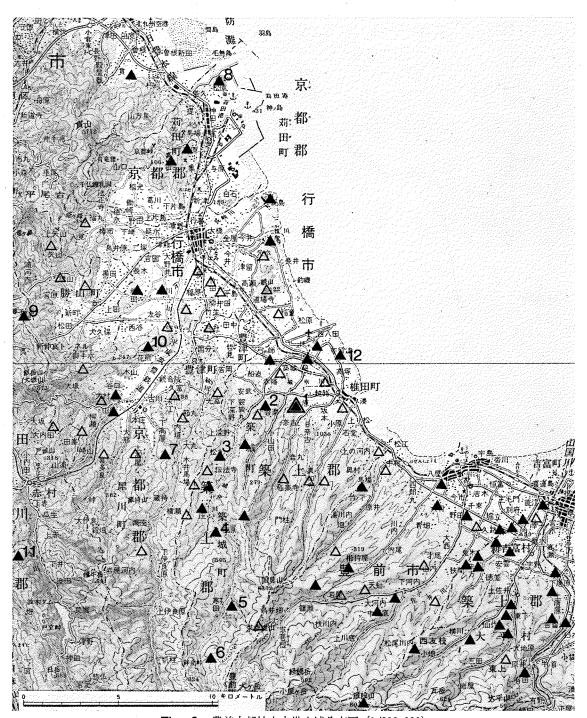


Fig. 2 豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)

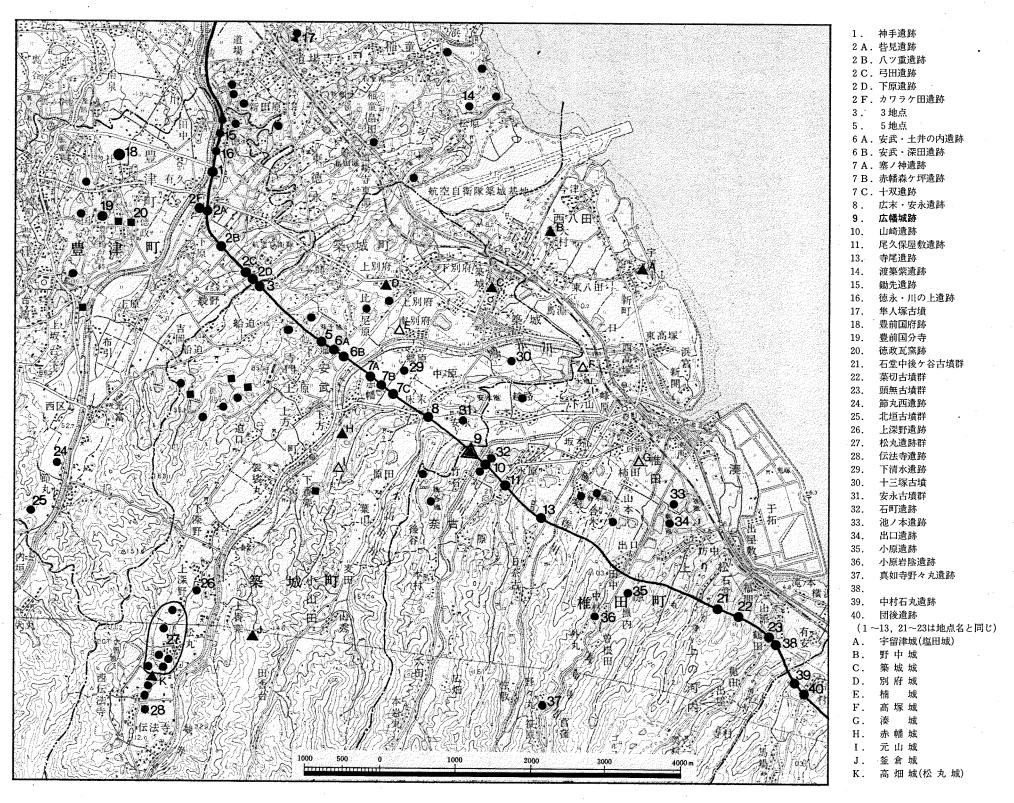


Fig. 3 広幡城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

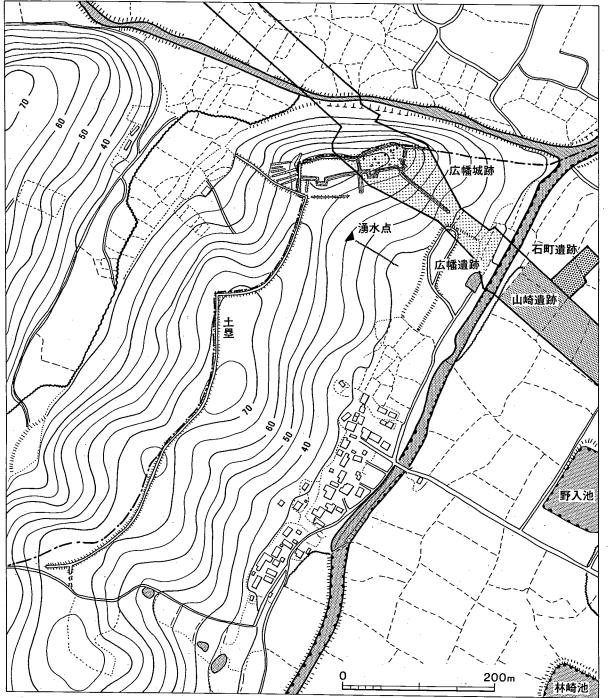


Fig. 4 広幡城跡周辺地形図 (1/5,000)

Ⅲ調査の内容

今回の調査は、広幡城公園を造るに際しての必要最少限の範囲にとどめることとした。すなわち、Ⅲ郭・Ⅲ郭を公園とするのに基本的には土盛りをもって整備し、施設等をその上にしつらえるとのことであったので、Ⅲ・Ⅲ郭の測量と遺構の確認、そして進入路兼工事用道路とされる部分の測量とトレンチ調査を行うこととしたのである。

調査地点の名称についてはFig.5のように仮称しておくこととする。

 Π 郭においては,ほぼ東西に幅 $1.5\,\mathrm{m}$ のトレンチを長さ37 m にわたって設け (9 トレンチ),その東端より $11\,\mathrm{m}$ 地点で直交して長さ $6.5\,\mathrm{m}$ を南へ延ばし,これは $6\,\mathrm{h}$ レンチとつながらせることとした。また $9\,\mathrm{h}$ レンチ西端付近では一部を約 $7\,\mathrm{m}$ 四方にわたって拡げた。ここは,この上部に施設が建てられる予定であったのと,伐開した樹木の処分地としての選地による拡張であった。ここから弥生時代の貯蔵穴 $5\,\mathrm{基}$ が検出された。 Π 郭には堀際の土塁の残存状況と,堀の堆積状況を見るために別に $6\,\mathrm{e}$ $7\,\mathrm{h}$ レンチを設けた。

Ⅲ郭ではⅢAとⅢBとを分ける土塁に直交して5トレンチを、またⅢBの北端でⅢ郭の堀の掘削土による土塁の部分に8トレンチを設定した。

№郭はその南辺の土塁が進入路にかかっていたので、ここに東から2~4トレンチを設けた。 1トレンチは2トレンチの東南に設けたが、ここは少し平坦な面が存したので遺構の存否を 確認する意味で設定した。

なお,進入路の取付き側に近い所で,湧水点からの水を利用した小さな谷水田が存したので, これも貴重な遺構として測量図を掲示する。

以下は、城跡の調査、弥生時代の調査、その他に分けて説明してゆく。

A. 城跡に関する調査

トレンチは進入路から上方へと設定していったが、以下の説明は山城の中心たる郭の方から 行ってゆく。

9トレンチ (Pl.3, Fig.6)

Ⅱ郭の中央に設けたものである。東西37m,幅1.5mで,一部に拡張部を設け,6トレンチともつないだ。6トレも合せて97.3mを発掘した。中央から東半分では小ピットや土壌状の掘込みがいくつか検出されたものの発掘をせず埋め戻した。調査したのは西端拡張部のみであり、これは次項にて述べる。

7トレンチ (Pl.4, Fig.6)

6トレンチの東10mの所に、堀まで含めてのトレンチを幅1m、長さ7mにわたって設定した。面積は8m。郭内は一度掘削したあと埋めて整地しているらしい。堀への落ち際には高さ $70\sim80$ cmの土塁を築いている。堀はその底面を丸く掘った毛抜堀となっている。底面に玄武岩や頁岩の礫15個程が存した。

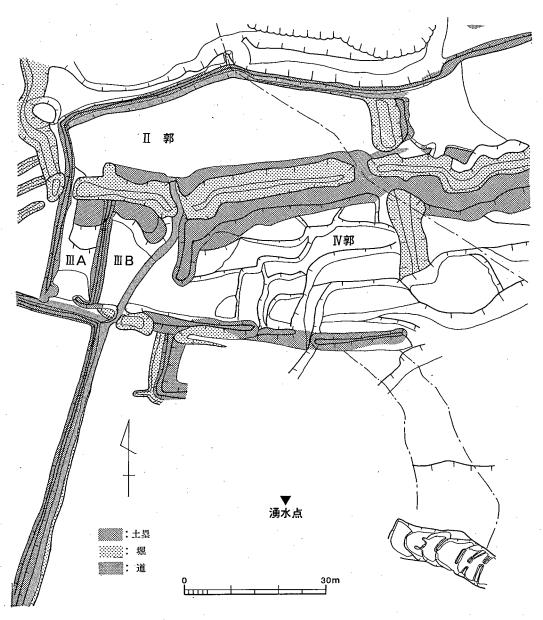


Fig. 5 広幡城跡Ⅱ・Ⅲ郭地形図 (1/800)

6トレンチ (Pl.4, Fig.6)

堀の内側に設けたトレンチで、幅1m,長さ4.5mを発掘した。あとで9トレンチを設定した際、それとつないでいる。南端にはもと50cm,基底部幅2m程の土塁の存することが土層図でわかる。北半部には貯蔵穴と思われる掘込み(SP36)が存した。これについては弥生時代の項で触れる。

8トレンチ (Pl.5, Fig.6)

幅1.5 m, 長9.2 m, 12m を発掘した。北半部はⅡ郭の堀を掘削した排土でもって土塁状の高まりとしている。土層は大きく3層に分かれ、上から赤茶色・灰褐色・赤褐色の土が置かれている。トレンチ内より弥生土器1が出土している。

5トレンチ(Pl.5, Fig.6)

幅1.2m,長さ3mをⅢ郭内の低い土塁に直交して設け発掘した。 3.2mと狭い。土塁の盛土はごく僅かであるが、これの基底面等は整地している可能性もある。中央付近と下部に土壙状掘込みがあるも性格はわからない。

4トレンチ(Pl.6, Fig.6)

幅1.5m,長さ5.2m,8.4mを発掘した。ここも2・3トレンチと同様に土塁がはっきりと認められる。北側は少しくぼんで溝状となっていたようだ。武者走りの如きものであろうか。 弥生土器3,須恵器甕片1が出土した。

Fig. 7-5 は弥生前期の甕底部片である。底径 9.2 cm。

3トレンチ (Pl.6, Fig. 6)

長さ4m,幅0.7mで約2.8㎡の面積を発掘した。見かけ上は北側は平坦であるが、もとは幅2.8m,高さ0.8mの土塁の存したことが知られる。この北側部分はあとで埋めたのかもしれない。弥生土器の壺片が出土している。

2トレンチ (Pl.7, Fig.6)

長さ5.8m,幅1.5mで約8.8mを発掘した。現状では高さが15~70cmしか捉えられない土 塁が、土層図で見ると40~120cmもあったことがわかる。また、南側には溝が掘られている。 トレンチ内より弥生土器3、須恵器甕片が出土している。

Fig.7-2~4 はいずれも須恵器甕の破片で、2は2個の破片が融着しており、外面は平行 タタキ、内面は同心円当具痕がある。このような破片があるということは窯跡が近在する可能 性もないではない。3は外面が擬格子目タタキ、内面は平行刻み目の当具痕である。4は底部 付近の破片であろう。外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕をみる。

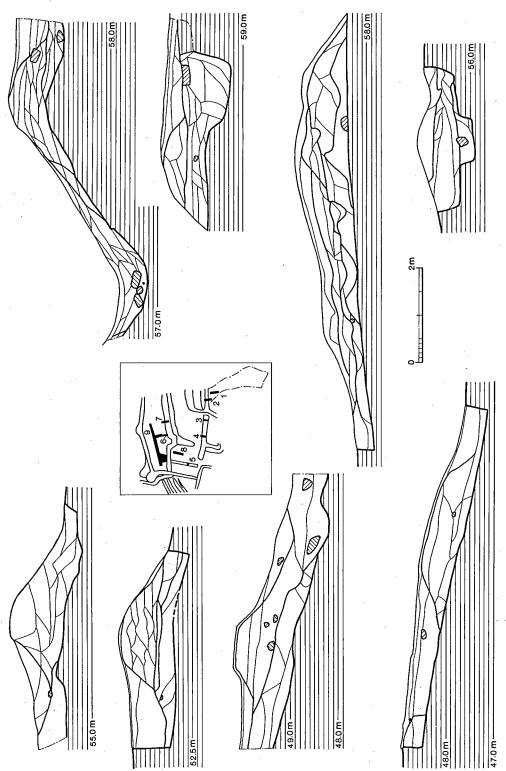


Fig. 6 広幡城跡 〈2次〉トレンチ土層実測図 (1/80)

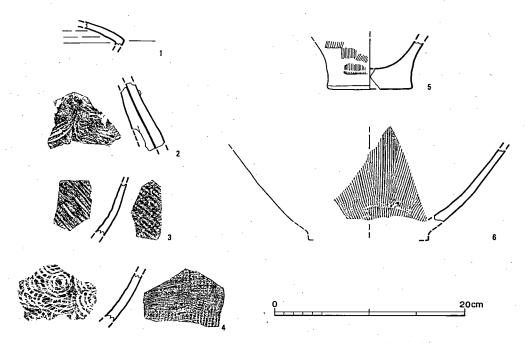


Fig. 7 広幡城跡〈2次〉トレンチその他出土土器実測図(1/4)

1トレンチ(Pl.7, Fig.6)

長さ $7.2\,\mathrm{m}$,幅 $1.5\,\mathrm{m}$ で約 $11.2\,\mathrm{m}$ を発掘した。表面上は見えないが土層図によってこれの南半に基底部幅 $3.8\,\mathrm{m}$ の土塁のあることがわかる。トレンチ内より弥生土器の $3.8\,\mathrm{m}$ の土塁のあることがわかる。トレンチ内より弥生土器の $3.8\,\mathrm{m}$ の はた土師器 1 ,須恵器壺 1 の破片が出土している。

Fig.7-1 は須恵器の破片で、胴部が算盤玉状に屈折した形状となる長頸壺になろう。外面 肩部は緑色の自然釉がかかっている。

以上、1~9トレンチにて主に土層図を中心として見てきたが、土塁・堀以外に山城に直接 関係すると思われる遺構は9トレンチのピット・土壙等を除いて検出されなかった。9トレン チのそれも未掘なので詳しいことはわからない。

土塁では、6・7トレンチで見るように郭内周縁にしっかりした土塁の築かれていたことが わかったのは大きな成果といえよう。また、Ⅳ郭南辺を画する土塁についても、2~4トレン チでわかるように、元来は現状での見た目よりずっと高くてしっかりしたものが築かれていた ことがわかる。

出土遺物は須恵器・弥生土器が大半で山城に関連するものはなかった。なお、 $1 \sim 9$ トレンチで合計 151.7 ㎡ を調査したことになる。

B. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構はⅡ郭内の6・9トレンチにおいて、貯蔵穴6基を検出した。 SP31~35は9トレンチの西端部に集中して存し、SP36のみが6トレンチ内にある。全て前期後半~末の頃に営まれたものと考えられる。

SP31 (Pl.9, Fig.9)

開口部は崩落しており、現状では直径 1.7 m程の円形プランとなる。底面はそれと同心円状で、やや北側に広くなり径 2 m 前後となる。深さ1.7 m、断面形は 北側が大きく張り出しての袋状となる。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺1・甕2そして扁平打製石斧1が出土した。1は如意形に開く口縁下に三角突帯を貼付けた甕であるが、磨滅しての 剝離が著しい。2は青緑灰色の緑泥片岩製の打製石斧である。長さ10.8cm、幅5.7 cm、厚さ1.4 cm。

SP32 (Fig. 9)

この周辺の5基の中では最も西に位置し、一部が調査区外へ入る。平面プランは直径1.2m程の円形となるようだ。この貯蔵穴は深さ0.9mの所まで掘りすすめ、それ以上は発掘しなかった。よって底面のプラン・大きさ等は不明である。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺2・甕4・石斧2・姫島産黒曜石の コア1・黒色の剝片1が出土した。1は 壺,2・3は甕であろう。1の底径7.5

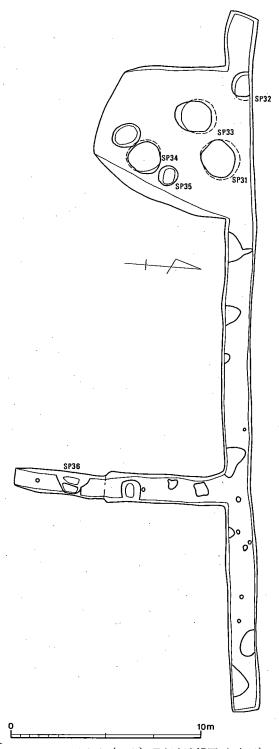


Fig. 8 広幡城跡〈2次〉Ⅱ郭内遺構図(1/200)

cm。 2 は底径 7.4 cm。 2 次火熱を受けているように見える。 3 は肩部が少し張った器形となる。 最大径20cm。 4 は緑泥片岩の扁平打製石斧で長さ 5.8 cm,幅 3.1 cm,厚さ 0.4 cm。 5 は太型蛤 刃石斧の刃部付近破片で,現存長 6.9 cm。玄武岩。

SP33 (Pl.9, Fig. 10)

SP31の西南にあり、底面で $1.8 \sim 1.9 \,\mathrm{m}$ の円形プランを示し、断面は袋状となる。深さは $1.65 \,\mathrm{m}$ 。東半分の下位の方は全掘できなかった。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺2, 甕1と黒曜石剝片1が出土している。1は大型の壺になろう。内外ともに化粧土をかけた痕跡がある。底径12cm。2も壺の底部で、こちらは底径が $7.6\,\mathrm{cm}$ と小さい。

SP34 (Pl.9, Fig.10)

SP31の南にある。現状で直径1.5m程の円形プランをなし、底面はそれよりやや広くて径

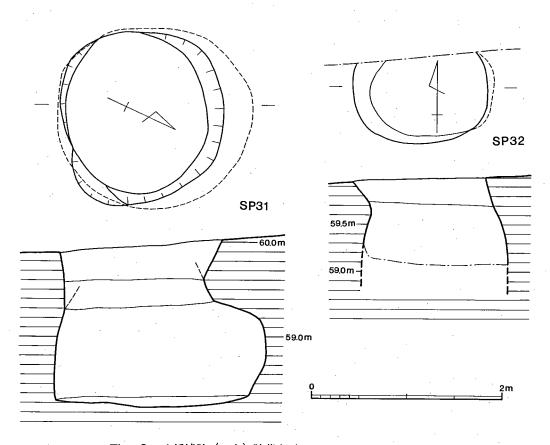


Fig. 9 広幡城跡〈2次〉貯蔵穴(SP31·32) 実測図 (1/40)

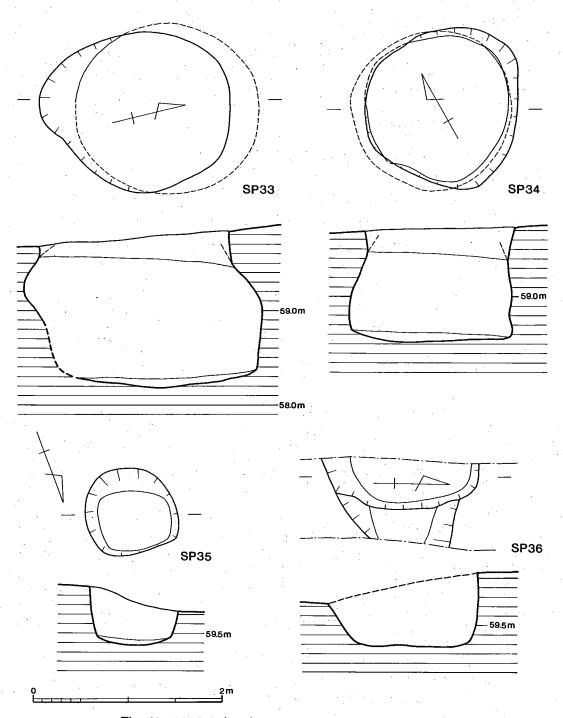


Fig. 10 広幡城跡〈2次〉貯蔵穴(SP33~36) 実測図 (1/40)

1.7 m 程となる。深さ1.2 m。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺1・甕3とサヌカイト剝片1, チャートのコア1がある。1は壺になろうか。底部から一度くびれたのち、胴部へと立上る。底径 $6.7\,\mathrm{cm}$ 。2は甕の底部で、割れて断面が見えるので成形法がよくわかる。底径 $7\,\mathrm{cm}$ 。

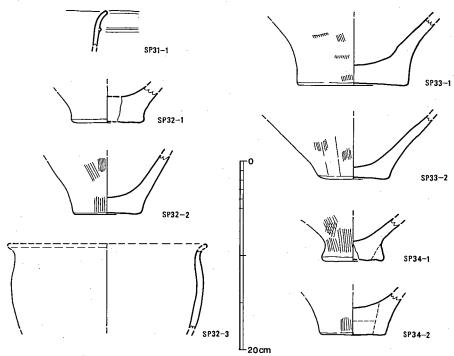


Fig. 11 広幡城跡〈2次〉貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

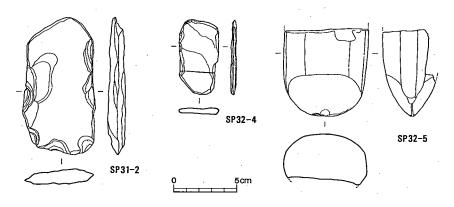


Fig. 12 広幡城跡〈2次〉貯蔵穴出土石器実測図 (1/3)

SP35 (Pl.8, Fig. 10)

SP34の北隣にある。上面径90~95cmの不整円形プランをなし、底面は65×75cmの隅円長方形プランとなる。深さは60cm。灰茶褐色土が入っていた。規模も小さく、深さもないので貯蔵穴ではない可能性もある。甕の破片1が出土したが図示にたえない。

SP36 (Pl.4, Fig. 10)

6 トレンチ内にあり、南北長1.65mを測り、大半は調査区外へのびてゆく。底面は隅円長方 影プランとなりそうである。東側は溝状に一段深くなっている。出土遺物はなかった。

C. その他の遺構・遺物

1トレンチのずっと南方、進入路としての取付き付近に、谷頭からの湧水を利用した狭小な 谷水田数枚が存した。現状では7枚を数えたが、もう数枚は存したであろう。

これらは上端幅 8 m 程の略東南に走る溝を段々に区切って水田としたというほどの、はなはだ簡便なつくりである。便宜的に西の方から A \sim G の記号を付すと、A は面積 19.53 m、B は 16 m でこの両者間に畦は明確には見えなかった。C は13.3 m で B \cdot C 間も畦がはっきりしない。D は23.1 m と最も広い。C \cdot D 間には畦がはっきりと残っている。C と D とは幅40 \sim 50 cm,長 さ $1.4\,\mathrm{m}$ 、 $3.3\,\mathrm{m}$ の小さなトレンチを設けてみたが、ともに黄色ロームブロックを混じえた灰

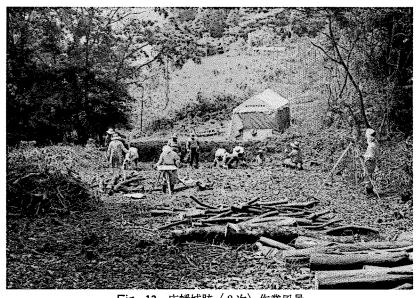


Fig. 13 広幡城跡〈2次〉作業風景

褐色粘質土が耕作土(あるいは床土)として置かれていた。Cは $10\sim35cm$,Dは $30\sim55cm$ の厚さでその下は岩盤である。

E は9.23㎡, F は12.6㎡の広さを有し、D・E 間、E・F 間、F・G 間には畦がつくられている。

これら7枚の水田に水をかける特別の水路はつくられておらず、畦の途中を切って適当に調整しつつ水を流したもののようである。

水田地からの出土遺物はなかったが、水田Eの北側、崖面付近で陶器片が採集されている。 Fig.7 — 6 は備前焼風の摺鉢片である。この摺鉢が水田と関係あるか否かはわからない。

この水田はおそらく太平洋戦争後からしばらくの間使われていたものと推測する。

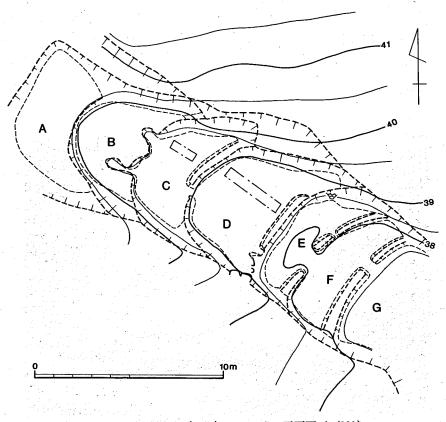


Fig. 14 広幡城跡〈2次〉近世谷水田平面図(1/200)

N おわりに

今回の調査は、歴史公園建設 ─ 広幡城跡の歴史性を生かして町民の憩いの場をつくる、という主旨 ─ に伴うものであったので、発掘調査は必要最小限の範囲にとどめ、なるべく現況を残そうという方向性で調査し、進めていくこととした。従って、II 郭内で施設の下部兼伐開樹木処理場としての所を拡張して弥生時代の貯蔵穴を調査したのと、各所の土塁についてその土盛りのあり方を見たのが主な内容となる。

以下、山城と弥生時代の貯蔵穴に関して若干のまとめを行っておこう。

なお、この広幡城歴史公園の計画図の一部を巻末に示しておく(Fig. 15)。

〈山城について〉

広幡城跡の山城としての縄張りは、前回のバイパス建設に先立つ調査(一次調査)の成果に今回の二次調査の結果を加えて、より詳細が知られるようになったと言えよう。すなわち、Ⅱ郭の郭内周縁は現状では北面、西面にのみ土塁が目立つが、南面の堀の前面にもしっかりした土塁が築かれていたこと、あるいはまたⅣ郭とした所の南面土塁も見かけ以上に高さを有していたことがわかり、土塁等を随所に配した防御面の普請は堅固になされていたことを伺せる。

IV郭南面の土塁については、その下方に存する湧水点を見裾えてのものと考えて大過あるまい。 I ~ IV郭内に井戸は掘られていないと考えてよいので、飲料水を得るための方策は万全を期して施されていたことと推察される。

ただ、このIV郭とした所に建物等が存したのか否かは今後の調査に俟つしかないが、平坦面が階段状にいくつか存することは建物の存在を示唆しているとも見てとれる。

今回の調査においては、山城の築城年代を伺うについての新しい資料は何ら得られなかった。 調査範囲を限定したこともあって、山城の存立に関係する遺物が全く出土していない。従って、 今回の調査のみをもってして、広幡城の築城および廃城について述べることはできないのであ るが、先のバイパスの調査で得られた成果をもとにすれば、築城は最も遡ったとしても16世紀 中頃までとし、同後半から末の頃に破却されたものとすることができよう。

〈弥生時代について〉

貯蔵穴はⅡ郭の西端付近で6基を検出したが、バイパスでの調査のときⅠ郭西端からⅢ郭にかけて9基を検出していた。これを見ると貯蔵穴の分布には大きく二ケ所の中心のあることがわかる。

竪穴住居跡は今回は検出されなかったが、前回の時に $1 \cdot 2$ 号と $3 \sim 6$ 号という二つのまとまりがあったことを考慮すれば、 $SP31 \sim 35$ の周辺の未調査部分に住居跡が遺存している可能性は十分にあるといえよう。また、 $1 \sim 4$ トレンチからも弥生土器が出土しているので、 \mathbb{N} 郭のあたりにも住居跡等の存在する可能性があるとしてよいだろう。

弥生前期中葉~末頃に、比高差40mの標高60mの山頂に住居群を造営した集団は、何故にかような立地を選んだのか。この山頂から見おろせる範囲内に居住可能な土地はいくらでもありそうに見える。やはり必要に迫られての選地と考えるのが最も自然であろう。黒曜石やサヌカイトの剝片が多いことや打製石鏃もわりと多く見つかっていることなどを考慮すれば、この時期に一時的に社会的緊張関係が生じた可能性もある。この点については、今後の調査例の増加によって更なる検討ができるようになろう。

弥生時代については、いまはその立地の特異性を強調することのみにとどめたい。

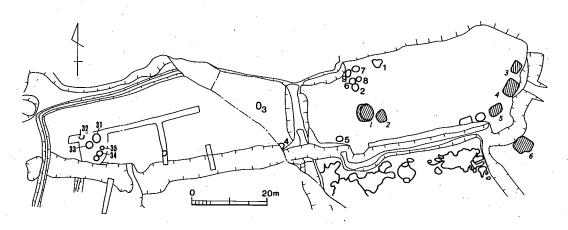


Fig. 15 広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,0000)

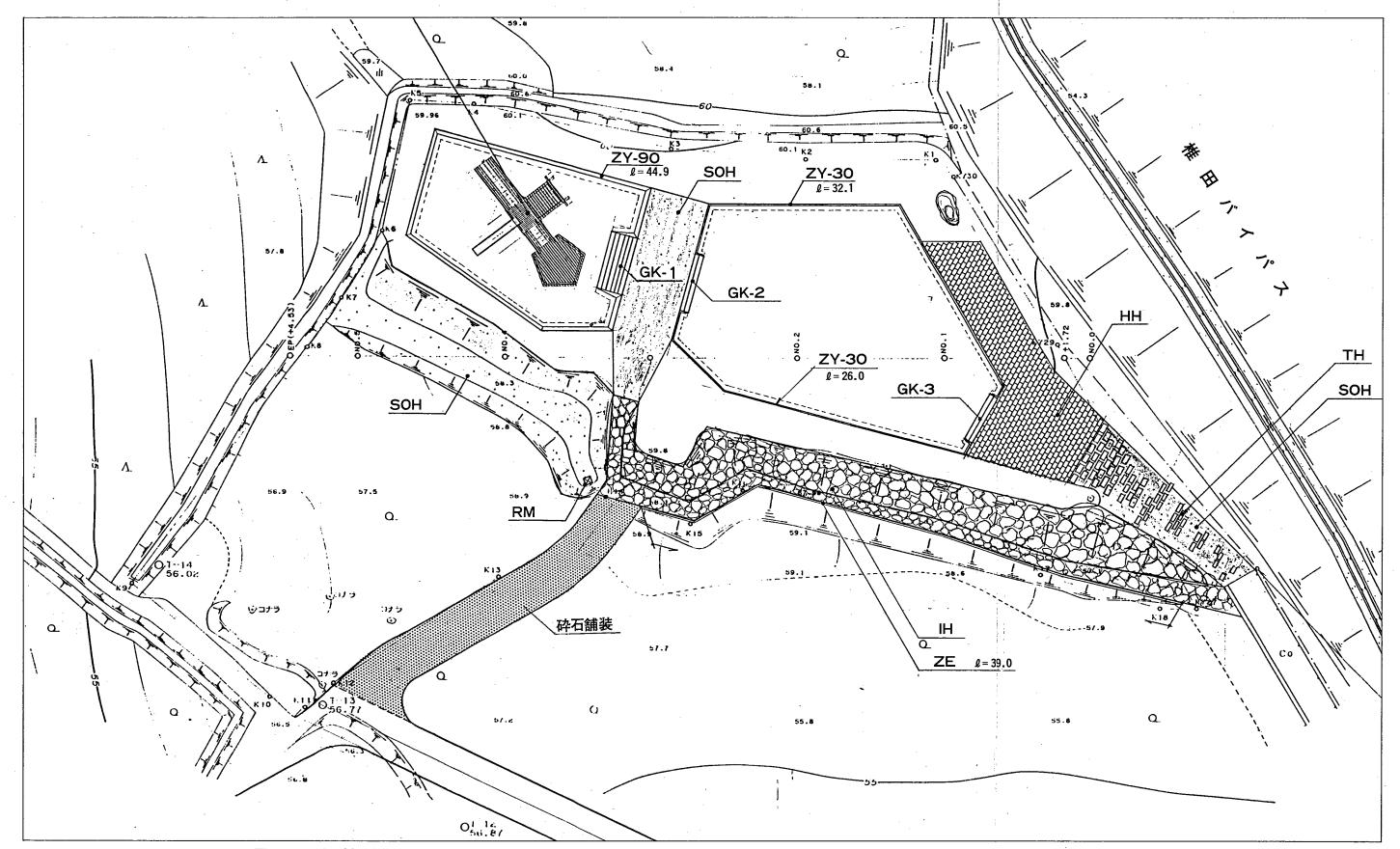


Fig. 16 広 幡 城 公 園 計 画 図

図 版



広幡城跡航空写真(東南より)



広幡城跡航空写真遠景(東南方向より)

PL.2



広幡城跡航空写真(東より)



広幡城跡航空写真(西より)

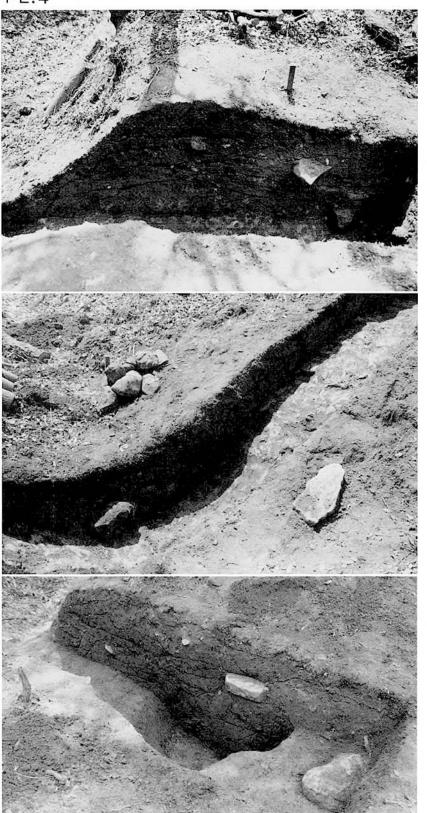


1 9トレンチ (東から)



2 9トレンチ (西から)

PL.4



 7トレンチ (東から)

2 7トレンチ (東から)

3 6トレンチ (東から)



 8トレンチ 作業中

 8トレンチ (東北から)

3 5トレンチ (南から)

PL.6



 4トレンチ (西から)



2 3トレンチ (西から)



3 IV郭付近 (東南から)



1 1・2トレンチ
 発掘中



2 2トレンチ (西から)



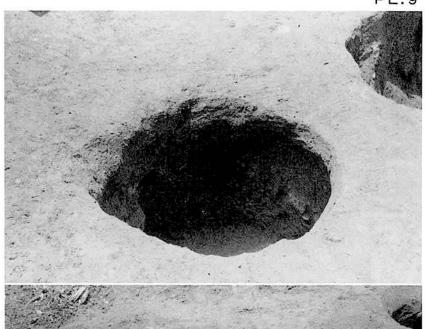
3 1トレンチ (西から)



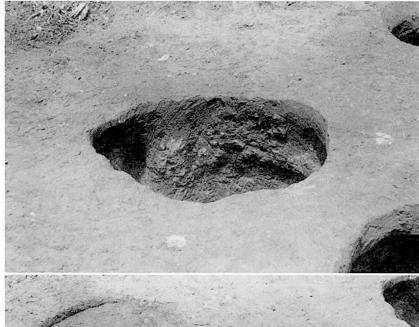
1 9トレンチの貯蔵穴発掘中



2 9トレンチ貯蔵穴 (SP31・33~35)



1 SP31



2 SP33



3 SP34

PL.10



1 谷水田の現況 (北西から)



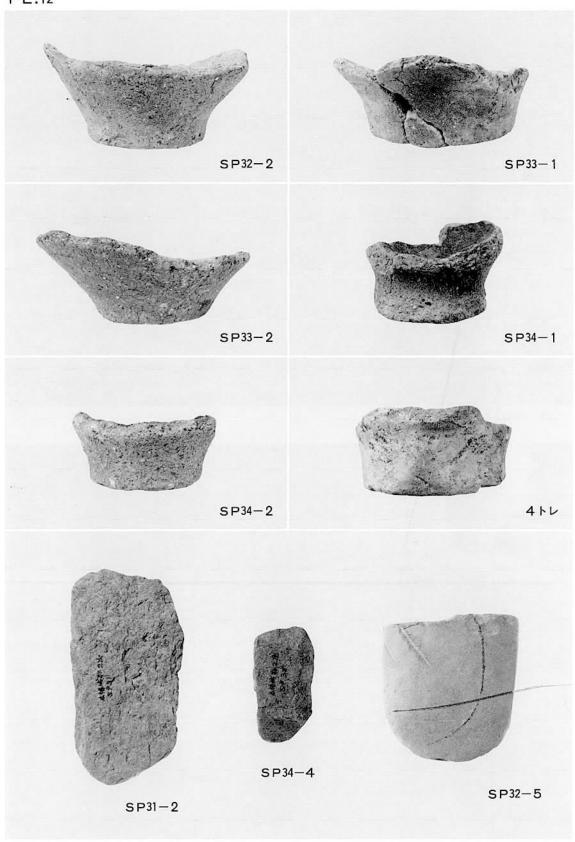
2 谷水田の現況 (東南から)



1 谷水田周辺樹木片付け中



2 谷水田 (北東から)



広幡城跡〈第2次〉出土土器・石器

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-9-

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社 福岡市博多区大字那珂142番地

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

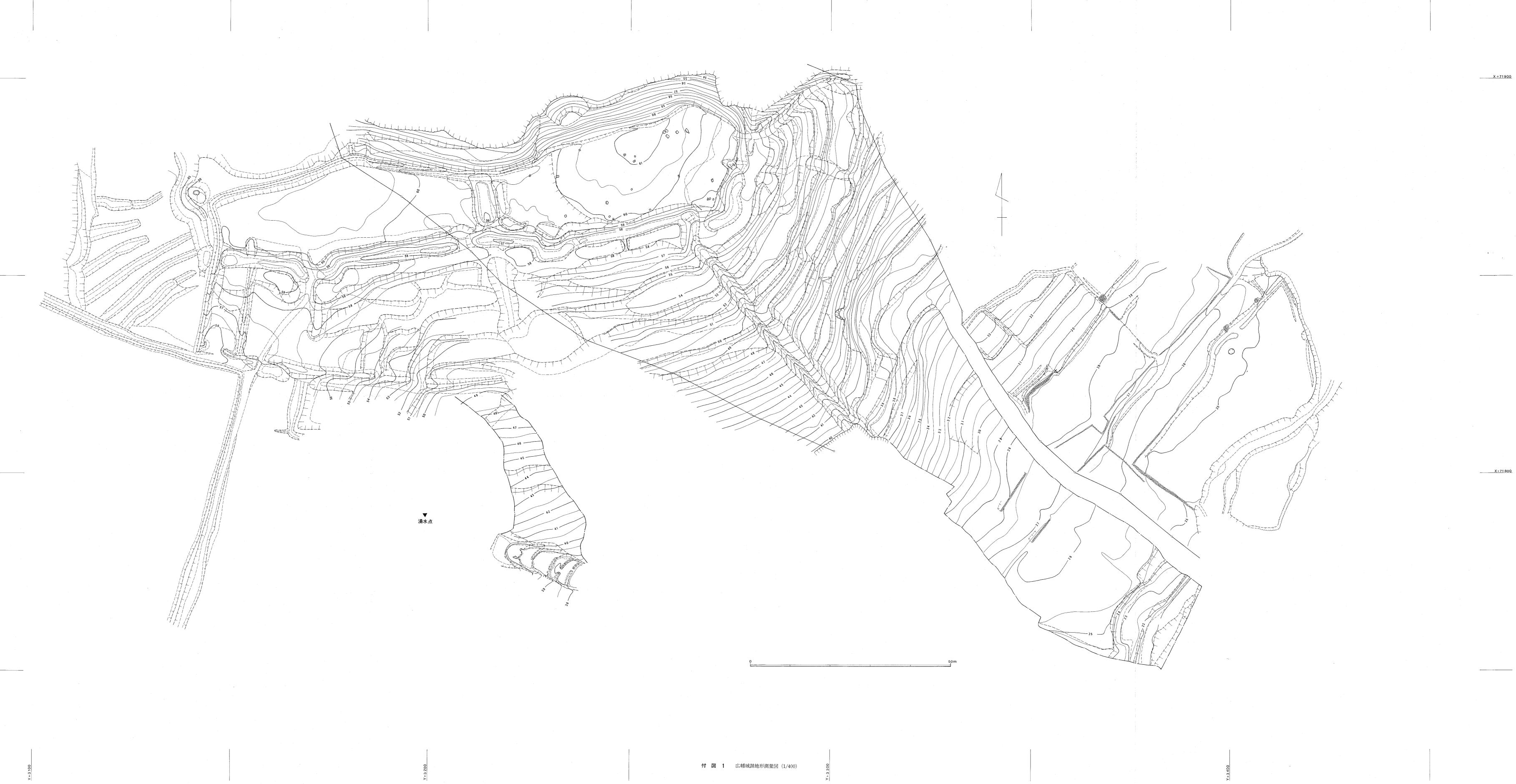
-9-

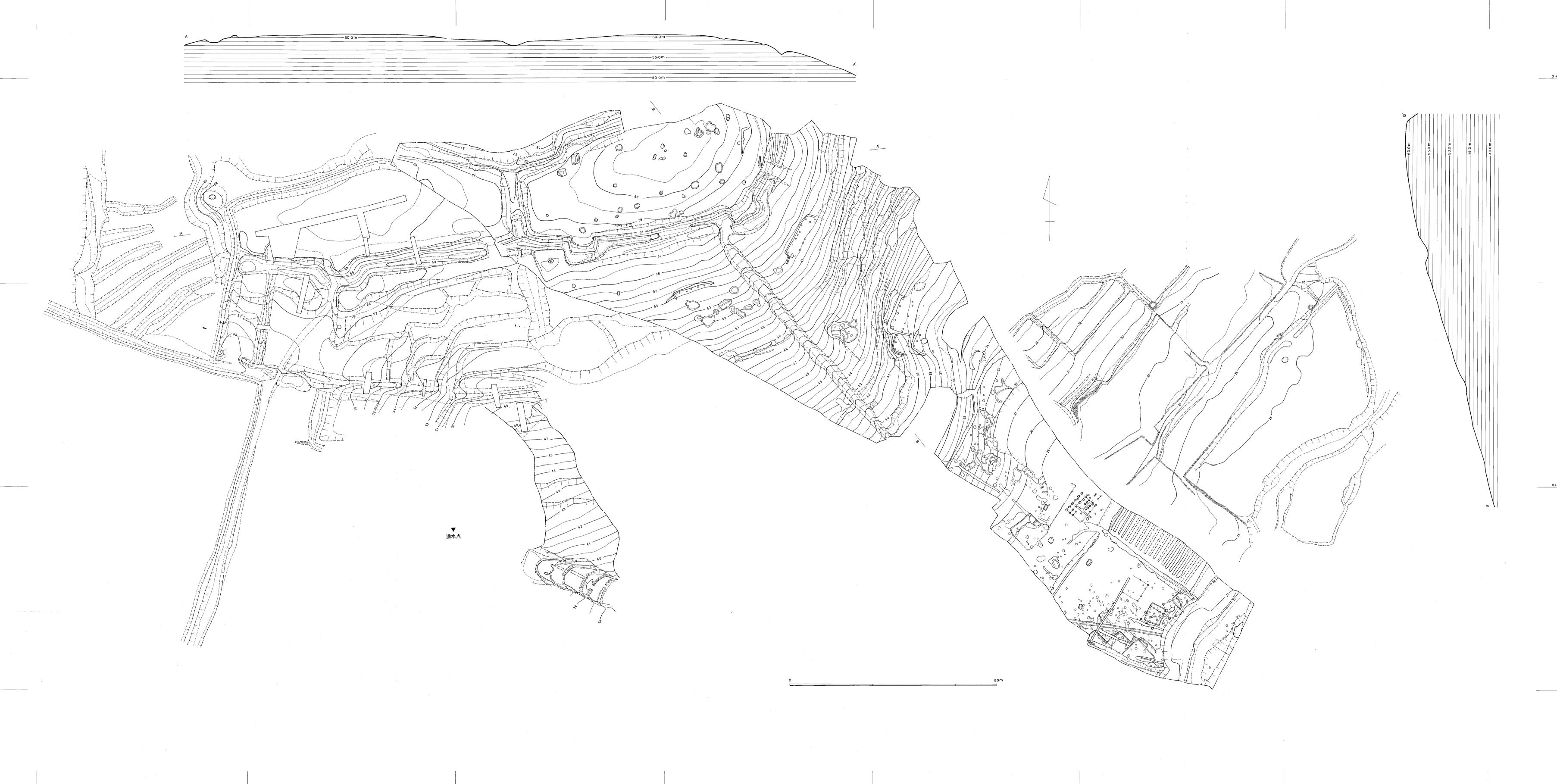
広

付 図

幡城跡

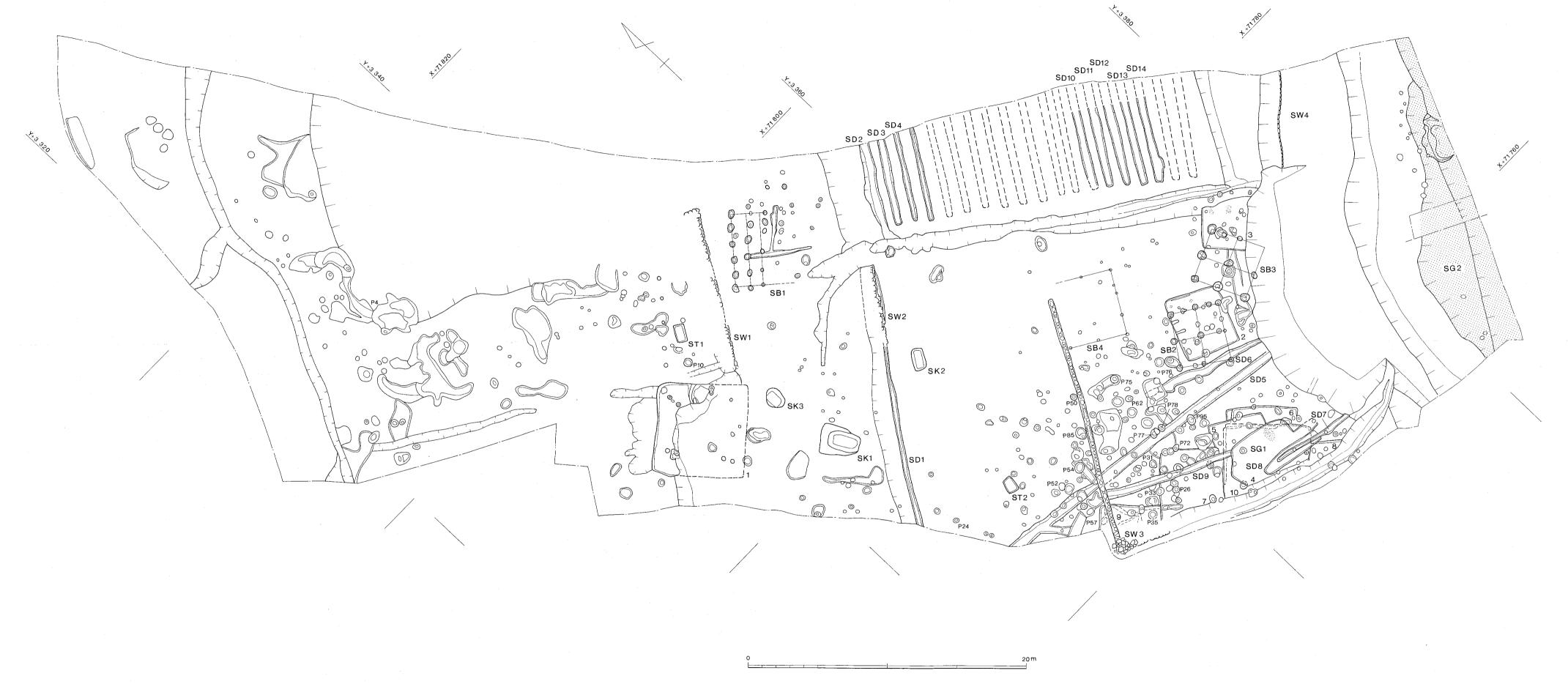
付 図 1 広幡城跡地形測量図 (1/400) 付 図 2 広幡城跡測量図 (1/400) 付 図 3 広幡城遺跡遺構図 (1/200) 付 図 4 広幡遺跡遺構図 (1/200)







付 図 3 広幡城遺跡遺構図 (1/200)



付 図 4 広幡遺跡遺構図 (1/200)